

---

# 混沌のアルファ・リニューアル版

高田ねお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

混沌のアルファ・リニューアル版

### 【Nコード】

N8625P

### 【作者名】

高田ねお

### 【あらすじ】

第五研究所『D・計画』の計画責任者の石和武士は他世界から流出してきた『アルファ』と呼ばれる謎の生物の研究を行っていた。その未知なる生物から派生する様々な事件に石和は巻き込まれてゆく。

## プロローグ（前書き）

『混沌のアルファ』の第一段階のエピソードを新しく書き直したり  
メイク版です。新規の方はこちらから、読んでいただけると分りや  
すいと思います。（プロローグ部分は変わりません）

## プロローグ

……世界は多数存在する。

分裂世界と呼ばれる、世界が無限に分裂増殖する現象がこの世界には確かに存在する。

世界はあらゆる可能性を内包している。世界は常に変動してている。

世界はことあるごとに細胞のように分裂し、それぞれが違う世界を構築してゆく。

一つの世界は二つに。二つの世界は四つに。四つの世界は八つに。

それは宇宙の始まり 根源世界を起源に木の根のように無数に枝分かれし、無限に分裂してゆく。

つまり、可能性の数だけ、世界はこの世に存在しているのだ。

それぞれの空間は互いに絶対次元壁と呼ばれる空間の領域に囲まれており、他の空間は知覚することすらできない。

故に分裂世界の立証は不可能と言われていた。しかし、世界にある『異物』が入り込んだことによって、分裂世界の研究は一気に進むことになった。

西暦2022年。6月10日。午前3時24分。

日本の関東地方にて地震が発生。気象庁震度階級4。それと同時

に東京の外れにある山の頂に何かが奇妙な物体が落下してきたのである。

それは生物だった。

爬虫類、哺乳類、両生類等々、この地球上には様々な種の生物が存在しているが、この生物はどの種にも該当しない、不可思議な生命形体をしていた。

この生物の出現は周囲の住民の騒ぎになりかけたが、情報操作により、地球の大気圏を抜けた小型隕石の落下ということで片付けられた。周囲の公的機関に圧力をかけ、情報を封印したのは複合企業の三ツ葉社であった。

三ツ葉社の研究機関では昔から分裂世界への研究を行っており、これがどういった代物であるのかを把握していた。

この規模の地震などさほど珍しくはないが、この振動は従来のプレートとプレートの衝突により生じたモノではない。空間と空間の一部が接触し、その衝撃波が『互いの次元空間』を振動させたのだ。そして、枝分かれした『絶対世界線』と呼ばれる世界の根と根が近づき、ほんのわずかではあるが空間同士が衝突した。

次元震と呼ばれる現象である。そのとき互いの絶対次元壁の一部に境界線が消失し、向こう側にあるモノがこちら側に流出した。

こちら側とは全く異なる進化と歴史を重ね、別の可能性から生まれ出た地球の生物。

つまり、これは無限に連なる分裂世界の一つから流れ出た生命体なのである。

この情報を得た三ツ葉社は早々に動き出し、この生命体を確保。三ツ葉社関連の生物研究施設、よつのは研究所に収容することに成功した。

その生命体は正常な生体活動が行われてはならず、いわば仮死状態と言われる状態だった。頑丈なカプセルに保護液を満たし、緩やかな生体活動が静止しないよう細心の注意を払いながら、この生物の仮死状態を保つことに成功した。

そして、この生物を研究者たちは（アルファ）という呼称をつけ、研究所の中で未知なる生物の解析が始まった。

細胞の解析、生体構造の研究、DNAの採取、胃に残留していた食物の調査

研究者たちは歓喜した。アルファの肉体は生態構造、細胞、身にまとう空気すら『この世界』にあるものと違う。

未知、未知、未知、未知。この生物の肉体の中には未知が溢れていた。

未知なる生物の解析は研究者たちにとって、至上の喜び。研究者たちはアルファの研究に没頭し、異世界生物や他世界の解明を進めていった。

そして、その研究の最中、研究者たちは革命的な発見をした。

の因子とこちら側の世界の生命体の因子を結びつけることによ

り、こちら側の世界ともうひとつの存在の混合種を造り出すことが出来る。

ふたつの生命体を融合させた『<sup>キ</sup>鍵』を造ることによって、その生命体のいた世界をこちらから引き寄せることができることがわかったのだ。

b

分裂世界の探索、調査。その恩恵は計り知れない。三ツ葉社会長、三ツ葉光一の指示により、分裂世界の本格的な研究機関が設立され、一つの計画が立ち上がった。

士。<sup>けし</sup>佐々木勇二郎、<sup>かわはらななえ</sup>川原奈々恵、<sup>かわかみひろゆき</sup>川上弘幸、<sup>ときはらじゅん</sup>戸木原淳、そして<sup>いざわた</sup>石和武士。

計画に必要な国内最高の研究者を三ツ葉社第五研究所へ集結させ、彼らを中心とした研究グループを編成した。

空間を制御する計画。机上の空論にしか過ぎなかった別世界の存在を実証する夢のような計画。

時に西暦2027年、5月22日。

Dimension project。通称、D-I計画がこの日、発動した。





## 第一段階D-I計画 1「過去の過ち」

夢を……見ていた。

激しい負の感情を露わにし、その感情を拳に乗せて、目の前にいる男へ叩きつける。そして、向こうもまた初めてみせる憎悪の光を瞳に宿し、想いを叩きつけてくる。

想いの衝突は更なる感情の高ぶりを生み、激しい争いへ昇華する。

只の喧嘩なら今まで幾度となくしてきた。目の前にいる、その男とは長い間ずっと自分の側にいた唯一無二の親友だったのだから。

長く側にいれば、些細な事で喧嘩も生じるし、争いも起きる。だが、それは家族同士で行う喧嘩とほぼ同等なもので、すぐ元の鞘に収まっていた。互いが謝ることもあれば、わずかな時間で怒りを忘れ、知らぬうちに仲直りしていることもある。

それは互いが互いを大切に想い、信頼できる間柄であったことに他ならない。

だが、いまのこれは違う。只の喧嘩ではない。心の底から彼を嫌悪し、憎み、想いを叩きつける。彼を殴りつける度にもう元の関係には戻れないことを実感する。

彼を信頼していた。彼を尊敬していた。彼を 親友だと思って

いた。

……思っていたのだ。

にも関わらず、彼はその想いを裏切った。

二人にとって大切な存在を傷つけ、取り返しの付かないことを彼はした。

許せなかった。自分の信頼を踏みにじり、罪を犯した彼が。

彼は告げる。元凶はお前だと。こうなったのはすべてお前のせいだと。その言葉が真実だと知って、更に感情が高まり、振り下ろす拳に力が入った。

黙れ、黙れ、黙れ。認めたくない、認めたくない。

この三人の。大事に大事にしてきた関係の崩壊が。自分自身にあったなど絶対に認めたくない！

……分かっている。これは夢だ。すでに事件は終え、すべては崩壊してしまったのだ。今ではもう取り返しなど付きようがない。それでも夢という媒体でこの事件を追体験することによって。あの時のどろしよもない想いが、幾度となく蘇るのだ。

憤怒。哀愁。憎悪。後悔。

様々な負の想いが頭の中で駆けずり回る、あの時の感覚が。

自分は彼女に許してもらえただろうか。

自分は……彼女を幸せに出来ただろうか？

## 2「起床」

「う……」

石和いさわ武士は低い呻き声を上げて、目を開いた。カーテンの隙間から光が差し込み、小鳥の囀りが聞こえてくる。どうやら、朝の様だ。石和は額に手を当てながら、ゆっくりとベットから身を起こした。

「くそ……酒飲んで寝ると、いつもこれだ。あれから何年も経つってのに……」

独りごちながら、長めに伸びた前髪を掻き上げ、首を左右に振る。夢と分かっていても過去の記憶を追体験するのはあまり気分のいいものではない。あの時の忌々しく、やるせない気持ちはもう二度と味わいたくないというのに。

七年前の決裂はもう起きてしまったことで、もう取り返しはつかない。いくら後悔しても仕方がないことなのだ。

自分が間違っていたのか。彼が間違っていたのか。それとも……彼女が間違っていたのだろうか。今となってはもう分からない。きつと明確な答えなどないのだろうか。

あえて、答えを探すのならば、それはきつとすべてだ。

自分も、彼も、彼女も。すべて間違えていた。お互いに少しずつずれた歯車が不和をもたらし、長い間築き上げてきた平穏で居心地

のいい環境を自分たちで破壊してしまったのだ。どちらにしろ、もうどうにもならない。彼 航わたるとの関係はもう終わってしまったことだし、万が一再会できたとしても、どうしていいのか分からないのだから。

「さて、と。気分を切り替えないとな」

一日の始まりからこんな憂鬱な気持ちを抱えていたら、仕事にも支障が出そうだ。気分を振り払うため、窓のカーテンを開いて、陽光を部屋の中に入れる。光が差し込み、石和は眩しげに目を細めた。窓を開けてベランダに出ると空は一面青空が広がっていた。

今日は快晴のようだ。もう十二月の半ばだが、今日は心なしか暖かい。過ごしやすい一日になりそうだ。

「……とは言っても、こっちは施設に引きこもってのお仕事だからな。天気はあんまり関係ないんだがな」

そんなことを呟きながら、石和はベランダから地上を見下ろした。石和がいま居る部屋は十一階建てのマンションの五階で、街の景色の様子が一望できる高さだ。すでに夜の人気のない静寂の時間は終わり告げ、ちらほらスーツを着込んだサラリーマンの姿が石和の目に映った。壁に立て掛けてある時計を見ると時間はまだ六時三十分。勤務地が遠い人間ならば、そろそろ出掛けなければならぬ時間だろう。

まだ少し早い、自分も少し準備しておいた方がよさそうだ。石和は窓を閉め、寝間着からスーツへの着替えを終えると、リビングルームへと向かった。

「あ、おはよう。武ちゃん」

キッチンへ行くと、小柄な女性が柔らかい笑顔で、挨拶をしてきた。柄が少し入った白いブラウスに紺のロングスカート。その上にピンク色のエプロンを羽織り、朝食の準備をしている。

石和千恵子<sup>いさわちえいこ</sup>。石和武士の妻であり、二児の母でもある。背中まで伸びた黒い髪の毛をグリーン色のリボンで束ねている。整った顔立ちだが、瞳が大きく童顔なので、身長が低いのも相まって、周囲には年齢よりも幼く見られがちである。

千恵子に挨拶を返し、食卓につく。テーブルの上には海苔、鮭の切り身、納豆、卵焼きなどが人数分置かれている。オーソドックスな和風のメニューだった。千恵子が湯気の出たご飯とみそ汁を持ってきて、石和の前に置く。

「今日は早いんだね。もう少ししたら、起こしにいこうと思ってただけど」

「ああ。今日は少し早く目が覚めちゃってな。勝義とことみはまだ寝てるのか？」

千恵子は頷き、答えた。

「二人ともまだぐっすりだよ。昨日の誕生会あんなにはしゃいだものね。まだもうしばらくは寝かせてあげるつもり。武ちゃんこそ、大丈夫？ 昨日結構飲んでたみたいだけど」

石和はご飯と鮭の切り身を口にしながら、「大丈夫だ」と、言った。

「俺はこう見えて、酒はそこそこ強いからな。しかし、佐々木がな……」

千恵子は「あー」と言っつて、苦笑いを浮かべた。昨日は息子の誕生日会を行い、第五研究所の同僚である佐々木勇二郎博士を呼んでいたのだが、帰りは顔を真っ赤にして、ひどい有様だった。あまりにも泥酔状態がひどいので、家に泊めようと何度も引き止めたのだが、「大丈夫、大丈夫」といつて、タクシーに乗って帰っていつてしまった。あのあと無事に家へ戻れたのか。少々心配である。

しかし、佐々木は酒好きと聞いていたが、あれほど弱いとは……酒好きがアルコールに強いとは限らない。それを実感させるには充分な有様だった。

「まあ、佐々木のことだ。二日酔いが原因で今日出社してこれない、なんてことはないだろうがな。心配はいらないさ」

「あはは。そうだね。でも、佐々木さんにも感謝だね。わざわざうちのイベントに出てくれて、場を盛り上げてくれて。ことみも勝義も懐いているみたいだし、いい人だね」

「第五研究所の連中はみんな個性派ぞろいで、プライベートでは付き合いづらいが、佐々木は例外だからな。グループの中でも一番空気が読めるヤツだし、まめに周囲に気を配っている。グループの中じゃ一番まともで社会的なヤツじゃないかな」

そう言いながらみそ汁をすすする石和に千恵子はくすくすと笑った。

「珍しいよね。武ちゃんがヒトのことをそんな風に褒めるなんて

ちよつとビツクリだよ」

「む。そうか？」

「うん。天変地異が起きないか、心配な位」

「それは言い過ぎだろ……」

自分はそんなに他人に優しくないのである。職場でもそんな風に見られてるのかもしれない。

「あははは、冗談だつてば。武ちゃんはぶつきらぼうなところがあるけど、すごくすごく優しいもん。みんなに自慢できる最高の旦那様だよ」

臆面もなくそんなことを言う千恵子。石和は顔が熱くなるのを感じながら、ごほんとか払いをした。

「ま、まあ、ともかく。佐々木は気軽に話せるいい奴だつてことだ。また連れてくることもあるだろうから、その時は歓迎してやってくれ」

千恵子は頷きながら、笑顔を浮かべた。

「勝義とことみも喜ぶと思う。是非つて伝えといて。武ちゃん」

「ああ」

佐々木も独身の一人暮らしで、いつも一人寂しく酒を飲んでいたりとぼやいていたから、頻繁に誘ってやれば喜ぶかもしれない。近いうちにまた食事にでも誘ってみるとしよう。

「ごちそうさま。さて、と。それじゃあ、そろそろいくかな」

石和は空の食器をキッチンの洗い場に置き、壁のハンガーにかけてあるコートを身に纏うと、玄関に向かって歩き始めた。千恵子が少し意外そうな顔を浮かべながら、後を付いてくる。

「もういくの？ いつもよりだいぶ早いよ」

「研究所に新しい機材が届いてな。今日からソイツを使った研究が始まるから、早めに行って準備しておきたいんだ」

「そうなんだ。じゃあ、今日は遅くなるのかな」

「どうかな。分からないが、なるべく早く帰れるようにするよ。勝義とことみが起きている時間までには必ずな」

「うん。待ってる。お仕事頑張ってるね、武ちゃん」

「ああ。行ってくる」

靴を履きドアを開けると、千恵子が、

「あ、武ちゃん。忘れ物だよ」

と言った。石和が振り向くと、千恵子が背伸びをして石和の唇にキスをしてきた。

「っ！」

大きく目を見開く石和に千恵子は頬を赤らめて、はにかんだ。

「えへへへ。いってらっしゃいのキス。子供達がいるときには恥ずかしくて、最近出来なかったし。たまにはしたいなあと思って」

「い、いってくる」

石和は顔が熱くなるのを感じながら、ドアを閉じた。すでに結婚して五年も経つというのに、どうにもこういった事に慣れを感じな



い。相手が千恵子だからだろうか。不思議なモノだ。千恵子も千恵子で未だ新婚時代と微塵も代わらない接し方をしてくるので、たまに気恥ずかしくて、たまらなくなってくる。まあ、悪い気はしないのだが。

石和は唇に指を当て、目を細め一人微笑むと、駐車場へ向かうためにエレベーターへと乗り込んだ。

### 3 「出社」

少しばかり早く出たからといって、スムーズに車が進むわけではない。石和はいつも通りの通勤ラッシュに巻き込まれていた。道路には数多あまたの車やトラックが並列に並んでいる。定期的な感覚で車が動き、少し進むと止まる。これの繰り返しだった。

この大道路を抜けるまではやや時間がかかるが、許容範囲内だ。それでもいつもの出勤時間よりも早く到着するだろう。

石和は運転席で動く様子がない道路状況を見計らいながら、煙草を加え、火をつけた。

(さて、いよいよ今日から新機材の投入か。これで少しは研究が前進するといいいんだがな)

頭がしびれるような煙草特有の感覚に身を委ねながら、石和は胸中で独りごちた。

#### D-1 計画。

それが三ツ葉社の第五研究所で行われている計画名であり、石和武士はその研究の責任者の一人である。

五年前に起こった『次元震』と呼ばれる現象。

我々のいるこの世界ともう一つのまったく異なる世界が交差し、互いの次元空間を震わせ、触れあった空間の穴から一つの生命体が流出してきた。

その異世界生命体が『アルファ』と呼称されるモノで、自分たちの仕事はこの生物を利用して、互いの次元空間に扉を造ることである。

半年前、神奈川県にある二ツ山バイオ工学研究所に務めていたが、その研究所と同じスポンサーである三ツ葉社本社より抜擢され、第五研究所にやって来た。

専攻はクローンや形質変換、センダイウイルスによる異種の細胞融合などで、分裂世界は完全に専門外で、正直、最初は興味も湧かなかった。あるかどうかもわからない分裂世界の存在に疑問を抱いていたからだ。しかし、異世界生命体、アルファの姿を目の当たりにし、計画の内容を聞いて、石和は大きく心を震わせた。

無限に広がる分裂世界の絶対世界線から流出した生物。こんな生物が本当に実在したとは。驚きだ。

そして、その生物とこちら側の生物を軸に異世界への入り口を造る。もう一つの世界の実証と観測。なんと胸が高鳴る計画だろうか。そう思った石和は第五研究所への異動を快諾した。

自らの手でまだ誰も知らない世界の扉を開く。未知なるものへの好奇心に石和の胸は高鳴った。

……だが、その高揚感も現在ではもうだいぶ薄れてしまっている。あれから半年。D-I計画の研究は難航を極めた。研究は微塵も進んでいないといってもいい。

計画は第一段階、第二段階、第三段階の研究と大きく三つに分かれているが、その一番最初である第一段階の『鍵』の精製に躓いているのが現状だ。

鍵<sup>キ</sup>は我々のいるこの世界（以後、世界と呼称）と本来アルファが存在する異世界（以後、世界と呼称）の間に行き来出来る扉を開くことが可能な生命体だ。

鍵<sup>キ</sup>を造るにはアルファの細胞と世界の生命体の細胞が融合した生物が必要となる。両方が混在する生命体が世界を世界に引張ってくる起点となるからだ。

アルファの細胞は世界にはない不思議な性質を持っており。アルファ側の細胞とこちら側の世界の生物の細胞と接触すると、途端に細胞が活性化し、他生物の細胞を浸食する。

この特性を利用して、この因子を結合した生物を造ろうとD計画の担当者たちは考えた。

実験動物に細胞を液状化させて、注入する方法を試みたが、結果は失敗。実験動物の体内に入った途端、アルファ細胞は暴走を引き起こし、実験動物の肉体は醜い怪物の様な容姿に変態した。また、細胞そのものを実験体に移植しても同様の結果だった。

暴走の引き金となるのは、移植した際に発生するGVHD（移植した側の細胞が拒絶すること）が原因だった。本来のGVHDは移植した細胞が移植された細胞側に受け入れられず、移植された細胞を攻撃するのだが、この細胞はどういう訳か、細胞の浸食に拍車をかけ暴走する。

そして、細胞は暴走したアルファ細胞によって滅茶苦茶な情報に書き換えられ、結果、実験動物の肉体は激しい変態を起こし、凶暴性が増した生命体に変化してしまう。

これでも融合はしているのだろうが、あまりにもバランスが悪い。DI計画に必要な鍵キは細胞と細胞、双方の因子が安定した生命体である。これでは使い物にならない。

上手く安定した融合生物を造るために様々な方法を試みたが、どの方法もことごとく失敗。惨敗状態だった。

本当に細胞の暴走を押さえ、安定した融合生物を造ることが出来るのだろうか。最初は意気揚々とした勢いだった第五研究所のスタッフも最近ではそんな不安を抱えているようだ。研究とはそんな易々と進むものではないとはいえ、活路がまったく見えない現状ではそんな感情を抱くのも無理はないといえた。

本日より新しい機材が第五研究所に設置され、今までとはまったく異なる細胞と生物との融合を行うことになる。この方法も駄目だったとしたら、その先いつたいどうすればいいのか。そんな不安が石和の頭に過ぎる。が、かぶりを振って、すぐさまその懸念を振り払う。

いまからそんな事を考えても仕方がない。失敗したときは失敗したときに考えればいい。いまは今日の実験で進展があることだけを祈るとしよう。

そんなことを考えながら、車を進めていると渋滞した道路を抜け、ようやく目的地が見えてきた。

東京の中心部にあるビジネス・シティ。その更に中心部にある天を刺すように聳そびえ立つビジネスシティの中で最も高い高層ビル。

巨大複合企業である三ツ葉社の心臓。三ツ葉社本部ビル。

この中にある研究区画の一画、第五研究所が石和の目的地だった。石和は三本目となった煙草を灰皿に押しつぶし、ビルの地下にある駐車場へと向かった。

#### 4 「瞬間物質転送装置」

駐車場の指定の場所へ車を止め、エレベーターに乗り込む。まだ早朝のせいか、エレベーターの中に人はいない。第五研究所のある二十五階のボタンを押すと、扉が閉まる直前に一人の男が小走りエレベーターの中へ入り込んできた。扉が閉じると、静かにエレベーターが二十五階に向けて、ぐんぐんと昇ってゆく。

「ふう、ギリギリセーフ」

大きく息を吐いて、そんなことを呟く。見知った顔だった。顔自体が笑ったような造りで、丸顔。温厚を絵に描いたような容姿である。長身の細身で、華奢な身体の上にスーツを着込んでいる。

佐々木勇二郎<sup>ささきゆうじろう</sup>。石和武士と同じ第五研究所所属のD-I計画責任者である。

「おはよう、石和くん。昨日はごちそうさま。楽しかったよ」

と、佐々木がにこにここと笑顔を浮かべながら、話し掛けてくる。

「……………」

石和はその挨拶に答えず、まじまじと佐々木の顔を眺めた。石和の拳動に佐々木は慌てて自分の顔を手でまさぐった。

「ど、どうしたの？ 石和くん。僕の顔になんかついてるのかい？」

「いや……逆だ。いつもと変わらないな。二日酔いとか大丈夫なのか？」

言いながら、石和は昨夜の佐々木の姿を想い出す。顔一面が紅く染まり、足下も呂律も定まっていなかった。あれだけぐでぐでんな状態だと流石に翌日にも多少影響があると踏んでいたのだが、佐々木の顔は青ざめても居ないし、頭痛に苦しんでいる様子もない。いわば、スタンダードな状態だった。佐々木は苦笑いを浮かべながら、

「あ、昨日のお酒のことかい？ いやだなあ、石和くん。僕は酒好きで、よくお酒をたしなむって言ったじゃないか。なれてるんだから、あの程度のお酒じゃ身体に残ったりしないよ」

と、あっけらかんとした口調で言う。昨晚の有様からはとてもそうは見えなかったので、心配したのだが。

「それにいつもよく効く酔い止めと胃腸薬を常備してるからね。心配は無用だよ、石和くん。あははは」

それは酒に慣れているとは言わないだろ。そう突っ込みたいのをぐっと堪え、引きつった笑顔で返事を返した。

「しかし、佐々木。今日は随分と早いんだな。出勤時間までまだ一時間以上あるぞ」

「それはお互い様だよ。どうしたんだい、こんな早い時間に」

「導入された新機材が気になってな。準備もあるだろうから早めに来たんだ。ひょっとして、佐々木もか？」

「うん。僕はアレを見るのは初めてじゃないけど……気になっち



やってね」

佐々木が頷きながら、苦笑いを浮かべた。今回の新機材の導入は佐々木にとつては複雑な気持ちに違いない。その新機材である装置は佐々木の親友である博士が造り出したものであり、D-I計画の実験に使用することを最後まで反対していたからだ。その機材の所有権は造り出した彼ではなく、三ツ葉社であることから、彼の反対意見は切って捨てられ、今回の導入が決定された。

「……やっぱり、佐々木は反対なのか？ 新機材の導入」

佐々木は静かにかぶりを振った。

「……複雑な感情があるのは確かだけどね。あの機材は本来そういった用途に造られた物じゃないし、新井さんが怒るのももつともなことだと思う。僕も感情的には新井さんの意見に賛成だよ。だけど、細胞と細胞の融合を行うにはあの機材は適していると思う。アレの特性を利用すれば手詰まり状態な現状を打破できる可能性は充分にある。僕もD-I計画担当者の一人だからね。第一段階の研究を成功させる可能性があるなら、どんなものでもすがりつきたいと思っっている」

「……確かにな」

と、石和は頷いた。研究がまったく良い方向に進んでいない現在、藁わらにも縋すがりたい気持ちで一杯なのだ。その為には利用できる物はすべて利用すべきだ。例えそれがその機材を造り出した制作者にとつて致命的な欠点だったとしても。その位、第一段階の研究は煮詰まり続けているのだ。

ぼーん、とアラーム音が鳴った。エレベーターが止まり、自動扉

が左右にスライドする。二十五階に到着したようだ。エレベーターから降りると、正面、左右、みつつに分かれた大きな廊下が広がっている。石和と佐々木はその廊下を右に折れて、第五研究所に向かつて歩いてゆく。三ツ葉社本社ビルの中には第一研究所から第十二研究所までの十二の研究機関があり、それぞれの場所で様々な研究が行われている。石和と佐々木が所属する第五研究所はこの二十五階の第五区画と呼ばれる部分にある。

第五研究所と書かれたプレートが貼り付けてある大きな扉の前に辿り着くと、石和と佐々木は扉の隣に設置されている扉開閉用のカードスロットにカードを通した。上に付いていた赤いランプが青に切り替わり、がちやりとロックの外れる音がした。三重に重ねられた嚴重な扉が次々と開き、第五研究所への入り口が開放される。

中に入り、そのままの足で第八実験室に行くと、いくつかのスタッフが中を駆けずり回っていた。新機材の設置と調整を行っているようだ。

「1043と999の接続がレッドになっているぞ！ C班はなにをやっている！」

「すいません、配線の接続もう少しで終わります。あと十分下さい！」

「五分で終わらせる。この後最終チェックが15項目も残っているんだ。ダラダラしていると陽が暮れちまうぞ！ 送信機、受信機の最終設定もいそげ！」

「りよ、了解！」

新機材を設置している作業班のリーダーらしき男が怒声を浴びせながら多くのスタッフに指示を与えている。スタッフの人数は十人を超えており、想像したより大がかりな設置になっているようだ。

「あれが……そうなのか」

石和は目の前に設置している機材をまじまじと眺めながら、言葉を漏らした。高さが2メートル以上ある透明の筒型カプセルが実験室の両端に置かれていた。中央には大型のコンピューターとパネルが設置されており、いくつものパイプやコードが床に広がっている。石和の言葉に佐々木は頷き、

「うん。あれが新井武之博士あらいたけゆきが提唱した『物質の分解と再構築』の理論を元に造り上げた装置。瞬間物質転送装置だよ」

と、言った。

「A側に入った物質や生命体の構築情報を取得したのち、素粒子レベルまで素体を一端分解し、転送電流へと変換する。そして、B側の転送機に転送電流を送り込み、構成情報を元に再構築する。そうして、あらゆる物質をどんなに遠い場所でも一瞬にして、移動することが可能な理論と技術を新井博士は生み出したんだ。すごいよね。一昔前の夢物語をあの人は現実のものとして見せたんだ」

そんな説明を口にしながら、佐々木は目を細めて微笑んだ。その賞賛の言葉とは裏腹に声のトーンは低く、わずかに憂いを帯びていた。

テレポート・ゲート  
瞬間物質転送装置。確かにこれは世紀の大発明であり、この装置の存在が世間に公表されれば、新井博士は歴史に残るほどの功績を残したことであろう。

しかし、現実には過酷なものだった。テレポート・ゲート瞬間物質転送装置の開発は世

間に発表されることはなかった。それどころか、瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートを開発していた第三研究所が解体され、新井博士は主任研究員の任を解かれてしまったのである。

無論、そうなるに至った理由は、ある。瞬間物質転送装置は確かに送信機がある場所ならどんなものでも一瞬で転送することが可能であるが、たった一つ、致命的な欠陥があった。

それは複数の個体識別情報を再構築できないという、些細であり、大きく危険を孕んだものだった。送信側に入った個体に別の個体が入り込むと、個体識別の認識が別々に行われることなく、分解、再構築をされてしまう。一言で言えば、A側の転送機に二つの個体が入っていたら、二つの個体情報が別々に識別されることなく、一つに融合してしまうのだ。

1 + 1 が 2 ではなく。1 + 1 が 1 となる。

コレが何らかの精密機械と仮定した場合、受信機になんらかの異物があったとすれば、異物と精密機械は融合し、まともに稼働しなくなるか、欠陥のある精密機械として転送されてしまう。

コレが生物であると仮定した場合、受信機になんらかの異物や小型の生物が入ってしまったとすれば、その生物と生物は融合し、遺伝子レベルで肉体に変化をもたらしてしまう。

こうして融合してしまった物質や生命体は二度と元には戻らない。ミキサーにかけて混ぜ合わせた飲み物は決して元には戻せない。それと同じだ。

新井博士を中心とした第三研究所のメンバーは必死にその欠点を改善するために動いたが、結局それは解決できないまま、予算を打

ち切られ、第三研究所は解散する羽目になってしまった。最後の最後で、この装置は完成に至れなかったのである。

そうして、瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの開発は終了したのだが、事はそのだけでは済まなかった。

瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの本来の使用方法ではなく、その欠点を逆に利用した研究を行おうと三ツ葉社上層部は考えたのだ。それを知った新井博士は激高した。自分の行った研究がそんなことに使われるのは我慢ならなかったのだらう。

しかし、瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートは新井博士個人の所有物ではない。研究の出費者は三ツ葉社であり、所有権はすべて三ツ葉社が把握している。彼の意見は切って捨てられ、第五研究所への導入が決定された。

そして、その数ヶ月後。新井武之博士は家族を残して、忽然と姿を消してしまった。失踪の理由も原因も不明。佐々木勇二郎は新井武之博士と昔からの親友と聞いている。この失踪は佐々木にとってもかなりショックな出来事だったことだらう。

瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの事で想うことがあり、自らの意志で失踪したか。それとも何かの事件に巻き込まれたのか。半年近く経った現在でも、失踪の手がかりは微塵も掴めていないらしい。佐々木がこの瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの導入に複雑な想いがあるのは至極当然のことだらう。

「……無事でいるといいな、新井博士」

石和が小さく呟くと佐々木は「うん」と、頷いた。

「ちょっと位でどうにかなるひとじゃないよ。タフをそのまま形にしたような人だからね。きつとどこかで元気にやっていると思う」  
「……そうだな」

もし事件かなにかに巻き込まれたのなら、半年近くも経過した現在、無事である可能性は限りなく低いだろう。石和は胸中でそう思ったが、それは口に出さなかった。そんなことを言っても何にもならない。佐々木は彼の無事を信じ、未だに独自の搜索を続けている。

その想いに水を差すことなど出来はしない。石和は瞬間物質転送装置ゲートをじっと見続けている佐々木の肩をぼん、と叩き、

「そろそろ行こう。設置にはもう少し時間がかかるみたいだし、俺らは俺らで今日の実験の為の準備をしておかないとな」

と、言って踵かかとを返した。

「あ、うん。分かった」

佐々木が頷いて石和の後に続き、そのままミーティングルームに向かって、歩いてゆく。今日の実験の資料は鞆の中に入っているの  
で、自分の研究室には寄らなくても問題はない。

「瞬間物質転送装置のマニュアルには一通り目を通したかい？」  
テレポート・ゲート

佐々木の言葉に石和は頷いた。

「一応、一通りな。しかし、さすがに現物に触らないで理解しようとするのは無理があるだろ。実際動かしてみないことにはな。シ

コミュニケーションプログラムぐらい先行で配布してくれば良かったのにな」

「あははは。今日の実験で動かすのは他のスタッフに任せきりになるだろうから、僕らが完全に操作できる必要なんかないと思うよ。指示すればすべて操作はしてもらえるんだし」

石和は目を大きく見開き、

「そうなのか？」

と、言った。

「まあ、僕らが操作するとしたら、操作マニュアルやコミュニケーションプログラムを行うのが精一杯で今日中に実験は行えないと思うけど……ひょっとして石和くん、自分で操作したかったのかい？」

「いや、そういうわけじゃないんだが、その……なんといえはいかな、他人に任せたくないというか。やはり自分の手で実験しているという実感がほしいんだ」

「まあ、気持ちは分からなくてもないけど。いいよ。僕、瞬間物テレポ質転送装置ト・ゲートのコミュニケーションプログラム持っているから、後でコピーしてあげるよ。さすがに今日の実験で操作する、というわけにはいかないけど、コミュニケーションを一通りマスターしておけば、いずれ操作の許可も下りると思う」

「サンキユ。助かる」

新しい機材に触れておきたい欲求もあるし、些細な変化も見逃さないようにするためには覚えておいて損はないだろう。

ミーティングルームに辿り着くと、先程と同様、扉の隣に設置してあるカードスロットに自分のカードを差し込み、扉を開く。

すると

「遅いぞ、二人とも！」

と、中に入るなり、部屋中に大きな声が鳴り響いた。驚いて、声の方向へ目を向けると、白衣姿の中年男が両腕を組んで立っていた。

「まったく呑気なものだな、二人とも。こんな特別な日に随分と呑気な出勤ではないか。第1段階の研究が煮詰まっているからといって、気が緩み過ぎではないのか。ん？」

目を大きく見開き、唇を笑みの形に大きく歪めながら、声高らかにそんなことを言ってくる。石和は眉を顰めた。時計を見るとまだ通常の勤務開始時間まで五十分近くある。この男は一体いつから第五研究所にいたのだろうか。

白髪と黒髪が入り交じった五十代前半の男だ。茶色の縁なし眼鏡をかけており、髪は七・三分け。顔は五十代にはかなり若く見えるが、目が妙にぎらついていて、それが妙に滑稽な印象を受ける。

戸木原淳<sup>とぎはらじゅん</sup>。第五研究所 五人いるD-I計画の担当責任者の一人で、すべてを統括する担当責任者でもある。

「どうも。おはようございます、戸木原博士」

佐々木が戸木原に笑顔を向けて、挨拶する。石和がそれに続けて、軽く頭を下げる。

「うむ。おはよう二人とも。いやあ、本当にこの日を待ちわびたぞ。断言しよう。今日は私たちにとって特別な日となる。そして、



それは世界史の1ページとなつて、歴史に名を残すことになるだろう！ 偉大なる研究の第一歩を踏み出した日として！」

アルコールでも入っていないければ、とても言えない様な恥ずかしい台詞を、喜々として語る戸木原。どうやら瞬間物質転送装置の導入でやたら気分が高揚しているらしい。その為に早く出勤してきたのだろう。まるで子供である。

石和は大きく溜息を吐いた。自分にも多少の高揚感があったことは認めるが、ここまで露骨には感情を露わにすることは出来ない。

「ず、随分とご機嫌ですね、戸木原博士」

戸木原のテンションの高さについていけないのだろう。若干、佐々木の声がうわずっていた。戸木原はそんな佐々木を気にした様子もなく、

「当然だろう！ あれだけ苦難を強いられた第1段階の目処が今日つくのだぞ。喜ばずにはいられないだろう！ 佐々木くんももっと嬉しそうな顔をしたらどうなんだ？ 石和くんもこんな日にそんな不機嫌そうな顔をするものではない。もっと笑いたまえ。あ、不機嫌そうな顔は生まれつきのものかね？ それは失礼した。はははは」

口早にまくし立ててくる戸木原を石和は半眼で睨み据え、

「…………随分と楽観的ですね」

と、吐き捨てるような口調で言った。

「瞬間物質転送装置を使用した実験は確かに新しい光明が見えるかもしれない。しかし、この実験が成功する保証などどこにもないのでしょ？ こういった試みは初めてなので、融合した細胞がどういう活動を行うのか全く予想が付かない。にも関わらず、今日、この実験が成功するという根拠が一体どこにあるのか。教えてほしいものです」

「い、石和くん」

石和の挑発的な言葉に佐々木が動揺した声をあげる。だが、戸木原は特に気分を害した様子もなく、自信満々の表情で、答えた。

「予感、だよ」

「……は？」

「だから、予感だよ。私には分かるのだ。今日のこの実験は成功する。そういう気がしてならないのだよ。私の予感には信頼性がある。自信がある。この長年培ってきた科学者としての勘がそう告げているのだよ。間違いなく、今日の実験は成功する。これは絶対の理なのだよ、はっはっはっ！」

「……………」

佐々木も石和も啞然と、する。只の勘を絶対的な根拠にするとはとても科学者の台詞とは思えない。

「それにしても、遅いな。瞬間物質転送装置テレポート・ゲートの設置に一体いつまで時間をかける！ これで今日の実験に間に合わなかったら、どうするつもりなのだ？ 実験室にいつてスタッフに活を入れてくる。君たちはここで実験に必要な書類をまとめていてくれたまえ。それでは失礼する！」

戸木原は一方的にそう告げると、落ち着きのない拳動で、部屋か

ら出て行ってしまった。実験が正式に始まるのは午後からの予定で、設置するにはまだ充分時間がある。こんな早朝から急かしてどうするというのが。

「……なんなんだ、アイツの落ち着きのなさは。無茶苦茶だな」

頭を掻きながら、深く嘆息する。

「い、石和くん。駄目だよ、むやみに戸木原博士を煽るような発言をしたら。またトラブルの原因になる」

と、佐々木が咎めてくるが、石和はふんと鼻を鳴らし、

「あれだけ支離滅裂なことを言われたら、煽りたくもなる。予感ってなんだ、予感って。科学者が口にする言葉じゃないだろう。理屈よりも感情が先行するあの性格でよくもまあ、今まで科学者としてやってこれたもんだ。佐々木はさっきの何も思わなかったのか？」

「そ、そりゃあ思ったけど、仮にも僕らの上司なんだし」

石和は腕を組み肩を竦めた。

「そこが一番の謎だな。あんなのがどうして、自分達の統括主任なのか。上層部は一体何を考えてるんだかな」

先程の様な奇行は現在に始まったことではない。感情に身を任せた行動で、研究所内をかき回し、トラブルをまき散らすので、スタッフ内でもすこぶる評判が悪い。研究に対するアプローチも言うことがいつもコロコロ変化するので、参考になつた試しがない。

研究所のスタッフ内では『無能の爆弾統括』トラブルメイカーと囁かれているらし

い。複数の博士号を持った優秀な男との話だが、こうなってくるとその博士号の取得すら疑わしくなってくる。

「以前、川上くんに聞いたんだけど……戸木原博士って島村専務の推薦でこの統括になつたらしいよ。ひよつとしたら、島村専務と戸木原博士はなにか繋がりがあつたのかもしれないね」

「コネでこの統括になつたってことか？」

「そこまでは分からないけど……それに近い何かがあつたのかも……」

と、曖昧な返答でごまかす佐々木。石和は三度、大きな溜息を吐いた。D-I計画は三ツ葉社の中でも莫大な金が動いているプロジェクトである。異世界生命体のアルファに関する情報もSランクの機密となっているほどだ。そんな大きなプロジェクトの統括にコネで採用した人物を持つてくるだろうか？

どうも妙なちぐはぐ感を感じる。

まあ、あんな男のことを気にしていても仕方がない。残りの担当責任者である川上弘幸かわがみひろゆきと川原奈々恵かわはらななえは細胞に関する別のアプローチを行っているらしく、今日の実験には参加出来ないらしい。戸木原と、佐々木と、自分。

今日はここにいる三人　　実質の戦力は二人だけとなるので、下準備にも若干時間がかかるだろう。石和と佐々木は椅子に座り、ノート型パソコンを起動すると、鞆の中に入っていた書類を取り出し、今日の実験に関するデータを確認するため、キーボードに指を滑らせ始めた。



## 5 「実験開始」

分裂世界。

根源世界を起源として、無限に分裂してゆく世界変動の理論。この分裂世界の存在を実証し、異世界を観測することがDimension project DI計画の目的である。

その第1段階として、世界と世界の因子がバランスよく取れた生物 統一体が必要となる。この統一体が 世界と 世界を繋ぎ、世界を引き寄せる要となるからだ。

その為に 細胞をこちら側の生物に移植する実験が行われたが、そのことごとくが失敗に終わった。移植した 細胞はGVHDを起こし、細胞が暴走。実験動物の細胞をもの凄いスピードで浸食する。結果、実験動物の生体情報を滅茶苦茶に書き換えてしまい、従来の姿とは全く異なる歪な生命体へと変態させてしまう。この暴走を食い止めることが出来ず、第五研究所の연구원たちは今まで頭を悩ませてきた。

そこで今回発案されたこの実験は今までとはまったく異なるアプローチで、細胞と実験動物を融合させ、統一体を造り出そうとするものである。

第八実験室に本日、設置された『テレポルトゲート瞬間物質転送装置』。

これを用い、細胞と実験動物を一つにする。

移植するのではない。融合するのだ。

瞬間物質転送装置は「物質の分解と再構築」を送信機と受信機で行うことにより、物質を転送することが出来るが、送信機で分解した生物に別の生物が入り込むとそれぞれの個体情報が識別されることなく融合してしまう。

逆にこれを欠点ではなく、手段として使用する。

つまりは送信機に実験体となる動物と細胞を同時に入れ、生命体の分解と再構築を行う。そうすれば、外部からの移植を行うことなく、実験動物に細胞を融合することが可能となる。その筈だ。しかし、このアプローチがどういう結果をもたらすかは、全く見当がつかない。前例のない実験となるので、シミュレーションプログラムも組むことが出来ない。実際に行ってデータを採取するしかないのだ。

「それでは実験を開始します」

オペレーターの一人がそう告げ、戸木原、佐々木、石和が一様にうなずく。

## 第八実験室。

この部屋は瞬間物質転送装置のある部屋とコントロールパネルがある部屋の二層に分けられた造りをしている。

強化ガラスで覆われた防壁の向こう側の部屋には左端と右端に瞬間物質転送装置が設置されている。左側が送信機で、右側が受信機送信機のカプセルの中には全長が60?ほどのニホンザルとその隣には手のひらサイズの肉片が置かれている。つい先程、異世界生命

体アルファから採取したばかりの 細胞である。

四人のオペレーター達がガラスの手前に設置されている横長のコントロールパネルの前に座り、その背後に戸木原、佐々木、石和の三人が立っている。

今回の実験の総指揮は佐々木が担当する。以前、第三研究所の研究に関わっていたこともあり、瞬間物質転送装置テレポート・ゲートの操作経験があることから、一番の適任だと言える。マニュアルにしか触れていない石和や戸木原では、操作はおろか、指揮することも難しいだろう。

戸木原は自分から率先して指揮を執ろうとしたが、以上の理由により、周囲が強引に却下した。彼はマニュアルすらまともに読んでなかったようで、いくら統括主任であっても、まるで知識のない彼が指揮を執ったら、実験が成立しない。不承不承、戸木原は佐々木が指揮することを承諾したが、現在でも不満顔を露わにして、両腕を組んでいた。これでは我が儘な子供と変わらない。

石和はやれやれと一人肩を竦め、意識を目の前のモニターテレと瞬間物質転送装置ポート・ゲートに移した。いよいよ 実験が始まる。佐々木が小さく口を開き、オペレーター達に指示を出し始めた。

「フェイズ10より開始する。転送対象物を生物に設定。量子分解転送モードを起動する」

「了解。瞬間物質転送装置テレポート・ゲート、起動開始」

「量子分解モード起動中……プログラムスキャン開始……01から29562までリストクリアー。プログラムに異常は見当たらず」  
「転送対象物を生物に設定。送信機、量子分解アンカー作動。スタンバイモードに入ります」

「受信機、量子変換アンカー作動。スタンバイモードに入ります」



四人のオペレーター達がコントロールパネルに指を走らせ、瞬間<sup>テレ</sup>物質<sup>ポート・ゲート</sup>転送装置を稼働させる。中央のコンピュータが鈍い唸りを受け、受信機と送信機が淡い光を放ち始める。

「第二段階。構築情報の取得を行う。スキャナー起動開始」

「了解。スキャナー起動します。スキャニング開始」

佐々木の指示でオペレーターがパネルを操作すると送信機のカプセルの外に付いているリング状の機械が動き始めた。

上から下へ。下から上へ。

カプセルの上下に赤外線が走り、対象物の構成情報を読み取っていく。中にいるニホンザルと傍らに置かれたひとかたまりの細胞。この時点ではまだ二つの構成情報が別々に読み取られている。

これを量子分解、再構築することによって、1 + 1を1とする

石和はごくりと、唾を飲み込んだ。細胞との融合も気になるが、瞬間<sup>テレポート</sup>移動現象にも非常に興味を惹かれる。石和が瞬間<sup>テレポート・ゲート</sup>物質<sup>ゲート</sup>転送装置を使った実験を見るのはこれが初めてである。物質の分解と再構築の理論が確立しているとはいえ、やはりそこにあるものが、一瞬で移動してしまう現象に現実<sup>リアリティ</sup>感がない。

本当に送信機にあるものが一瞬で受信機に移動するのか。この目でそれを確かめて、自分の頭に現実<sup>リアリティ</sup>感を刻みつけたい。そんな欲求が石和の中で膨れ上がり、送信機に釘付けになる。胸をときどきと高鳴らせながら、その瞬間を待つ。

「 スキャン終了。次。第三段階。転送準備に入る」

「了解。これより転送準備に入ります」

「送信機、量子分解アンカー、スタンバイモードから実行モードへ移行。<sup>ソフト</sup>量子分解エネルギー、アンカー内で急速上昇中。各機関、動作に異常なし」

「受信機、量子変換アンカー、スタンバイモードから実行モードへ移行。<sup>ソフト</sup>アンカーに対象の個体情報を入力。具現エネルギーの精製を開始。エネルギー充電率二十パーセント」

「分解エネルギー80を突破。放電現象が始まります」

送信機のカプセルから大きな稼働音と共に電光が走り始めた。ばちばちと音を立てて、無数の電光が送信機から発せられ、暴れた獣のように研究室の中を猛り狂う。時間が経つに連れ放電の激しさは増し、送信機から強烈な光が溢れ出した。

石和は目を細めた。近くのスタッフからサングラスを差し出されたが、石和はそれを受け取らなかった。多少、眩しくてもサングラス越しではない、瞬間移動現象の瞬間を目に焼き付けたい。そう思ったからだ。幸い、肉眼に影響はないレベルの光量とのことだったので、目を瞑りたい衝動を堪え、瞬間物質転送装置の送信機を睨むように目を据える。

「量子分解エネルギー、充電率100%。送信機、各部異常なし。量子分解、準備完了」

「具現エネルギー、充電率100%。受信機、各部異常なし。量子変換、準備完了」

「その他、各機関異常は見当たらず。最終確認、コンプリート。転送いけます」

佐々木は大きく頷き、

「量子分解エネルギー開放。転送開始！」

と、転送実行の指示を与えた。

「了解、瞬間物質転送装置、転送開始します」

オペレーターが言葉を返し、パネルの転送実行キイに手を伸ばし、押した。

次の瞬間。

送信機から強烈な光が溢れだし、電光が縦横無尽蔵に荒れ狂った。カプセルの中が白色一色に染まってゆく。

すでに実験動物の姿も、細胞も、白い光に覆われ、中がどうなっているのか分からない。いや、すでにその肉体は分解されて、肉眼では確認出来ない状態なのだ。白色に染まったこの状態こそ、ヒトが肉眼で確認できるぎりぎりの状態なのかも知れない。

「量子分解アンカー正常作動。対象を量子分解し、転送電流へ変換完了！ いけます！」

「受信機の量子変換アンカー起動。転送電流を送電、再構築を開始！」

「了解、量子変換アンカー起動。再構築を開始」

送信機から受信機への転送が始まった。送信機に溢れ出ていた光が一瞬で消え失せ、今度は受信機のカプセルが白い光に染まり、電光がスパークする。しかし、光や放電現象が激しくなったのはほん

の一瞬のことだった。突如、溢れ出た光がカプセルの中で一点の光となつて収縮し、光が意味のある形を成していく。転送電流を変換し、再構築しているのだ。

……光が消え去り、静寂が訪れた。

「あ……」

石和は目を大きく見開いて、送信機の中を見る。送信機の中には既に何もなく。代わりに受信機の中には送信機に入っていた筈のニホンザルがいきいきと声を上げて、辺りを見回している。その猿の様子は送信機に入っていた時となんら代わりがない。

「これが……瞬間移動現象」  
レポート

石和が小さな声で呟く。移動した。本当に瞬間移動した。確かに自分の肉眼で、その瞬間を確認したが、やはり信じられない。リアリティが感じられない。

それなのに、奇妙な高揚感だけはやたら込み上げてくる。こんなことをとうとう人の手で行えるようになったことに感動を覚える。そう、ヒトは労力や時間を使うことなく。どんな遠い場所でも一瞬で移動することが出来る技術を手に入れたのだ。

受信機の中を一通り見回してみる。設置されたカメラもチエックするが、ニホンザルの傍らに細胞の肉片は、ない。再構築時に猿の肉体に取り込まれたのだ。

そして、肝心の猿の様子だが、特に異常は見当たらなかった。送信機にいるときと変わらない。首を傾

げ、カプセルをどんと叩いて、遊んでいたりしている。

「成功……か？」

オペレーターの一人がぼつりと呟くと、佐々木がおそろおそろと  
いった口調で、

「た、対象の生体データバイタルは？」

と、聞いた。オペレーターはパネルを操作して、受信機バイタルに生体ス  
キャンを走らせる。

「細胞、細胞、完全融合。実験体の生体データバイタルに異常値は見  
当たらず。オールグリーンです」

……いつもの細胞の暴走が始まらない。と、いうことは

「成功だ！」

傍らにいた戸木原が突如、大声で叫んだ。

「ははははは、ホラ見る！ 私が言ったとおりではないか。今日  
の実験で成功する！ そういう確信があったのだよ！ 瞬間物質テレポルト転  
送装置インゲートの導入は大正解だったな！ これで第1段階の『鍵キー』の精製  
は成った！ ははははは、これでD-I計画は大いなる前進を遂げた  
ことになる！ あとは結晶体の精製だけだ！ いける！ D-I計画  
は実現可能の一手手前までまだ来ているのだ！」

先程の不満顔は何処に行ったのか、戸木原は満面の笑顔を浮かべ、  
歡喜の言葉を周囲にまき散らす。

だが、本当にこれで安定してくれるのなら。第1段階の『<sup>キ</sup>鍵』の精製は大きく前進したことになる。今までどうやっても細胞と実験動物は上手く融合出来なかったのだ。これを機に研究が大きく前進するかもしれない。ようやく光明が見えてきた。

石和が佐々木の方に目を向けると、こちらと目が合った。佐々木の顔にも安堵と歡喜の表情が浮かんでいる。

石和は微笑み、

「やったな」

それだけ言うと、佐々木は笑顔を返し、

「うん」

と、大きく頷き、安堵の溜息を吐いた。

と。その時だった。突如、受信機のカプセルにいる猿の様子に変化が生じた。壁をどんと叩いていた手が止まり、大きな奇声を上げながら、そのまま倒れ込んだ。ぶるぶると小刻みに身体を痙攣させ、カプセル内を転げ回る。それと同時に、コントロールパネルの上に設置されているモニターの一部が真っ赤に染まり、大きなアラーム音が研究室に鳴り響いた。

「な、なんだ！ どうした!？」

石和が困惑の声を口にすると、オペレーターが狼狽した声で、叫んだ。

「た、対象の細胞に異変が発生！ 細胞の形状が次々と変質して、

拡大しています！」

「な  
」

大きく目を見開いて、生体バイタルデータをモニターしているグラフを覗き込む。滅茶苦茶だった。細胞の構成情報が従来のものとは大きく異なる形状に変質している。変質した細胞が斑点状に猿の肉体全体を覆い、その一つ一つがもの凄い勢いで従来の細胞を蝕み、浸食してゆく。

この現象を石和はよく知っていた。今まで何度も、何度も、目の当たりにしてきた事だ。見間違えようもない。

細胞の暴走だった。

「くそっ！」

石和は忌々しげに舌打ちをした。カプセル内で猿がのたうち回り、その姿形が従来のものと大きくかけ離れたものになってゆく。めきめきと音を立てて、両腕、両足の筋肉が隆起し、毛が抜け落ちる。猿の顔が醜く歪み、大きな瞳が紅い色に変色する。歯茎が剥き出しになり、犬歯が長く伸びる。60? ほどしかなかった猿の全長が三倍以上に膨れ上がり、元の原型を留めない怪物へと変貌してゆく。

怪物が咆哮を上げた。異様な程長く伸びた腕が受信機のカプセルを叩く。銃弾すら弾く特殊強化ガラスで出来たカプセルにわずかに撃で大きなヒビが入った。

がん、がん、がん、がん。

周囲を怪物が闇雲に叩き、カプセルが大きく振動する。がしゃん、

と大きな音が響き渡った。カプセルの一部に三日月状の穴が空き、強化ガラスの大きな破片が音を立てて床に砕け散った。オペレーター達の顔が大きく歪んだ。動揺して、パニックになっている。

「まずい！」

佐々木が叫びながらコントロールパネルに駆け寄り、パネルに指を滑らせた。

このままでは『成体』になってしまう。『成体』は実験動物に投与した細胞が暴走し、完全に細胞が書き換えられた状態の事を指す。『成体』となった実験体は驚異的な力を発揮し、通常の重火器ではまったく歯が立たない程の肉体を持つ存在となる。

そうだったら、もう手がつけれない。闘争本能が剥き出しとなった『成体』が外に開放される可能性がある。そうならない為にこの研究室は必要以上に頑丈な防壁で造られているが、それも確実なものではない。万が一、外に出るような事があれば間違はなく大惨事となる。そうならない為に『成体』になる前に実験体を『処理』しなければならない。

石和はオペレーター達の顔を見回して、叫んだ。

「実験中止！ 実験体が『成体』になる前に確実に処分する。オペレーターは佐々木博士のサポートに入れ。それと待機中の『AS<sup>アス</sup>H』の部隊にA装備で実験室の前で待機させろ！ 万が一、こちらの迎撃が失敗した場合、即座に状況を開始するように通達！ 急げ！」

「りよ、了解！」

と、オペレーター達が頷きながら、すぐさま動き始めた。一人が



パネルに指を滑らせ、一人は部隊への回線を開き、通達する。石和も続いてパネルの前に駆け寄り、佐々木の肩を掴み、モニターを覗き込んだ。

「ど、どうなってるんだろう、コレ。細胞の浸食が速過ぎる！  
こんなスピードでの変態は今まで見たことがない！」

佐々木が焦りの感情を含んだ言葉を吐いた。確かにこんな速度で浸食し、変態してゆく実験体は今まで見たことがない。細胞を外部移植していたときの変態スピードは現在の速度の四分の一ほどではない。だからこそ、実験体に変化したときには即座に始末することが出来た。

しかし、この細胞の浸食速度は異常だ。何故、こんなにも細胞の浸食速度が速いのか。瞬間物質転送装置テレポート・ゲートでの融合が細胞に何か変化をもたらしたのだろうか。

「『自動迎撃システム』起動。標準合わせ完了！自動でレーザー・ガンが発射されます！」  
オペレーターが佐々木にそう報告した刹那、蒼白い一筋の光が受信機のカプセルの上部から、実験体目掛け、発射された。

『自動迎撃システム』は実験体が『成体』になるのを防ぐため、カプセル内に取り付けられた武装である。実験体の生体データバイタルとリンクしており、実験体に異変があったらすぐにこのシステムが作動し、カプセルの上部に取り付けられたレーザー・ガンが実験体の身体を自動で射抜くように設定されている。

システムが自動的に合わせた標準は実験体の頭部だった。どんな生物であっても、頭部を破壊されては活動が出来なくなる。それは

細胞に侵された生物も同じだ。

ジャツ！と、レーザーが実験体の身体を射抜く音が響き渡った。だが、とっさに上がった実験体の左腕が頭部の破壊を阻害した。意図的に頭部をかばったのではなく、暴れていた際にたまたま振り上げたのだらう。振り上げられた左腕がレーザーの照射されているラインを走り、肘から先の部分の腕が切り落とされ、カプセル内にとさりと落ちた。

実験体は大きな悲鳴を上げ、カプセルの中で滅茶苦茶にもがき、苦しんでいる。継いで、二射、三射と連続でレーザーが照射され、実験体の身体を射抜き、血しぶきがガラスのカプセルを染め上げる。しかし、肝心の頭を射抜くことは出来ない。狭いカプセルの中とはいえ、これだけ激しく暴れ回られると、頭部に命中させるのは難しいようだ。

「自動標準システムだけでは無理だ！ 自動補正とマニュアルを同時に展開して、こちらで標準をつけるべきだ！」

石和の言葉に佐々木は大きくかぶりを振った。

「駄目だ！ いまマニュアルに切り替えたら、逆に時間がかかってしまう。下手に切り替えるのは危険だよ！ それよりもカプセルの外に出てしまった場合を想定して、実験室の武装を起動しておく！」

叫びながら、佐々木はコンソールの脇にある長方形型の箱のガラスを拳で叩き割った。非常時のみに作動することが許されるボタン。ためいらいなく、そのままボタンに拳を叩きつけ、佐々木は実験室に装備されている迎撃システムを起動した。

実験室の四方の壁にはレーザー砲と二十？のガトリング砲が装備してある。カプセル内で処分できなかった場合の備え。すべては実験体を『成体』にしない為に用意された、万が一のものだった。

これを実際に使用するの初めてのことである。警告のブザーが実験室に鳴り響き、張り詰めた空気がこの密室空間の中に充満してゆく

『自動迎撃システム』のレーザー攻撃は絶え間なく続いていた。幾度となく照射される蒼白いレーザー・ビームがカプセル内で飛び交い、実験体の身体にいくつもの傷痕が刻まれる。

が、どれも急所を貫くことは叶わず、活動を止めることが出来なっていた。実験体の赤い紅い眼が大きく見開き、レーザー・ガンが射出されている本体を捕らえた。実験体は片腕となった腕を振りかぶり、レーザーガンの本体に右拳を叩きつける、ぐしゃり、と原型を留めないほどレーザー・ガンの本体が歪み、爆竹を鳴らした様な音と共に爆発し、黒い煙を上げた。

完全に破壊された。これではもう『自動迎撃システム』は働かない。更に実験体は闇雲に右腕を振り回し、暴れまくる。強化ガラスで出来たカプセルに幾度も打撃を与え、その都度ガラスのヒビは大きさを増してゆく。

そして、限界が訪れた。

ガラスが割れる甲高い音が響き渡った。床に耐久硬度を超えたガラスの破片が粉々に砕け散る。受信機のカプセルはすでに防壁としての機能を失っていた。実験体を束縛するものはもはや何もない。

実験体は足をカプセルの外へ出し、そのままカプセルの外に出ようとする。

「っ！ 佐々木っ！ 実験体が  
「分かつてる！」

佐々木は歯がみしながら、パネルを叩き、実験室の壁に設置された武装を起動する。二十？のガトリング砲が実験室の左右の壁から飛び出し、実験体の肉体目掛けて、火を噴いた。6本並べた砲身が反時計回りに高速回転し、次々と弾を吐き出し、轟音が部屋中に響き渡る。

毎分6000発で発射される銃弾が次々と実験体の身体の至る場所へに食い込み、わずかに緑色が混じった紅い血が勢いよく吹き出した。身体が踊るように揺れ、カプセルから出ようとする身体の動きが止まった。

が、致命傷には至らない。細胞の書き換えが進み過ぎている。実験体の肉体が強化され、銃弾が深くまで食い込んでいないのだ。レーザーで脳を射抜かなければ、活動を止めることは難しそうだ。石和は佐々木の左隣にあるコントロールパネルに取り付き、パネルに指を滑らせ始めた。

「佐々木、レーザー砲の操作をこっちによこせ！」  
「え？」

「佐々木がガトリング砲で足止めしている間にレーザー砲で実験体の脳を射抜く！ 早くしろ！」

佐々木は頷き、

「わ、わかった！ 石和くん、頼んだ！」

叫んで、パネルを操作すると、石和の目の前にあるモニターに『Laser operation』という文字が浮かび上がり、レーザー砲のプログラムが起動した。非常用のマニュアルは過去に一通りマスターしている。大丈夫。覚えているはずだ。石和は自分にそう言い聞かせ、壁の左右に取り付けてあるもう一つの武装を起動した。

レーザー砲から射出されるレーザー・ビームは『自動迎撃システム』に装備されていたレーザーガンとは比較にならないほどの高出力の照射が可能だ。いくら 細胞の書き換えで強化された細胞といえども、これの最大出力には耐えられないはずだ。

ただ、最大出力の場合、照射時間が異常に短く、狙いが外れると、第二射までに時間がかかるため、チャンスは一度きりとなるだろう。

マニュアルとコンピューターの誤差修正機能を同時に展開し、再び、実験体の脳に狙いをつける。実験体の肉体の膨張は未だ続いており、既にその身体の大きさは二メートル近い。全身から溢れ出る粘液を垂れ流し、床を塗らしながら、肉食獣の様な牙を剥き出しにして咆哮する。

ガトリング砲の集中砲火を浴びているのにも関わらず、足が少しずつ、前へ、前へ、と進んできている。細胞の浸食が進み、更に肉体が強化されたのだろう。最終的にはガトリング砲では足止めすら出来ないに違いない。そして、その刻は間近に迫っている。

このままの勢いだとあと1分もしないうちに『成体』として、完成してしまうのではないだろうか。

「くっ……な、なんて身体能力だ」

石和が小さく呟くと、ルビーのような深紅の瞳がこちらを向き、ガラス越しに石和の視線と交差した。様な気がした。

ぞくり、と。石和の背筋に悪寒が駆け抜けた。

極度の焦燥感が石和の心を蝕んでいく。身体が強ばり、冷たい汗が額からこぼれ落ちる。焦っては駄目だ。心が乱れ、操作にミスがあれば逆に事態を悪化させるだけだ。はやる心を必死に押さえつけながら、手順に従い、レーザー砲の回路を次々と開き、発射態勢にまで持つて行く。

「標準を対象の頭に固定！ 自動誤差修正0・04！ 出力最大レベル5！ 発射準備完了！ いけます！」

「っ！ っ！ 佐々木！」

「っ！」

石和の言葉を合図に、佐々木はガトリング砲の活動を止めた。その次の瞬間、石和はトリガーとなる「実行キイ」を押して、レーザー砲を発射した。蒼白い光が実験体の頭目掛けて空を走る。左右の壁から同時に放たれたレーザー・ビーム。吸い込まれるように二筋の光が一点に集中し、実験体の頭を射抜いた。額の中心に直径が五センチほどある穴がぽっかりと空いた。

時間が止まったような硬直と沈黙。

それは五秒にも満たない、一瞬の間だったのだろう。しかし、石和にはその沈黙が永遠の時間を感じられた。

「やった……のか？」

石和が擦れた声で呟いたのを皮切りに。時間が動いた。ぐらりと。実験体の身体が揺れ動いた。

そのままひたひた歩き、しすくま 踞るようにして、実験体の身体が崩れ落ちた。身体がびくびくと痙攣しているが、それ以上の動きはなく。完全に沈黙していた。生体バイタルデータを見ても、もう何も反応は計測されていない。完全に消失していた。

ようやく、決着が付いた。緊張感と共に力が抜け落ちてゆく。石和は天を仰ぎながら、額に手を当てると、もの凄い量の汗がべつたりと付着した。どうやら、相当緊張していたらしい。大きく安堵の溜息を吐きながら、コントロールパネルを背にし、座り込んだ。緊張感が消え失せると、今度は何とも言えない気持ち<sup>が</sup>沸き上がった。きた。

最悪の事態は避けられたが、それだけだ。後に残ったのは、重苦しい空気と失意感。

テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置を使った融合でも 細胞の暴走を止めることは出来なかった。

実験は失敗に終わったのだ。





## 6 「GVHDと拒絶反応」

石和、佐々木、戸木原はミーティングルームに戻ってきていた。二十人分の椅子と中央に設置された巨大なテーブルが置いてあり、正面には百二十インチのメインモニターが壁に取り付けられている。モニターの見やすい中央の席に石和、佐々木の順に座り、その反対側には戸木原がいる。ここへ来たのは二時間前に行われた瞬間物質テレポト・ゲート転送装置の実験について、話し合いをする為であるが、三人とも椅子に座り込んだまま、口を開かない。完全に沈黙していた。

先程の緊急事態を回避するため、精神力を極限まで消耗していたこともあり、今後の研究について、話し合う余力がなかった。なによりも、瞬間物質テレポト・ゲート転送装置の実験が完全に失敗したことが石和の気を奪い、思考を停止させていた。

無論、戸木原のようにこの実験が成功するとは思ってはいなかった。しかし、この実験を行うことにより、なんらかの活路、もしくはいつもと違った結果を見せてくれるのではないかと、わずかな期待感があった。

その期待は粉々に打ち砕かれ、何の収穫も得ることは出来なかった。これから、どうすればいいのか。何の対策も方針も浮かびはない。辺りを見回すと、他の二人も自分と似たような心境の様だ。気だるげな表情で、俯いている。

「やはり、瞬間物質テレポト・ゲート転送装置を使った手法でも統一体を造ることは難しいのか……失敗に失敗を重ね、すでに半年。細胞の移植も失

敗、体液注入も失敗。他になががあるというのか。これ以上、実験を続けるのは無駄なのかもしれんな……」

戸木原がテーブルの上で両手を組んで、落胆を含んだ口調で呟く。流石の彼でもこの状況では樂觀的にはなれないようだ。

しかし、いつまでもこうしても仕方がない。無駄でも何でも、新しい方針を立てなければならぬ。どうにかして、細胞を制御し、『鍵』という名の統一体を造る。

それが自分達の仕事なのだから。石和は額に手をあてながら首を左右に振って、けだるさを振り払い、口を開いた。

「……ともかく、今回の実験について、もう少し詳しく検証してみよう。失敗には終わったが、奇妙な点もあった。そこを一つ一つ分析していけば、何か活路が開けるかもしれない」

佐々木と戸木原は頷いた。異論はないようだ。

「それじゃあ、佐々木。今回の実験データを中央のモニターに回してくれ。それと今まで行った細胞移植実験のデータも総合の平均として表示してくれ。比較して、見てみよう」

「うん。分かった」

佐々木が目の前にあるノート型パソコンを叩くと、中央のモニターにグラフが表示された。今回の実験の生体データバイタルと以前行った実験の生体データバイタル。三人でそれを見比べる。

「……こうしてみると、意外に細胞移植実験のときとデータが違うよね。この差はどこからでたんだろう？」

と、佐々木が顎に指をあてて、呟く。

「詳しく分析してみないと分からないが……これは『成分が分離したジューズ』と『かき混ぜたジューズ』の違いじゃないか？」

石和の言葉に首を傾げ、

「どういうこと？」

と、言った。

「細胞を取り込んだ質の差だよ。細胞移植した実験体は当然のことだが、移植したその部分から細胞の浸食が始まっている。つまりは成分が全域に行き渡っていない分離したジューズだ。対して、今回の実験は瞬間物質転送装置テレポート・ゲートが分解と再構築を行い、細胞は実験体の全体に行き渡った状態で融合している。それがかき混ぜて、成分が互いに上手く溶け合ったジューズってことだ。同じ種類のジューズではあるが、微妙に味が違う」

佐々木がなるほど、と頷いた。

「今回の実験で細胞がほんのわずかな時間、安定したのはそのせいかもね。でも、そうなるかどうか、細胞は暴走したんだろう。『混ぜ合わせたジューズ』状態でも、細胞は細胞を受け入れられないってことかな」

「だろうな。だからこそ、細胞が暴走したんだ。それに今回は『混ぜ合わせたジューズ』状態が裏目に出た。実験体の隅々まで行き渡った細胞が一斉にGVHDを起こして、浸食してしまったんだから」

と。そこまで、語って。石和はモニターに表示されている生体データを見つめながら、眉を顰めた。なにか、妙な違和感がある。佐々木はきよとんとした表情を浮かべ、

「？ どうしたんだい、石和くん」

と、訊いてくる。石和はノート型パソコンに指を滑らせ、改めて生体データを検証してみる。石和は大きく目を見開いて、言った。

「これは…… G V H D じゃないぞ。拒絶反応だ！」

「え……？」

「ど、どういうことだね？」

と、佐々木と戸木原が声を上げる。石和は生体データのグラフの一部をピックアップして、正面のモニターに映した。

「これが 細胞時における双方のデータだ。知つての通り、細胞が暴走するトリガーとなるのが G V H D（合併症）が原因だ。細胞を実験体の身体に移植すると、細胞が 細胞との共存を受け付けず、合併症を起こし、細胞が 細胞を滅茶苦茶な情報に書き換えてしまう。」

しかし、よく見てくれ。瞬間物質転送装置を使った今回の実験、細胞は合併症を起こしていない。逆だ。実験動物である 細胞のほうか 細胞を攻撃している。つまりは拒絶反応だ」

G V H D と拒絶反応は混合されがちであるが、攻撃する対象と攻撃される対象が全くの逆である。臓器移植で例えるとすれば、臓器を移植し、その臓器を肉体が受け付けないのが拒絶反応と呼び、G V H D はその逆、臓器の方が受け付けないのが G V H D と呼ばれ

る。

細胞が実験体の身体になじむのを拒絶するのが、GVHD。実験体の細胞が 細胞を拒絶するのが拒絶反応という訳だ。

戸木原は腕を組み、

「しかし、石和くん。最終的に 細胞は暴走し、実験体の身体に浸食したのだ。この違いに何か大きな差があるのかな？」

石和は頷いた。

「勿論、ある……あります。今回の実験、細胞が暴走を始めるまで若干のタイムラグがありましたよね？ これは最初『暴走による浸食』ではなかったんです。忘れがちですが、元々、細胞には他の細胞に干渉すると浸食する特性が備わっています。GVHDを引き起こすことによって、暴走し、浸食に拍車をかけていたんです。しかし、今回のこの実験、データを見ると分かりますが、GVHDは当初、起きていない。

単純に 細胞は自分の細胞を増やすため、浸食している。

量子分解された 細胞が実験体の身体にくまなく浸透し、結果、暴走したわけでもないのに関わらず、この浸食スピードが今回の実験ではもの凄い速さに加速した。そして、実験体である 細胞が耐えられず、拒絶反応を起こし、それがトリガーとなって、いつもの暴走が始まった、というわけです」

佐々木が納得した表情を浮かべた。

「そういうことなら、少し活路が見えてきたかもしれないね。原因が 細胞の浸食なら、浸食するスピードを遅めることが出来れば、

拒絶反応は起こらないってことなんだから」

戸木原が椅子からがたんと音を立てて、立ち上がった。

「おおおつ、す、素晴らしい！ 光明が見えてきたではないか！  
となれば、やることは一つだな。細胞に負けない 細胞を造り  
出せばいいのだ。そうすれば、拒絶反応も起きないし、上手く適合  
するに違いない！」

声高らかに、そんな事を言い出す戸木原。この男はどこまで楽観  
的なのだろうか。石和は嘆息した。

「口で言うのは簡単です。しかし、現実問題として、どうやって  
そんな 細胞を造り出せばいいのですか？ 細胞はガン細胞以上  
の強い浸食力を持っています。そんな細胞を簡単に押さえることが  
できる技術があるなら、ヒトはガンをとくに克服しているはずで  
す」

「ぬ……」

戸木原が石和の言葉に口ごもる。

「それ以前にどうやってたら 細胞の浸食力を押さえ、拒絶反応を  
起こさないようにするか。それが問題です。今までも浸食を弱体化  
させる研究は続けてきたのに、未だ実現できていないのです。そう  
簡単に事が進められるとは思えないのですが」

「で、では、どうすればいいというのだ！ このままでは埒が明  
かないではないか！ なんとかしたまえ！」

戸木原は眉間に皺を刻んで、テーブルを両手で強く叩いた。戸木  
原の理不尽さに石和は舌打ちをした。無理難題を楽観的に要求し、

それを否定したら、怒鳴り散らし、ヒトに当たる。そして、自分ではその解決案を一つとして出さない。どうして、この男が統括主任に任命されたのか。石和には理解できない。黙殺して、戸木原を睨み付ける。

険悪な空気が流れ始めると、佐々木は笑いながら、

「まあまあ。その難題を解決するために僕らは集まっているんだろう？　ひとつひとつ、どうするべきか、考えていこうよ」

と、言って、両手をひらひらさせた。

「まず、細胞の浸食するスピードを遅めることについてだけ……僕にひとつ考えがある」

「え……？」

「ほ、本当かね？」

佐々木の言葉に、石和と戸木原が大きく目を見開いた。

「石和くん、以前僕の論文を読んでくれたよね？　中身を覚えてるかい？」

石和は少し考えて、

「ああ。生体ナノマシンの同化と増殖……たしか『NEXT』だったか」

と、言った。

医療用ナノマシン『NEXT』。極小で知られるナノ単位（ウイルスサイズの大きさ）で造られた、生体ナノロボットを利用した技術である。ナノロボットの細胞の生産と同時に代謝機能を活性化さ

せ、治癒能力のスピードを通常時の三倍にも四倍にも上げる技術である。佐々木勇二郎が理論を構築し、大学の研究機関で開発を進めていた。動物実験も成功していて、残るは臨床実験のみ。最終的には大怪我でも数日で完治させるモノを目指して、研究中とのことだ。

現在はこのD-I計画の責任者として駆り出されたため、『NEXT』の研究は凍結中らしい。佐々木は頷いて、答えた。

「そう。この『NEXT』は破損した細胞情報を読み取って、ナノロボットがその細胞に同化する。そして、それが次々と増殖して、欠けた肉体を再生してゆくものなんだけど……これを実現するためには『細胞の浸食と同化』について、研究していたことがあるんだ。僕の場合はどれだけ速くナノロボットを細胞に溶けこませて、広げることが課題だったんだけどね。このナノロボットの特性を逆転させれば、逆に細胞の浸食するスピードを抑えることも可能だと思うんだ」

「ははあ、ナノマシンを同化させて、浸食する特性を遅めるのかなるほど……面白いな。確かにそうだったアプローチは今までやったことがなかったな。どうして今まで、やろうとしなかったんだ？」

石和の問いに佐々木は苦笑いを浮かべた。

「勿論、考えたことはあったよ。でも、GVHDが起ると、ナノマシンにプログラムを与えても、上手く作動しないからね。する意味がなかったんだ。でも瞬間物質転送装置テレポート・ゲートを使ったこの実験ではGVHDは起きなかったんだから、多分いけると思う。遅延プログラムを入力したナノマシン、造ってみせるよ」

佐々木が先程まで浮かべたい気だるげな表情はすでになく。瞳に活力が溢れていた。完全に失敗だと思っていた実験にわずかな活



路が見えたからだろう。石和は微笑んで、言った。

「この分野じゃ、佐々木の右に出るものはいなさそうだな。頼んだぞ」

「了解、任せて」と、言って佐々木は頷いた。佐々木がこうして自信がありそうな口調で話すときは、いつも期待できる。実現できる確信があるのだ。任せて問題はないだろう。

「そうになると、残るはあとひとつ、だね。細胞を細胞に負けない細胞にしなければならぬ」

佐々木の言葉に石和は両腕を組みながら、唸った。

「……細胞の強化、か。正直、こっちの方が難題だろうな。」

細胞は 世界にあるどの生物の細胞よりも強い。いくら手を加えたところで、たかがしれている。そういった研究は今までもしてきたが、いい結果が出た試しがない」

「そうだね。なにか別のアプローチを考えないとね……戸木原博士、なにかありますか？」

と、佐々木が話を戸木原に振る。

「む。そ、そうだな……細胞にもナノマシンを組み込めばいいのではないか。細胞と同様、細胞にも細胞の浸食に負けないものを入力すればいいのだよ！」

戸木原の言葉に石和は眉を顰めた。それが出来ればとつくにやっている。佐々木は手を小さく左右に振って、

「さ、さすがにそれは無理かと。細胞が細胞に浸食するシステムはまだ説明できていないのです。説明できていないものに対抗するナノマシンは造れません」

「しかし、佐々木くんは細胞にナノマシンを組み込もうとしているではないか」

「それはあくまでも遅延を遅らせるシンプルな命令ですからね。未知の生物とはいえ、細胞の増殖の仕方は世界のものとあまり変わりませんので。しかし、これがどういう形で浸食し、細胞の構成情報を書き換えるかは、未だに説明できていません。万が一、説明できていたとしても、そこまで複雑な動作をナノマシンでは行えないんです。少なくとも、現在のナノテク技術では」

「むむむ、では、どうすればいいのかね？」

質問を質問で返してくる戸木原。その活路が見えないからこそ、佐々木は話を振ったというのに。やはり、駄目だ。この男は。

今日のこれ以上の論議は無駄かもしれない。悔しいが、自分には何も思いつかない。佐々木もこれ以上の打開策はなさそうだ。もう一度実験のデータを洗い直して、それからもう一度話し合った方がよさそうだ。

と。そんなことを考えていると、

「そうになると、答えはひとつよ。細胞に合わせた細胞をーから造ればいいのかよ」

と、奥の入り口の方から女性の声が聞こえて来た。石和が声の方へ視線を向けると、入り口の扉に冬用のコートを羽織った女性の姿があった。肩までかかるくらいのミディアムヘアで、かすかにウエーブがかかった柔らかそうな髪の毛が肩にかかった。川原はそれを右手で掻き上げながら、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

背丈は162?ほどで、女性としては平均的な身長だろうか。顔は人並み以上に整っているが、千恵子の様なあどけなさはない、どちらかといえば、美人に分類される容姿だろう。

かわはらななえ  
川原奈々恵。D-I計画担当者の一人であり、五人の担当責任者の紅一点でもある。

「ただいま。いま帰ったわ。は〜どうやら間に合ったみたいね」

羽織っていたコートを脱ぎながら、川原は石和の左隣の椅子に座り込んだ。石和は驚いた表情で言った。

「川原たちが戻ってくるのって今日だったのか。言えば、会議の時間も伸ばしたのに」

「まあ、今日中に蹴りが付くのは分かってたんだけど、会議には間に合わないと思ったのよね。でも、向こうで今日の実験結果のデータ見たら、今日中に会議に参加しなくなっちゃって。急いで帰って来ちゃったわ」

「実験って……今日の実験結果のデータか？」

川原は頷き、「勿論」と、言った。

「よつのは生物研究所でもアルファに関する実験データは未だ送られてきているみたいよ。向こうでもまだアルファに関する研究は続いているからね。勿論、関係者以外閲覧禁止だけど、その辺はわたしもD-I計画の担当者だから権限行使して、見せてもらっちゃったわ」

言いながら、くすくすと笑う。D-I計画の担当責任者である川原

奈々恵と川上弘幸は三ヶ月ほど前から、八王子の高尾にあるよつのは生物研究所の調査を行っていた。瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートを使った融合実験とは、異なるアプローチ方法を探すためである。

よつのは研究所は異世界生命体アルファを最初に収容した研究所であり、第五研究所とは違う資料や研究も行っていたので、何か手がかりになるものがないか、探っていたのだろう。そして、川原と川上はよつのは研究所である発見をしたらしい。

『上手くいけば、D計画に貢献できるかもしれない』

川原はそう言って、一ヶ月ほど前から、よつのは研究所に入り浸るようになった。

その発見とは何なのか。

石和は川原に訊いたが、『ぬか喜びになるかもしれないから、まだ言えない。きっちり成果が出せたら、教える』と言って、詳細をまるつきり教えてくれなかった。

他のメンバーにも訊いたが、皆、首を横に振った。二人は誰にも詳細を教えていなかったようだ。今日、戻ってきたと言うことはなんらかの成果が出た、ということだろうか。

「……で、会議はどんな感じで進んでいるのかしら？ どれどれ」

髪の毛を掻き上げながら、石和が使っているノート型パソコンを覗き込む川原。距離が近い。女性特有の甘い香りと掻き上げた髪の毛の合間から覗くうなじに、どきりとさせられる。警戒心がないのだろうか、この女は。石和は川原から目を逸らしながら、低い声で呟いた。

「川原……何故わざわざ俺のパソコンを覗く？ 中央のモニターに情報は出ているだろう」

「いいじゃないの。わたしはこっちで見た方が分かりやすいのよ」  
「訳が分からないんだが」

川原は軽く眉を顰めて、

「もう、石和くんは冷たいわね。せつかく久しぶりに帰ってきたんだから、もう少し、再会のスキンシップがあってもいいと思うのに。ホラ、こんな風に」

言いながら、川原は石和の左腕に両腕ぎゅっ、と抱きついた。

「っ！ あ、あのなあ、川原！」

「ん〜、石和くんの身体あつたかいわね。外寒かったから、丁度いい暖房器具だわ。ふふふ、ぬくい、ぬくい」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、腕に密着し、頬をすりすりとする川原。川原の大きな胸の感触が服越しに伝わる。佐々木は愉快そうに笑い声を上げた。

「あははは。いいなあ、石和くん。モテモテだね」

「佐々木も笑ってないで止めてくれ。いまは会議中だぞ」

そう言うが、佐々木は笑うだけで止めようとしない。戸木原も訝しげな表情を浮かべ、「妻子持ち……愛人……不倫……？」と、見当違いな台詞を一人ぶつぶつと呟きながら、両腕を組んでこちらを見据えている。石和は舌打ちをし、強引に川原の腕をふりほどいた。

「ヒトをからかうのもいい加減にしろ、川原。大体、白々しいぞ。」

入ってきた時の台詞といい、入ってくるタイミングといい、俺たちの会話を聞いていたとしか思えないぞ。外で立ち聞きして、わざわざタイミングを合わせたな？」

「あ、ばれてた？ 割と自然を装ったつもりだったのに」

悪びれた様子もなしに川原は軽く舌を出して、笑った。どうにもこの女性はヒトの困った反応を見て、楽しむ節がある。

「困難な状況に陥っている中、突如入ってきた人物が状況を打破する提案をして、解決する……！ ってなかなかワクワクするシチュエーションだと思わない？ なんか活躍する主人公みたいでかっこいいじゃない」

石和は小さく溜息を吐いた。

「……そんなドラマや映画みたいな展開は現実ではいらないだろ。いいから本題に入れ、本題に。どういう意味なんだ、さっきの言葉は」

川原はきよとんとした表情を造って、

「？ さっきの言葉って？」

と、訊いてくる。わざとやっているのだろうか。石和は眉間に皺を寄せて、言った。

「とぼけるな。自分で言ったんだろ。『細胞に合わせた細胞を一から造ればいい』って」

「ああ。それなら言葉通りの意味よ。細胞に適應する細胞が

見つからないなら、造ればいいのよ。人工的にね」

石和はがくりと肩を落とした。今更そんなことを言われるまでもない。

「あのなあ、川原……口で言うだけなら簡単だ。今までいくら実験体の細胞に手を加えようが、細胞の浸食を防ぐことは出来なかったんだ。どうやって、そんな都合のいい細胞を造り出すつもりだ」

川原は右の人差し指を立てて、かぶりを振った。

「石和くん、一つの物事に固執すると、大きなものの見方が出来なくなるわよ。もっと柔軟に考えるのよ。従来の生物の細胞に手を加えるのが難しいなら、最初からこちらの都合の良い細胞を持った生物を生み出せばいいのよ」

石和は大きく目を見開いて、はっ、とした。

「っ！ 遺伝子操作か！」

「ぴんぽん。大正解。そう、わたしは元々の研究分野が遺伝子操作でしよう？ なんとか細胞に適応できる細胞を造れないか模索していたのよ。で、川上くんと一緒に色々研究して、考えついた結論はこれよ」

そう言つて、川原は懐から、なにやら取り出した。石だった。蒼い色をした直径が二センチほどの水晶。どういう仕掛けか、水晶の中で蒼白い炎のようなものが揺らめき、輝いている。

「な、なんだい、それは……？」

佐々木が目を大きく見開いて、まじまじとその水晶を見つめている。

「『アフア・クリスタル水の水晶』。正式名称はなかったから、わたしが勝手に命名したの。いい名前でしょう?」

「いったいななんだ、これは……まるで中で炎が燃えているみたいだ」

「『みたい』じゃなくて、燃えているのよ、実際に。まあ、あたし達が知っている炎とはちよつと性質が違うものなだけだね。ちよつと、手を出して石和くん」

石和が手を出すと、川原がその手のひらに水晶を落とした。石和が手のひらを見つめながら、

「これ……触っても大丈夫なのか?」

と、言った。川原はくすくすと笑いながら、頷いた。

「別に触るくらいなら、大丈夫よ。強く叩いたり、握りつぶしたりはしない限りね」

人差し指で突いたり、軽く握ったりしてみろ。心なしか、生暖かいような気がする。中の炎のようなもののせいだろうか。

「なんか、これ一見固そうな水晶だが、妙に柔らかいな」

ぶよぶよした弾力がある。本当に奇妙な石である。いや、本当にこれは石なのだろうか。



「……で、この石はいつたい何なんだ？ 確かに珍しい水晶であることは認めるが、これがD-I計画となんの関係があるんだ。因果関係がさっぱり読めないんだが」

川原はあつけらかなとした面持ちで、告げた。

「あ、ごめんなさい。珍しい石だから、ちょっと自慢したくなっちゃっただけ。D-I計画とは何の関連もないの」

石和は脱力して、テーブルの上に突っ伏した。川原はおかしそうな表情を浮かべて、石和の肩をぼんぼんと叩いた。

「くすくす。冗談よ、冗談。石和くんをちよつと和ませてあげようと思って」

「お、お前なあ」

「だって石和くんって、いつも不機嫌そうな顔浮かべてるんだもの。もう少し、笑わないと身体に良くないわよ」

「余計なお世話だ。別に不機嫌な訳じゃない」

「笑った方が研究所内の女の子にもてると思うのに。せつかく顔がいいんだし」

「川原、いい加減にしろ」

川原は両手をひらひらと振った。

「まあまあ、この水晶にある特性を知ったら、きっと石和くんの不機嫌顔も満面の笑顔になるわよ。このD-I計画第一段階においての救世主的存在になるかもしれないわ」

自信の籠もった口調でそう告げると、川原は立ち上がった。

「みんな、悪いけど第二研究室まで来てくれるかしら。面白いものを見せてあげるわ。川上くんが準備して待ってるわよ」

川原の言葉に大きく目を見開いて、困惑の表情を浮かべる石和達。川原はその反応に満足したのか、心底楽しそうな笑顔を浮かべ、片目を瞑って見せた。

6 「GVHDと拒絶反応」(後書き)

続く!

## 7 「やわらかい細胞」

第五研究所にはすべてで十五の研究室があり、それぞれの研究室でD-I計画に関する様々なアプローチを行っている。細胞の構造を延々と調べる研究室もあれば、分裂世界に対する考察を続ける研究室もある。ひとつだけ共通しているのは、ここにあるすべての研究室は分裂世界の観測 D-I計画に繋がる研究を行っているということだ。

石和たちが川原に連れられ、来たのはその中の一つ、第二研究室だった。浸食力の高い、細胞にどういった細胞なら対応できるのか。それを知るために、様々なアプローチを行っている場所だ。川原が自動ドアを開き、中に入ると、石和、佐々木、戸木原がそれに続いた。

天井には蒼白い蛍光灯が灯り、部屋全体が薄暗い。縦長な造り部屋にいくつものカプセルが並列に並んでいる。カプセルの全長は2メートルぐらいで、中には様々な実験動物が入れられており、カプセル内は実験動物を保護する特殊な液体で満たされている。

ハムスター、ラット、モルモット、ウサギ、ミニブタなどの典型的な実験動物を始め、トカゲやワニなどの爬虫類、両生類、昆虫、等々、その実験動物の種類も様々だ。

細胞を移植し、肉体が変態した途中で始末された実験動物も多数あり、あまりにも変態が進んだものは元の生物がなんであったのか分からないほどだ。

様々な実験動物を横目にしながら、川原の後を追ひ、研究室の奥

へと進んでゆく。無数のカプセルの連なりから抜け出すと、今度は壁越しにデスクが横一面に並べられた場所へと出た。各デスクには高スペックのワークステーションが設置され、白衣を着た研究者たちが皆、黙々とキーボードを叩き続けている。

カプセルの様子はすべてワークステーションにリンクされているので、生体スキャンバイタルは遠隔操作で行える。更に細胞の採取、細胞に手を加える作業、その他研究に必要な作業は、機械で自動化されており、八割方の作業はデスクで行えるようになっていく。

川原はその無数に並んだデスクのひとつに向かって歩いていった。そこには小柄な体格の男が、滑らかな動きでワークステーションのキーボードに指を滑らせている。

身長は160cmにも満たない、小柄な体格で上に羽織った白衣が若干だぶついていた。短い髪の毛を整髪料で逆立てている。顔は眉毛が極端に薄いのが唯一の特徴で、他は特筆することのない平均的な容貌だ。総合的なルックスは悪くないのだが、なにか近寄りがない雰囲気がある。

その原因は表情だろう。顔に感情の色がまったく浮かんでいないのだ。リアルに造られた人形のイメージを彷彿させる。瞬まはたきと眼球の視線移動以外は顔をいっさい動かさず、作業に没頭し、その様は精密に動く機械のようだった。

かわかみひろゆき  
川上弘幸。D計画担当責任者の一人である。

川原は川上の至近距離まで近づくと、手をばたばたと小刻みに揺らして、

「川上くん、連れてきたわよ」

と、言った。その瞬間、手がぴたりと止まり、彼の視線がこちらを向いた。無表情のまま、じっと石和達の顔を見据え、その後、小さな声で「……どうも」と、呟き、軽く頭を下げた。石和も反射的に頭を下げて、それを挨拶とした。佐々木が右手を小さく振って、笑顔を浮かべながら、言った。

「やあ。川上くん。久しぶり。元気にしてたかな」

川上は小さく頷き、

「……問題ない」

と、答える。

「一ヶ月もの間、向こうでお疲れ様。向こうじゃ直属の部下もないし、大変だったんじゃないかな」

「……支障はなかった」

「よつのは生物研究所の様子はどうだった？ やっぱり第五研究所とは造りや雰囲気は違ったのかな」

「……だいぶ違った、と思う」

「……」

「……」

「え、え」と

「……」

佐々木が必死になって話題を口にするが、返事が必要最小限なので、会話が膨らまない。というよりも、まるで会話のキャッチボールが成立していなかった。相変わらずだった。

川上は無口、無表情で、内面では何を考えているか、まったく読み取れないタイプの男だ。饒舌になることもあるが、それはあくまでも研究に対することだけで、私生活や世間話についてはまるっきり自分から口にするかもしれないし、こちらがそういつた話をしていても、加わることがない。自分の殻に閉じこもっているようにも見えないので、基本的にそういう性格をしているだけなのだろう。佐々木と川上の無益な会話を打ち切るため、石和は腕を組み、川上へ声をかけた。

「……で、川原。ここに連れてきて、何をするつもりなのか。そろそろ教えてくれないか。あの水晶とD-I計画、いったいどういう関係があるんだ？」

川原は人差し指を振りながら、片目を瞑り、

「慌てない、慌てない。オードブルを食べないでメインディッシュを頂くのはマナー違反よ。『百聞は一見に如かず』でしょう？ 説明する前に、まず面白いものを見せてあげるわ。それじゃ川上くん、お願いね」

そう言っつて、川原は先程の水晶 『アクア・クリスタル水の水晶』を川上に手渡した。それを受け取ると、川上はデスクの引き出しから一枚の紙とナイフを取り出し、デスクの上に紙を敷き、『アクア・クリスタル水の水晶』をナイフで切り始めた。

「え？ そ、それ切っちゃうのかい？」

佐々木が驚愕の表情で、川上に聞く。川上は小さく頷いた。

「切らないと実験が出来ない」

ナイフは水晶の中にたいした抵抗もなく入り込み、すとん、と簡単に分断された。石和も先程自らの手で確認したが、あの石は妙に柔らかい。ナイフやカッターだけでも簡単に寸断できるほどの柔らかさだ。だが、見た目は固そうな水晶なので、ナイフで切っている光景になにか妙な違和感を感じる。

再びナイフを水晶に入れて、寸断し、直径五ミリぐらいの欠片を二つ造った。その二つの欠片からも蒼白い炎が灯っている。本当に奇妙な石だ。

川上は椅子から立ち上がり、背後に並んでいるカプセルの一つに歩み寄った。川上の後を追いつ、カプセルの中を覗き込むと、丸いテーブルの上に二つのシャーレ（底の全長が10センチ程のガラス製の平皿）がテーブルの左端と右端、極端に離れた場所に置いてあった。それぞれのシャーレの中には2センチにも満たない小さな二つの肉片が乗せられている。

「川原くん。この二つの肉片は、一体なんだね？」

と、戸木原が訊くと、川原はそれぞれを指さしながら、答えた。

「左側にある、こちら側の肉片が細胞です。右側にある肉片がウサギから採取したもので、つまり、細胞です。両方とも先程採取したばかりのものですよ」

細胞と細胞。ふたつの細胞を使った実験のようだ。しかし、この二つの細胞とあの水晶の因果関係がさっぱり分からない。石和が眉を顰めながら川原の顔を見ると、こちらを向いて楽しそうな笑みを浮かべた。この笑みは知っている。驚かそうとなにか企んでいる



る表情だ。こういった場合、いくら尋ねても勿体ぶって、教えてはくれないだろう。再びカプセルに視線を移し、実験の様子を見守ることにする。

「それでは、実験を開始する」

川上が淡々とした口調で皆にそう告げて、実験が始まった。カプセルの横にある小さなボタンを押すと、ばしゃっ、という音と共に横幅10?、縦幅2?ほどのボックスが飛び出した。シャーレに先程切った『アクア・クリスタル水の水晶』の欠片を乗せると、それをボックスの中央に置き、再びボックスを押し戻して、閉じた。

続けて、川上はカプセルの脇に付いているパネルを叩く。すると、カプセルの中で二つに折りたたまれていた細長いアームが稼働し始めた。

このアームはカプセルの中での実験を行うのに不可欠なもので、ヒトの手に酷似した動きを再現し、指示した命令をこなしてくれる。実験体の採血、細胞の移植、レーザーによる実験体の肉体の切開、肉片の採取など、簡単なパネル操作で様々な活動を行うことが可能だ。細胞による実験は極めて危険なもので、カプセル外での実験は一切許可されていない。従って、こういったカプセル内での補助機能が必要となるのだ。

四つで構成されたアームの指が、器用にシャーレの中にある『アクア・クリスタル水の水晶』の欠片を掴む。アームがカプセルの一番奥まで動き、アルファの肉片の真上で止まった。

「石和くん。よく見ててね。面白い現象が見られるわよ」

川原のその言葉を皮切りに、アームの指が開き、肉片の上に『水<sup>アクア・クリスタル</sup>の水晶』がぼとり、と落ちた。

その刹那　急激な変化が訪れた。

『水<sup>アクア・クリスタル</sup>の水晶』が突如として、強い光を放ち始めた。蒼白い光がカプセル全体を包み込み、石和の視界にまで浸食する。

「な……っ！」

石和は驚愕に顔を歪ませながら、眩しげに目を細めた。水晶の変化は光だけではない。まるで熱して溶けた飴のように。ぐずぐずと音を立てて、水晶が液化化し始めていた。既に水晶だった面影はない。液化化した水晶がアルファの肉片の上に広がり、そのまま沈んで、肉片に同化してゆく。それに伴い、強烈な光が収まり、やがて『水<sup>アクア・クリスタル</sup>の欠片の痕跡は何処にも無くなっていた。そして、数秒の間を置いて、細胞に新たなる変化が生じた。

びくん、と。肉片が小さく震えた。細胞が活性化し、増殖するのはあくまでも　細胞と接触したときに限られる。にも関わらず、目の前にある、細胞は

「増殖………している？」

石和が唾然とした表情で呟く。目を凝らして、何度か見返すが、やはり間違いない。何の媒体もなしに　細胞が急速に増殖している。カプセルの隣にあるモニターで生体<sup>バイタル</sup>データを確認すると、細胞が異様なほどの活発な動きを見せていた。細胞の増殖は続き、やがて、シャーレの中に収まらないほどの大きさへと膨れ上がっていた。

2センチにも満たなかった肉片の全長が今では10センチを超える大きさとなり、そこでようやく膨張が収まった。

……どうということだろうか。細胞がこんな現象を起こすのは初めて見た。あの水晶が起爆剤になって細胞が増加したのは分かる。だが、どういった原理である石が細胞に反応し、同化したのか。まるで、分からない。

「次にこれを 細胞に落とす」

困惑する石和達を余所に川上がそう告げ、パネルを操作した。再びアームを動かして、『アクア・クリスタル水の水晶』の欠片を掴み、今度は細胞の真上に落とす。細胞に落とすときと同様、強烈な蒼白い光が溢れ、液状化し、『アクア・クリスタル水の水晶』は細胞と同化した。細胞は細胞の時のような異様な増殖はなかったが、細胞自体が活性化したのは変わらない。少しずつ、細胞が増殖して、膨らんでいる。

細胞と 細胞。その双方が小さな脈動を繰り返す、シャーレの中で蠢いている。川上は間髪入れず、次の動作に移った。再び細胞の方へアームを動かし、膨張したアルファの肉片をがしり、と掴んだ。不気味に蠢く細胞をそのまま、細胞の真上に持って行き、そこでアームの動きを止めた。そして川上は、

「今度は、このアルファの肉片を 生物の肉片の上に落とす」

と、言った。アームの指が開き、アルファの肉片が 生物の肉片の上に、べしやりと音を立てて、落下した。

その瞬間、再び 細胞の活動が活性化した。

細胞が 細胞という餌を見つけ、浸食し始めたのだ。細胞に取り付き、次々と 細胞が増殖していく。一見はいつもと変わらない現象に見えるが

「石和くん」

顎に手を当て、カプセルの様子を観察していると、自分と呼ぶ声と共に肩がぼんぼんと叩かれた。背後へ振り向くと、川原が「こっちを見て」と、言つて、カプセルの横のモニターを指さした。どうやら、視認できない変化らしい。モニターでは拡大した細胞の様子をリアルタイムで観測できる。石和がモニターの真っ正面に行くと、その後ろから佐々木と戸木原が覗き込んできた。モニターでは何万倍にも拡大された細胞の様子が映っていた。細胞が次々と 細胞に浸食し、情報を書き換えてゆく。その勢いはじわじわと加速してゆき、やがては 細胞のすべての構成情報を書き換え、同化してしまうだろう。

「ん……？」

不意に背後から、佐々木が声を上げた。

「石和くん。あれ、なんかおかしくないかい？」

「ん？ なにがだ」

佐々木は背後からモニターを指さし、訝しげな声で呟く。

「いつもの浸食の仕方が違うというか……こんな浸食の仕方じゃ無かったような」

「……いわれてみれば」

額に手を当てながら、石和は 細胞の動きを注視する。確かに妙だ。細胞の浸食が妙に遅い。いや、浸食するスピードは一緒であるが、浸食が定期的に止まっている。まるで処理落ちしたパソコンの様な動きでぎこちない浸食が続いている。こんな浸食の仕方は今までに例がない。

なんなのだろう、これは。細胞のモニターしている隣に表示されているグラフと交互に見比べ、頭を捻る。この一定のリズムには何か意味があるのだろうか。ひよっとして、これは 細胞の浸食を防いでいるのではないだろうか。

「い、いや……違う。ひよっとしてこれは『適応』しようしているんじゃないか!？」

一人叫び、モニターの動きを再度確認し、動きを追う。

細胞と 細胞。細胞の浸食と 細胞のこの動き。やはり、間違いない。細胞同士が『適応』しようとしているのだ。それでこの不自然な動きにも説明がつく。

「い、石和くん。どういうことかね? 説明したまえ」

と、後ろから戸木原の声が飛んでくる。石和はモニターを見据えたまま、答えた。

「『適応』しようとしてるんですよ、細胞が。この奇妙なリズムでの浸食にはこの 細胞が関係してます。細胞は 細胞に浸食し、構成情報が書き換えられ、拡大してゆくのがいつもの現象で、細胞は抵抗する力もなく浸食されていきますが、どうやらこの細胞はその浸食に『適応』しようとしているようです。細胞に飲ま

れるわけでもなく、抵抗するのでもなく、細胞は細胞と共存しようとして働かかかてるんです」

「え……？」

目を丸くして、驚愕に顔を歪める佐々木と戸木原。石和は続けた。

「しかし、これは『適応』しようとしているだけで、この細胞は完全に対応し切れていません。細胞の浸食が強く、細胞の『適応』能力を上回っているでしょう。浸食途中にGVHDが発生して、浸食に加速をかけていることも原因だと思えます。それでもこの細胞の『適応』力はすごいですけどね。ほんのわずかな時間とはいえ、細胞と細胞の統合を行っている」

石和の説明に川原は満面の笑顔を浮かべながら、ぱちぱちと手を叩いた。

「さすがは石和くんね。これだけの情報で、真相を引き当てるなんて。『大当たり』よ！大正解！そう、これは細胞に『適応』しようとする特性のある特殊な細胞なのよ。これをあたし達は『柔らかい細胞』と呼んでいるわ」

「柔らかい……細胞？」

石和が反芻した言葉に、川原は深々と頷いた。

「『環境に対応する柔軟な性質を持った細胞』という意味よ。その対応能力はいま見ての通りよ。すごいでしょう？これがわたしと川上くんが出張期間の間に得た研究の成果ってワケ」

得意満面といった表情で言う川原。こちらの唾然とした表情に満足したようだ。川原の望み通りの反応するのは癪に障るが、これは

驚かざるを得ない。この半年間いくら研究しても、針の穴ほどの突破口も見えなかった。『細胞』と『細胞の融合』が。

わずか一ヶ月　しかも担当責任者二人だけでやってのけたのだ。信じられない。石和は両手を挙げて、苦笑した。

「まいった。降参だ」

「え……?」

「まさかお前達二人だけで、こんな偉業を成し遂げるなんて。正直驚いた。本当にすごいと思う。俺は川原達のことを尊敬する」

川原の目をじっと見据えて。心の底から思った事を口にした。

「　　っ!」

石和の言葉に川原が大きく目を見開いて、顔を赤く染めた。そのまま、ふい、と視線をそらす。らしくない反応だった。石和は眉を顰めた。

「……どうした?」

「い、いえ……なんでも。というか、まさか石和くんの口から褒め言葉が出てくるなんて思わなかったから、ちょっとびっくりしちゃったわ」

「む。そうか?」

「ええ。天変地異が起きないか心配な位」

「……」

何処かで似たような台詞を聞いたような気がした。どうやら本気でヒトへの対応の仕方を改めなければいけないかもしれない。石和が半ば真剣にそんなことを考えていると、佐々木が前に出てきて、

「川原さん、そろそろ教えてくれないかな？ あの奇妙な石は一体なんなんだい？」

と、もどかしそうな感情が籠もった口調で、言った。石和は頷いて、佐々木に同意した。

「そうだな。俺も気になる。今の実験を見た限りでは、『柔らかい細胞』の精製にはさっきの『水の水晶<sup>アクア・クリスタル</sup>』が必要になるんだろ？ あんな奇妙な石をいつたいどこから入手してきたんだ？」

石和と佐々木が交互に問いかけると、川原はくすくすと笑った。

「そうね。それじゃあ、そろそろ種明かしといきましょうかしらね。え〜と、どこから話したらいいかしら」

「髪の毛を片手で掻き上げながら、川原は話し始めた。」



## 8 「水の水晶の恩恵」(第一段階、了)

「みんな知つての通り、よつのは生物研究所が一番最初に異世界生命体アルファの研究が行われていた場所で、現在でも小規模ではあるけど、研究は進められているわ。私たちがよつのは生物研究所に目をつけたのも、第五研究所とは違う。細胞へのアプローチを行っていないか調べる為よ。そしてもし、あるとすれば、それを参考に細胞との融合への突破口を開けないか、それを模索する。そのためにわたしと川上くんはよつのは生物研究所で動いていたの」

よつのは生物研究所は異世界生命体アルファを最初に収容した場所であり、初めてアルファの本格的な研究が行われた機関である。

アルファの生体構造から、分裂世界の考察、様々な研究グループに分けられ、三ツ葉社の徹底とした支援の元、研究は行われていた。と、の因子が均一に融合された統一体。『鍵<sup>キ</sup>』が未知の分裂世界の扉を開くことを発見したのもこのよつのは生物研究所である。確かにこの場所なら、この第五研究所と別のアプローチを行っていたかもしれないが

「しかし、川原。この第五研究所が設立されたとき、よつのは生物研究所の研究内容もすべてこちらで引き継いだはずだ。あちらの研究内容を調べるだけなら、第五研究所の中でもできたんじゃないのか？」

石和の言葉に川原はおおきくかぶりを振った。

「確かに研究内容の引き継ぎはしたけど、それはあくまでもデータだけの引き継ぎでしょう？ やっぱり、実際に向こうの研究員の話聞いて、細かいアプローチの仕方を肌で感じたかったのよ。向こうには向こうのやり方があって、アルファに対する様々な考察を行っていたわ。こっちも第一段階の研究が行き詰まっっていて、考えが凝り固まっていたから、いい刺激にもなったしね。石和くんたちも気づかないうちに、視野が狭くなっていたりしたんじゃない？」

「む……」

川原にそう言われて、石和は唖った。確かにD-I計画の研究は難航し、無意識に視野が狭くなっていたのかもしれない。瞬間物質転送装置インゲートの実験の成果に託し、考えることを放棄していた部分もある。川原はそういった呪縛から解き放たれるために、よつのは生物研究所と第五研究所を行き来していたのだろう。川原は続けた。

「まあ、よつのは生物研究所にこだわった理由はそれだけじゃないんだけどね。研究成果はすべて第五研究所に託されたって、石和くんいま言ったけど、甘い、甘い。ヒトは都合の悪いモノを隠そうとする悪癖があるものよ。それはよつのは研究所も例外じゃなかったってわけ」

「……どういうことだい？」

と、佐々木が怪訝な面もちで、川原に尋ねる。

「そのままの意味よ。よつのは生物研究所ではアルファに関する『ある現象』を知りながらも、その情報を隠蔽していたのよ。臭いモノに慌てて、蓋をするかのようにな」

川原が言ったその言葉に戸木原が大きく目を見開き、

「バカな！ 研究データの隠蔽など、おおきな契約違反ではないか。万が一そんなことが行われていたのならば、よつのは生物研究所のスタッフもただではすまないぞ！」

と、大きな声で怒鳴る。

「だけど、これは事実です。そして、そのことを三ツ葉社の上層部は知っている。いえ、上層部がその事実を隠蔽していたんです」

「成る程」と、石和はうなずいた。

「よつのは生物研究所でなにか不祥事が起きたわけだな？ それを表沙汰になるのを恐れて、その不祥事を上層部が隠蔽した。その結果として、よつのは生物研究所の所員はその研究データを抹消しなくてはならなくなった……違うか？」

川原が頷き、それでようやく想像がついた。その不祥事とはおそらく

「……『成体』の暴走じゃないのか？」

「っ！」

石和の言葉に川原は大きく目を見開いた。どうやら、凶星のようだ。川原は啞然とした面もちで、

「……すごいわね、どうして分かったの？」

と、言った。石和は苦笑した。

「アルファの実験での不祥事では一番ありそうなことだろ。それに前々から第五研究所に設置されている『成体』用の武装が尋常じゃないと思っていたんだ。細胞が暴走した瞬間、自動で稼働する『自動迎撃システム』に、高出力のレーザー砲に二十？のガトリング砲が各二門ずつ。更に三ツ葉社専門の警備会社『ASH』の部隊までもが、後方に待機している。細胞の暴走が本当の意味で危険だと知っていなければ、ここまで過剰な対策を講じたりしないだろう。だから、ひよっとして思ったんだ。よつのは生物研究所では細胞の暴走を止めることができず、『成体』となつた実験体の姿を目の当たりにしたことがあるんじゃないかってな」

川原は両手をぱちぱちと叩きながら、感嘆の溜息を吐いた。

「びつくりしたわ。石和くん。探偵になれるんじゃないかしら。その通りよ。そう、よつのは生物研究所では細胞の暴走時に実験体へ止めを刺すことができず、『成体』を完成させてしまったの。そして、死者を出すほどの大惨事に発展してしまった」

「やっぱりか」

だとすれば、実験データを隠蔽したのも頷ける。そんなことが公になれば、三ツ葉社の名に傷がつくし、なによりも異世界生命体アルファの存在を世間に知られてしまう可能性がある。そんなことになれば、大騒ぎになるのは火を見るよりも明らかだろう。

「だけど、驚いたなあ。上層部が隠蔽していた情報だろう？ どうやってそんな機密の高い情報入手することができたんだい」

感心した口調で言った言葉に川原はくすくすといたずらっぽいなを浮かべ、人差し指を口に当てた。

「ソースは秘密。察してくれると助かるわ」

川上の方へ目を向けると、石和と視線が絡み合った。川上は無表情のまま、小さくうなずいた。どうやら、まっとうな方法で入手した情報ではないようだ。川上はプログラム関係のエキスパートで、ネット関連の技術にも詳しいと聞いているが、ひよっとしたら、公にできない手段で入手した情報なのかもしれない。詳しく詮索しない方がよさそうだ。黙って、話の続きを聞くことにする。

「で、よつのは生物研究所で行った 細胞の移植実験が失敗し、実験体の処分を行うことも失敗。結果、細胞の書き換えがすべて終わり、『成体』が完成してしまったの。『成体』はこちら側の生物では考えられないほどの身体能力を持っていて、その力をよつのは生物研究所内で発揮した。所内はものすごいことになっていたらしいわよ。装備していた銃火器じゃあまったく歯が立たなかったみたいで、『ASH』の最新兵器を身体に何十発も撃ち込んで、それでようやくしとめたんだって。『成体』による被害は甚大で研究所は半壊滅状態。死傷者も十人以上。まさに最悪ね。この事件が表沙汰にならなかったのが不思議な位だわ」

川原は肩をすくめながら、言う。先ほどの実験で 細胞が暴走したことを思い出す。紅い眼。元の姿とはあまりにもかけ離れたその容貌。二十？のガトリング砲ですら、致命傷を与えられない肉体。一撃で特殊強ガラスにヒビを入れる圧倒的な力。いま思い返しても、ぞっとする。

あれでもまだ、細胞の書き換えが済んでいない状態なのだ。あれでもし、細胞の書き換えが完全に終了し、『成体』になっていたとしたら……。

改めて、石和は自分の扱っている生命体が危険極まりないことを

実感した。

「だけど、川原さん。『成体』になった実験体が危険極まりない存在であることは分かったけど……この事件とさつき言っていた『柔らかい細胞』との繋がりはいつたいなんだい？ イマイチ、ふたつの因果関係がわからないんだけど」

と、佐々木が両腕を組みながらそう言うと、

「問題はその『成体』の狩猟方法にある。『成体』は極めて特殊な手段で、捕獲した獲物を食料に変換する。それが先ほど川原博士の持っていた『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>であり、その存在が『柔らかい細胞』の精製に繋がった」

唐突に川上が口を開き、川原の代わりに佐々木の質問に答えた。

川原が目丸くした。

「ちよつ……ちよつと川上くん！ いきなり話の主導権を持っていかないでよ！ いいところだったのに！」

「川原博士は話が長い。一から順に話をしてゆくのは非効率だし、それではいつまで経っても本題に入れない。最初は主題となるべきことをまとめて語り、その後で、細かい問答を行えばいい」

「なによ、失礼ね。わたしはみんなに分かりやすく伝えるために、一から順に」

「結論から、言う。『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>の正体は生き物が持つ生体エネルギーを極限にまで圧縮して、結晶化したものだ」

「あ つ！ い、いきなり話の核心に！」

川原が目尻に涙を滲ませて、大声で叫んだ。どうやら、もったいぶった話し方をして、皆を驚かせようと企んでいたようだ。相変わ

らず、子供っぽい一面を持った女性だった。

「生体エネルギーを……結晶化したもの？ あ、あの石が？」

佐々木が驚愕のまなざしで川上の言葉を反芻し、川上が淡々とした口調で答える。

「そう。『成体』となった実験体は研究員を捕獲して、食料としてその身体を蹂躪したそうだが、研究員の身体をそのまま喰らったのではない。研究員の体内にある生体エネルギーを搾り取り、それを物質化させたのだ」

石和は唾然とした。エネルギーを何の触媒もなしに、物質化させるなど……信じられない。そんなことが可能なのだろうか。いや、万が一、可能としても生体エネルギーを結晶化させることに、何の意味が

「っ！ そ、そうか！ 食料の確保か！」

川上は頷いた。

「『アルファ・クリスタル水的水晶』はアルファの体内に入ると物質化されたエネルギーが解放され、身体中にエネルギーが浸透する。それが体内に取り込んだ対象のエネルギーとして、吸収される。つまり、この石は『成体』の食料だ」

佐々木が「成る程」と納得した面もちでうなずいた。

「確かに食料としては理想の形態かもしれない。食べ物を食べて、消化し、エネルギー変換して、余分なものを排泄するという段階を

踏まないで、それ口にするだけで、エネルギーを取り込むことができるんだから。川上くん、その『水の水晶』アクア・クリスタルはどのくらい持つのかな？」

「年代測定器にかけたが、正式な年数は計測できなかった。だが、少なくとも見積もっても百年以上は劣化しないと見られている」

「百年以上か……すごいな」

「まさに究極の保存食だね。食を味わう楽しみがないのが珠に傷だけだね」

石和と佐々木が感心の言葉を漏らす。おそらく異世界生命体アルファには元々、そういった能力が備わっていたのだらう。細胞が細胞に浸食し、細胞の書き換えによって、『成体』にもアルファが持っていたその能力が継承されたのだ。

「し、しかし、それは本当かね？ エネルギーを結晶化できるスキルがある生物など、にわかには信じ難いのだが……」

戸木原が眉根を寄せながら、呟いた言葉に川上はかぶりを振った。

「分裂世界にはあらゆる可能性が内包されている。どんなスキルを持つ生物が存在したとしても不思議ではない」

佐々木が頷き、

「そうだね。一見、突拍子もないスキルに感じるけど、いつでも体内に取り込んで、エネルギーに出来る能力というのは生物としての理には叶っていると思う。なるほどねえ、改めて自分の行っている研究が非常に興味深いものだとは再認識させられたよ」

妙に感心したような口調で言う。



「……………」

石和は改めて、川上の持つ『アクア・クリスタル水の水晶』に目を向ける。この青白い炎が『成体』に殺害された研究員の生きる為に宿っていたエネルギー。つまりは命の灯火そのものであるということだ。

確かに『成体』のその能力は非常に興味深いものだ。だが、これが殺害された研究員のなれの果てだと考えるとぞつとする。

もし、アルファという生命体が 世界ではなく、我々の住むこの世界に存在していたとすれば、ヒトという種は間違いなく絶滅させられていただろう。たった一つの個体で研究所を壊滅状態まで追い込み、そんな特殊な能力までもを身体に宿している。他にもなか我々の知らない能力があるかもしれない。そんな圧倒的な能力を持った生物に対して、ヒトという生物はあまりにも脆弱だ。かなうはずがない。

この生物の存在が自分のいる世界の存在ではなく、『一つの可能性』の世界であることに石和は心底安堵した。

「自分の説明は以上だ。あとは川原博士に任せる」

川上はそう言って、再び口を閉じた。川原は半眼で川上を睨めつけながら、

「うう……楽しみにとっておいたショートケーキの苺を横からかっさわられたような気分だね。川上くん、後で覚えてなさいよ」

と、恨めしげに呻いた。川上は無表情のまま、何も答えなかった。

そんなに『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>の真相を自分で語りたかったのだろうか。「まったくもう……」と、ぶつぶつ愚痴を一人つぶやきつつ、話の続きを語り始める。

「ま、あとは川上くんのいった通りよ。この『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>の存在が『柔らかい細胞』の開発に繋がるきつかけになったの。みんなもさつきみたでしょう？ 『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>は細胞だけでなく、細胞にも反応して、吸収し、細胞そのものを活性化させる力がある。そして、もうひとつ。『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>を吸収した細胞には新しい利点<sup>アクア・クリスタル</sup>が生まれていたのよ」

「細胞が活発になるだけじゃないんだな？」

石和の問いに川原は髪の毛をかき上げながら頷いた。

「ええ。正式には細胞と細胞双方に『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>を浸透させた直後ね。そのときにだけふたつの細胞にある利点が生まれるのよ。『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>と同等のエネルギーを含む細胞が、ひとつになろうとして、細胞の性質を変化させるの。つまり、細胞が細胞に浸食しようとする。細胞は『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>から得られた同等のエネルギーと同化しようとする動きが働き、結果、その細胞は『適応』しようとするのよ」

「それが……『柔らかい細胞』か」

「そう。だけど、この『柔らかい細胞』の働きは未成熟な生物にしか働きかけなかったのよね。生まれて、一ヶ月前後の生物にしかその適応現象が発生しなかったの」

佐々木が腕を組んで、唸った。

「それだと『柔らかい細胞』を使った『鍵』の精製は難しいんじゃないのかな。世界を動かす為にはある程度成熟した素体でないと、

莫大なエネルギーの奔流に耐えられない」

川原はかぶりを振り、

「そんなことないわよ。だから、さつき言ったでしょう？ 『無ければ、一から造ればいい』<sup>アクア・クリスタル</sup>つて。DNAを操作し、胎芽の状態の頃からの実験体に少量の『水の水晶』<sup>アクア・クリスタル</sup>を定期的に与え続けたのよ。そして、成長加速機にかけて成熟した実験体に育て上げる。あとは見ている通りよ。さつきの細胞は成熟した実験体から採取したもの。まあ、少し手こずったけどね。残念ながら、それでもGVHDは何故か発生して、最終的には細胞に飲み込まれてしまうのだけどね。でも」

と、川原は途中で言葉を止め、皆の顔を見回して笑った。確かに後は言わなくても分かる。瞬間物質転送装置<sup>テレポルト・ゲート</sup>を使えばGVHDは回避できる。そして、佐々木が細胞の浸食を遅延させるプログラムを組めば、なんとか安定させることが出来るかもしれない。石和は両拳をぎゅっ、と握り、唇を笑みの形に歪めた。ようやく活路が見えてきた。

胸の奥からなんともいえない嬉しさがこみ上げてくる。これで成功すると決まったわけではない。しかし、今までまったく先が見えなかった研究に光が射し込んできたことは確かな事実だ。その進展は素直に喜んでもいいだろう。石和がそんなことを考えていると、戸木原が天井を仰ぎ、高らかに声を上げた。

「おおおつ、す、素晴らしい！ ここに来て、問題点が一挙に解決したではないか！ やはり、私の言ったとおりではないか。今日のこの実験は成功する！ 私にはその確信があったのだよ。いける。私が率いるこの五人なら、D-I計画を完遂することができる！ み

んな、私についくるがいい！ 私はこの偉大なる計画をきつと現実のものにしてみせる。それを約束しよう！ はっはっはっはっ！」

胸をそらして大声で笑う。辺りにいる研究員たちが何事かと、ざわめき始めた。両手を広げ、オペラでも歌うかのように、歓喜の言葉を周囲にまき散らす。

完全に注目の的だった。

「ま、また始まったわね。いつものが」

川原は顔を冷や汗を滲ませながら、戸木原に聞こえない程の小さな声で囁いた。川原の顔が赤くなっている。奇妙なことで注目を浴びるのが恥ずかしいのだろう。石和も同様だった。額に手を当て、

「まったく、なんのパフォーマンスだ。毎回毎回勘弁してほしいもんだ」

と、言っつて嘆息する。

「あ、あははは……まあまあ。戸木原博士は感情が豊かなんだよ。D-I計画の研究が進んだことが本当に嬉しいから、ああやって、声にして表現しているんだよ。確かにちょっと恥ずかしいけれど……」

四人は一人陶醉している戸木原から距離を取り、話を続ける。

「で、川原。その『柔らかい細胞』を持った実験体、ニホンザルのサンプルはあるのか？ 本格的な統一体を造るにはある程度知能を持った実験体がほしいんだが」

「いいえ、まだよ。成功したのはウサギだけで、他の実験動物は

まだこれから。まあ、若干勝手が違ってくるところもあるでしょうけど、ニホンザルでも『柔らかい細胞』にすることは可能だと思うわ」

「よし、それなら、俺も手伝おう。遺伝子操作系は専門外だが、元々俺の研究分野は異種の細胞融合だからな。なにか力になれるかもしれない」

川原は口に手を当て、

「あらあら、随分と優しいわね。ひよっとして下心あり？ そんなにわたしと一緒に仕事したいのかしら」

「……前言撤回」

「くすくす。冗談よ。ありがとう、石和くん。お願いしてもいいかしら」

「ったく……」

川原の言葉に石和が眉を顰めて舌打ちすると、佐々木が笑った。

「二人とも仲がいいなあ」

「佐々木、お前の目は節穴なのか。それともこうやっていじられているのを世間では仲がいいというのか」

「ひどいわね。別にいじってなんかいないわよ。石和くんの反応が面白いから、楽しんでるだけなのに」

「知ってるか、川原。それを世間ではいじっているというんだ」

「あははは。それじゃあ、僕は細胞の遅延させるナノマシンの開発に全力を尽くすよ。といっても、一週間もあれば、多分用意することが出来ると思うけど。実験体の用意はどのくらいで用意出来るそうだい？」

「そうね。成長加速器を使えばこちらもそれぐらいで完成させられるかもしれないわ。まあ、実際やってみないと分からないけど。」

川上くん、どう思うっ？」

「……いけると、思う」

石和は戸木原を除く全員の顔を見回しながら、

「よし。それじゃあ、十日後を目安に再実験と行こう。佐々木は細胞を遅延させる『NEXT』を、川原、川上は『柔らかい細胞』を持った実験体を。なんとか十日後の実験まで間に合わせてくれ。基本、俺は『柔らかい細胞』のほうのサポートをするが、佐々木もなにか手伝えることがあったら、言ってくれ。出来る限り手伝わせてもらう。瞬間物質転送装置の実験申請は俺から出しておく。ようやく行き詰まった研究に活路が見えてきたんだ。気合を入れていこう」

「うん。わかった」

「……了解した」

と、佐々木と川上が頷く。川原がくすくすと笑い、言った。

「なんだか石和くん。統括主任みたいね。そういう風に私たちに指示を出しているところなんか、随分とそれらしいわよ」

「む。そうか？」

「ええ。そのまま戸木原博士に代わって統括主任になったらどうかしら。結構向いていると思うけど」

石和は苦笑しながら、首を左右に振った。

「俺はそういうのは向いてない。気まぐれで我が儘だからな」

「くすくす。わたしの方も了解よ。頑張っつて、次の実験でいい成果を出しましょう」

「ああ」

と、その時だった。実験室の壁に取り付けられたスピーカーから、シンプルなメロディと共に呼び出しの放送が聞こえてきた。

『第五研究所担当の石和武士主任、第五研究所の石和武士主任。島村専務が呼びびです。至急、専務室までお越し下さい。繰り返し  
ます』

石和は眉を顰めた。

「なんだろう？ 特に呼び出されるような用事はなかったと思うが」

「石和くん、なにかやらかしたんじゃないのかしら」

「川原じゃあるまいし」

「む。それちよつとどどういう意味よ」

「なにか心当たりはないのかい。石和くん」

「いや、特に」

佐々木にそう言いながらも、石和にはひとつの心当たりがあった。たぶん、『あの話』だろう。しかし、まだ、口外無用の命を受けているので、理由を話すわけにはいかない。

「ちよつと行ってくる。悪いが、話の続きは後にしよう。今日の実験の報告もしておきたいしな」

皆にそう告げ石和は四人から離れ、研究室の出口に向かって歩き始めた。ふと、足を止め、後ろをみると、川原達とは少し離れた場所ので戸木原が陶酔したように顔を弛め、笑みを浮かべていた。第五研究所の問題児。子供ではないが、言動は子供とさほど変わらないといってもいいだろう。どういった意図で島村専務が彼を統括主任

に任命したのか、気になるところである。一度、島村専務にさりげなく訊いてみようかなどと、そんなことを考えながら、再び出口に向かつて歩き始めた。

と。

「チャイルド……れでようやく……第一D-I計画の 駒……ゲイト門……ネオ能力者……混沌……」

石和の耳によく分からない言葉が入り込んできた。戸木原の小さな呟き声だった。振り返り、再び彼の姿を見据える。

刹那、

ぞくり、と。

石和の背筋に悪寒が駆け抜けた。

「え……?」

なんなのだろうか。この感覚は。訳が分からない。石和の視線のその先には戸木原がいて、その姿形は変わらない。にも関わらず、彼を見ていると胸の奥底から、よく分からない衝動がせり上がってくる。戸木原の浮かべる、その笑み。それがとてつもなく、奇妙で得体の知れないものを感じられた。そう。それはまるでヒトではない、まったく異質のものを見たかのような

「チャイルド……れでようやく……第一D-I計画の 駒……ゲイト門……ネオ能力者……混沌……」

再び同じ言葉を繰り返す。駒。ゲイト門。ネオ・チャイルド能力者。そして、混沌。他は上手く聞き取れない。よく分からない、その単語の羅列。いつもの不可解な言動の一環だ。気にするほどのものではない。そうに決まっている。その筈なのに。



どうして、自分はその言葉とその吊り上がった唇の歪みに不吉なものを感じてしまうのだろうか。こうしているだけで、冷や汗がじわりとにじみ出て、心臓の脈動が加速してゆく。

「　　っ！」

石和は目を強く瞑って、大きくかぶりを振った。三度、戸木原に目を向けると、すべてが元に戻っていた。異質なモノなど何一つない。何気ない光景。戸木原は相変わらず笑みを浮かべていたが、それはいつもよく見かけるものと変わらない。あの不快な感覚は嘘のようにかき消えていた。

「な、なんだ………いつたい？」

目を閉じて、右手でまぶたを揉む。初めての瞬間物質テレポート・ゲ転送装置トの実験で自分が思っている以上に疲れているのかもしれない。何か腑に落ちない。心の奥底にそんな痼りを残しながら、石和は第二研究室を抜け、専務室へ行くため、エレベーターへ向かって歩き始めた。

8 「水の水晶の恩恵」(第一段階、了)(後書き)

第二段階『紅い眼。赤い炎』に続く。

## 第二段階『紅い眼、赤い炎』 1 「検視官と警部」

いくつものパトカーが回転灯の赤い光をくるくると回しながら、停車していた。『KEEP OUT!』と書かれた黄色いテープが周囲に張り巡らされ、その一帯に一切立ち入りは出来ない。テープの外には幾人もの警官が立ち並び、辺りの通行を完全に塞いでいた。

緊急時における通行規制。距離を置いて、その騒ぎに注目した人々が群がっている。

「あそこか？」

「あそこですね」

運転席にいる部下の青年に質問すると、間髪入れず答えが返ってきた。まあ、あそこまで派手な通行規制が行われているのだ。分かりやすいといえば、分かりやすい。

そんなことを胸中で独りごちながら、芳田源五郎よしだげんごろうは車のドアを開け、助手席から抜け出した。つん、と針を刺したような冷気が芳田の彫りの深い顔に触れる。今日は比較的暖かい一日ではあったが、それはあくまでも陽が沈むまでの話だ。陽は十の昔に沈み、今では氷のように冷たい風が大気の中で泳いでいる。暖房の効いた車の中から外へ出ると、その温度差が顕著けんちやくになるので、いささかきつい。

(やれやれ……この寒さは少々老骨に堪えるの)

芳田は長めのコートの裾を整えながら、現場に向かって歩いてゆく。運転席から降りた青年がそれに続いた。芳田の前に入り込み、人混みを強引に掻き分け、道を造ってゆく。もの凄い数の人だから

だった。

『ナニナニ？ ナニが起こったの？』

『事故じゃね？ 誰か大怪我したんだろ』

『ばっか、怪我人じゃねーよ。怪我人だけでこんなケーサツいっぱいいるワケないじゃん。コロシだよ、コ・ロ・シ。サツジン事件ってヤツだよ』

『うっそマジ？ マジヤバクね？ ドラマみてえじゃん』

『きゃあ〜やだ怖い！ ね、中見れないかな。スタイってどんなカンジかな。お腹とか胸とかさされたりしてるのかな？』

『頭がなかつたりするんじゃない？ うひゃあ〜まじヤベエって！ テンション上がってきたわあ！』

……不謹慎な若者の会話が耳に入ってくる。他人の不幸は密の味とはよく言ったモノだ。平和な日常を謳歌している人々にはそれがたまらなく刺激的に映るのだろう。携帯端末を用い、写真を撮っている輩もいる。フラッシュがちかちかと瞬き、芳田は眩し気に目を細めた。ここからでは現場は見えないのに、いったい何処を撮っているのだろうか。

そんな若者の戯れを横目に、芳田と青年は前へ、前へと進んでゆく。

人混みを抜け、視界が開ける。

栄えた繁華街の中、ビルとビルの合間にある狭い狭い路地裏だった。

どこにでもある、街の死角。人気のない、黒い閑散とした世界。

繁華街の中で、ここは人気もなく、人々の視界を遮断した場所だ。この路地の裏は倉庫街に繋がっているので、確かに動くのには都合

がいのかもしれない。夜の倉庫街は完全に無人なので、万一奥へ逃げ込んだとしても、誰も助けを呼べないからだ。

警官の敬礼に小さく頷き、芳田は黄色いテープをくぐり抜け、そのまま路地の中に入り込んだ。奥へ進むと、紺色の鍔付き帽子と制服を着た鑑識班の面々が写真を取り、目の前にある『ソレ』を丁寧に調べ上げている。周囲にはライトが設置され、アスファルトの上に這う『ソレ』を鮮明に浮かび上がらせていた。

「よお、源ちゃん。来たの」

と、『ソレ』を調べていた一人がこちらに気付き、立ち上がった。手入れをほとんどしていないぼさぼさの白髪に前歯が所々欠けた中年の男である。司法警察員の検死官で、芳田とは付き合いの深い男だ。芳田は頭にかぶった丸い帽子のずれを直しながら、

「どうだ？ ホトケさんは」

と、訊いた。中年男はシシシ、と笑った。

「ドドロロよ。ドロドロのグチャグチャ。それでいて、とあっても綺麗なホトケちゃんだね」

「例の『アレ』かの？」

「間違いないね。やり口がまったく一緒だし、こんな見事な切り口はそこの殺人狂じゃお目にかかれないしさ。間違いなく、『ヤッ』だよ」

楽しそうな声で言いながら、歯抜けの中年男は後ろに下がった。遮られていた視界が開け、『ソレ』が芳田の目に映った。

『ソレ』は奇怪なオブジェだった。

辺り一面に赤黒い血をまき散らし、その中心には女性の遺体が仰向けに横たわっていた。十代後半から二十代前半であるう若い女性だった。苦悶の表情を浮かべたまま、息絶えている。頸動脈がある首筋の部分がざっくりと切られ、吹き出した血がビルの壁一面にペンをぶちまけたかのように真っ赤に染まっている。上半身の服は綺麗に切り裂かれており、乳房から腹部にかけてまで完全に露出している。

否。それは露出というレベルではなかった。

剥き出しになっているのは肌だけではない。そこに内包されていた中身までも剥き出しにして、その様を外気へ晒していた。

腹部には十字の大きな切り傷があり、ぱっくりと開いたその中から、様々な臓器がこぼれ出て、残骸となって、地面に散らばっている。腹に残った臓器はほとんどなく、左脇にある柵に途中で途切れたピンク色の腸がぶらりとぶら下がっていた。

生前はそれなりに整った顔立ちだったのだろう。美貌の面影がすかに残留している。しかし、今はその姿は影を潜め、醜く歪んでいた。充血した眼球は飛び出すほどに大きく見開かれ、瞳孔は拡大きつっている。口は獣のように大きく開かれ、大量の血筋が口からこぼれ出ていた。ねっとりとした液体が遺体と地面を覆い、鉄が錆び付いたような異臭が辺り一面に充満している。

「うっ……ぐっ、うええ……っ！」

近くにいた刑事が青ざめた顔で、両手で口を塞いだ。この間入っ

たばかりの新任の刑事だろう。経験が浅く、猟奇死体に免疫がないようだ。

「うわっ、おいコラ！ここに吐くなよ。現場を荒らすんじゃないえ！」

傍らにいた鑑識班の男が新米刑事に小さな紙袋を手渡し、後ろに押しやる。芳田はそんなやりとりを聞き流しながら、眉間に皺を寄せた。

「これで……十人目という訳か」

歯抜けの中年男は頷いた。

「相も変わらず、見事なホトケさんだよ。いや、最初に比べ、更に手慣れてきた感があるねえ。ホントに惚れ惚れするくらい見事な殺し方だね。他の殺人狂にも見習ってほしいくらいだねえ」

うつとりとしたような顔で、そんなことを言う。芳田と一緒にきた青年が露骨に眉をしかめ、

「……猟奇殺人に綺麗とか、汚いとかあるんですか。俺には本能のままに命をもてあそんだイカレ野郎の犯行にしかみえないんですが」

と、嫌悪を露わにした口調で言った。歯抜けの中年男はヒヒヒ、と愉快そうな声で笑った。

「まだまだ若いな、おまえさんは。一見、ドロドロのぐちゃぐちゃな猟奇殺人に見えるかもしれないが。その実、きれいな殺し

方をしているんだな、これまた」

「綺麗？　これが？」

青年は臓器があちこちに散らばった遺体を見回した。どうみても綺麗には見えない、と言いたいのだろう。

「よく考えてみい。虚を突かれない限り、相手は抵抗をするもんだぜ。襲われた人間だって、死にたくなんかはずだからなあ。しかし、驚いたことにこのホトケさんを造った奴はほぼ一撃で、首筋の頸動脈を両断し、しとめてる。ためらった様な形跡も手こずった様子も一切なしだ。ホレみてみい、この綺麗な切り傷」

そう言つて、首筋の大きな切り口にライトを当てる。青年は芳田の方に顔を向け、

「相当の手練れ……つてことですか？」

と、訊いた。芳田は深々と頷いた。

「最初はまだ、手こずった様子があったようだがの。最近発見された遺体はほぼ一撃で仕留められている、という話だ。『第二の切り裂きジャック』とはよくいったもんだの」

『第二の切り裂きジャック』。

刑事たちの間で名付けられた、この一連の殺人事件の通り名である。鋭い刃物を毎回犯行に使われていること、狙われるのが常に女性であることから、この名がつけられた。

今回の被害者を入れて、十人目となる。



被害者の共通点は若い女性であるというだけで、被害者同士の面識も接点も一切なし。

無差別殺人だと思われる。殺害の手法はいつも同じ手口で、その命を弄んでいる。人気のない路地で、首にある頸動脈を鋭い刃物で切り刻み、そこから出血多量を誘っている。

その後、上半身の衣服と腹部を十文字に切り裂き、中の臓器をえぐり、ぐちゃぐちゃに潰した臓器を周囲にまき散らしている。

これだけ残虐の限りを尽くした事件が連続で発生したのにも関わらず、警察機関は犯人の特定がまったくできない状態が続いている。事件発生の頻度は回数がかねるほど頻繁となり、被害者は増える一方だった。

捜査一課内でも早期解決が望まれている事件である。

歯抜けの中年男は遺体の傍らで、しゃがみこみ、内蔵のはみ出た腹部をまじまじと見つめる。

「それにしても、不可解なのはこの腹の中だな。手で引きちぎった訳でもなさそうだし、どうやってここまで臓器をばらばらにしているのか。腹の中にプラスチック爆弾でも詰め込んだのかもしれないなあ」

一人でぶつぶつと呟き、興味深そうな面持ちで被害者の腹の中を調べている。芳田はふう、と嘆息した。

「……ともかく、これ以上の被害者を出すわけにもいかん。犯人の割り出しを急いでくれ。あとは任せた」

芳田はそう言って、踵を返し。路地の出口に向かって歩き始めた。歯抜けの中年男は笑顔で手を振り、作業に戻った。青年は芳田のあとに続き、話しかける。

「なにか手がかりらしいものは見つかったんですか？ 犯人の目星は？」

「相変わらず、ほとんど無し、だそうだ。これだけ好き勝手やっておきながら、痕跡がほとんどない、というのもすごい。おそらく今回のホトケもたいした情報は得られんだろうな」

「ここまで来たら、いい加減、情報を世間に公開してしまったら、どうですか？ その方が市民への牽制にもなって、被害者を減らすことが出来ると思うんですが」

芳田は静かにかぶりを振った。

「それが出来るのなら、とっくにやっとする。だが、課長が首を縦に振らんだ。『今回の事件は決して、情報公開をしてはならない』の一点張りでの。ワシにもどうすることもできん」

おそらくは今回の一件、課長よりはるか上 本庁のお偉いさん方からの圧力が働いているのだろう。でなければ、課長も十の昔にそれをやっているだろう。現在の情報管制が負の方向に働いていることは百も承知のはずだ。青年は苛々の募った表情を浮かべ、芳田に食って掛かった。

「し、しかし！ それじゃあ、どうすればいいんですか？ 遺体からの手がかりはほぼ皆無。被害者に共通点はなし。犯行現場も毎回違うんじゃない、一体どうすれば」

感情的にまくし立てる青年をよそに芳田は足を止めて、俯き、

「……風潰かぜつぶしにするしか、ないかもしれんの」

と、小さく呟いた。

「え？」

「こうなれば、人海戦術で攻めるしかない。詳しくはこれからの会議で提案する。これ以上は捜査一課の面子にもかかわるしの。こらで一気に逆転といこう。気合いを入れていくぞ、若いの」

「りよ、了解！」

芳田は路地裏を抜け、再び車に向けて歩き始めた。

その最中、芳田はこの辺りのマンションに住む、大事な大事な娘のように想っている女性のことを思い出し、彼女の身を案じていた。

（嬢ちゃんもこの辺りを通るといっておったしの。危険が及ばんとも限らん。早々に解決せんとな……）

芳田は助手席の中に乗り込むと、帽子を深く被り、『第二の切り裂きジャック』捕獲案を頭の中で練り始めた。

## 2 「帰宅」

石和武士が自宅であるマンションに戻ったのは夜の八時を過ぎた頃だった。島村専務の呼び出しがあり、それが終わった後も実験の話し合いをしていたせいで、すっかり遅くなってしまった。

「勝義もことみもまだ起きているだろうから、ぎりぎり約束は守れたが……もう少し、早く帰ってくるべきだったな。この時間じゃあとつくに夕食は終わってるだろうしな」

そんなことを独りごちながら、駐車場に止めた車の中から出て、エレベーターへ向かう。

寒い。心なしか風も強く感じる。石和はぶるぶると体を震わせながら、小走りで一気にエレベーターの中に駆け込んだ。どうにも寒いのは苦手である。吐く息も真っ白で、今日の冷え込みは相当なものだ。スピードが変わらないのを分かっていながらも、せかすように繰り返しエレベーターの開閉ボタンを押してしまう。静かにエレベーターの扉が左右から閉まり、石和を乗せた機械の箱がぐんぐんと、上に向かって移動し始めた。

ガラス張りで外が一望できるエレベーターの中で、石和は天を仰いだ。空には一面の夜空が広がっている。

雲がほとんどない、綺麗な夜空だが、星は瞬きは少ない。排気ガスの汚染が強いし、なによりも街で輝く街灯やネオンの光が阻害し、よほど強い光星でないと、東京では見えない。

「たまには満天の星空がみたいものだな……」

父の田舎を思い出す。とんでもない田舎の街だったが、空一面に

映し出される星の群が衝撃的だったのを覚えている。地平線が見えるほどの遮蔽物がない空間で、石和はそのとき地球が丸いことを実感した。空が球状にみえたのだ。

天然のプラネタリウム。その圧倒的な光景に心が奪われ、時間を忘れた。いつかまとめた休みをもらって、千恵子たちを連れていきたいものだ。彼女たちにあの光景を見せてあげたい。第一段階の研究がひと段落したら、まとめて休みを取るのも悪くないかもしれない。

そんなことを考えていると、エレベーターからぼーんと、アラームが鳴り響き、五階に到着した。エレベーターから降り、自分の城である501号室のドアに歩み寄り、鍵を開ける。すると、

「おとうさんっ!」

ドアを開いた瞬間、快活な声と共に、少年が飛び出してきた。タツクルするように石和の腰に抱きついてきた。

「うわっ! とつと、と」

思わずバランスを崩し、そのまま尻餅をつく。尻を強く地面に打ち、石和は痛みをしかめた。少年はそれを特に気にした様子もなく、石和の腹にすりすりとして頬ずりをしている。

「えへへ、おかえり! おとうさん」

無邪気なその様子に石和は苦笑しながら、ため息を吐いた。

石和勝義<sup>いさわかつよし</sup>。四歳なつたばかりの石和の息子である。

染み一つないぷにぷにとした肌に汚れを知らない純真なその瞳に

小さなその身体。その愛らしい姿に尻の痛みを忘れ、頬が緩む。が、すぐさま顔を引き締め、勝義に向き直る。

教育は幼い頃がもっとも重要だという。こんな風に飛びついてくるのは危ないときつちり叱らなければいけない。石和はしかめっ面を造り、勝義の頭を軽くこづいた。

「こら、勝義。そんな風に飛びついてきたら、危ないってこの前いったらう。お父さんも危ないし、おまえも危ないんだぞ。怪我をしたらどうするつもりだ？」

「あははっ、だって、おとうさんが帰ってきたのがうれしくて、がまんできなかつたんだもん！ おかえりなさい、おとうさん。あそぼ！ あそぼ！」

「いや、あのな。だからな……」

駄目だ。まるで人の話を聞いていない。どうするべきか、もっと強く叱るべきか。いや、しかし、自分を慕って飛びついて来たのに、強く怒ったりしたら、勝義がショックを受けないか。いや、でも教育上それは仕方がないのでは

そんな葛藤を石和が続けていると、

「きゃっ！ も、もう……勝義、なにをやってるの」

と、部屋の中から声が聞こえてきた。声の方へ向けると、エプロン姿の千恵子が両手で赤ん坊を抱き抱えながら、玄関に立っていた。千恵子の手にいる赤ん坊は二人の間に出来た女の子で、生後からまだ一年と六ヶ月しか経っていない。

石和ことみ。勝義に続く、二人目の子供である。

ことみは小さな手をこちらに向け、きゃっきゃつとはしゃいでいる。ことみも自分の帰宅を歓迎してくれているようだ。自然と頬が緩む。千恵子は勝義をきつ、と睨み付け、こちらに歩み寄ると、勝義の頭をゴーンツ、と叩いた。

「いだっ！ ふ……うあああああん！」

さほど大した力には見えなかったが、千恵子の拳は子供には充分強い衝撃だったようだ。石和の腹の上で勝義が両手で頭を抱え、大声で泣き始めた。

「お父さんに飛びついちゃ駄目だって何回もいつてるでしょう！  
すぐくすぐく危ないんだよ！」

「ひっ……ぐっ、だって、だって……」

しゃくり声を上げながら、ぼろぼろと涙を零す勝義。

「だってじゃないの。そんなことやって、お父さんが怪我して、死んじゃったらどうするの？ 大好きなお父さんがいなくなっちゃってもいいの？」

「やだっ！ おとうさんいなくなっちゃうのやだ！ 死んじゃうのやだあっ！」

大声で泣いて、首を大きく横に振る。

「だったら、お父さんに『ごめんなさい』ってしないと駄目だよ。もうしないって約束して。そうすればお父さん、いなくならないから」

「うっ……ぐす。ごめんね、ごめんなさい、おとうさん、しなないで……いなくなっちゃ、やだよ……」

勝義は腕の裾をくいくい引つ張りながら、上目遣いで詫びてくる。石和は微笑んで、勝義の頭を撫でた。

「ん。分かってくればいい。これからは気をつけような」  
「うん……ごめんなさい」

目をごしごしとこすりながら、勝義は石和の腹から降りた。千恵子がにこつと微笑みながら、手を差し伸べた。

「武ちゃん。大丈夫？」

その手を掴み、石和は立ち上がった。

「ああ。大丈夫、ちょっと腰を打っただけだ」  
「ならよかつたけど……武ちゃんもああいうときはビシッと言ってあげないと駄目だよ。ちゃんと怒ってあげるのが子供達の為になるんだから」

と、そんなことを言う。石和は啞然とした表情で千恵子の顔を眺め、その後、「ははははっ！」と、笑い出した。

「え……？ な、なに？ あ、あたしなにか変なこといったかな」  
目をぱちくりとさせて、慌てふためく千恵子。石和は目尻から滲み出てきた涙を右手で拭いながら、かぶりを振った。

「くくく……い、いや、別に変なことは言っていない。し、しかし、あの『泣き虫チエコ』がこう、毅然とした態度で『お母さん』をやっているのが、なんだか急におかしくなっ……くっ、くくく……」



「！」

「やつ……！ な、なによ、もう、武ちゃん！ ひ、ひどいよ！」

千恵子の顔が耳まで真っ赤になった。

「すまん……べ、べつに笑うつもりはなかったんだが……くっ、くっ、くっ」

必死に堪えるが、どうしても笑いがこぼれでてしまう。千恵子とのつき合いは小学生の頃からなので、子供の頃の彼女をよく知っている。

あだ名は『泣き虫チエ』。

ちょっとしたことですぐに泣きわめくことから、小学校のクラスメイトからつけられた名前だった。あの頃は気弱で、頼りなく、自分の後について回るような少女だったというのに。あの頃から比べると随分と成長したものだ。どうしても子供に甘くなってしまう自分に比べ、千恵子はきつちりと『母親』している。その光景を目の当たりにすると、それを実感する。

「ふんだ。武ちゃんのバカ」

むう、と頬を膨らませて、そっぽを向く。昔のことを引き合いに出すと千恵子は機嫌が悪くなる。小さな頃の泣き虫な自分が好きでないのだろう。少々笑いすぎたかもしれない。石和は千恵子の頭に手を乗せて、笑った。

「いや、すまなかった。別にからかったつもりはないんだ。いつの間にか『母親』になっていたんだあって、微笑ましくなっただ

けだ」

言いながら、千恵子の頭を撫でる。しばらく、むくれ顔を浮かべていたが、頭を撫で続けるうちに頬が緩み、目がトロンとしてきた。「昔から、頭を撫でられるのが好きだよな、千恵子は。こうしてると機嫌が直る」

「も、もう、武ちゃんってば。あたしは子犬じゃないんだから……ふあ……ん」

そう言いながらも、目尻が緩んできている。口も元も緩み、あつという間に機嫌は直っていた。本当に子犬のようだ。石和は苦笑した。

「ぱーぱ、ぱーぱ」

と、千恵子の胸元にいることみが手を伸ばしてくる。

「おっ、ことみもか。ほら。よいしょ……っど！」

千恵子の胸に手を伸ばし、ことみを抱きかかえた。柔らかい感覚なその身体をそっと抱きしめ、頭を撫でる。ことみは嬉しそうにきやっきゃっとはしゃいだ。千恵子はその光景を眺めながら「えへへ」と楽しそうに笑った。そして、

「おかえり。武ちゃん。今日も一日お疲れ様」

と、満面の笑顔で千恵子は自分の帰宅を歓迎してくれた。石和も笑顔でそれに答えた。

「ただいま、千恵子」



### 3 「ささやかな幸せ」

ことみを両手で抱きかかえたまま、部屋の中に入る。部屋の中を見回すと、食卓にご飯が並べられていることに気づいた。自分の分だけではない、家族全員分の食事が置かれている。石和はことみをベビーベットにそっと置きながら、訊いた。

「わざわざ待っていてくれたのか？」

千恵子は頷き、

「連絡がなかったから、今日はそこまで遅くならないんじゃないかな、って思ってた」

「すまないな、わざわざ。でも、無理しないで食べていて、構わないんだぞ。勝義もお腹を空かしてるだろう」

「あたしは武ちゃんと一緒にご飯食べたいから、少しぐらいなら全然大丈夫だよ。この子もお父さんと一緒に食べるっていつて聞かなくて」

千恵子の傍らにいる勝義がこくこくと頷いた。

「おとうさんと一緒にいい！ おとーさんがいっしょのほづがおいしいもん！」

石和は笑いながら、勝義の頭を撫でた。

「ありがとうな、勝義。千恵子も。俺もなるべく早く帰れるように努力するよ」

「うん。出来る限り待つてるから」

千恵子は笑顔で頷き、食事の準備を始めた。食卓にはカレイの煮付け、肉じゃが、海草のサラダが置かれている。そこに千恵子がキッチンからご飯をのせたお盆を持つてくる。よそつたばかりのきのこの炊き込みご飯、なめこの味噌汁である。

「今日は和食攻めだな」

「うん。武ちゃん、大好物でしょう。きのこの炊き込みご飯」

「肉じゃがもな」

人数分のご飯と味噌汁が置かれると、三人の食事が始まった。「いただきます」と、手を合わせると、勝義がすぐさま勢いよくご飯をかき込み始めた。相当お腹が空いていたようだ。千恵子は苦笑いを浮かべながら、

「もう……そんなに一気に食べたなら、喉に詰まるよ。もっとゆっくり噛んで食べなきゃ駄目だよ」

そう言って、麦茶をコップに注ぎ、勝義の側に置く。勝義は大きくくくくくと頷きながら、ご飯をほおばり続けている。頬が大きく膨らみ、まるでリスのようだ。石和は笑いながら、ご飯を口にする。きのこの香りとこりこりした歯ごたえが口の中に広がる。

「うん。旨い」

素直な感想を口にすると、千恵子が両手を合わせて、満面の笑顔を浮かべた。

「ホント？ よかった。お代わりもあるから、たくさん食べてね」

「おかわり！」

と、千恵子がそう言った刹那、勝義が空になった茶碗を千恵子に差し出した。

「もう？ だから、ちゃんと噛んで食べないと駄目だっていったでしょう、勝義」

「だって、おいしいんだもん！」

「理由になつてないでしょう。次はちゃんと噛まないで駄目だからね」

そんな微笑ましい光景を眺めながら、石和は食を進める。今日の実験のトラブルのこともあり、疲労も空腹も相当なモノだった。自然とご飯をかき込む速さが早くなる。勝義の手前、あからさまにご飯をかき込むような真似は出来ないが、それでも自然、ご飯が減るスピードはいつもよりも早い。あつという間にご飯茶碗は空になっていた。

、ご飯のおかわりを千恵子に頼み、待っている最中――ふと、今日の夕方、島村専務に呼び出されたことを思い出した。

「そうだ、千恵子。この前行っていた話、本決まりになりそうな勢いだぞ」

千恵子はきょとんとして、

「それって……武ちゃんが統括で行う研究所のこと？」

と、訊いてくる。石和は頷いた。

「まだ先の話だけだな。第五研究所での仕事がひと段落したら、

本格的に動き始めるそうだ」

今日、呼び出された用件は予測したとおり、その話だった。島村専務は本社の研究所を始め、様々な研究施設の統括責任者だ。以前、自分が博士号を取得した分野に島村専務は強く興味を持ち、それを主軸とした研究所を造り、その所長として働いてもらいたいという提案を出してきたのだ。

夢のような話だった。

自分の為にそこまで大きな計画が動くなど、想像すらしたことがなかったからだ。まだ先の話ということもあり、関係者には口外無用という命を受けていた。この話を知っているのは千恵子だけである。あまりにも大きな話なので、石和もまだはつきりとした返事を返していなかった。

「すごいよね、武ちゃんの若さで研究所の所長なんて。びっくりだよ」

感心した口調で、炊き込みご飯が盛られたお椀を石和に手渡す。

「俺はそういうの向いてないと思うんだけどな。気まぐれだし、我がままだし」

言いながら、ご飯を口にすると、千恵子が大きくかぶりを振った。

「そんなことないよ。だって武ちゃんだもの。所長さんだって上手くこなせるよ」

「おいおい、そんなに簡単なものじゃないぞ。現在第五研究所でやっている主任とは訳が違うんだ。それに所長になるってことは同時に大きな責任が背負うことだ。なにかあれば、千恵子や勝義、こ

とみにも負担がかかることになる。そう樂觀的には考えられない」

千恵子は口に手を当てて、くすくすと笑った。

「そんなことを言ったら、なににもできないよ。あたしも子供たちも何があつたつて、大丈夫だよ。だつて、武ちゃんがいるんだもん。他のなにが無くなつたつて、それだけで充分すぎるくらい幸せなんだよ」

臆面もなくそう告げる千恵子に石和は赤面した。

「ち、千恵子。恋は盲目と言うが、つき合つて、二年。結婚してもう五年だぞ。もうそろそろ落ち着いてきてもいい頃じゃないか。うちの研究員でも年々妻の待遇が悪くなつてきているつて、愚痴つて

「知らないよ、他の人のことなんて。あたしはずっと武ちゃんに恋している自信があるもの。ずっと、ずっと好き。大好きだよ、武ちゃん」

目をじつと見つめながら、感情の籠もつた声で言う千恵子。顔が熱くなるのを感じながら、視線を逸らし、こほんと咳払いをした。

「くすくす、まだ落ち着いてないのはお互い様だよね。武ちゃん、顔まっかだよ」

「ほんとうだ！ おとーさん、かおまっか！ まっかっか！」  
「だ、だ」

千恵子の指摘に勝義が便乗し、それを見たことみがベビーベットの中で楽しそうにはしゃぐ。



「うつ、うるさい！ 男をからかうもんじゃないぞ、千恵子。勝義も」

言いながら、炊き込みご飯を口の中にかき込む。千恵子はいたずらっぽい笑みを浮かべながら、べえとピンク色の舌を出した。

「あははっ、さっきからかわれた仕返しだよ。これでおあいこだね」

「む……」

そう言われると、何も言えなくなる。どうやら、千恵子のほうが一枚上手のようだ。

「でも、そこまで心配する必要もないんじゃないかな。武ちゃんが所長をやるって行っても、営業までやるわけじゃないんでしょ？」

「ああ」と、石和は頷いた。

「作り上げた薬品やナノマシンなんかの販売、技術提供なんかの方はまた、別に責任者がいるからな。総務部長ってヤツだ。肩書きはともかく実権はそっちのほうが俺よりも上になるのかな。こういったものを造ってほしい、っていう最低限の指示もそっちからでるらしい。それと平行して独自にやりたい研究を進めてもいいって島村専務は言ってる」

「なんだ。じゃあ、心配する事なんてなにもないよ。柄じゃないって言っても、やっぱり武ちゃんも自分の研究所を持つことに憧れはあるんでしょっ？」

「ん。まあ……そうだな」

千恵子の言葉に少し考えて、頷いた。確かに不安要素はあるが、自分の研究施設が持てることに憧れはある。研究者なら誰でもそうなのではないだろうか。

「だったら、武ちゃんの好きなようにすればいいと思うよ。あたしはどんなことだって、武ちゃんの決めたことなら応援するから。頑張って、武ちゃん」

笑顔でガッツポーズを作った。華奢な身体の千恵子がそういったポーズを取ると妙に違和感があり、それがまた可愛らしい。石和は笑顔で返した。

「ありがとうな……千恵子」

「あはは。お礼なんて、いらないよ。だって、あたしは武ちゃんの奥さんだもん。夫の力になるのは当然だよ。あたし達は夫婦なんだから」

あっけらかんとした口調で、告げる千恵子。どんな逆境でも平気という台詞は熱に浮かされたその場限りのものであることが多いのだが、千恵子は違う。たとえどんな過酷な環境化に身を晒されたとしても、家族がすべて五体満足なら、きつと笑ってる。幸せそうにいつまでも笑い続けていることだろう。千恵子という女性はそういう人物だ。彼女のことを幼い頃から知っている石和にはそれが分かった。

だからこそ、彼女には幸せな道を歩んでほしい。新しく生まれてきたふたつの命と共に。そして、自分が全力をかけて、その道を造ってやりたい。強く、強くそう思うのだ。

七年前に犯してしまった過ちはきつと消えることはない。だけど、

決して手遅れではない。このいまの幸せを手放さないように、これからも頑張つてゆこう。石和は現在の幸せをかみしめながら、そう思った。

「え？ なあに、武ちゃん。あたしの顔、なんかついてる？」

「ご飯粒でもついてているのかと思ったのか、恥ずかしそうに顔をまさぐる。石和はふっ、と笑つて、

「いや……なんでもない。悪いが、またお代わりを頼んでいいか？」

と、言った。

「ぼくも、ぼくも！ おかわり！」

勝義といっしょに差し出された空の茶碗を受け取りながら、千恵子は笑つた。

「二人ともすごい食欲。ちょっと待つてね。すぐ持つてくるから」

そう言つて千恵子は立ち上がり、炊飯器に向かつて歩いてゆく。

あまり調子に乗ると、胃もたれになるかもしれないが、自制する気は毛頭無い。胃腸薬が必要になりかもしれないな、と思いつつ、石和は三杯目の御飯の到着を待つのだつた。



#### 4 「実験再開」

それから、十日後。

第八実験室では瞬間物質転送装置の稼働準備が進められていた。四人のオペレーター達がパネルを操作し、段階を踏んで、量子分解と再構築ができる状態までもってゆく。オペレーターの後ろには、戸木原淳、川上弘幸、佐々木勇二郎、川原奈々恵、石和武士、と、研究主任五名が立ち並び、実験を見守っている。

ガラス越しに見える奥の部屋には瞬間物質転送装置が置かれており、受信機と送信機が鈍い唸りをあげている。左側にある送信機カプセルの中には前回と同じく、実験体であるニホンザルとひとかたまりの肉片が置かれている。

見た目は確かに同じだが、その二つの素体には適応するために様々な改良が施されている。

細胞の浸食を遅延させるナノマシンを注入したアルファの肉片、  
遺伝子操作と『水の水晶を用いて、造られた特殊な細胞』柔  
らかい細胞』。

これらを作成する過程でいくつかのトラブルが発生はしたものの、なんとか完成にこぎ着けることができた。今日はこれらの素体を使い、再実験を行う。現在、出来ることはすべて行ったつもりだ。

前回の実験を元にシミュレーションを行ったが、何の問題もなかった。あとはモニター上での成功を現実のものするだけだ。

細胞と 細胞。本当にこれら二つの細胞を綺麗に融合し、D-I 計画の核となる統一体 「鍵<sup>キ</sup>」を造ることができるとだろうか。……いや、出来る。出来るに決まっている。必ず、ふたつの細胞を融合させ、統一体を完成させてみせる。

不安と期待が渦巻く胸中の霧を振り払い、石和は正面に見える瞬<sup>テ</sup>間物質<sup>レポート・ゲート</sup>転送装置の送信カプセルに目を据えた。放電現象が起こり、カプセル内が青白い光に包まれていく。

「最終確認、コンプリート。転送いけます」

オペレーターの言葉に佐々木は石和の目を見た。言葉はなかった。石和はかすかに微笑んで、深々と頷いた。佐々木が頷き返し、再び正面に目を向けて、『実行』の合図を口にした。

「量子分解アンカー起動。量子分解開始！」

カプセルから青白い光が溢れだし、石和の視界がその光の浸食され、視界が青一色に染まる。転送時に発生する発光現象。眉間に皺を寄せながら、石和は目を細め、量子分解されゆく二ホンザルと細胞の成りゆきを見守った。

そうして、再実験は始まった。

## 5 「違和感」

「さてさて、それでは僭越ながら、わたくし、川原奈々恵が乾杯の音頭をとらせていただきます！ 本日の実験の成功を祝しまして

乾杯！」

『乾杯！』

会議室の中で、皆の声が重なり合い、缶ジュースがかちん、とぶつかり合った。石和はそのまま、ジュースを喉の奥に流し込み、強烈な炭酸のはじける感覚に身をゆだねた。それと同時に実験の疲労をも吹き飛ばす衝動が胸を奥からせり上がってくる。口元が弛み、笑みの形になるのが押さえられない。

「や……やった！ やったぞ！ 我々はついに偉業を成し遂げた！ 『鍵』<sup>キイ</sup>の精製に成功したのだ！ ははははははっ！」

戸木原が胸を大きく反らし、大声で叫ぶ。いつもの恥ずかしい戸木原の叫びだが、今回はやはり自分も同じ事をやりたい気分だった。仕事ということ、缶ジュースが代用品となったが、アルコールが入っていたら、自分も声を出してはしゃいでいたかもしれない。

それほどの嬉しさが身体中を駆けめぐっている。

やった。とうとうやった。実験は成功したのだ。

量子分解された実験体と 細胞は一つに融合した後も、拒絶反応は発生しなかった。細胞はじわじわと浸食してゆき、細胞はこちらの思惑通り、細胞と上手く『適応』するために細胞が上手く変化し始めた。実験が終了し、二時間が経過しても、暴走は始まらない。細胞と 細胞の融合は順調に進んでいた。このまま何もトラブルが起きなければ、統一体である『鍵』<sup>キイ</sup>が完成する。

半年間の苦勞が身を結んだ瞬間だった。

「これでようやく、D-I計画の第一段階の研究に一区切りがつきそうね。おめでとう、石和くん」

言いながら、川原が缶ジュースを差し出してくる。石和は自分の持つ缶をかちん、とぶつけて、微笑んだ。

「まだ、細胞が全身に行き渡った訳じゃないから、油断は許されない状況ではあるがな」

川原は苦笑いを浮かべ、片手で髪の毛をかきあげた。

「もう……石和くんは心配性ね。生体データを一通りチェックしたけど、不安になるような動きは一切なかったじゃないの。このままきつと、上手くいくわよ」

「だといいがな。なんにしろ、ここまで上手く言ったのは川原たちが『柔らかい細胞』という細胞に『適応』する細胞を作り上げてくれたおかげだ。ありがとう川原。それに川上も」

「ふふふ、どういたしまして。もつと褒めてくれていいわよ」  
「……………」

川原は胸を張って、そんな軽口を叩いたのに対して、川上は無言で頷いただけだった。相変わらずの態度であるが、いつもより嬉しそうな表情を浮かべているような気がした。

川上もこの第五研究所が設立された頃から、この研究に取り組んできたのだ。それなりに思うところはあはずだ。石和は佐々木のほうに顔を向け、

「佐々木も。細胞を遅延させるナノマシンなんて、ここにいるスタッフだけでは造れなかった。佐々木がいてくれて本当によかつ



たと思う」

佐々木はあははと笑った。

「まさかこんなところで『NEXT』の研究が役立つとは思わなかったよ。世の中、どこで何が役立つかわからないものだね」

心なしか、声のテンションがいつもより高いような気がする。佐々木もそれだけ、今回の実験が成功したことが嬉しいのだろう。

「石和くんも！ 的確で冷静な分析があったからこそ、やるべき課題を浮き彫りにすることが出来たんだよ。僕は石和くんの功績も大きいと思うなあ」

佐々木の褒め言葉に、石和は苦笑しながらかぶりを振った。

「いや、俺はみんなのように 細胞の性質を変えるような発見や開発は何も出来なかった。俺の功績なんて、ほとんどないに等しいと思う。俺はせいぜいみんなの手伝いをした程度だ」

川原は口に手をあててく、すくすと笑った。

「謙遜も程々にしないと嫌みになるわよ。石和くんの知識と優れた洞察力にどれだけ助けられたか分からないわ。わたし達だけの力じゃここまで辿り着けなかった。そう思うわ。本当よ」

「そうだよ。それに瞬間物質転送装置を使った分解融合を思い<sup>テレポート・ゲート</sup>いて、原案を出したのは石和くんだったじゃないか。瞬間物質転送<sup>ゲート</sup>装置を使うという発想が浮かばなければ、今回の実験の成功はあり得なかったんだから。川上くんもそうは思わないかい？」

佐々木の言葉に川上は頷いた。

「……川原博士と佐々木博士の言うとおり、だと思っ」

「過大評価もいいところだと思っがな。まあ、今回の実験の成功はみんなが力を合わせた結果だということ。本当にみんな、ご苦労さん」

言いながら、缶ジュースを目線まで掲げて、笑った。すると、

「石和くんの言うとおりだ。この私、戸木原淳が率いる第五研究所のメンバーはこの三ツ葉社の中でも選りすぐりの最高の頭脳なのだよ。我々五人がいれば、必ずD-I計画は現実のものとなるだろう！ 第一段階の『鍵<sup>キ</sup>』の精製は完成したも同然だし、このまま第二段階の素体まで一気に造り上げてしまおうではないか！」

と、石和の背後から、戸木原が陶醉したような表情を浮かべながら、そんなことを言うってくる。川原がそれに笑顔を浮かべながら、便乗した。

「そうね。散々、研究が煮詰まっった分、その反動で一気に加速した感じだし、このまま第二段階の素体も一気に造り上げちゃいましょうよ！」

大きく両手を広げて、そんなことを言う。佐々木が苦笑いを浮かべて、首を傾げた

「あははは、そう行きたいところだけど、世の中そこまで甘くないんじゃないかな。特に第二段階の研究は第一段階の研究より難しいと言われているしね」

「だな。そう簡単に事は運ばないと思っ」

石和は頷いて、佐々木に同意する。現在、の絶対世界線は近接した位置に並び、それが平行に進んでいると思われる。第一段階で精製する『鍵』<sup>キ</sup>は世界と世界の因子が均一に混じり合ったもので、この素体を軸として、近接する絶対世界線をこちら側に引き寄せることが出来る特殊な生物だ。

だが、それを行うには莫大なエネルギーが必要不可欠となる。いくら近接した世界とはいえ、世界そのものを動かすのだ。生半可なエネルギーでは世界を動かすことなど出来ないだろう。

『鍵』<sup>キ</sup>を莫大なエネルギーに耐えうる素体にする。そのエネルギーを自在に操作する装置を開発すること。それが第二段階で成すべき事であるが、その実現は極めて困難なモノになると予測されている。川原は眉をしかめ、

「もう二人とも……実験の成功でせっかく盛り上がっているのに、水を差すようなこと言わないで頂戴。テンションが下がるじゃないの」

と、両手を腰に当てて、言う。

「川原くんの言うとおりだ。もっと前向きに考えたまえ。成せば成ると言うのではないか」

相変わらず口先だけは立派な男である。そもそもこの男は第一段階の研究においても、何の功も成していない。よくまあ、自信満々でそんなことをいえるものだ。

いつものように反論したい衝動におそわれたが、石和はそれを喉元でぐっ、と押さえた。川原の言うとおりだ。せっかくみんな盛り上がっていい気分になっているのだから、わざわざそれをぶちこわすような、空気の読めないことはしたくない。なによりも今日は自

分もいい気分ではないのだ。戸木原の言葉を黙殺して、缶を傾け、ジュースを飲んだ。すると、戸木原は自信満々の笑みを浮かべ、

「それに　安心したまえ。私の頭の中にすでに第二段階の構想は出来ている。これを実行すれば。第二段階の研究は完成したも同然だ」

そんな、意外な台詞を言った。

「っ！　……げほっ、げほっ！」

戸木原のその発言に石和は大きく目を見開いて、咳き込んだ。驚いた拍子に気管にジュースが入ってしまったようだ。川原や佐々木も大きく目を見開き、ぽかんとしている。

「え？　そ、それは本当………なんですか、戸木原博士」

半信半疑といった表情で訊く、佐々木。戸木原はうなずきながら、にやり、と笑った。

「無論だとも！　君たちはただ私についてくればいいのだよ。そうすれば第二段階の研究は順調に進み、最終段階までたどり着くことができる！　もはやD-I計画には何の不安もないということだよ！　ははははははっ！」

そう言って、高らかに笑う。石和は怪訝な面もちで、戸木原を睨め付けた。あからさまに胡散臭い。自制しようと思っていたが、我慢できない。石和は半眼で、戸木原に問うた。

「では、戸木原博士。詳細を是非とも教えていただきたいモノで

す。問題点はいくつかあります。どういったエネルギーを流用するのか。そのエネルギーを『鍵』<sup>キ</sup>をどこから持ってくるのか。そして、その莫大なエネルギーを『鍵』<sup>キ</sup>という生命体の中で活動させるのか。その問題点を戸木原博士はどうやって一挙に解決させるのでしょうか？」

自分でも意地の悪い言い方だと思うが、止まらない。第一、あおったのはあちらだ。自信満々に告げたからには、答えてもらわないと気が済まない。莫大な戸木原はふん、と鼻を鳴らし、人差し指をちつつ、と左右に振った。いちいち動作が下げさな男である。

「どうも君らは第一段階で煮詰まったときのように、凝り固まった考え方が消えていないようだな。そこが君たちの限界なのかね？ ふふふ、仕方がないな。では、逆に訊こう。『鍵』<sup>キ</sup>を動かすにはエネルギーが必要だ。そのエネルギーは何が一番適していると思うかね？」

「生体エネルギーでしょう」

石和は間髪入れず、答えた。『鍵』<sup>キ</sup>という素体が生物である以上、それが一番適切である。『鍵』<sup>キ</sup>は機械ではないのだ。それ以外のエネルギーだと、素体が適応しきれない可能性がある。

だが、問題はどうかやってエネルギーを変換するかだ。D-I計画を行うには世界をも動かす莫大なエネルギーを生体エネルギーに変換して、『鍵』<sup>キ</sup>にそそぎ込む必要がある。万一、生体エネルギーに変換する方法が思いついたとしても、どうかやって、『鍵』<sup>キ</sup>の素体を莫大なエネルギーに耐えうるものにすればいいのか？

問題は山積みである。これを一朝一夕に解決できるとは思えない。戸木原はふふん、と高圧的な笑みを浮かべた。

「分かっているではないか。ではもう一つ質問させてもらおう。川原さんと川上くんが開発した『柔らかい細胞』はどういった特性を持ったものだったかね？」

「どうって……それは 細胞の浸食に対して、飲み込まれないよう『適応』するためのものに決まってる」

と、石和の言葉が途中で止まった。それでようやく戸木原の言葉んとしている事が分かった。石和は右目に手を当てて、呻くように呟いた。

「そ……そうか。そういうことか。迂闊だった。どうして、こんな単純なことに気が付かなかったんだ！」

「え？ え？ どういうこと？ どういうこと？」

「僕らにも分かるように説明してくれないかい？ 訳がわからない」

川原と佐々木が石和と戸木原の顔を交互に見ながら、困惑した表情を浮かべている。戸木原は得意満面で答える。

「だから、『柔らかい細胞』の特徴は『適応』することなのだろう？ その特色はなにも 細胞に限ったことではないだろう。だとすれば、話は簡単ではないか。『柔らかい細胞』を使って、『鍵<sup>キイ</sup>』の素体を莫大なエネルギーに耐えられるような細胞に『適応』させればいいのだよ」

川原と佐々木は大きく目を見開いた。

「た、確かに！ 他のエネルギーならともかく、生体エネルギーなら、『柔らかい細胞』は『適応』しようとするかもしれない！」

「ある程度細胞をいじって強化する必要があると思うけど、確か

にいけるかもしれないわね。理論的には充分、可能なはずよ」

こちら側の反応に満足したのか、戸木原は両腕を組んで、豪快な笑い声を上げた。

「ははは、そうだろう、そうだろう。だが、それだけではないぞ。先程、エネルギーを生体エネルギーに変換する必要があると、言っていたが、そんなモノは必要ない。

あの『水の水晶』だが、あれは莫大なエネルギーの結晶なのだろう？ あれを上手く分析し、生体エネルギーを蓄積できる素体を『鍵』とは別に造ってやるのだ。つまり、生きたエネルギーの貯蔵庫だよ。そして、それを上手く『鍵』とつなぎ合わせることが出来れば

『鍵』は稼働し、の絶対世界線をこちらに引き寄せることが、出来る。つまり、D計画は成る。戸木原は自信満々な声で、皆にそう告げた。

『……………』

川上、川原、佐々木、石和が沈黙して、戸木原に目を向ける。信じられない、というのが、石和の正直な感想だった。また、見当違いなことを述べて、それだけで終わると実践していたのにー実際、口にした言葉は、これ以上ないくらいの確なアイデアだった。

戸木原の言ったことは、正しい。言うほど簡単なことではないにしろ、方向性は決して、間違っていない。この方向で煮詰めていけば、D計画は現実のものとして、稼働することになるのではないか。

「ん？ どうしたのだ、皆。静まりかえって。私の提案があまりにも的確なので、ビックリしたのかね？ 簡単な事だからこそ、気付きにくい。まあ、こういった盲点に気付くのも実力のうちということだよ」

高圧的な態度で、「はははは」と、笑い声を上げる。相変わらずの傲慢な態度に腹が立ったが、何も言い返せない。戸木原の言うこととは間違っていない。

単純なこと程、見逃しやすい。それに気付かなかった自分が馬鹿だった。そして、それに気付いた戸木原が一枚上手だった。そういうことだ。統括主任の名は伊達ではなかったということだろうか。

「何というか……言葉がないわね。完敗だね。見事です、戸木原博士」

「うん。僕もエネルギー変換という概念に概念に囚われて、その方法を思いつかなかつたよ。科学者は自由な発想がもっとも重要というけど、僕らはまだ凝り固まった概念に囚われていたみたいだね」

川原と佐々木が素直に自分達の力不足を認め、戸木原博士を賞賛した。石和は何も口にしなかったが、胸中では己の敗北を認めていた。もし、この案を自力で出したのなら、戸木原に対する認識を改めなければならぬかもしれない。

「うむ。君たちはまだまだ未熟な若輩者だ。だが、気に病むことはない。君たちには見込みがある。君たちは私が統括するチームの一員なのだから。努力を怠らなければ、きっと私に追いつける日がやってくる！ せいぜい精進するがいいぞ、みんな。はっはっはっ！」

……もっとも性格の認識を改める必要はまったくなさそうだが。



戸木原は右の人差し指をぴつ、と立てて、続けた。

「さて。諸君。ここでひとつ提案があるのだが、第二段階の研究、私に先行してやらせてもらえないかね？」

佐々木が眉を顰めた。

「え……何故です？」

「実は先日、川原くんから、『水の水晶』の欠片を一部頂いたのだが、それを私直属のA班のスタッフに見せたら、非常に興味を示していてね。先程の第二段階の構想を口にしたら、是非とも自分達の班を主軸にして、研究を進めてみたいと、懸命でね。完成の目処が立ってきたとはいえ、まだ、第一段階の作業が完全に終わったわけではないし、君たちも色々と作業で忙しいはずだ。どうだろうか？」

A班のみが先行して、先に第二段階の研究を行うというのは」

「A班のみで、ですか？」

川原が言葉に戸木原が頷く。

「A班のスタッフだけなら、抜けても第一段階の作業にはさほど支障がないと思うのだが。君たちは第一段階の作業が終わり次第合流してくれればいい。その間に少しでも第二段階の研究を進めておきたいのだよ。そのほうが少しでも時間が短縮できて、効率がいいだろう？」

「そういうことでしたら」

「ええ、別にいいんじゃないかしら。特にトラブルもなく進めば、一班ぐらい抜けても、支障はないと思うし。ねえ、石和くん」

「……………」

「……………石和くん？」

「あ？ あ、ああ。別にいいと思うが」

川原は怪訝な表情を浮かべ、顔を覗き込んでくる。

「どうしたのかしら。石和くん、なんか変よ。酔ったの？」

「アルコールなんか微塵も入っていない只の炭酸飲料でどうやって酔うことができるのか、詳しく教えてもらいたいんだが。俺は特異体質の持ち主か？」

半眼で石和がそう言つと、川原がくすくす笑つた。どうやら、またからかわれたらしい。

「ありがとう、諸君。感謝する！ だとすれば、善は急げだな！ A班の連中にさつそく教えてやらねば、ならん。急いでいかねば！ これからA班の研究で、留守にすることが、多くなると思うが、君たちは第一段階の作業に専念しておいてくれたまえ。それでは失礼する！」

口早にまくし立てて、そう言つと、戸木原は缶ジュースを片手に握つたまま、会議室から抜けて、駆けていった。その様を見送りながら、佐々木は苦笑いを浮かべた。

「相変わらず、落ち着きのない人だなあ。別に話は明日でもいいのに」

「……なあ、佐々木」

「ん？ なんだい」

「一つ聞きたいんだが…… A班のスタッフつて、どんなメンツだ？」

石和の質問に佐々木は首を捻つて、答えた。

「うん、僕はあの班とはあまり面識がないから、詳しいことは知らないなあ。戸木原博士が直接指揮しているグループってことぐらいしか……どうかしたのかい？」

「いや、ちよつと、気になってな……」

目を細めて、曖昧な答えを返す。確かに一班ぐらい抜けても、作業には支障はないだろうがー何故、そんな第二段階の研究を急ぐ必要があるのだろうか？

戸木原が異様に『訝えている』ことといい、どうにも不自然さを感じる。この違和感には覚えがある。以前、第二実験室で戸木原を見るときに感じた不可思議な空気。

あれに似ている。そんな気がした。

……どうにも、嫌な予感がする。

石和は額に手をあてて、大きくかぶりを振った。考えすぎだ。何の根拠もないのに、そんなことを考えるなんて、どうかしている。

「どうにも疲れているみたいだな……」

石和が小さく独りごちると、その様を眺めていた川原がきよとんとした顔で、首を傾げた。

「……やっぱり、酔っぱらっちゃったのかしら？」

## 6 「佐々木の本性」

今日の夕飯のメニューはすき焼きだった。テーブルの上には電気加熱式の小型コンロがあり、その上で鍋がぐつぐつと音を立てて、煮立っている。鍋の中にはシラタキ、ねぎ、榎茸、白菜、モヤシ、春菊、椎茸、焼き豆腐、そして、主役の牛肉がぎゅちりと詰められており、様々な具の香りが食卓に漂い、食欲を刺激する。石和、千恵子、勝義と、食事に招待された佐々木勇二郎が加わり、食卓を囲んでいる。

鍋の中の具がほどよく煮えてきたところで、千恵子が、

「そろそろ大丈夫ですよ。どうぞ召し上がってください」

と、言った。

「はいっ、それでは遠慮なく。いただきます！」

佐々木が甲高い声で返事をする、勢いよく鍋に箸を突っ込み、溶き卵を入れたお椀の中に具を入れてゆく。最初に口に入れたのはメインの具材である牛肉だった。実験に成功したお祝いと千恵子には言っておいたので、かなりよい牛肉を購入してきたらしい。佐々木は目をぎゅつと瞑って、ぶるぶると身体を震わせた。

「お、おいしい……おいしいすぎる……」

他の具も次々と口に放り込み、咀嚼する度に幸せそうな笑顔を浮かべている。石和も続いて、肉を口に運んで、味を見る。確かに上手い。ふわりとした柔らかさと、肉の旨味が口中に広がる。千恵子は相当奮発したようだ。

「うーん、グレイト！ 絶妙な味付け！ 石和くんは幸せ者だなあ。毎日こんな料理が食べられるんだから」

千恵子は口に手をあてて、くすくすと笑った。

「どうもありがとうございます。お肉もご飯もたくさんあるので、どんどん食べてくださいね」

「はいっ！ がんがん行かせていただきます あっ、勝義くん、そんなにお肉ばかり食べてたら駄目じゃないか。野菜もいっぱい食べるんだ！」

言いながら、隣の椅子に座っている勝義のお椀にネギや椎茸をひよひよいと放り込む。勝義が露骨に眉を顰めた。

「えー、やー、シイタケきらい！」

佐々木が握り拳を掲げて、叫んだ。

「好き嫌いは駄目だぞ、勝義くん。お父さんは椎茸大好きだぞ。椎茸や野菜をちゃんと食べたから、お父さんはあんなに大きく、立派になったんだ。お父さんみたいになりたくないのかい」

勝義はきよとした顔で石和の顔をじっと見つめ、

「おとーさん、シイタケ好きなの？ 食べればおとーさんみたいになれる？」

と、訊いてくる。石和は微笑んで、頷いた。

「お父さんは椎茸大好きだぞ。食べればお父さんみたいに大きくなれる。本当だぞ」

勝義はしばらく、お椀の中にある椎茸と睨めっこしていたが、意を決したかのように目をぎゅっと瞑ると、椎茸を口の中に放り込んだ。むぐむぐと口を動かし、喉の音を立てて、飲み込む。佐々木が笑顔で、勝義の頭を撫でた。

「うん、偉いぞ、勝義くん！ さすが石和くんの子だね。いい子だなあ」

勝義は気持ちよさそうに目を細めて、頬を弛めた。

「えへへ、これでおおきくなれるかな。おとーさんみたいになれる？」

「なれるさ！ お父さんよりも大きくなれる。だから、いっぱい食べよう。お肉もたくさん、野菜はもつとたくさんだ！」

「うん、いっぱい食べる！ 頑張つて、食べる！」

「そうだ、椎茸も、ネギも、シラタキも、お肉もおいしくいただくんだ！」

妙にテンションが高い佐々木に合わせて、勝義もはしゃいでいるので、いつもより食卓が賑やかだった。ベビーベットにいることも、その空気に当てられたのか、きゃっきゃっ、と嬉しそうにはしゃいでいる。

「むぐむぐ……いやあ、しかし、本当においしいなあ。あ、千恵子さん、すみません。おかわりいいですか？」

空になったご飯茶碗を差し出す。石和は苦笑した。

「つたく、はしゃぎすぎだ。少々、オーバーじゃないのか」

「もぐもぐ……僕、普段は外食ばかりだからね。やっぱり誰かの手料理だと自然にテンションが上がっちゃうんだよね。それがおいしい料理だったら、尚更だね」

千恵子のご飯を盛った茶碗を持ってくると、佐々木はお礼を言つて茶碗を受け取り、すかさずご飯をかき込み始めた。満面の笑顔で「ご飯とすき焼きの具を頼張る。本当に美味しそうなご飯の食べ方をする男である。」

「佐々木さんはまだ結婚とかされないんですか？ 一人暮らしだと色々大変でしょう」

千恵子の言葉に佐々木は肩を竦めた。

「うーん……仕事帰りに出迎えて、ご飯を造って、待ってくれる人がいたらいいなあ、とは思ってますけどね。困ったことに相手がないんですよ」

両手を広げて、あははと笑う。

「お見合いとかどうだ？ 佐々木の年齢なら頃合いだろ」

経歴や年収は申し分ないし、お見合いとなれば、飛びついてくる女性はそれなりにいるだろう。

「お見合いはね。どうにも好きになれないんだ。やっぱり、好き合った同士で結婚したいよ」

「そうは言っても、この業界は出会いがないぞ。女が少ないから

な。俺も千恵子がいなかったら、独身街道まっしぐらだったかもしれない」

「そんなことないよ。だって、武ちゃんかつこいいもん。あたしが会社員だったら、絶対アタックしてたよ」

そういうことを第三者がいる前で言わないでほしい。妙に気恥ずかしくなる。

「そういや、主任の川原さんが石和くんにご執心な感じだよね。アレは石和くんが結婚していなかったら、狙われていたんじゃないかな。あはははは」

「……………」

「いでででででっ！　ち、千恵子。腰をつねるな、痣になる。いでででっ！」

「ふんだ。武ちゃんのばか」

「あははは。モテる男は辛いね、石和くん」

石和は千恵子につねられた部分をさすりながら、佐々木を半眼で睨め付けた。佐々木は素知らぬ顔で、すき焼きの肉を頬張っている。絶対わざとやっている。結婚は余計なお世話と言いたいらしい。石和は嘆息した。

「はあ……まあ、佐々木が今のままでいいって言うなら、いいさ。俺がとやかく言うことではないしな。でも、連れがいた方が仕事にハリが出ると思うぞ」

「勿論、憧れはあるけどね。いまは一人が気楽かな。どうしてもほしくなったら、見合いも考えるよ」

佐々木とそんな会話を繰り返していると、勝義が「ごちそうさまでした」と満足した笑顔を浮かべて、言った。そして、石和の腕にすがりついた。



「ね、ね。おとーさん、あそぼ、あそぼ！」

「こらこら、勝義。お父さんはまだご飯終わってないぞ。また後でな」

「えー。やだ、あとでやだ！ あそぼ！ あそびたいの！」

「こら、勝義。我が儘いわないの」

と、千恵子は咎めるが、勝義は不服そうな顔を浮かべている。佐々木が微笑みながら、

「勝義くん、この前の誕生日に買ってあげたゲームがあったらどう。あとでとおじさんと対戦しよう」

と、言った。勝義の顔がぱあつと明るくなった。

「したい、対戦したい！ しよう、しよう！」

「うん。でもおじさんとお父さんはまだご飯食べてるから、あとのお楽しみでいいかな。勝義くんはいい子だから、待っていてくれるよね」

「うん！ 待ってる！」

と、快活な声で勝義は頷いた。勝義は「約束だよ、おじさん！」と、言っけてリビングを出ていった。石和は目を丸くした。

「驚いたな。どうして、佐々木の言うことは聞くんだ？」

「子供は目先のことしか目に入らないからね。ただ、駄目だよっていう注意するより、待たせた後のご褒美を造ってあげたほうが、言うことを聞いてくれるんだよ」

「へえ……そうなのか、千恵子」

「的を得てると思うよ。あたしも時々、やってるし」

「あと、子供って自分の好きなモノに共感してくれるとすごく喜

ぶんだよ。だから、子供が夢中になっているモノとかにご褒美を持つてくると、効果的だよ」

と、佐々木が付け加える。

「勝義の誕生日パーティーやったときから、思っていたけど……佐々木さんって随分と子供に慣れてるんですね。びっくり」

千恵子が感心した口調でそう言うと、佐々木は照れた表情で頭を掻いた。

「年の離れた妹と弟がいたので。昔よく世話をしあげてたんですよ。その時と同じ風にやってるだけで」

「あははは、武ちゃんより、子供の扱い上手かも。佐々木さんに少し教わったら？」

「む……」

無邪気にそう言う千恵子に石和は眉を顰めた。反論したかったが、図星なので何も言えない。どうにも子供には甘くなってしまう、厳しく叱つたりすることが苦手なのである。悪いことをしたときは強く叱ってやるのが、子供の為になることは分かっているのだが……。佐々木は目を細めた。

「石和くんはそういうの意識してやるのは苦手っぽいから、自分のやり方で接していけばいいんじゃないかな。勿論、甘いばかりじゃ駄目だと思うけどね。石和くんなりの考えた方法で、真摯に向かい合えば、勝義くんもそれに答えてくれると思うよ」

「そうだね。勝義もことみも武ちゃんのこと大好きなんだから」「……む、ど、努力してみる」

二人に返事を返すときに少し声がうわずってしまった。千恵子と佐々木が笑い声を上げた。何故笑うのだろうか。石和は顔を熱くなるのを感じながら、ご飯を口に放り込んだ。

「んしょ、と。それじゃあ、武ちゃん。あたし、ことみを向この部屋に寝かしてくるわね」

と、千恵子が椅子から立ち上がり、ベビーベッドの中から、ことみを抱きかかえた。ことみを見ると、目が半分閉じかかっている、だいぶ眠そうだ。石和は「頼む」と、頷いた。

「お酒少し飲む？ 飲むならおつまみも用意するけど」

石和は少し考えて、

「……そうだな。少し飲むかな。佐々木はどうだ」

佐々木が嬉しそうにこくこくと頷く。そういえば、佐々木は酒好きだった。訊くだけ野暮だったようだ。

「あははは。あとで持ってくるね」

千恵子はそう言って、眠たげなことみを連れて、出ていった。

「ん、すき焼きにお酒。いいねえ。ビールだと最強の組み合わせだね」

「佐々木、今日はほどほどにしておけよ。ただでさえ、酔いやすいんだから」

苦笑しながら、佐々木にそう言うと、ふと、思い出したことがあ

った。すっかり忘れていた。佐々木に頼まれていたモノを渡さないと。アルコールが入ってからでは忘れるかもしれないので、今のうちに渡しておくでしょう。石和は壁に立て掛けてある鞆の中から、A4サイズの封筒を取り出し、佐々木に手渡した。佐々木はきよんとし、

「これは？」

「頼まれていた書類……『新井博士』に関する報告書だ」  
「っ！」

その瞬間、佐々木の弛んでいた顔が引き締まった。受け取った封筒を開き、真剣な眼差しで中身に目を通す。

佐々木は行方不明となった新井武之博士を失踪当時からずっと、独自のルートで調査してきた。興信所や島根にいる三ツ葉社の知り合いなどに頼んだり、失踪した日にいく予定だった島根県などに足を運んで、彼の行方を追いかけてきたのだ。

今回、石和の高校時代の友人の一人が島根の探偵事務所働いているのを知って、佐々木博士の行方について調査してもらったのである。

随分と実績のある探偵事務所と聞いて、期待していたのだが、残念ながらもぼしい情報はなにも得ることはできなかった。佐々木が落胆した表情で嘆息した。

「やっぱり手がかりなし、かあ……」

警察機関での調査も十の昔に打ち切られている位だ。そう簡単に情報を掴むことはできないだろう。

「力になれなくて、すまないな。一応、調査は続行するように頼

んでおいたが……あまり期待はしないでくれ、と言っていた」

佐々木は笑い顔を造って、手をぱたぱたと振った。

「いや、わざわざ、ありがとう。石和くんには感謝しているんだ、本当に。またなにか情報が入ったら、教えてくれるかな」

無理して笑顔を造っているのが、丸わかりだった。石和はテーブルに肘をつき、顎に乗せながら、神妙な面もちで言った。

「……なあ、佐々木。新井博士は本当に島根で失踪したのかな？」

「え？ どういうことだい？」

「確かに警察の公式発表は出張先である島根での失踪という話だったが……向こうでは目撃情報はおるか、新井博士が島根に着いたという情報も皆無だ。ここまで目撃情報がないのはあまりにも不自然だと思っただが」

佐々木が俯きながら、両腕を組んだ。

「確かに……そうかもしれないね。でも、東京でも新井さんの足取りはまったく掴めないのに、そうなると新井さんは一体どこへ？」

石和は眉根を寄せて、かぶりを振った。

「わからない。しかし、これだけ調べても島根で情報を得られないうことは、公式発表の情報が間違っている可能性がある。もう一度、最後に目撃された情報を洗いなおして、そこから調査しなおしていったほうがいい気がする」

それでも正直、情報を得るのは難しいとは思うが、まったく情報

が得られない島根を探るよりは、はるかにましだろう。佐々木はしばしの間黙考し、首を縦に振った。

「……そうだね。島根での調査はいったん打ち切ろう。もう一回、興信所の方に調査を頼んでみることにするよ。ありがとう、石和くん」

「いや、俺も新井博士の行方は気になるからな。手伝えることがあつたら、手伝いたい」

新井博士は半年前、第五研究所が設立された当初に失踪している。その失踪直前、第五研究所に瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの導入について、反対を唱え、上層部に抗議している。

その瞬間物質転送装置の導入を提案したのは他でもない、自分なのだ。もし、新井博士がそのことを気に病んで失踪したとすれば、自分にも責任はある

「……違うよ、石和くん。それは間違いだよ」

こちらの表情で考えていることを見透かされたらしい。佐々木は微笑みながら、石和の考えを否定した。

「石和くんも新井博士と一度あつたことがあるだろう？ あの人  
がそんな繊細で弱そうな人物に見えたかい？」

言われて、新井博士の姿を頭の中に思い浮かべる。佐々木の言うとおり、新井武之博士とは一度だけ会って、話す機会があつた。筋骨隆々な身体。豪快で大雑把、曲がったことが嫌いな直情的な性格。石和はそのときのことを思い出して、吹き出した。

「確かにな。最初、会つたとき、びっくりした覚えがある。こう

言っちゃ失礼だが、とても瞬間物質転送装置を生み出した科学者と  
は思えなかった」

「それは長年つきあってきた僕でもそう思うから仕方がないよ。  
大雑把な性格と繊細で独創的な思考を合わせ持つ不思議なひとだっ  
たからね。本当、科学者である人ほど白衣が似合わない人も珍しい  
よ」

そう言って、佐々木はあはは、と笑った。

「確かに新井博士は瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの導入には強い反対意見を  
持っていた。だけど、それが原因で失踪するようなひとじゃないよ、  
絶対に。それだけのことでくじけたり、家族を捨ててやけになるよ  
うな人じゃないことは僕がよく知っている。だから、石和くんが気  
に病む必要なんて、どこにもないんだ」

「……………」

佐々木と新井博士のつき合いは随分と古いらしい。出会いは佐々  
木が大学生の時、新井博士は当時工学の授業を行っていたらしい。  
当時行っていた新井博士の研究に興味を持ち、その時をきっかけに  
親しくなったそう。佐々木が一人前になるまで、親身になって面  
倒を見てくれた、大事な大事な『恩師』なのだ。

しかし、新井博士は少し変わった性格で『恩師』と呼ばれるのを  
非常に嫌ったらしい。

『恩師』というと偉そうだし、上下関係があるようで、なんか調子  
が狂うわい。佐々木はもう立派な科学者だし、ワシとは対等じゃろ  
？ だったら『恩師』なんて堅苦しい呼び方は止めて、『親友』で  
いいじゃろ、わっはっはっはっはっ！』

歳も十以上離れていた佐々木に対して、新井博士はそう言った。

だから、新井博士は『恩師』ではなく、『親友』なのだ、佐々木は以前、そう言っていた。

年の離れた、それでも対等と呼べる親友。そんな二人の絆は自分が思っているよりも、相当深いのだろう。

石和は無言で深々と頷き、佐々木の言葉を受け入れた。佐々木の言つとおり、そういつた懸念は持たないことにしよう。

リビングのドアから、ノック音が聞こえてきた。石和が立ち上がり、ドアを開けると、お盆を持った千恵子が立っていた。

「お待ちどうさま、武ちゃん」

千恵子がそう言つて、にこりと微笑んだ。どうやら、待望の酒とつまみの料理が来たようだ。

「簡単なものばかりだけど」

テーブルに二本のビール瓶と料理を乗せた皿を並べていく。冷や奴、枝豆、軟骨の唐揚げ、にんにくの串焼きが少しづつ、更にもつてある。量が少ないのは、すき焼きというメインがあるから、そこまで食べられないと思った千恵子の配慮だろう。

酒の肴としては最適のメニューだった。ビール瓶の栓を抜いて、一緒に持ってきた二つのコップに注ぐ。佐々木の目がきらきらと輝いた。先ほど、すき焼きにはビールが最適と言っていたので、お目当てのものが来て嬉しいらしい。

「悪いな、千恵子」

「すいません、千恵子さん。おいしいすき焼きをごちそうになったのに、こんなもので」

「あはは。気にしないでください。本当にたいしたものじゃない



ですから。それじゃあ、武ちゃん、あたしあっちの部屋にいるから、何かあったら呼んでね」

「ああ、ありがとう」

手をひらひらと振りながら、千恵子は出ていった。佐々木と石和はビールの入ったコップを手に取り、目線の高さにまで掲げた。

「それじゃあ、改めて。今日の実験の成功を祝って」

「うん。乾杯！」

二つのコップがかちんと重なり合い、二人はそのまま一気にビールを飲み干した。口元についた泡を手で拭いながら、石和はふうとため息をついた。

「仕事が終わった後の一杯は本当にうまいな。今日の実験の成功もあつたから、尚更だな」

「ははは。本当、仕事の後の最初の一杯はたまらなくおいしいよね。どうしてだろう」

二人は再びコップにビールを注ぎ、二杯目となるビールを喉の奥にそそぎ込む。石和は心地よい感覚に身を委ねた。

「しかし、あれだけ煮詰まっていたD-I計画がこつも順調に進んでいくなんて、なんか、嘘みたいだね」

「ああ。瞬間物質転送装置と『テレポルト・ゲート柔らかな細胞』様様だな。ようやく光明が見えてきたと思う」

「それに今日は意外なこともあつたしね。まさかあの戸木原博士がああも的確な案を出してくるとは、本当びっくりだよ。今までは……その、ちよつと首を傾げるようなところがあつたけど、今日でちよつと見方が変わったかもしれない。統括主任の名は伊達じゃな

かったということだね。あははは」

「」

佐々木の言葉に。石和は眉を顰めて、目を細めた。

「……石和くん？」

佐々木がそれを見て首を傾げる。

「今日、会議室でもなんか妙に考え込んでいたけど、なにか気になることでもあるのかい？」

「いや、戸木原博士のことが、ちょっと気になってな……」

「あつ、ひよつとして、石和くんは戸木原博士のこと、だいぶ敵対視していたから、今日のことのことが気に食わなかったのかな。気持ちには分からないんでもないけど」

佐々木が笑いながら言った言葉に、石和は大きくかぶりを振った。

「いや、確かに戸木原博士の言動には目に余るものがあつたから、正直引いていた部分があるが、優れた発案を認めないほど、俺は子供じゃない。第二段階の発案については俺たちより、戸木原博士のほうが一段上で、考え方も的確だった。それは素直に感心したよ」

「まあ、相変わらずあの偉そうな口調はどうかと思うがな」と、付け加えると、佐々木は苦笑いを浮かべた。はっきりと口にはしないが、彼の中にも似た想いが渦巻いている筈だ。

「まあ、それはいいんだ。俺が気になったのはそこじゃない」

石和はコップに残っていたビールを一気に飲み干し、

「なんで戸木原博士はわざわざA班に限定して、第二段階の研究を依頼したんだ？」

と、言った。

「うん？ 僕らは『鍵<sup>キ</sup>』の安定作業で、手が離せないからだろう？ A班はあくまでもその繋ぎだし、別に変なおとはないんじゃないかな……もぐもぐ」

佐々木は千恵子の造ってくれたつまみを食べながら、淡々と答える。石和はかぶりを振った。

「D-I計画はそこまで急ぐ研究じゃない。そりゃあ 絶対世界線と 絶対世界線はいつまでも隣接した位置にいるわけではないが、まだ研究が本格的に始まってから半年しか経っていない計画だ。A班に専攻させてまで、第二段階の研究を急ぐ必要性なんて、どこにもないはずだ」

「そう言われれば、確かに……でも戸木原博士のことだから、深い考えはあんまりないんじゃないかな。みんなに対して一本取ったから、更に調子に乗って、みんなが本格的に第二段階の研究に入る前に、もっと驚いてもらおうと。戸木原博士によくある自尊心の暴走じゃないかな……もぐもぐ……この枝豆おいしいね。スーパのお総菜コーナーにあるのとは比較にならないよ、うん」

佐々木にしては随分と毒のある発言だった。食べるのに夢中で、オブラートに包むのを忘れていたようだ。

「そう言われれば、その通りかもしれないが いや、実は大し

た根拠なんてないんだ。この前、第二実験室で戸木原博士の姿を見たとき、なにか得体のしれないものを感じたというか……イヤな予感がしたんだ」

「……………」

佐々木が枝豆を食べるのをやめて、ぽかんとした表情でこちらを見つめている。

「な、なんだ？」

「いや、『嫌な予感』って、石和くんらしくない発言だなあって、ちよつと驚いた」

佐々木の言葉に石和は顔が熱くなるのを感じた。

「そう感じてしまうのだから、仕方がないだろ。まあ、自分でも考えすぎだって、分かっているんだ。ちよつと神経が過敏になりすぎているのかもしれない」

なんだか自分の言ったことが、妙に恥ずかしいことに感じて、石和はそれをごまかすために、冷や奴を取り皿に置き、口の中にかき込み始めた。

「……………」

しかし、佐々木は笑わなかった。顎に手を当て、真剣な表情で黙考した後、

「よし、それなら調べてみよう」

と、言った。

「え？ 調べるって、なにを？」

「勿論、第二段階についての情報だよ。これからA班のメンバーで、どういった過程で研究を行うか、戸木原博士は一切言わなかっただろう？ その情報を引き出して、調べてみよう。そうだなあ……川上くんは協力を頼んでみよう。ひよっとしたら、協力してくれるかもしれない」

「川上？」

石和は眉を顰めた。何故、ここで川上の名前が出てくるのか、分からない。佐々木はにやりと笑った。

「石和くんも不思議に思っていたんじゃないかな。あの二人はよつのは生物研究所の不祥事 『成体』が暴走した情報をどうやって、知ったのか」

「」

確かにその情報を入手できなければ、『水の水晶』はおろか、『柔らかい細胞』の生成もできなかっただろう。しかし、鉄の情報管制を敷いている三ツ葉社がそう簡単に情報を漏らすとは思えない。となると、情報を入手するにはかなり特殊な手段を用いなければならない。そう……例えば、社会では違法とされる手段

こちらの考えを見透かしたように、佐々木は深々と頷いた。

「そう。三ツ葉社の情報バンクである多目的型人工衛星『ヨハネ』に強制進入したんだよ」

「……っ！」

その言葉に石和は大きく目を見開いた。

「川上くんはコンピュータープログラムのエキスパートなのは知っているだろう？　どうやら、そういった裏の技術にも優れているらしいよ。僕も『柔らかい細胞』の経緯が気になって、川上くんに問いつめたんだ。最初は口を割ってくれなかったんだけど、鎌を掛けたら、ひっかかってくれて、教えてくれた」

「渋々だけどね」と、無邪気に笑いながら、付け加える。

「まさか……戸木原博士が管理するコンピューターの中に侵入するつもりか」

その質問には答えず、佐々木は目を細めた。

「これから戸木原博士がどういった過程を経て、研究を進めているのか。僕たちにはそれを知れる権利はあると思うよ。僕たちはD-I計画の担当責任者なんだからね。万が一大事な情報がないなら、石和くんも安心できるし、いい考えだと思うけどな」

佐々木の悪巧みに石和は啞然とした。佐々木は温厚で毒のない人柄だと思っていたが、どうやらそれは表だけだったようだ。石和は苦笑した。

「……この狸め」

「ひどいな、その言い方は。これは石和くんの為にやることだよ。まあ、ちよつと面白いなあって思ったけど」

言いながら、子供のように無邪気な笑みを浮かべた。

「ったく……まあ、いい。じゃあ、すまないが、頼む。別に気の

せいなら、それでいいんだ。佐々木の言うとおり、安心感がほしいだけかもしれないしな」

「了解、任せて」

佐々木は頷き、空になった石和のコップにビールを注いだ。そして、自分のコップにもビールを注ぎ、

「さて。それじゃあ、勝義君も待っていることだし、そろそろ終わらせて、二次会といこう。石和くんも参加だよ、勿論」

と、言った。

「対戦ゲームか？ 俺はああいうの弱いんだがな」

「いいんだよ、勝義くんが喜んでくれれば。こういうのはノリが大事なんだから」

石和は頷き、三杯目となったビールを掲げた。

「それじゃあ、もう一度。D計画の成功を祈って」

「乾杯！」

石和と佐々木は再び互いのコップをかちんと合わせて、最後となったビールを一気に飲み干した。

## 7 「捕獲」

「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……！」

夜の繁華街の中、少女は全力で駆けずり回っていた。人気のまったくない狭い路地を闇雲に走る、走る、走る。遠くから聞こえてくる車の走行音や人のざわめきが遠くの出来事であるような錯覚を受ける。ここは外の世界から、隔離された黒の世界だ。繁華街に隣接した位置にあるのにも関わらず、外の世界に戻るのは困難に感じる。

呼吸は乱れに乱れ、脇腹がずきずきと痛む。凍えるような冷気が辺り一面に漂っているのにも関わらず、少女の身体は大量の汗で濡れていた。

少女は望むモノは一つ。現実世界への帰還。恐怖の感情に刈られ、必死に外の世界への帰還を強く強く渴望した。

こんなはずではなかった。こんな状況に遭遇するなんて、想像すらしていなかった。自分はただ、ほんの少しの刺激がほしかっただけだったのに。

どうしてこんなことになったのだろう。

少女がこの人気のない路地裏に来た目的はドラッグだった。

常用性の少ない、ちょっととした興奮剤のようなもので、退屈な日常にほんの少しでいい、刺激がほしいが為に今まで幾度かに渡って、



購入し、使用していた。

使用していたと言っても、常用制のない軽いものだけだ。流石に巷で流行っている『クラックボール』などには決して手を出さず、遊びで出来る効果のモノを選び、それを常用していた。違法には変わりないが、常用制のものに手を出して、人生を破滅に追い込むほどの節操なしではない。少女はそう思っていた。非日常なものにはほんのわずかだけ入り込み、すぐまた平穏な日常に戻る。その行き来をスリルとして楽しんでいただけかもしてない。

その日の夜、少女は興奮剤のストックが無くなったので、少女はいつも売人がいる路地裏へ向かった。その売人は気さくな性格の若い女性で、自分の話や愚痴をよく聞いてくれたので、少女のお気に入りの場所だった。

『アンタらクスリなんて、ろくなモンじゃないからね。やるにしても適度な量にとどめときな。常用制のあるヤツは色々な意味で戻ってこれなくなる』よ。アンタらはまだ若いんだ。現実世界から『クスリの国』へ逃げるにはまだちと早いだろ。まあ、それでも欲しいってんなら、あたしゃ止めないよ。金を払ってもらえば、ブツは売る。けどね、一応忠告はしたよ。あとはアンタらがどう受け取るか次第だからね』

クスリの売人などという黒い商売をやっているのにも関わらず、そんな説教を咬ます矛盾した売人。少女は売人のそのアンバランスさを気に入っていた。冷たく突き放した話し方をする割には、きっちりこちら話を聞いてくれて、相談に乗ってくれる。少女はそんな売人のことが好きだった。今日もクスリの購入の他、軽く話でもしようかと思いいながら、少女は売人がいつもいる路地裏の奥へとたどり着いた。

そこは非日常への入り口。ここに居るときだけ退廃した日常を忘れ、刺激を得ることが出来る。自分の飢えを満たしてくれる大切な場所。そこはそんな聖域だったのだ。

しかし、その日。少女が訪れたときにはその聖域は侵されていた。自分の渴望した非現実的な日常よりも、更に強い非現実によって。強い非現実が高確率で『毒』となる。そして、戻ってこれなくなる。少女はその日、それを己の身を持って知る羽目になった。

「え　？」

その光景を見た刹那、少女の意識は冷たく凍り付いた。いつもの売人が　死んでいた。売人は狩人の標的となり。獲物として、仕留められていた。

狩人である『ソレ』は獲物の解体作業を行っている真つ最中だった。

売人の首に大きな傷があり、そこから血が垂れ流しになっている。顔は苦悶と恐怖の感情が宿したまま、そこで時間が止まったように固まり、身体をびくんびくんと震わせている。仰向けに倒れ、上半身の服はビリビリに切り刻まれていた。

そんな売人の足に『ソレ』は跨り、『その行為』を楽しんでいた。

びちゃびちゃ。ぐしゃぐしゃ。びちゃびちゃ。ぐしゃぐしゃ。

売人の腹は十文字に切り割かれ、ぱっくりと開いていた。大量の血が吹き出し、中に詰まっていた臓器があちこちにこぼれ落ちていく。そんな売人の腹部に両手を交互に突っ込み、臓器を弄んでいた。

びちゃびちゃ。ぐしゃぐしゃ。びちゃびちゃ。ぐしゃぐしゃ。

血しぶきと、ちぎれたピンク色の腸がゆらゆらと、踊る、踊る、踊る。

「う……げ、ええっ！」

目の前で起こるその狂気に満ちた遊戯と凄惨なその有様に耐えきれず、少女は口を押さえながら、嘔吐した。手が吐捨物にまみれ、手から溢れ出て地面にこぼれ落ちる。胃酸が喉を焼き、激痛に少女はぼたぼたと涙をこぼした。

錯乱した頭の中で少女は最近、この街で噂になっている事件を思い出していた。

若い女性だけを標的にした殺人。身体を鋭いナイフで切り刻み、その肉体の中身すら弄ぶ猟奇殺人。

『切り裂きジャックの再来』と呼ばれている事件が連続で発生しているという、そんな噂。

まさか、噂が本当だったなんて。まさか、それに自分が遭遇するなんて。あり得ない。あり得ない。あり得ない。

「ありえ……ない……」

掠れた声で、つぶやく。それとほぼ同時だった。売人の遺体を弄ぶ『ソレ』の動きがぴたり、止まった。こちらに気づいたのか、それとも端から気づいていて、自分の遊戯を少女に見せ付けていたのか。快樂に歪んだ『ソレ』の瞳がゆっくりと少女の視線と絡み合っ

た。

少女の見た『ソレ』の眼は。少女が知るヒトの眼と大きくかけ離れていた。その眼球は不気味な程に鮮やかな真紅色をしており、その質感は真紅の石。ルビーを彷彿させた。『ソレ』の口元がにい、と歪み、ゆらりとした動きで立ち上がった。

「ひっ……！」

ねっとりとした『ソレ』の視線におぞましい悪寒が駆け抜け、短い悲鳴を上げた。次の標的として、認識された。狩猟の標的とされた。それを本能的に察した少女は踵を返して、走り出した。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……！」

息を切らし、歯をがちがちと鳴らして、路地裏の出口を目指して、駆ける。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。怖い、怖い、怖い。死にたくない、死にたくない、死にたくない。誰か助けて。お願い、誰か、誰か、誰か！

初めて味わう死の恐怖。頭の中は真っ白に染まり、足はがくがくと震えて、力が入らない。それでも足は止めない。自分は逃げなければならぬ。どんなことをしても。自分の命を守るために。異質な恐怖から逃れる為に。

だが、その行為は無意味だった。狩猟者と獲物。獲物は狩られるものだ。そして、『ソレ』の身体能力は獲物を狩るのに十分な身体能力を保持していた。

『ソレ』は動いた。疾風のような速さで駆け、跳躍し、必死に逃げまどう少女に『ソレ』は己の牙である肉の刃を一閃させた。その一連の動きにはまったく無駄がなく、華麗な踊りを見せられているようだ。

ああ、綺麗だな。

そんな場違いなことを、少女は思った。

そして、それが少女が頭の中に思い描いた最後の言葉となった。

「あ」

ぱくり、と切り裂かれた少女の首筋から、血が噴き出した。首の頸動脈を切断されたのだ。まるで蛇口が壊れた水道のような勢いで、辺り一面を血で濡らし、『ソレ』を、地面を、路地を挟む双方のブロック壁を真っ赤に染め上げていった。少女の意識はそこで途切れた。

さて、おかわりを頂こう。

少女の身体を腹に肉のナイフを突き立てる。思い切り突き立てた『ソレ』の腕に何とも言えない感触が走る。

快感。柔らかい肉に刃を沈め、不可侵だった体内を浸食する感動。

なんて心地よい感触なんだろう。そのまま腹を十文字に切り裂き、両手を腹の中に突っ込んだ。暖かい臓器の感覚が、たまらない。『ソレ』は楽しそうな笑顔を浮かべて、腸をぶちぶちと引きちぎり、少女の腹を蹂躪し始めた。

『ココココレだ、コレ。これがほしかったんだ。ああ、あああ、  
いいいいい、いいよ、いいよ、さいこお二いい……っ！ しあわせ  
だっ…なんて、こおこコチいいいいんだろっ…っ！ さあハヤクア  
シをやるっ、やるっ、ヤロウやるウ！ アレをスレバもっともつと  
シあわずにナれるんだ！ ああ、はは、いやハハハハはははははあ  
ははははははははははハハははハハハはあ                   っ！！』

至高の快感が『ソレ』の身体中に駆け抜け、雄叫びを上げた。や  
がて、少女の腹の中から、蒼白い光が広がり、中の臓器がばちゃっ  
と弾けて、辺り一面に四散した。顔面に降りかかった血を『ソレ』  
は下を伸ばして、口一面をなめ回し、恍惚の表情を浮かべた。

## 7 「捕獲」 (後書き)

ランキングが評価ポイントをポチッとクリックすると高田が飛び跳ねますw

## 8 「予感」(前書き)

ここからは旧版と話はほぼ変わりません。ガンガン進めていきます！



## 8 「予感」

佐々木は第五研究所に配置された自分専用の書斎で前回の実験のレポートをまとめていた。デスクの上に設置されたワークステーションのキーボードを叩き、データの入力を行っている。

「うん、順調だね。アルファ細胞の浸食も大きな乱れもないし、融合バランスも問題なし。この調子でいけば、『鍵』の素体は完成する」

独りごちながら、佐々木は大きく背伸びをした。微塵も進展が見られないD-I計画であったが、ここで大きな前進を見せた。むしろ、半年の成果としては上々の結果だ。これで他の研究スタッフにも刺激を得て、士気があがることだろう。

そんな大きな満足感に浸りながらモニターを眺めていると、デスクの脇に設置されている電話から電子音が鳴り響いた。スイッチを押して、回線を繋ぐと、よく知っている声がスピーカーから響いてきた。

『川上だ』

短く、自分の名前を告げる。相変わらず、無愛想な声だった。佐々木は苦笑しながら、その声に答える。

「どうもお疲れ様、川上くん。どうしたんだい？」

『例の件で連絡した。そちらの都合のいい時間に報告する』

数日前に依頼した戸木原博士の調査についてだろう。依頼したのは二日前で、随分と仕事が早い。佐々木は感嘆の声を漏らした。

「ありがとう。よければ、今から平気かな」

『了解した。そっちに行く』

必要最小限の会話で、川上は内線を切った。確かに内線だと誰かに訊かれるかの可能性もあるし、発覚したら川上に迷惑をかけることになる。直接話すほうがいいだろう。

五分もしないうち書斎のチャイムが鳴り、川上がやってきた。佐々木は川上を部屋の中へ招き入れ、椅子に座らせる。入れ立てのコーヒーの入ったカップを差し出すと、川上は無言で小さく頷きながら、コーヒーを啜った。

「で、どうだい。なにか分かったかな？」

川上は静かに顔を左右に振り、佐々木に告げた。

「結論から、言う。戸木原博士が現在行っている研究については何の情報も得ることが出来なかった」

「え？ 何の情報もって……まるっきりかい？」

「あの研究グループの管理コンピューターには通常では考えられないほどの強固なセキュリティがかけられている。おそらく『ガーディアン守護者』  
を使っている。とても自分の手に負える代物じゃない」

『ガーディアン守護者？ そ……それって、まさか、あの？』

川上は無言で頷く。佐々木は啞然とした。ガーディアン守護者は軍事防衛プログラム用にM E I Tが開発した、とびつきり凶悪なプログラム防壁で

ある。高度な人工AIを搭載しており、下手に手出しをすれば、あつという間に場所を感知され、ウイルスをばらまかれ、侵入者のコンピュータを破壊する。更に高度なスパイウェアを用い、その侵入者の関係者までも割り出し、攻撃する。特Aのクラッカーが挑戦し、破滅した話も聞く。そんな防壁、破れるはずがない。

「そんな……大仰なものいったいどこで？ いや、それ以前になんて、そんな警戒態勢を敷く必要があるんだろう？ いくら機密防衛の為とはいえ、大げさすぎる」

「分からない。ただ、ガーディアン守護者が設置してあると分かった時点で、自分は侵入するのを止めた。無謀な冒険は頭がいい行為とはいえない」

川上の言うとおりだ。こんなことで危険な橋を渡つても、何の特もない。

「だが、戸木原博士の性格は単純で直情的だ。過剰なほどのプライド、慢心が隙を生む。例えるなら、正面玄関の鍵キは強固なものにし、周りにドーベルマンを配置する程の徹底ぶりだが、裏口には誰にもおらず、しかも鍵キが開いているような、間抜け。別ルートから探ってみた結果、色々な情報入手することに成功した」

何を言われても、無表情、無感動、無反応だった川上であつたが、やはり、戸木原の態度にはだいぶ腹を立てていたようだ。言葉の端々にトゲがあるのが分かる。

「別方向で研究グループについて、調べてみた。いま現在、戸木原博士が独立して組んだ研究グループは全部で十二人。その内、五人が鹿島大学付属病院の元研究員、四人が人類進化促進塾の元研究員、そして、三人が元よつのは研究所の元研究員だった」

「よつのは研究所の研究員？ その研究員って、まさか」

「そう。アルファを最初に調べていた研究員達だ。それだけではない。戸木原教授は鹿島大学付属病院、人類進化促進塾、よつのは研究所、すべての研究所で働いていたことがあり、集まった研究員はすべて過去、戸木原博士に深い関わりがある者達だった」

「な」

佐々木は絶句した。戸木原博士がよつのは研究所で働いていたのなど、聞いたこともない。ここに来る以前はたしか神奈川にある、滝村研究所で働いていたという話だったはずだが……。それとも、に関わる前にいたということだろうか？ あるいは

「佐々木博士がいま考えている通り。戸木原博士がここに来る前にいたセクシオンはよつのは研究所。研究対象は実験体の調査。『あの事故』があつたときも、戸木原博士はいた。我々が知らされていた情報はおそらく改変されたモノだ。

たしかに滝村研究所の記録名簿には戸木原淳の名前があつたが、コンピューターの中の記録名簿などいくらでも書き換えることが出来る」

考えていることが顔に出ていたらしい。淡々とした口調で川上が告げる。川上は続けた。

「そして、もうひとつ。戸木原のいた研究所や施設、そのすべての人間が、戸木原博士を崇拜している。よって、他の研究所から情報を引き出すのは非常に困難と思われる」

「崇拜って……あの戸木原博士をかい？」

にわかには信じられない話である。石和武士がよく愚痴っているのを聞くが、彼の気持ちもよく分かる。理性より感情が先行し、すぐヒトに怒鳴り散らす。ヒトを使うのは上手いが、このD-計画の

研究で役立つような功績を挙げたことなど只の一度もない。そのくせ、根拠のない、絶対的な自信を持っている。世間的に見て、嫌われる部類の人間と見ていいだろう。その戸木原博士が慕われていたというレベルを超え、崇拜されていたなど、佐々木にはちよつと考えられない。

「佐々木博士は意外に思われるかもしれないが、ここ以外での戸木原博士の評判は悪くない。むしろ、逆だ。公式発表はされていないモノがほとんどだが、各研究所では彼が筆頭に行った研究はかなりの成果を挙げ、評価されている。さすがに細かな研究内容は分からなかったが。過去の彼の噂を耳にしたが、『冷静沈着な切れ者』と言っていた。人望も高かったらしい」

「……なにがなんだか分からない。ここにいる戸木原博士とは何一つかみ合わない。話を聞くとまるで別人ではないか。本当にそれは戸木原博士なのだろうか。同姓同名の別人ではないのだろうか。それに彼の行動は不可解だ。」

「結晶をなじませる実験体を彼らだけで造る、と言ったこと。守護者<sup>アン</sup>などという大げさな防壁で武装していること。そして、彼の過去……」

「何一つかみ合わない。何一つ分からない。」

正直、軽い気持ちで、この調査を始めたのだが、蓋を開けてみれば、瓢箪から駒、どころの話ではなかった。

「この事を感覚的に石和くんは分かっていたんだ……なんの根拠もなしに。すごい勘をしているなあ。ビックリだよ」

感心する他ない。佐々木ははあ、と溜息を吐いた。

「……………」

その様を川上はじっとみつめていた。まるで何かを観察するかのよう。その視線に気付いて、佐々木は我に返った。

「え……なに？ な、なんか僕の顔についているかな？」

言いながら、佐々木は顔に手を当てる。川上はかぶりを振った。

「何でもない。自分が得た情報は以上だ。結局、頼まれた研究の内容はまったく分からず仕舞になってしまった。謝罪する」

そう言って、川上は無表情のまま頭を下げる。

「そんな……充分だよ。それにわざわざ僕の頼みで危ない橋を渡る必要なんて、ないんだ。安全な範囲でつて、頼んだときに言っただろう？ 本当にありがとう、川上くん。感謝する。謝礼は弾むよ」

「いらない。金には特に不自由していない」

「でも、労働にはそれなりの報酬がないと。君にはもらう権利がある。そして、僕には報酬を払う義務がある」

「今回の件は他人事ではない、自分にも関わることだ。だから佐々木教授の頼みはただのきっかけに過ぎない。佐々木教授が気にする必要はない。それに……………」

川上は目をそらして、言った。

「……………自分は佐々木博士のことを尊敬している。NEXTの開発は素晴らしい。それを可能にする技術もだが、コストの低さ、用途の

広さもすごいと思う。NEXTが完成し、実用化すれば、多くのヒトの命が救われることは間違いない。頑張つて、NEXTの完成を目指してほしいと思つてる。そんな素晴らしい開発をしている佐々木博士からお金を受け取るなど、出来ない……だから、報酬はいらない」

相変わらず、無表情で淡々としているが、目をそらしたところを見る限り、照れているのだろう。川上が尊敬していると言ってきたのは、正直、佐々木にとって意外だった。

佐々木と川上は別に親しい間柄ではない。DI計画が発動してから、知り合った中であるし、川上は寡黙な性格なので、特に親しくなるきっかけもなにもなかった。

そんな相手から、尊敬の言葉を聞くのは意外であり、くすぐったくもあつた。

しかし、同時に単純に嬉しいとも思う。こういった応援の言葉は励みにもなる。

だから、佐々木はその感情をそのまま口にした。

「ありがとう、川上くん。僕はその言葉を聞きたくて、NEXTの研究をしているのかも知れない。だから、その言葉はすごく嬉しい」  
「……………」

「だけど、お礼をしないと僕の気が済まない。川上くんがどう思うと、けつきよくは頼んだのは僕だからね。お金がイヤだったら、別のものによいようか。そうだな……飲みなんかどうだろう？」

「む。飲み？」

「うん。こう見えて、僕はけっこう酒好きでね。いい店はそれなりに知ってるつもりだよ。いくつか、ボトルキープしている店もある

し。川上くんもいける口だろう？ 僕が選んだその店で、もてなすももちろん、すべて僕持ちだ。これなら、いいだろう？」

「確かに酒は人並みに好きだ。しかし、報酬は」

「これが駄目ならエツチな店とかしか残ってないんだけど……そっちのほうがいいかい？」

「っ！」

普段、表情をまったく変えない川上の顔が、一瞬だが、驚愕の表情に歪んだ。顔も心なしか、紅い。……驚いた。ほんの冗談だったのだが、こんなに動揺するなんて。下ネタ系にはまるつきり弱いのかも知れない。無表情に戻った川上は　　しかし、顔は紅いままで、

「……飲みでいい。感謝する」

と、小さく呟き、カップに残っていたコーヒーを一気に煽った。佐々木はその挙動を可愛らしく思い、笑った。



## 9 『第二の切り裂きジャックの噂』

その頃、石和武士は中央研究フロアにて、『鍵』<sup>キ</sup>のデータ収集を行っていた。細胞と細胞の融合は順調で、完全融合は目前だ。しかし、最後の最後まで気は抜けない。万が一の事態に備え、取るだけのデータは取っておく。そうすれば、不測の事態に対処しやすい。少なくとも、何もしないよりはマシである。

実験体のカプセルに直結した大型コンピューターのコンソールパネルを手慣れた手つきで、叩く。グラフの動きは一定。特になんの異常も見あたらぬ。

「順調過ぎるほど順調ってワケだ。今までの難航が嘘のようだな……こうなると逆に不安になってくる。なんか、取り返しのつかない不備が出るんじゃないかと……」

椅子に寄りかかりながら、独りごちていると、

「そんな心配しているのはあなただけよ」

と、声がした。振り向くとコーヒーの入った紙コップを両手に持った川原奈々恵がいた。

「川原博士、なんでここに？ あっちで、実験体のグラフの観測途中のはずだろ」

「オートにしてあるから、AIが観測してくれてるわよ。特になんの問題もないんだもの、あんなのずっと見てたら、眠くなっちゃう。はい、コレ」

そう言って、手元にあるコーヒーの入ったカップを一つ手渡した。

「悪いな。いくらだ？」

「おごりよ。ま、とはいっても、そこで買った百二十円の安物だけどね」

「サンキュ、安物には安物の良さがあるさ。ん……あちち」

熱い。ふーふーと息を吹きかけ、少しづつ、コーヒーを口に含む。

「しかしまあ、石和くんも相当な心配性ね『鍵<sup>キ</sup>』の完成はもう誰の目にも明らかなのに。ここまで来て、不安を抱えてるヒトはメンバーの中であなたぐらいのものよ。なにか心当たりでもあるの？」

「そういうわけじゃないけどな。事に万全を期したいだけだ。石橋は叩いて渡る性格でね、臆病なんだ」

「べつにそんなに慎重になる必要もないでしょう。いくら『鍵<sup>キ</sup>』が完成したからといって、それはあくまでもプロトタイプに過ぎないんだしね。大量の生体エネルギーを備蓄出来るように改良も加えないといけないし、生体エネルギーを入れる器もまだまだ完成に時間がかかるはず。やることはまだ山ほどあるのよ。そもそもD-I計画の研究には期限は存在しないんだし、焦る必要もないわ。じっくり研究に取り込めばいいのよ」

「べつに焦ってるつもりはないさ。ただ、研究が先に進むのは楽しいからな。計器と睨めっこするのも嫌いじゃない」

「ふうん……本当かしら？」

川原が悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「本当は早く独立したいから、じゃないかしら？」

と、言った。

「……え？」

「この研究が一段落したら、石和くん、自分の研究所を持つんでしよう？ しかも、スポンサーは三ツ葉社。すごいわよね。石和くんの若さで三ツ葉社系列研究所の所長なんて。ものすごい大出世じゃない」

「……何故、その話を？ 誰にも話をしていないはずだが」

訝しげな表情で石和が訊くと、川原はくすくすと笑った。

「壁に目あり、障子に耳ありってね。情報なんて、どこかしら漏れるものよ。あ、でも誤解しないでね。別に調べた訳じゃなく、たまたま耳に入ってきたのよ。いいじゃない、めでたい情報なんだし、いずれみんなにはれるんだから。メンバーのみんなにも話したら？ 祝福してくれるわよ、きっと。戸木原博士には妬まれるかもしれないけど」

「まだ完全な決定じゃないし、口外は現時点で厳禁とされてるんだ。どこから話を聞いたかは知らないが、口外はしないでくれ」  
「くすくす、さて。どうしようかしらね」

川原は悪戯心を含んだ笑みを浮かべ、口に手を当てている。石和は眉を顰めた。

「ヒトの弱みにつけ込んで、脅迫でもする気か？ お前、ぜったい子供の頃、いじめっ子だっただろ」

「失礼ね、そんなことしないわよ。ただ、黙ってる代わりにひとつお願いがあるんだけど」

「知ってるか、川原。そんな条件付けのお願いを脅迫と言うんだぞ」  
「大丈夫だって。そんな大したことじゃないわよ。仕事の帰り道を家まで送ってほしいだけだから」

「……は？」

石和は露骨に眉間に皺を寄せて、川原を睨め付けた。川原は涼しい顔をして。石和の視線を受け流し、人差し指を自分の口にちよんとつけた。

「女性の話は最後まで聞くものよ、石和くん。あのね、いま、あたしの住んでいる辺りって、すごい危険なのよ」

「……危険？ なにが」

川原は石和の右端にある椅子に腰掛け、コーヒーを一口啜り、話し始めた。

「実は今、私の住んでる街で、通り魔殺人が相次いでるのよ。ここ一週間で五人……くらいかしら。殺されてるの。被害者同士の繋がりには特になくて、唯一の共通点はみんな若い女性ってこと。犯人の目星はまったくついてなくて、今日にも次の被害者がでるかもしれない危険な状態、らしいわ」

「ひょっとして……またクラック・ボール絡みの事件か？」

「例の覚醒剤騒動？ うん、どうかしらね。まだ詳しいことは分からないみたいだけど、可能性はあるんじゃないかしら」

クラック・ボールはPCPと特殊なLSDをカクテルした新種のドラッグである。三年ほど前から米国から日本へと流出してきている。

昔のPCPはバッドトリップを起こす確率が高く、不人気のクスリだった。しかし、今回、世間に出回っている、このクラック・ボールは少量の摂取で、強い脳内のセニトロンを過剰放出し、多幸感、他者との共有感が得られる。しかもその効用はコカインよりも強いらしい。学生の小遣いでも買えるほど手頃な価格で裁かれており、若者の中毒者ジャンキーの間で人気の代物だ。

しかし、このクラック・ボールは過剰投与すると、幻覚、錯乱の症状が現れ、凶暴性が増す効用がある。それだけではない。アドレナリンの爆発的な分泌と筋力の増加が対象の肉体を超人にしまうのだ。麻酔効果もあるらしく、筋肉の筋を痛めようが、断裂しようが、構わず肉体を本能のままに酷使し続ける。その力は拳でコンクリートをぶち抜くほどの威力があるらしい。

人格が崩壊し、凶暴性が増した中毒者ジャンキーがその力を使って、暴れ回るのだ。その様はまさに『怪物』そのもの。手のつけようがない。

最近ではその超常能力を目的に暴走族、ヤグザの抗争などで使われている。その他、錯乱した中毒者ジャンキーが無差別猟奇殺人を犯したりとクラック・ボールの被害者は年々拡大の傾向にあった。おそらく、いま川原の言った事件もその類であろう。

しかし、最近そんな猟奇殺人の話を目にしただろうか。ここ最近のニュースを反芻してみるが、そんな事件の話は聞いたこと無いような気が

「あ、ちなみにこの情報、まだ公式発表されていないから、思い出すうとしても無駄だと思うわ。あたしの仲の良い親戚で刑事やってるおじさんがいて、私に注意呼びかけてくれたのよ。情報管制されて

いる話を人にいつちやまずいと思うんだけど、おじさんには感謝が  
しらね。私のこと心配して、規律を破ってくれたんだから。

で、そんな話を聞いたら、家に帰るのが怖くて怖くて仕方がない  
のよ。私の住んでるマンションからそこそこ歩くと、一通りのな  
い道も歩かなきゃいけないわけでしょ？」

「……なるほどな。それで車で研究所に往復している俺に送ってほ  
しいと。そういうことか」

「ええ。石和くんなら家に帰る途中、私の街も通りかかるし、つい  
でに送ってもらえると助かるかなあって」

あははと笑いながら、川原が両手を合わせる。石和は大きくため  
息を吐いて、頭をがりがり掻いた。

「つたく、何かと思えばそんなことか。いいよ、べつに」

「……え？」

石和の言葉を聞いて、川原は両手を合わせたまま、大きく目を見  
開く。

「だから、送ってやる。なんでそこで驚いた顔をするんだ。変なヤ  
ツだな」

「え？ あの、だって断られるかなあ、って思ってた。本当に？」

「いや、だってその話、本当だろ？ 冗談ぽくお願いしてるが、お  
前の目を見れば分かる。本当に怯えてる。怖いんだろ？」

「  
」  
「だったら、別にそんな秘密を口外しない条件とか、そんなことを  
言わないで、直接頼めばいい。本気で困ってる同僚の頼みを無下に  
断るほど、俺は腐ってない」

川原は頬を赤く染めながら、視線を逸らし、嘆息した。

「……まったく。どうして私は石和くと早く出会わなかったのかしらね……」

「は？」

「なんでもないわ。ありがと、石和くん。恩に着るわ」

そう言って、川原は笑った。

「どうせ通り道のついでだ。さほど手間じゃない。しかし、物騒な話だな。一週間に五人か。そんなわずかな間にそれだけ被害者が出ていて、報道管制が敷かれているのも妙な話だな。逆に派手に情報公開して、周囲に注意を呼びかけた方がいいんじゃないか？」

「私もそう思うけど、それは警察機関が決めることだからねえ。相当残虐な殺り口らしいから、パニックになるのおそれるのかしら」  
「どんなやり口なんだ、それ？」

「もうすぐ昼時、話聞いたら食欲無くすわよ、石和くん。正に猟奇殺人、私も詳細聞いたときは気分が悪くなったわ」

手を口に当てながら、くすくすと笑う川原。いつものいたずらっぽい笑み。嫌な予感がして、石和は手を振った。

「そうか、じゃあ、やめとこう」

「それで、その殺し方なんだけどね」

「おい……」

「くすくす。石和くんにも同じ気持ち味わってもらおうと思ってこういうのは分かち合わないかね」

そんなものは分かち合いたくない。それに普通、分かち合うのは喜びの方じゃないのだろうか。

「まあまあ、石和くんも興味ある話だと思うから。切り裂きジャックって知ってるわよね。19世紀末、イギリスで起きた『連続殺事

件の起源』、『劇場型犯罪の始まり』とも言われている事件。五人もの女性を鋭利な刃物で喉をかききり、内蔵を摘出なんかを行った残虐な異常者よ。今回の事件は手口が似ていることから、署内では『第二の切り裂きジャック』とか言われて騒がれてるみたい。まあ、当時殺害されたのはほとんどが四十代の中年女性だったのに対し、今回起きてる事件はみんな若い女性みただけ。それがまた、現代の切り裂き魔って感じがするわね」

「……………」

気のせいだろうか。川原の表情が妙に生き生きとしているような気がする。こういった生々しい話が好きなのだろうか。それとも嫌がらせの類として、好きなのか。

おそらくは両方だろう。

「犯行は夜人氣のない、路地で単独の女性を狙って行われてるわ。武器は鋭利な刃物で首と腹を切断。傷の切り口から見て、相当切れ味の鋭い刃物らしいわ。首の頸動脈を一撃で切断。その後に腹部を切り裂いて、その遺体を死ぬまでもてあそぶ。まさに猟奇殺人ね。しかも未だに犯人のめどが全く立っていない。第二のジャック・ザ・リッパーと呼ばれるのも、頷けるわよね」

「しかし、あれは指紋鑑定、DNA鑑定などが存在しなかったからこそ、犯人を割り出せなかつたのであつて、現在はそうじゃないだろう。殺人現場には多くの証拠が残っていて、現在の科学技術ではそれを細かく検証出来るはずだ。特に日本はこういった現場検証から犯人を割り出すエキスパートが揃っているのに。それでも犯人は見つからないのか？」

「見つからないみたいね。場所もあたしの住む街以外では起きていない。範囲が限られているのにも関わらず、未だ犯人が捕まらないつてのは相当な曲者よね」



「手慣れているってことか」

それだと、麻薬絡みの話ではないのかもしれない。クラック・ポールを投与した人間がそんな冷静な判断が出来るとは思えない。

「おじさんの見解だと医者か、それに似た技術を持つモノじゃないかって言ってたわ。被害者の傷の断面が綺麗すぎるんだって」

川原の言葉に石和は首を傾げた。

「？ それは鋭い刃物を使ったんだから、当然のことじゃないのか」  
「切れ味と傷は別なのよ。例えば快楽を目的とした殺人者でも、ナイフの使いに長けているとは限らないでしょう？ 普通は傷に感情がある。刺すことを躊躇したことが分かる『ためらい傷』や、急所以外の所にも精神的に追い込むために傷を造ったり。被害者も動かない人形じゃないんだし、抵抗もするでしょう？」

「けど、この殺人犯にはそういった無駄な感情がなくて、ヒトを殺すために最低限の手順で、被害者を死に追い込んでるんだって……特殊訓練でも受けた人か、あるいは肉体の解体に熟知した外科医か、それに準ずるなにか。そんなことをおじさんは言っていたわ」

「……いずれにしろ、それだけ手慣れた快楽殺人者なら次の被害者が出る可能性が高いな。本気で気をつけたほうがいい、川原」

「そのつもりよ。だから石和くんに頼んだわけ。よろしくね！」  
「……………」

そうお願いする川原の瞳はすでに怯えの色はなく、いつもの悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

しかし、人助けする代わりに得られるモノが、気分が悪くなりそ

うな殺人鬼の話とは随分と割の合わない。川原らしいといえ、川原らしいのだが。ともかく、しばらくは賑やかな帰宅が続きそうだな、と石和は苦笑した。

10 「紅い眼、赤い炎」第二段階（了）

夜の大通りを車で疾走する。道路は軽い混雑状況にあった。渋滞というほどひどい状況ではないが、事あることにブレーキをかけ、ひたすら動くのを待つことになる。

思うとおりのスピードで進めない苛立ちに石和武士は軽く眉を潜め、舌打ちした。

まあ、いい。考え事をするには丁度いいかもしれない

石和は片手で煙草に火をつけ、紫煙を肺に溜め込みながら、深い思考の世界に潜る。

『……意外な結果がたよ、石和くん』

佐々木が神妙な顔をして、戸木原の調査報告を行ってきたとき、頭が真つ白になった。

戸木原淳。過去の改竄にこことは違う性格。そして、強固なセキュリティをかけられたデータ・ベース。

胡散臭いなんて、レベルではない。

肺に溜め込んだ紫煙と共にため息を吐く。中でも一番驚いたのは戸木原淳の性格と周りの評価』だった。

彼が有能な研究員で、彼を尊敬し、従う研究員が何人もいる。まるでここの評価とは真逆ではないか。にわかには信じられない。彼が戸木原淳本人ではない可能性だってある。有能な研究員である戸

木原淳を名乗って、この研究室に潜り込んだのかもしれない。

しかし、川上がハックしたデータ・ベースには顔写真も登録されており、それは間違いなく本人のものだったらしい。指紋登録もされており、改竄された可能性は低い。

それに三ツ葉社の研究機関で行っているこの『D-I計画』はどの研究機関よりも機密性の高い重要なプロジェクトだ。そのリーダーにすり替わるうなど、不可能に近い。

だとすると、考えられるのはひとつ。擬態だ。

あえて、無能を晒すような真似をし、他の研究員達の信用を失わせ、戸木原淳という存在を軽く扱うようにしたのだ。

しかし、そうする理由が分からない。有能で人望が厚い方がなにかと有利だと思っただが……そうしなければならぬなにかがあるのだろうか？

額に手を当てかぶりを振る。なにを考えても、それはあくまでも推測でしかない。何かが起こっている訳でもない。考えても結論など、出る訳などないのだ。

ただ 嫌な予感は今一日で格段に増し、不安と懸念は膨れ上がる一方だ。

戸木原淳。軽い気持ちで始めた身辺調査であったが、もう少し深いところまで調べてみる必要があるそうだ。

「けほっ……けほ、けほっ……」

と。咳き込む声が聞こえてきて、石和は我に返った。隣

の助手席では川原奈々恵が口元を覆いながら、咳き込んでいる。

「ああ。すまん。煙かったか」

言いながら、車の空気清浄機を稼働し、煙草の煙を外に逃がす。すると、川原は半眼でじつとこちらを睨め付けてきた。

「……石和くんて、本当に失礼なヒトよね」

「なんだ？ もう平気だろう」

「そうじゃなくて。隣にあたしがいようがいまいがおかまいなし。この密閉空間の中で煙草の煙充滿させて、一人の世界に浸っちゃうんだもの。女性をないがしろにすると、ばちがあたるわよ？」

石和は苦笑した。そういえば今日は一人ではなかったのだ。

「いや。悪い。車の運転中だと考え事がよくまとまるから、いつものクセでつい、な」

川原ははあ、と嘆息した。

「いいわよ、別に。こっちも送ってもらってる身だし、文句はいえないしね。でも、意外。石和くんって煙草吸ってたのね」

「家や研究所内ではあまり吸わないからな。プライベートで一人の時、つまりこの車にいるとき以外はほとんど吸わないかも知れないな」

「やっぱり家族の前では吸いにくいのかしら」

「ああ。千恵子はともかく、子供がいるからな。昔はそれなりにヘビースモーカーだったが、すっかり落ちついてしまったって訳だ」

「千恵子と子供達、ね。石和くんも一人前のお父さんしてるのね。なんか可愛いわ」

「男に可愛いとかいうな」

露骨に眉を潜めて言うが、川原は楽しそうな笑みを浮かべている。川原は身を乗り出し、

「ねね、奥さんとの馴れ初めとか、聞いていい？　どんな出会いでどんな結婚をしたのかとか」

「お前なあ。暇に飢えた主婦じゃあるまいし、ゴシップ感覚でそんなことを聞くのは止めてくれ」

「いいじゃない。そもそも女はそういう会話が好きなのよ。年齢に関係なくね。それにあたし達のグループで結婚してるのって石和くんだけじゃない？　興味を惹くのはごく自然のことだと思っただけど。まだあたしの家まで時間かかりそうだし、今後の参考の為に是非聞かせてほしいわ」

「……何の参考だ、何の。べつに語るほどのことは何もない。千恵子とは子供の頃からの遊び仲間の一人で、気付いたら告白されて、気付いたら結婚して、ごく普通に子供が出来て父親になった。それだけだ」

「幼なじみとの結婚かあ……いいわよね。長い想いを遂げたっていうのがロマンティックな感じがして」

「期待にそえなくて申し訳ないが、そんな少女漫画みたいなものじゃない。付き合い始める前まで、そんな感情はほとんどなかった。それ以前は家族的な感覚が強かったからな。自然な流れだよ、ごく平凡な」

「それは石和くん主体の感覚でしょう？　奥さんはそうじゃないんじゃないかしら。さっき奥さんに『告白された』って言ってたし」「う……」

さりげなく流したつもりだったが、しっかり川原の耳には残っていたようだ。仕方がない。石和は少しだけ千恵子の話をすることに

した。

「……あいつは小学校四年の頃、俺の学校に転校してきたんだが、病弱で人付き合いが苦手なやつでな。周りからいじめられてたんだ。それである事件をきっかけにそのいじめから助けてやったことがあった。それから、アイツとはよくしゃべるようになってな。アイツ……千恵子とはそれからの付き合いだ。

小学校、中学校、高校、大学は違ったが　ずっとずっと一緒だった。だからかな、俺はアイツの気持ちに気付かなかった。あまりにも一緒にいるのが当たり前すぎて、家族的な好意以外なものが入っていることに全然気付かなかったんだ、七年前、直接告白される、その時までな。千恵子はずっと俺のことを好いていてくれた。小学校の頃から、ずっとな」

「……………」  
「俺の初恋はべつの女性だ。初めて付き合ったのもまた違う女性。千恵子はその間、ずっと変わらず俺に接してくれた。いや……ちがうな。変わらずいられるように接してみせてくれていたんだ。だからこそ、俺は彼女の想いに気付かなかったんだがな」

「悪い男だった訳ね。無自覚のうちに奥さんを悲しませてたんだから」

「……否定はしない。千恵子に告白されたとき、もう一人幼なじみがいたんだが、ソイツにも言われたよ。『お前、それはずっと二股かけてきたのと変わらない。無自覚つてのは罪のひとつだ』ってな」  
「それって……俗にいう三角関係？」

なにやら川原の瞳と声が好奇心に満ちている。それで石和は我に返った。しゃべりすぎた。七年前の『あの時の事件』と航のことは自分でも思い出したくない。

「……………まあ、詳しいことは想像に任せる。最終的に俺は千恵子を選

び、彼女と結婚した。後悔はしてない。今となってはなるべくしてなつた感じがするしな」

「のろけられちゃったわね。あゝあ、聞かなきゃ良かった」

「おいおい。自分から話をさせていおいてソレはないだろ……川原も結婚すればいい。时期的にも頃合いだろ？」

そう言うと、川原がじっと見つめてくる。

「……川原？」

石和が訝しげに名前を呼ぶと、川原は視線を逸らし、おどけたように両手を広げて、溜息を吐いた。

「……頃合い過ぎて、行き遅れの領域よ。こういう仕事をしてるとどうしてもね。出会いがないのよ。大学もこつち系だとろくな男いなかったし。あゝあ、どっかい男転がってないかしらね」

「佐々木なんかどうだ？ アイツはいい奴だし、信頼できる男だ。俺が保証する」

「佐々木くんかあ……うゝん、誠実そうではあるんだけど」

と。その時だった。

突如、ずずん、という鈍い音が響き渡り、車がかたがたと揺れた。

「きゃっ！ な……なに？」

「激しい振動だ……地震か？」

前方を見ると、信号が青なのに車が進んでいない。ブレーキをかけ、周囲を見渡す。先の十字路で何か騒ぎが起きているようだ。



「なんだ、いつたい……交通事故か？」  
「石和くん……見て！ あれ！」

川原の指さす先にオレンジ色の光が見える。爛々と輝くその光。  
夜の闇夜を照らす禍々しい光。車が 燃えているのだ。

「繰り返す！ 犯人は武装解除して、直ちに投降しなさい！ さもなくば、発砲する！ 繰り返す！ 犯人は 』

「う、う、撃て撃て撃てえっ！ ああああ人は人間じゃない！ ば化け物だ！ 警告なんか意味あるもんか！ 拳銃じゃ駄目だ！ 重火器の使用要請を出せ！」

『馬鹿者っ！ このままじゃパニックになる恐れがある！ 私含む五人は犯人を包囲する。ニューナンブ・改を出せ！ 他の警官はこの辺りの車をすべて退避させる！ 非常線を張ってこの一画を封鎖するんだ！ それと本部へ機動隊の出動要請を！ 急げ！』

十字路の中央から、幾多もの声が聞こえてくる。警察だろうか。なにかトラブルが起きてるらしい。混乱して統率が取れていないようだ。

どくん、と胸が大きく脈動する。なんだろうか。ひどく、嫌な感じがする。

石和は、エンジンをかけたままブレーキをロックし、車を降りた。

「ちよっ、ちよっ」と石和くん。どこいくのよ

「ちよっ」と様子を見てくる。すぐ戻る

川原にそう言って、騒ぎの起きている中心へと向かう。幸い非常線はまだ張られていないようだ。十字路の前には人だかりが出来ている。

「な……なんだよ、アレ。映画の撮影か、なんかかよ？」

「ねえ、なんかやばくない？ 逃げた方がいいんじゃない？」

「うわっ……撃った！ 撃ったぞ、いま！」

「え、ウソウソ！ 立ってるわよ！ ヤバイクスリでもやってるんじゃないの？」

人混みを掻き分け、進んでゆく。一体、なにが起きているのか。どく、どく、どく、どく、どく。

進むたびに心臓の脈動が早まり、汗が噴き出す。なんなのだろうか、この感覚は。訳が分からない。

「下がって！ 下がってください！ 今から非常線を張ります！ 大変危険ですので、この場より直ちに退避してください！ まもなく誘導が始まりますので、こちらの指示に従って、落ち着いて動いてください！」

「あっ……そのお前！ これ以上近くな！ 危険だと言ってるだろうが！」

制止する警官の声は石和には聞こえない。前に進んでいく。密集した人混みの中に身体を押し込み、先へ先へ、進む。押し込む隙間がないと、石和は両手で強引に人混みを掻き分け、強引に道を造る。周囲から罵声が飛ぶが、やはり石和の耳には届かない。

妙な焦燥感は身体中に行き渡り、何が起こっているか。それしか思考出来なくなっていた。やがて、人混みは途切れ 視界が開けた。

「な……なんだ、これは」

呆然として、石和は呻いた。辺り一面が オレンジ色に染まっていた。

車が爆発し、漏れたガソリンに引火したのだろう。十字路の中心が真っ赤に燃えている。中央には、巨漢の男が立っていた。身長は190cmほどであろうか。ぼろぼろになったワイシャツにあちこちが破れたズボン。

所々に血のような染みがこびり付いている。浮浪者だろうか。顔は影になっていて石和の位置からはよく見えない。

その巨漢の男を五人の警官が扇状に男を取り囲み、拳銃を構えている。

否。すでに発砲していた。ぱんぱんぱん、と乾いた音が響く。男と警官達の感覚はほんの1.5メートル程度。じりじりと後ずさりながら、警官達は発砲を続ける。警官は常に拳銃を所持しているが、実際使用することはほとんどない。せいぜいが威嚇である。

その拳銃をこつも連射するなど、相手はよほどの凶悪犯なのか。また、クラック・ボールジャンキーを服用した中毒者が暴れているのだろうか。

警官たちの顔は皆、一様に青ざめている。中には歯をかちかちと震わせている者もいて、身体も緊張して硬直している。あれでは撃つても、的に当たるかどうか怪しいものだ。幸いなことに標的との距離は短い。でたらめな方向に飛ぶ銃弾もあったが、七割の銃弾は男の身体に命中していた。

腰、胸、腹、頭。様々な場所に弾丸が命中し、男の身体が幾度も跳ねる。

だが、それだけだった。男は倒れない。それどころか、効いた様子すらない。身体に叩き込まれた筈の銃弾が、アスファルトの上へとからからと音を立てて転がり落ちる。

「な……」

効いている、効いていないのレベルではなかった。男の肌に銃創は皆無。貫通はおるか、体内に食い込むこともなく、すべての銃弾を弾き返していた。

違う。これはクラック・ボールでは、ない。確かにクラック・ボールを服用すれば、アドレナリンの異常分泌による力の増大や、麻酔効果などで、一時的に超常能力を発揮することは可能だ。

だが、これは違う。そういう問題ではない。まるきり銃弾を受け付けない肉体を持つ人間など存在するはずがない。

男が動いた。銃弾の雨がなんの障害とならないのであれば。阻む物などなにもないも同然だ。五人の警官の一人に近づき、右手を横一文字に振った。手にはナイフなどの殺傷武器はなにもない。そもそも警官に触れてすら、いない。ただ、男の手刀が何も無い空間を薙いだだけ。

にも関わらず　　ずるり、と。警官の首がずれた。

「え？」

首がずれた警官も何が起きたかも分からず。目をぱちくりとさせていた。そのまま、胴と首は完全に分離し、首がごろりと転がった。

ひゅん、ひゅん、ひゅん。

続けて、男は幾度も手刀で空を薙ぐ。今度は三度連続で、無造作に。

ごろん、ごろん、ごろん。

更にみつつの警官の首が鈍い音を立てて地面に落ちた。木から落ちた果実の様に。首のひとつはそのままころころと転がり、人混みの前で止まった。そして、首が無くなった警官達の膝が落ちて、そのまま跪いた。

ぶしゃあ、と。四つの警官の身体から血が勢いよく吹き出し、辺り一面を赤く紅く染め上げてゆく。それはまるで、公園にある噴水のような

「う……うわあああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああっ！！」  
「きやあああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああっ！！」

絶叫が辺り一面に鳴り響く。それは警官と一般人の混じり合った恐怖の悲鳴。

それが　　混乱と、殺戮の始まりだった。

すでに連携も抵抗もなにもない。一人残った警官が、一目散に逃げ出した。すでに警官という立場など関係ない。ひとつの個として、ひとつの生物として、死から逃れ、生を渴望する。そして、その想いは伝染する。警官から、市民へと。最悪の事態だった。

避難誘導を待つ暇もなく　人々はそこから逃げ出した。周りの者を押しつけ、踏みつぶし、逃げる。車に乗っていたモノは車を捨てて、逃げる。そこまで頭の働かない者は後ろに後続車がいるのにもかかわらず、車をバックさせる。

車同士の衝突。そして、炎上。爆発。連鎖反応。オレンジ色の光が広がってゆく。たちまちのうち、平和だった十字路の通りは戦場と化した。

男は逃げる者を殺さない。目の前にある障害を排除してゆくだけ。それが車であろうが、ヒトであろうが、関係ない。手も触れず、不可思議な『力』を持って、切断し、壊し、己の行く道を開拓してゆく。その破壊と進行は誰にも止められない。

「そんな……そんな馬鹿な……」

そんな混乱の最中、石和はその場に立ちつくしていた。大きく目を見開いて、ただ、呆然とその男を見つめる。

恐怖で身体がすくんだ訳ではない。自分が危機的状況であることを感じてない訳でもない。目の前にあるその事実が、ただひたすら信じられなかった。

影で先程まで見えなかった顔。その瞳。街頭の近くに歩みを進め、その顔が白日の下に晒される。

「そんな……馬鹿な……」

同じ言葉をもう一度繰り返し、再びその男の姿形を確認する。

赤い、紅い不気味なほどに鮮やかな瞳。

それはまるで宝石のような輝きを放つルビー状の瞳。

それはヒトではあらざる眼。

そして、その顔　　一度しか会ったことのない顔だが、決して忘れない印象を持つその男。風貌は変わり果てていたが、間違いない。

新井武之博士だった。

第三段階 『人類進化促進塾』 1 「バベル（混乱）の塔」

彼 天より降りる

エホバ 天をたれてくだりたもう

御足のもと暗きことはなはだし

エホバくだりて かの人々の建つる街と塔を見たまえり

いざ我らくだり

かしこにて彼らの言葉を乱し互いに言葉を通ずることを得ざらし  
めん

ゆえにその名は バベルと呼ぶる。

禍なるかなバビロン そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり



少しずつ、少しずつ、少しずつ。

電流を流し、流し、流し、ナノマシンを与え、与え、与え、細胞を変質させてゆく。

『頭頂葉とうちやうけつへナノマシン注入開始。精神レベル60?。汚染レベル0・2上昇。特殊能力スキル87……88……89まで上昇

』

十六平方メートルほどある部屋だった。白い壁にクリーム色の床飾り気のない無機質なベットに少女が横たわっている。まだ幼い子供で、年齢は五歳ぐらいだろうか。もつとも、この部屋の処置で五歳という年齢は年長の部類に入る。

未発達でないと意味がない。この研究は脳が完全に発達してからでは遅すぎるのだ。

少女は眠っている。眼は閉じていて、意識はない。全身麻酔が完全に効いている状態だ。

ヘルメットにも似た機械を、少女の頭頂部から目元までをすっぽりと覆っている。そこから剥き出しとなった無数のコードとチュー

ブが長々と伸びており、ベットから壁に繋がっている。

『精神レベル62% 特殊能力スキル……92を超えました。す、すごい……ここまで高レベルで覚醒した能力者は初めてです』

『力の種類は……変換憑依か。ナノマシンと電子チップを埋め込めば、自分の意志であらゆる電子機器に干渉することが出来るようになる。いや……ここまでのレベルになると自分の意識を量子データに変換することも可能だ。大型コンピュータに直結させて、彼女を観測者に仕立て上げれば、仮想空間の構築も現実のものになるかもしれない』

『……適正値はどうなんだ？』

『<sup>ゲート</sup>門としての適正値ですか？ こちらは……あまり芳しくはないですねえ。64.5%。0.3上昇しただけです。初期適正値としてはかなり高い方だったんですけどね。仕方ないので、<sup>ネオ・チャイルド</sup>能力者としてのスキルを伸ばした方が』

『ナノマシンを注入しろ。今度はレベル2でだ』

『え？』

『聞こえなかったのか。レベル2だ』

『む、無茶です！ 精神レベルが六十を超えてるんですよ？ これ以上汚染レベルが上がれば、人格に障害が発生する可能性があります！ 下手をすれば命だって』

『<sup>ネオ・チャイルド</sup>そ、そうですね！ せっかく能力者としてのスキルが高レベルで覚醒したのに。いいじゃないですか。今回は諦めて、次の素体に期待すれば』

『勘違いするな。現在、欲しているのは<sup>ネオ・チャイルド</sup>能力者ではない、<sup>ゲート</sup>門の適格者だ。戸木原博士からも言われているだろう。出来るだけ急いでほしいと』

『……』

『私は戸木原博士の期待に応えたい。報いたいのだ。その為には多少の無茶もやむを得まい』

『し、しかし!』

『心配するな。この子は孤児で、両親はいない。万が一の事態が起きたとしても、いつものようなトラブルは起きん。これ以上は言わんぞ。レベル2だ。始めろ』

『りよ、了解』

少しずつ、少しずつ、少しずつ。

電流を流し、流し、流し、ナノマシンを与え、与え、与え、細胞を変質させてゆく。

回路を開く。それはヒトの脳に眠る未知の回路。それを探り、無理矢理道を造って繋ぐ。代償は欠落した人格か。破損した肉体か。代償の代わりに得たものは？

適正値は何???

## 2 「疑惑と困惑」

「まさかあの騒ぎに君たちが居合わせていたとは…災難だったね、石和武士くん」

三ツ葉社本部ビル 最上階 専務室。

無駄に広い部屋の中、三ツ葉社の重役である、島村一彦しまむらひがすひし専務がデスクのソファに鎮座していた。歳は五十代後半で、顔には年相応の深い皺が刻まれている。丸眼鏡越しに見えるその眼は生き生きとしており、鋭い。世界でも上位に位置する巨大複合企業本社の専務だ。判断力はその役職に恥じぬほどの確で、発言権も相当高い大物だ。今までも幾度か話したことがあるが、未だ島村専務を目の辺りにすると緊張する。

視線をそらし、窓に目を向けると陽光が揺らぎ、石和の顔を照らした。眉を顰め、眼を細める。光がやけにまぶしく感じる。カーテン越しに入ってくる光なので光量自体は大したことないと思うのだが。普段、心地よい陽の光が現在はずいぶん。昨晚、なかなか寝付けなかったせいだろう。

あんな光景を目の当たりにした直後にゆっくりなど、寝られるわけがない。

特に、我々D-1計画に携わる者にとって、あれは悪夢以外の何者でもない。

「……で、あの騒ぎに巻き込まれて、その後どうしたのだね？」

相当大きな騒ぎになり、被害者も出たと聞いているが。君や石和くんには何か問題や怪我などはなかったのかね？」

島村専務の問いに石和は背筋を伸ばし、静かにかぶりを振った。

「いえ、大丈夫です。現場は最初、混乱状況に陥りましたが、すぐに警察と機動隊の増援が到着し、非常線を張って民間人を誘導していましたので。私の車も誘導に従って、現場を離れ、川原を送り、その後帰宅しました」

「うむ。怪我がなくてなによりだった。川原博士のその後の様子は？」

「笑顔を浮かべてましたが、顔は青ざめてました。やはりショックは大きかった様です。車で待機しているように言っておいたのですが、外へ出てしまい、殺害現場を目の当たりにしてしまったので」

「……まあ、しばらくはゆっくりと休むことだな。二人とも身体は大事にしてくれたまえ。川原くんも石和くんも我が社にとって、大事な存在なのだからね。特に石和くん、君にはこの先、頑張ってもらわねばならない。丁度D-I計画の第一段階も一息つきそうな時期だ。休暇でも取って、ゆっくりと休むのもいいかもしれない。なんならよい温泉宿を紹介してあげよう」

「どうもありがとうございます」

そう言って頭を下げる。しかし、休暇を取るつもりになどなれない。なれるはずがない。この件についてはつきりさせておかないと、このモヤモヤ感はずっと残ることになるだろう。

「島村専務、少し聞きたいのですが、あの事件についてはなににご存知ですか？」

「ん？ 特殊なドラッグ、クラック・ボールを投与したと思われる男が十字路で車を爆破。死者十二名、重軽傷者四十三名の被害を

起こした事件。ここ最近の事件では一番の大惨事だ。その後、犯人は新しい包囲網が出来る前に十字路から路地裏へと逃走。五百メートルぐらいは追撃したらしいが、その後完全に目標を消失。<sup>ロスト</sup>目下捜索中らしいがね、まだ居場所は判明してないそうだ。私もこの位の情報しか知らない。早く犯人が捕まるといいが」

「島村専務は犯人の事を知ってますか？」

「いや、詳しくは。そもそも、犯人の身元は判明してないと聞いている」

「私は犯人の顔を見ました。この目ではつきりと」

そう告げて、島村専務を顔をきつ、と睨み据える。島村専務に動揺は微塵も見受けられない。もつとも相手は世界上位に位置する巨大複合企業の専務だ。ポーカーフェイスなどお手のものだろう。何も知らぬ顔をしているからといって、本当に知らないとは限らない。石和は続けた。

「一度、このビルの中でお会いしたことがあります。アレは『新井武之』博士です。間違いありません」

「新井武之博士というと 出張中に行方不明になったという…彼のことかね」

「はい」

島村は顎に手を当て、

「ふむ…何かの勘違いではないかね。新井博士は剛胆な性格だが、人柄はまっすぐで間違ったことを嫌う人物だった。犯人はPCPを投与している薬物中毒者らしいが、彼が薬物に手を出して、犯罪を犯すなど あり得ないと思うのだが」

「その通りです。新井博士とは私も一度話ただけですが、芯の強い、真っ直ぐな印象を受けました。どんな状況下でもクスリに逃

げるようなことはないと思われず。しかし、第三者の介入があったとすれば、話はまた別です」

「と、いうと?」

「そのままの意味です。第三者に強制的にクスリを投与されたとすれば、依存症となり自我が崩壊しても不思議ではないはずですよ。いえ、それ以前の問題として、あれは本当にクラック・ボールなのでしょう。クラック・ボールは確かに幻覚、麻酔、アドレナリンの過剰分泌など、様々な症状が発生しますが、昨夜の男はヒトとしての規格をはるかに超えた能力を持ってました。そもそも刃物も何も使わず、首を切り落とせる人間がいるとお思いませんか?」

「……………」

「単刀直入に言います、誰かが新井博士の肉体に細胞を投与した可能性があります」

言った。オブラートに包むことなく、思ったことをありのまま。

しかし、それでも島村専務の表情は微動だにしない。石和は更に続けた。

「新井博士の眼を私は見ました。紅いルビー状の眼球。あれは『<sup>レッドルビー</sup>赤眼』です。細胞を生物に投与すると、細胞が浸食し、肉体の変態と同時に眼球を紅く鮮やかな色に変質させます。変態の形体は様々ですが、眼球が紅く染まることに例外はありません。」

何者かに細胞を投与されたとすれば、新井博士が見せた特異体質、それに手刀のみで車や人の身体を切り裂いた、通常ではあり得ない超現象もすべて説明がつきます」

島村専務はふう、と溜息を軽く吐き、ずれた丸眼鏡をくい、と人差し指で戻した。

「つまり D-I 計画スタッフの誰かが 細胞を新井博士に投与して、その結果が昨日の事件だと、そう言いたい訳だな？」

「はい、残念ながら」

「……あり得ないよ、石和くん」

そう言つて、島村専務は大きく首を左右に振つた。

「君の言葉を信用しないという訳ではない。だが、その見解は間違いだ。理由が聞きたいかね？」

詰め寄りた衝動に駆られたが、両拳をぎゅっと握りしめ、堪える。

「……是非」

「まず第一に見間違えの可能性だ。昨日、現場は混乱状況にあつた。しかも夜。それに付け加え、危険な状況下にあつたのなら、非常線は張られていたはずだ。至近距離で視認することは不可能に近い」

「私が嘘をついていると？」

「そうは言っていない。だから、見間違えだと言つたのだ。体格と顔が新井博士に似ていたのを石和くんが彼だと誤認し、それが真実だと思い込んでしまった。しかも、石和くん、君と新井博士の面識は只の一度きり。間違えても不思議ではないと言ふことだ」

「いえ、私はたしかに」

「こちらの話はまだ続いているぞ、石和くん。ヒトの話は最後まで聞くものだ。第二に犯人の眼が『赤眼』レッドルビーであつた話だ。これも先と同じ理由で片づけられる。見間違い いや、錯覚と言つた方がいいか。辺りの車が爆発炎上したとなれば、辺り一面は大火事、視界は赤だ。光の反射で彼の眼が赤く染まって見えたのだよ」

「確かに見ました。あれは見間違いなどはありません」



「ヒトの眼は自分で信じているほど、確かなものではないよ。特に自分の意識が混乱、錯乱しているときには認識は狂いやすい。それらしく見えたものを、『そう見えた』と確信しているだけだ。それに『赤眼』<sup>レッドレ</sup>は深い紅だ。深紅はその色の性質上、闇に溶けやすい。至近距離でならともかく、離れた場所でそれを確認するのは難しい。違うかね？」

「う……」

「そして、第三に 石和くん、もし先の犯人に細胞が投与されていたら仮定して、本当にそんなことが可能なかね？」

「え？」

…… 島村専務の言っていることが分からない。D-I計画のことは逐一、島村専務には報告されている筈だ。細胞によって、身体が変態を起こし、紅い眼になることも、その後、驚異的な能力を持つことも。よつのは研究所での惨事を含め、すべて、知っている筈。

こちらが困惑をしているのを見て、島村はふうと嘆息し、

「意味が分からないかね？ ではこう言い換えよう。いま、君がD-I計画で成そうとしていることはなにかね？」

「っ！」

石和は大きく目を見開いて、はつとした。それでようやく、島村の言わんとしていることが分かった。

「気付いたかね？ 自分が矛盾したことを言ってるのに。そう、細胞を体内に投与すれば確かに超常能力を持った生物が出来あがる。昨日のような事件を一人で起こすことも可能だろう。しかし、細胞を体内に投与すると、細胞に浸食され、別の情報に書き換えられてしまう。言ってしまうえばこの世に存在しない、化け物にな

つてしまうということだ。それは例え、ヒトに使用としたとしても例外ではないだろう。だが、昨日の犯人は化け物だったかね？ ヒト以外の形をしていたのかね？ この時点で君の推測は破綻しているのだよ」

「いえ、細胞との融合は順調で、完成は目前です。現在の実験体にも何の変調は見られないので、可能の筈です」

「だが、完成はしていない。君自身も分かって言っているはずだ。少なくとも、現時点でそれを行うのは不可能だと。それとも君たち以外に、そんなことができる人物が他にいないとでも？ 不可能だろう、技術的な問題もあるが、実験体は君たちの元にある。瞬間物質<sup>テレポ</sup>転送装置も実働しているのはこの一台しかない。誰かがそれを持ち出さない限り、他の人間に精製は不可能だ」

「……では昨日のアレは一体なんだというのですか？」

「分からん。現時点では推測もしようがない。しかし、それほどでもないことだよ、石和くん。アレは新井博士ではない。アレは『赤眼<sup>レッドセル</sup>』ではない。アレは細胞を投与したものではない。私たちが

との因果関係は何一つ無い。すなわち無関係であるということだ。従って、この件を追求する必要はない」

「――」

「今日はもう帰らたまえ。他に休暇申請があれば、受け付ける。繰り返すが、君は我が社にとって大事な存在だ。十分に休養を取り、D-I計画の遂行に全力を注いでほしい。以上だ」

### 3 「慟哭」

エレベーターが下る。一人、その中で石和武士は拳を強く握りしめ、歯がみしていた。

だんっ、と壁を強く叩き、エレベーターがぐらぐらと揺れる。

苛立つ。収穫など何一つ得られなかったふがいなさに心がかき乱される。

「見間違いだと？ D-1計画の担当者である俺が見間違えるとも思っているのか？ あれは間違いなく 細胞によるものだ。他にあんな超常能力を持った怪物がこの世に存在するわけがない！ ふざけるなっ！」

一人、叫ぶ。島村専務はこの事件に関わっているかどうかは分からないが。あれが 細胞によるものであるならば、なにかしらの事情を知っている筈なのだ。

しかし、島村専務の言葉を何一つ否定できなかったのも事実だった。そして、なにも反論できなかった。悔しいが、現状の『見た』という事実だけでは、反論することができない。状況証拠ばかりで、確かなものは何一つ無いのだから。

戸木原博士のことといい、自分の知らないところでいったい何が起きているのか。

嫌な予感がする。

なにか取り返しがつかないことが進んでいるような……そんな気

がする。

とにかく、昨日のことを本格的に調べてみよう。また佐々木と相談して、必要な川上にも助力を仰ぐ。それから今後の動きを検討しよう。

そんなことを考えながら、地下に到着したエレベーターから降りると、意外な人物がそこにいた。

佐々木勇二郎だった。駐車を支える太い柱の一つに寄りかかり、俯いている。エレベーターから降りてきた音に反応して顔を上げると、すぐさまこちらの存在に気付き、石和の元へ駆け寄って来る。

「お疲れ様、石和くん」

「佐々木、お前どうしてこんな所に？ 勤務時間中じゃないのか？」

そう言って、佐々木の姿を見る。仕事時に着用している白衣ではない、スーツ姿だった。

「急用があるって言って、今日は早引けした。あとは川上くんに任せである」

「お、お前なあ……無茶苦茶だぞ。大した用もなしに早引けなんて、D-I計画の担当者がやることじゃないぞ」

「無茶苦茶なのは自分でも承知している。でも、これは僕にとって大事なことだよ、石和くん……気になって仕方がないんだ」

鋭く告げて、佐々木はじつと石和の眼を見据える。

……眼が充血している。あまり睡眠を取っていないようだ。親友である新井博士のことが心配で仕方がないのだろう。

いや、それだけではない。佐々木の眼には暗い光がある。激しい葛藤の中、何かを決意したような、そんな眼だ。よくない傾向だった。よほどの事がない限り、佐々木が仕事を放棄して、早引けすることなどなかったというのに。

（昨日、佐々木に電話をしたのはまずかったか……ショックが大きすぎた）

頭を掻いて、嘆息する。しかし、遅かれ早かれ知ることだ。ショックを受けるなら早い方がいい。それに事情を一通り知った相談相手は石和には必要だった。未だ混乱していて、これからどうするべきか、頭の中でまとまらないのだ。

「分かったよ、佐々木。でも、ここでこの話は……まずい」

そう言って、石和は周囲を見回した。駐車場に出入りしている社員の姿が目につく。この話を他人に聞かれるのはまずい。石和は歩き出した。行く先は自分の車。車の中なら話も聞かれないう。佐々木は無言で頷き、石和の後を追った。

石和は自分の車の前に来るとリモコンキーでロックを外し、すぐさま運転席へ乗り込んだ。続けて、佐々木が助手席に座る。

石和はボックスの中から煙草の入った箱を取り出した。煙草を加え、火をつける。紫煙を肺に入れ、心地よい感覚に身を委ねる。

「お前も吸うか？」

「いや……僕は吸わない。吸えないんだ」

「そっぴやそっぴや……」

「で、どうだったんだい？ 島村専務との話は」

石和は俯きながら、小さくかぶりを振った。

「完全敗北だ。すべて俺の気のせい、錯覚だと。あれは百戦錬磨の強者だな。反論の言葉をことごとく吸い取られていく感じがした。しかもあの威圧感。なにも反論出来なかったし、なにも聞き出すことが出来なかった。話を聞いているうちに本当に見間違えたただけなんじゃないかって、錯覚しそうになったよ」

「石和くん自身はどう思ってるんだい？ 本当に錯覚だと？」

「馬鹿いえ。あれは見間違いなんかじゃない。間違はなくあれは新井武之博士本人だ。そして、あの眼は『赤眼』<sup>レッドルビ</sup>だ。俺はD-1計画の担当者の一人だぞ。見間違えるはずなんか ない」

「そう、か……やっぱり……そうなんだ」

佐々木は顔に手を当てて、身体をぶるぶると震わせ始めた。歯を食いしばり、目からは涙がぼろぼろとこぼれ落ちてゆく。

「……佐々木？」

「へ、変だと思っていたんだ。あれだけ家族を大切にしていた新井さんが、何の連絡もなしに消息を絶つなんて……あり得ないって……なにかあったんだって つく……」

「でも、信じたくなかったんだ。どうしても無事である望みを捨てきれなかった。だ、だから、僕は……っ！ つく、なんで……そんなことが出来るんだらう？ ひどい……ひどすぎるよ！ あの人の細胞を……あ、新井さん……っ。うつつ……」

あとはもう言葉にならなかった。佐々木は涙を拭うことすらせず、泣き始めた。石和はなにも言わなかった。佐々木の顔を見ることも

しない。紫煙を肺に吸い込み、吐き出す。灰が尽きたら、新しい煙草を啜え、火をつける。その作業を単調に繰り返す。石と新井の面識はただ一度だけ。昨日の光景を見て驚愕があったが、悲しみはない。

佐々木の気持ちは分かるが、痛みは分かち合えない。それが分かると言うのはただの同情であり、偽善だ。同情は優しさではない。

だから、石和は告げる。冷たく、無慈悲に。佐々木がやろうとしていることを止めなくてはならない。

「止めておけ」

淡々とした声で。石和はそう言った。

「……え？」

「佐々木が考えていること、分かるぞ。新井さんの家族に今回のことを打ち上げ、この事を世間に公表するつもりだろう？ それをきっかけに今回の主犯を捜し出し、三ツ葉社そのものを訴えようとしている。違うか？」

佐々木は俯いたまま何も言わなかった。どうやら凶星の様だ。石和は続けた。

「止めておけ。真相はお前の心に留めておくだけにしろ。いいじゃないか、行方不明のまま。真実を語っても心の傷が広がるだけだ。それに 細胞の存在は極秘扱いだ。どんな理由があろうと外部に漏らすことは許されない。こんなことは言わなくても分かっているはずだろ？ 第一、真相を話したところで、信じちゃくれないさ。別次元の生物の存在なんか」

「……石和くん、それ 本気で言ってるのかい？」

「本気もなにも俺は正しいことを言っているだけだ。お前のやろうとしていることは無謀な特攻だ。勝ち目も何もない、新井さんの家族を巻き込んだ自己満足だ。そんな行為に意味なんかあるわけがない」

「っ！」

佐々木は激昂して、石和の胸ぐらを掴んだ。もの凄い形相だった。普段の温厚な顔は影を潜め、強く歯を食いしばり、血走った目で石和を睨み付けている。こんな佐々木の姿を見るのは初めてだった。

「君になにがわかるっ！ 君にっ……僕の気持ちかわかるのか！」

新井さんは親友だった！ 最高に大事な僕の友達だったんだ！ その友達が実験体に使われたんだぞ！ 君にも分かっているはずだ。

細胞に浸食された生物は二度と元には戻れない！ 絶対にだ！ それを分かっているながら、こんな非道な行いをしたヒトを許せるかい？ 許せるわけないだろうっ！ せめて仇を討ってあげなきゃ、新井さんは浮かばれないんだっ！」

「だから、それが自己満足だっって言ってるんだ！ 落ち着いてよく考えてみる！ 新井博士の家族が真相を知ったら、どうなるか！

無事に済むと思っっているのか？ 昨夜の事件であれだけ被害をだしたのにも関わらず、平然と真相を揉み消すような連中だぞ。確実になんらかの手段で、口封じをされる。残酷なようだが、現在の状況を維持するのが一番安全なんだよ！」

「あ……」

「そして、それはお前もだ。そんな真似をすればお前もただじゃ済まない。D-I計画の担当者であることなんて関係ない。いや、逆だ。状況を理解しているからこそ、真っ先に狙われる。そして、下手すれば新井博士の二の舞だ。細胞を強制投与されて同じ道を辿ることになるかもしれない。これが無謀な特攻でなくてなんだというん







#### 4 「クロとグレー」

それから三十分ほどが経過し、佐々木の嗚咽が弱まってきた。少し落ち着いてきたらしい。石和の胸ぐらから手を放し、そのまま佐々木は車から降りた。背中を向け、そのまま駐車をしようと歩みを進める。

「佐々木？」

「ごめん……今日は帰るよ。ひとりで色々考えたいんだ」

「そうか……」

「……大丈夫。もう馬鹿なことは考えない。ありがとう、石和くん。君がいてくれてよかった」

そう言って。佐々木は去っていった。石和は車の天井を仰ぎながら、煙草を啜え、火をつけた。今日はこれで何本目の煙草になるだろうか。すでに煙草のストックが尽きかけていた。これほどハイペースで吸うのは久しぶりのことだった。

「……冷静に理論的に考えろ、か。よく言うよな、俺も。ったく。ヒトの事なんて言えないクセに」

自嘲気味に一人笑う。島村専務に真っ正面から向かっていった行為自体、冷静な行為とはいえないだろう。自分も佐々木と同じだ。頭に血が昇って我を忘れていたのだ。

佐々木を諭す行為で、ようやく頭が冷えた感じだった。人の振り見て我が振り直せ。正に現在の自分の為にある言葉だった。

「少し、状況を頭の中で整理してみるか…」

煙草の紫煙を肺にたっぷり溜め込みながら、石和は思考の底に潜り込んだ。

新井武之博士は自分の研究成果をD-I計画に使うことをひどく反対していた。自分が望んだ形でなく、欠点を利用した利用法だ。納得いかないのも当然のことだろう。

そして、半年前。ちょうどこのD-I計画が設立された頃、新井博士は失踪した。

島根のある研究会に参加することになってたらしい。家を出たとき、島根にも訪れず、家にも戻ることなく。彼は失踪してしまった。

家族となにかわだかまりがあった訳ではない。むしろ、家族仲は良好で、幸せな家庭を築いていたと聞く。佐々木が聞くところによると、他になにか問題があったわけではなさそうだ。

「と、なるとやはり、失踪はブラフか。真相は揉み消されていたって訳だ。昨晚の事件のように」

唇を笑みの形に歪めて、独りごちる。

新井博士は失踪したのではない。失踪させられていたのだ。そう考えればしつくりと来る。しかし、何のために？

たとえ訴えを起こそうが、物質瞬間転送装置テレポルト・ゲートの所有権は三ツ葉社にある。新井博士が裁判で勝てる見込みは万に一つもない。世間か

ら抹消させられなければならない事は何一つとしてない。だとすると、それ以外の理由があるはず。それが分からない。一体、新井博士の身に何があったのか？ それを調べる必要があるだろう。

次に新井博士に 細胞を投与した犯人だ。

異世界生命体<sup>㊦</sup> の存在は極秘中の極秘だ。

決して、関係者以外の眼には触れさせてはいけない。使用なんてもつてのほかだ。

例え三ツ葉社の上層部でさえ、この計画に関わっていない役員はの閲覧すら許可されない。それほど扱いが困難なものだ。つまり、細胞を持ち出せる人間は限られるのだ。

佐々木勇二郎、川原奈々恵、川上弘幸、石和武士、戸木原淳。

が保管されている部屋に入れるのはこの五人のみ。単純に考えれば簡単だ。この五人の中の誰かが犯人と言うことになる。

自分と佐々木は除外するとして、残りの候補は三人。

川原奈々恵。ヒトの反応を見て楽しむという、困った性格の持ち主だが、基本的に悪い女性ではない……と思う。軽口を叩くが、内面では殺人鬼の話に怯え、頼ってくるなどの可愛い一面も見せている。とてもではないが、人体に 細胞を投与して研究を行うような性格の持ち主には見えない。

もつとも、川原と出会って半年しか経っていないし、自分の知らない黒い部分があるかもしれないので断定はできない。特に女性は表と裏を使い分ける人種だ。疑いたくはないが、グレーと言うことにしておく。

川上弘幸。彼に関して、知ることはほとんどない。川上はとにかく寡黙な男で仕事の必要な話以外はとにかく口にしない。常に無表情なので感情も読みにくい。

コンピュータープログラマーのエキスパートで、D計画に関するプログラミングの主軸はすべて彼が受け持っている。異世界生命体の考察も鋭く的確な意見を発することがあり、D計画に多大な貢献をしてきたといってもいい。プライベートに関しての情報はゼロ。強制侵入技術ハッキングに長けていたり、私生活が怪しげな男ではある。ただ、D計画の担当者には敬意を払っている。特に佐々木には尊敬の念を抱いているようだ。佐々木と新井博士が仲の良かったことは知っているし、彼が新井博士を破滅させる動機もあるかどうか疑わしい。これもグレーということにしておく。

戸木原淳。D計画の主任研究員。主任を務めるから、どんな男かと思ってみれば、無能を絵に描いた様な男だった。傲慢でわがままで、すぐに苛つき、ヒトに当たる。この男はヒトを不愉快にするために生まれてきたのではないだろうか。

科学者の性格が偏るのはよくあることだが、それにしても彼は酷い。

D計画において、有益な事をしたのはグループの配置くらいなもので、他は皆無。まったく役に立っていない。そのくせ自尊心だけは強く、周囲へ自分のアピールを忘れない。

小さな男だ。

この三人の中では一番、可能性が低いかもしれない。ヒトに細胞を投与する勇気など彼にはない。出来るわけがない。

「と、一昨日までの俺なら、そう思っていたらうな」

溜息を吐く。佐々木から話を聞いた現在となつては、戸木原が一番疑わしい。過去の改竄、管理コンピューターに攻勢防壁を仕込む徹底的な情報管制。D-I計画研究所とは異なる働きと評価。

彼には不審な点多すぎる。性格がこと異なる事実にも驚かされた。自分たちに無能である擬態をしていたとするなら、今までの評価などなんのアテにもならない。

得体のしれないものを感じる彼なら　　やるかもしれない。

しかし、怪しいだけだ。

何故、そんなことをするのか。どうやってそんな事を行ったのか。その部分がすっぱり抜けている。

先程、島村専務に言われたが、現状の技術で、細胞とヒトを融合させた統一体を造るのは不可能だ。ようやく猿と細胞の統一体が完成しそうな状況なのだ。細胞をヒトに植え付け、統一体として、完成させたものが存在する筈がない。

我々よりも研究が進んでいる輩がいるのだろうか？

現在、戸木原の研究グループにはよつのは研究所にいた研究員がいると、佐々木は言っていた。戸木原が細胞を持ち出し、我々の管轄外のグループで研究を進めていたとすれば、充分可能性はある。

が、そう仮定したとしても、やはり分からない。何のためにヒトと細胞を融合させる必要があるのか。そして、何故その統一体を外へ解放したのか。そんなことをすれば、被害者が増えて騒ぎが増すだけだろうに

「っ！」

石和は大きく目を見開いて、両拳でハンドルをだんっ！、と叩いた。

「ひょっとして……まさか……」

石和の頭の中である想像が浮かんだ。その考えに体中から冷や汗が吹き出す。最悪だ。

この想像は極めつけ過ぎる。まさかとは思つ。だが、そう考えればすべての辻褄は合う。合ってしまう。

「い、いや……いくらなんでもそれだけの為にそこまでする人間がいるとは思えない……俺の考えすぎだ」

自分にそう言い聞かせる。石和は額に手を当て、その考えを振り払った。

と。その時、石和の持つ携帯電話が振動し、思考の底から浮上した。着信だ。画像には『川原奈々恵』の名前が出ている。

『もしもし、石和くん？ あたし、あたし』

外線ボタンを押し、携帯を耳元に当てると、馴れ馴れしい、気軽な声が鼓膜に響いた。

「……むかし流行<sup>で</sup>った『オレオレ詐欺』じゃないんだから、ちゃんと名乗れ」

『川原よ、川原奈々恵。番号登録してあるはずでしょう？ あ、奥さんにばれるといけないから名前登録してないのかしら？』



「お前は俺の愛人か……？」

身体力が抜ける。昨夜、青ざめた顔をした状態で別れたので心配していたのが、いつもの調子で拍子抜けである。どうも、こちらが考えている以上にタフな女性のようにだ。

「で、何の用だ、川原。お前は今日、昨夜の一件で臨時の休みをもらった筈だろ？」

「それは石和くんも同じでしょう。石和くん、いま空いてる？ よかったらちよつと出てきてほしいんだけど」

「唐突だな、何の用だ？」

「昨夜、従兄弟に刑事のおじさんがいるって言ったでしょう？ 昨夜、おじさんもあの現場にいたらしくて。で、石和くんのことを話したら、ちよつと昨日のことについて話が聞きたいんですって」

石和は眉を潜め、

「事情聴取か？ それは勘弁してほしいんだが」

と、一人かぶりを振りながら、言った。昔やったことがある。同じ事を何度も繰り返し聞かれ、何時間も拘束され、精神疲労が凄まじかったのを思い出す。

『うっん、そんな堅苦しいものじゃなくて、あくまでもプライベートなものだって。その代わり昨日のことで聞きたいことがあるなら口外しないのを条件で色々教えてあげるって』

「おいおい、そういうのは民間人に漏らすのはまずいんじゃないのか？ お前のおじさんって一体どんな刑事なんだよ」

『くすくす、聞いて驚きなさい。泣く子も黙る、華の捜査一課の刑事よ』

「捜査一課って……まさか警視庁捜査一課のことか？」  
『そ。しかも警部よ。偉いんだから』

……外部に情報を漏らす捜査一課の警部というのはどうなんだろうか。色々問題があるような気がする。

『で、石和くん。どうする？ 嫌だったら、べつに断ってもいいと思うけど』

「いや、行くよ。昨日の話は俺も興味があるからな」

『わかった、叔父さんに伝える。勿論、あたしも行くから。で、今から指定する場所に来てほしいんだけど……大丈夫かしら？』

「いま、車の中にいるからいつでも動ける。三ツ葉社本社のビルの下駐車場にいる」

『本社ビル？ 石和くん、今日仕事休みでしょう。なんでそんなところにいるのよ？』

「ちょっと野暮用だ。で、どこにいけばいいんだ？ あまり遠くでないと思うんだけど」

『ううん、そこからだったら、三十分くらいで着くと思うわ。場所は……ええと、石和くんの携帯に地図と場所を転送するわ。変な場所と思うかも知れないけど……気にしないでね？』

「……は？」

石和は携帯に転送してきた画像を見て、首を捻った。気になる。気にならない訳がない。

携帯の画像は一面が青色に包まれており、中心には大きなロゴでこう書かれていた。

『ようこそ！ 君嶋水族館へ！』



## 5 「青の道標」 (前編)

最近の水族館は透明な海底トンネルを設け、実際海に住んでいる生き物たちをライブで見ることの出来る、大規模なものがあると聞く。しかし、川原の指定してきたのは昔からあるごく普通の水族館で、平日のせいか客も少ない。そんな場所だった。

「水族館なんて何年ぶりだろうな……昔、千恵子と付き合ってたときに来た以来か」

きよろきよろと辺りを眺めながら、青く薄暗いフロアを歩く。エリアは全部で三つに分かれていて、川原の指定したのは二つめの『海の楽園エリア』だった。

様々な海洋生物が泳ぐ水槽を眺めながら、目的地へと向かう。こうして見ていると、普段みない変わった魚や生物が多いので、自然と目があちこちに行き、興味を引かれる。

右の水槽にはアカシユモクザメ。左の水槽にはメガネモチノウオ。バンドイルカの水槽には女性客が集まっている。

「こりゃあ、勝義とことみが喜びそうだな……」

奥に進んでゆくと、道が開け、巨大なトンネル型の水槽があった。中に入ると視界一面が蒼に包まれた。分厚い強化ガラスで造られた透明トンネルの外で数百、いや、数千単位の魚の群れがゆらゆらと泳いでいる。この場所にいると海底から魚たちを見上げているような錯覚を起こしそうだ。

「なかなか壮観だろう?」

と、石和の横から声がした。トーンの低い男の声だった。横を見やるとくたびれたコートと古めいた帽子を被った中年の男が立っていた。

「全長48m。3500尾以上の魚がいるトンネル水槽だ。海底トンネルを用いた巨大な水族館には遠く及ばんがね。だが、ワシはこのトンネル水槽が好きだ。こうやって見上げると圧倒されるだろう? 陸で生きるワシにはなんとも不思議な感覚だ。そうは思わんかね」

歳は六十前後くらいだろうか。眼は少したれ目気味で、深く刻まれた皺が目立つ。帽子からはみ出た髪の毛は八割方白く染まっており、年齢を感じさせる。

石和は中年の言葉に頷く。

「確かに……圧倒されますね。水族館なんて来たのは久々なもので益々そう感じます。しかし、この場所になにか意味があったりするのでしょうか」

中年男はにやりと笑い、

「なあに、意味なんか何一つ無い。ワシはこの場所が好きでな。仕事の合間など頻繁に来てるのだよ。ここは落ち着くし、よく考えがまとまるのでな。ひとつ意味があるとすれば、ここに君を呼び出したのは仕事ではなく、あくまでもワシ個人の都合で来てもらったことをアピールする為である、とでも言っておこうか。こう言えば満

足かね？ 石和武士くん」

「ええ。あくまでもプライベートという訳ですね」

「そういうことだ」

「……二人とも挨拶も自己紹介もなしに初対面のヒトとよく普通に会話できるわね」

中年男の後ろから、ひょこっと、見慣れた女性が顔を出した。川原だった。石和と中年男のやりとりを目をぱちくりとさせながら、髪を掻き上げている。ラフなジャケットに少し短めのスカート。普段、三ツ葉社での制服と白衣姿しか見たことがなかったので、妙に新鮮な感じがした。

「川原。ここにいたのか」

「紹介するわね、石和くん。芳田源<sup>よしだげん</sup>。私のおじさんよ。変なトコに呼び出してごめんなさいね。ここで会うって言うてきかなくて」

「年寄りの我が儘に付き合うのは若者の義務だろう。それにデートする絶好の機会を造ってあげたと思えば、ワシに感謝する気にもなるだろう？ なあ、奈々恵嬢ちゃん」

「あ、あのね。さつきも言ったでしょう。石和くんは結婚してしまっても、子供もいるのよ？ デートとか言ったら、石和くんがドン引きするわよ、間違いなく」

「ほう？ その割には嬢ちゃんの服、普段よりも気合が入ってるよ。うな気がするが。水族館へ行くって言うて、心なしか楽しそうな顔をしていた様に見えたのはワシの気のせいだったか。それは悪かった」

「お……叔父さん。もう知らないっ！」

顔を真っ赤に染めて、川原はトンネルの奥へ行ってしまった。

「はっはっはっ、からかいすぎてしまったか。少し意地が悪かった

かもしれん」

珍しい光景だった。いつもヒトをからかって楽しんでる川原が逆にからかわれている。川原の性格はこの中年男譲りなのだろうか。それならば、川原がかなわないのも納得できる。

「……追わなくていいんですか？」

「なに、お前さんと二人で話がしたかったのだからな、むしろ丁度いい。嬢ちゃんの機嫌取りはその後で考えましょう。改めて、自己紹介しよう。警視庁捜査一課警部の芳田源五郎だ。わざわざ呼び出して済まなかったな、若いの」

「ごつい手を差し出して来たので、石和は握り返して、それに応える。」

「いえ。いい気分転換になります。俺は三ツ葉社第五研究所所属の石和武士です。どうぞよろしく」

『うむ』と芳田は頷いた。

「さて。年寄りの長話に付き合わせるのもなんだからな。とっとと本題の話に入るとしよう。石和武士くん、お前さんはあの現場に居合わせていたらしいな」

「はい。川原といっしょに」

「では単刀直入に聞こう。お前さんは犯人ホシの顔を見たかね？ 見た姿はお前さんの知っている人物だったりしないかね？」

本当に単刀直入だった。警察相手にどう答えればいいのか。返答こたへに窮する。

「奈々恵嬢ちゃんからお前さんの昨夜の様子は聞いた。嬢ちゃんがお前さんが帰ってこないのを心配し、車を離れた。ようやく探し出したお前さんは我を忘れて立ちつくしていたとな。あの混乱の最中、我を忘れる程のショックを受けるのは二つ。恐怖のあまり混乱していたのか。とんでもないものをみてしまい、状況を忘れたのか。ワシの推測では後者と出ているのだが」

「鋭い観察眼、恐れ入ります」

石和の言葉に芳田はにやりと笑う。警視庁捜査一課警部の名は伊達じゃないようだ。

「勘違いしないでほしいのだが、これは尋問でもなければ、事情聴取でもない。答えたくなければ、答えなくても構わんし、ワシも追求はしない。そして、君から情報を得たとしてもそれを調査にどうこう使うつもりはないのだ。あくまでもここだけの話だ。それを約束しよう」

石和は訝しげに目を細めた。そんな筈はない。警察が有力な情報を得たら、動かない訳がない。そんなことを言われて、信用するのは子供くらいなものだ。

「ワシの話を信用できないのは分かる。無論それには理由はある、少し特殊のな。それは後で話そう。が、先の質問の答えを聞かないことには話が始まらないのでな。もし、ここで首を横に振れば、お前さんにとって大事な話を聞き逃すことになるだろう。まあ、判断はお前さんの意志に任せるが……どうかね？」

「……………」

どうやら選択の余地はないようだ。しばしの沈黙の後、石和は深々と頷いた。



「はい…俺はその人物を知ってます。あれは間違いなく三ツ葉社第三研究所所属していた、新井武之博士の姿でした」

「ふむ…やはりか」

石和の答えを聞くと、顎に手を当て、眼を細めた。鋭い眼だった。ヒトの在り方は眼を見れば分かると言うが、芳田の眼は数々の修羅場を乗り越えてきたことのある、それだ。なにもかも見透かしたような。眼の光。見ていると吸い込まれそう、そんな戦慄を覚える。こちらの様子に気付いたのか、芳田はいきなり表情を弛め、

「どうだ。少し回って見ないか？」

と、言った。

「え？」

「せっかく、水族館に来たんだ。見て回らないと、魚たち（こいつら）に失礼つてもものだろう。そうは思わないか」

そう言つて、芳田は歩き出した。石和は黙つて、芳田の後をついてゆく。長い、長い水槽トンネルを二人で歩く。

「……さて、どこから話したもののか。石和くん、お前さんは巻で起きている『連続猟奇殺人事件』のことは知っているかね？」

「はい、一般公開はされていない事件ですよ」

「うむ。だが、こういつた事件の場合、情報の規制は無意味でもある。次々と被害者が出れば、自然と話が広がってゆくからな。街に繰り出す人々はほとんどこの『第二の切り裂きジャック』と呼ばれる存在を知っておつた。なんとも上の連中の無能なことよ。それならば、情報を公開し、注意を呼びかける方がまだ被害者を防げると

「このに」

芳田は苦笑した。

「ワシはこの事件を追っていた。だが、無差別殺人というのはどうにも犯人が捕まえ辛い。被害者の因果関係から、犯人を割り出すことが出来ないからな。現場にそれなりの目撃証言、証拠になるものが残ってればまだ尻尾は掴めるが、それすらない。正直、捜査は難航しておった。だから、ワシはここで人海戦術をとることにした」

「犯人が犯行を犯しそうな場所にヒトを配置して、ひたすら張り込む……ですか？」

「さすが科学者だな、頭の回転が早い。その通りだ。犯人の出現するのは決まって人気のない路地裏だった。その条件に合う場所を割り出し、一カ所につき二人の人員をつけ、数十カ所に配置した。そして、張り込みを開始してから四日後、ようやく獲物が網にかかった。一つの路地裏で若い少女に襲いかかるうとしていた男を目撃。二人の刑事が目標を取り押さえ、確保することに成功した」

「じゃあ、連続猟奇殺人の犯人はすでに捕まっていたんですね」

芳田は眉を潜め、無言でかぶりを振った。

「ところがそう上手くはいかなかった。突如として、犯人を確保した刑事たちの連絡が途絶えたのだ。ワシらは慌てて現場へ急行した。そこでワシらが見たのは、返り血を浴びて真っ赤に染まった犯人、惨殺された刑事二人、それに少女の遺体だった。大きな誤算だったのは、犯人を確保するには刑事二人程度の人員では全然足りなかったことだ。格闘術が長けているとか、そういうレベルの話ではない、あれは怪物だった。比喻ではない。少なくともワシにあれは人間には見えなかった」

「っー」

どくん、と。石和の心臓の鼓動が大きく跳ねた。「まさか」と思っていた最悪の想像が現実のものだったと確信する

「気付いたかの？ そう、お前さんが十字路で見た男と連続猟奇殺人の犯人は同一人物だ。増援を呼び、確保しようとした結果、あそこまで被害が拡大してしまった。あれだけの人数を動員しておきながら、確保できなかった。相手はたった一人であるのにも関わらず、だ。正直、あれは警察の手に余る。クラック・ボールを服用していたからだと言うが、いくら筋力が増加しようが、人間があれほどの力を発揮できるとは思えんのだ」

間違いない。新井武之博士に投与されたのは細胞だ。そして、続けて路上で新井博士が犯行を犯し続ける理由。それが分かった気がする。三つの事柄が石和の脳裏に駆けめぐる。

ひとつ。川上が言っていた説明。

「結論から、言う。先ほど川原博士が持っていた『水の水晶』アクア・クリスタルの正体は生き物が持つ生体エネルギーを極限にまで圧縮して、結晶化したものだ」

「あ　っ！　い、いきなり話の核心に!？」

「生体エネルギーを……結晶化したもの？　あの石が？」

「そう。『成体』となった実験体は研究員を捕獲して、食料としてその身体を蹂躪したそうだが、研究員の身体をそのまま喰らったのではない。研究員の体内にある生体エネルギーを搾り取り、それを物質化させたのだ」

ふたつ。川原の言っていた『第二の切り裂きジャックの』台詞

『犯行は夜人気のない、路地で単独の女性を狙って行われてるわ。武器は鋭利な刃物で首と腹を切断。傷の切り口から見て、相当切れ味の鋭い刃物らしいわ。首の頸動脈を一撃で切断。その後に腹部を切り裂いて、その遺体を死ぬまでもてあそぶ。まさに猟奇殺人ね。しかも未だに犯人のめどが全く立っていない。第二のジャック・ザ・リップーと呼ばれるのも、頷けるわよね』

そして、みつつめ。戸木原の言っていた言葉

『ははは、そうだろう、そうだろう。だが、それだけではないぞ。先程、エネルギーを生体エネルギーに変換する必要があると、言っていたが、そんなモノは必要ない。

あの『水の水晶』アクア・クリスタルだが、あれは莫大なエネルギーの結晶なのだろう？ あれを上手く分析し、生体エネルギーを蓄積できる素体を『鍵』とは別に造ってやるのだ。つまり、生きたエネルギーの貯蔵庫だよ。そして、それを上手く『鍵』とつなぎ合わせることが出来れば

その三つの言葉が頭の中で一つに繋がる。

どうして生きたまま、被害者の臓器を抉るような真似をしていたのか。

快樂殺人？ 『成体』となった新井博士にそんな意志があるはずがない。あるのは異世界生命体アルファの名残である凄まじい闘争本能だけだ。

そう これは無差別殺人ではない。厳密に言えば狩り。獲物を捕獲し、水の水晶を結晶化するために新井博士は街を徘徊していた

のだ。そして、それをやらせたのが、戸木原だとしたら。その目的はおそらく

（あの野郎……正気か。第二段階の素体を造るため、民間人を殺害して生体エネルギーを集めまくっているっていうのか！）

ぎり、と歯がみし、両拳を強く握りしめる。その様子を冷たい目で芳田が眺めていた。こちらの反応を見て、何かを探っているのだろうか。石和もその視線に気付いていたが、平静を保てない。困惑と憤怒と憤り。頭の中で様々な感情が混ざり合い、感情を抑えることができない。

しかし、芳田は追求してこなかった。その話は単なる前振りだと言わんばかりに。まったく別のことを口にしてきた。

## 5 「青の道標」 (後編)

「お前さんは人類進化促進塾じんるいしんかそくしんじゅくという施設を知っているかね？」

「え……？」

「ヒトには何かしら秀でた『才能』がひとつは存在する。絵が上手かったり、音感が優れていたり、運動神経がよかったりと、ヒトは何かしらの特技を持ち、生まれてくる。その才能を幼少期のうちに発見し、それを脳への刺激、特殊なカリキュラムによって、数倍に引き延ばす。エリートを人工的に造る機関だ」

「それが……なにか？」

「半年前、新井武之博士が失踪する前、最後に目撃された場所がその施設なのだよ。そして、その時いつしよにいた人物は戸木原淳。君のいる研究所の主任研究員だ」

「な」

石和は大きく目を見開いた。

「半年前、捜査一課うちの部署で、行方不明となった新井武之博士の行方を捜しておった。新井博士は地位も名誉もある人物だから。失踪は事件性のある特別家出人扱いとなり、警察内でも本格的な捜索が行われた。島根県の出張先でいなくなったと聞いていたが、島根で新井博士を目撃した者が誰もいなかったのだ。目撃証言を辿っていった先、辿り着いた先がそこだった。

話を聞くと、当日、新井博士は人類進化促進塾の中で戸木原淳博士と話し合い……いや、言い争いを行ってたことが分かった。その後は目撃者も何もなし。行方知れずだ。そこから八方ふさがりとなつての。結局、捜査はそこで途絶えてしまった訳だが」

「と、戸木原博士は何故そんなところに？」

「関係者だったからだろう。聞いたところによると、戸木原淳博士は何年前か前、人類進化促進塾の担当研究員の一人だったそうだ。無論、彼の事情聴取も行ったが、『確かにここで新井博士と話し合ってたんですが、その後、施設を出て帰宅しました。そのあとの事は一切分かりません。言い争っていたことに関してはビジネスに関することなので話すことはできません』と、言ってな。

何かあったという目撃証言もなし。施設内も見せてもらつたが、特に怪しいところはなし。証拠不十分で撤退するしかなかった」

……そういえば、川上が調べたデータの中に人類進化促進塾の名前があつたような気がする。そして、戸木原が率いる研究グループの中に人類進化促進塾のメンバーが……いた。

つまり、人類進化促進塾の連中と戸木原が新井博士を拉致し、細胞を投与した、ということなのだろうか？

「ワシもこの失踪事件だけだったら、そこまで深く考えなかつたかもしれない。しかし、昨夜の一件が疑惑を確信に変えた。この戸木原淳という男……間違いなく、新井博士の失踪と変貌に絡んでおる。状況証拠ばかりで、確たる証拠は何もないが。」

お前さんに聞きたかつたのはまさにこの事だ。戸木原淳という男のことをどこまで知っておる？ 奈々恵嬢ちゃんにも話を聞いたんだが、あまり詳しく知らないみたいだったのでな。お前さんに話を聞きたかつたという訳だ」

「……俺も彼について知っていることは川原と同じぐらいのことし

か知りません。同じ同僚をこういうのもなんですが、所内の評判もあまりよくありません。ここ最近はある研究の為にどこかの研究所に籠もっているらしく、連絡が取れません」

「ふむ、嬢ちゃんと一緒、か」

顎に手をあて、ずっと眼を細める。石和は一つだけ付け加えた。

「ただ、最近なにか……得体の知れないものを感じました」

「ほう？」

「根拠はなにも無いんですけど、その嫌な予感……というか。不安になるようなというか。何故か底が計れない感じがして。上手くは言えないんですが」

「お前さん、なかなかよい勘をしているな。刑事に向いてるかもしれないぞ」

芳田はそう言って笑った。そして、石和の肩をぼん、と叩き、

「わざわざこんな所まで済まなかったな、若いの。話は終わりだ」

と、言った。

「え……？ も、もうですか」

拍子抜けする。まだこちらは芳田の有益になるような証言は何一つとして話してない。こちらが部外秘になるような情報を教えてもらったというのに。これでは芳田にとってのメリットがあまりにも少ない。とはいえ石和に、真実を話すことなど出来はしないのだが。

「仕事ではないと言っただろう？ ワシの話聞いてくれただけで充分だ。それにどうせもうすぐ意味も無くなるんでな」



「意味が……なくなる？」

「ああ。昨夜の十字路の騒ぎはな、別の所属が受け継ぎ、捜査一課の管轄では無くなる。ワシらは関係なくなり、動けなくなるという訳だ」

「仕方がない。ワシらはあれだけの署員を動員しておきながらも、犯人を確保出来なかったんだからの。戸木原をしょっぴいて尋問でも行いたかったんだが……まあ、あとは後続に任せるしかない。どんな連中が引き継ぐかは知らんがな」

……後続など、きつとしない。昨日の一件は何者かによって肝心な部分はすべて揉み消されていた。だとすれば警察機関にも同様の圧力をかけ、すべてを抹消するつもりではないのだろうか。そしてそれを芳田は知っている。そんな気がした。しかし

「なんで俺なんですか？ あなたと俺は初対面の筈です。そして、いま話したことは川原にすら話してないことでしょう。でなければ、川原をわざわざ避けて話す必要ありませんから。そんな重要なことをどうして？」

「やはり、鋭い洞察力を持つとるな……捜査一課に来んか？ ワシが推薦してやるぞ」

芳田は笑いながら、何度も肩をぼんぼんと叩いた。

「……簡単なことだ。お前さんは奈々恵嬢ちゃんにとっての騎士<sup>ナイト</sup>だからだ」

「え……ええ？」

よく分からない芳田の答えに石和は困惑した。

「連れは他界、子供もないワシにとって、奈々恵嬢ちゃんは大事な大事な宝なのだよ。ワシは嬢ちゃんのことを実の娘の様に想っている。戸木原淳が本当に危険きわまりない男だったとして、嬢ちゃんが同じ研究所で働いていることに不安を感じるのは当然なことだろう。事実を知り、万が一の為に護ってくれるものが要だ。だから、お前さんに話した」

「だからといって、初対面の人間にそれを託すのは軽率な気がします」

「刑事とはヒトを『観察する』のが商売みたいなモノでな、長年やってると短い時間で、その人物を本質を見極められるようになる。初対面など関係ない。奈々恵嬢ちゃんからお前さんのことは色々聞いとるしの。お前さんの本質は理解したつもりだ」

そう言って、芳田は石和の右手に何かをぎゅっと押し込んだ。手を開くと、千円札が二枚入っていた。

「この入場料だ。わざわざ来てもらったんだから、この位は払わんとな。取っておいてくれ」

芳田は背を向けて、出口に向かって歩き出した。

「先に帰る。奈々恵の嬢ちゃんにはそう伝えといてくれ」

「あ……」

「お前さんが今日得た情報をどう使おうが、それは自由だ。公にしなければそれでいい。何かの行動を起こすのも、見て見ぬふりをするのも逃げるのもいいだろう。だが、そのときは奈々恵嬢ちゃんのことにも気にかけてやってくれ……嬢ちゃんが危なくなった時は、助けてやってほしい。そして、ワシらが『使える状況』になったら、躊躇いなく呼んでくれ……ワシの願いはそれだけだ」

石和はなにか言葉をかけようとしたが、芳田の姿はもう見えない。行ってしまった。

右手に握らされた千円札二枚を見つめる。その合間には小さなメモ用紙が挟まれていた。

「……あのヒト、滅茶苦茶だな……」

メモの内容を見て石和は苦笑した。情報と道標を与えることで、自分が行えなくなった捜査をこちらに託したのだ。自分の大切な川原の護衛も付け加えて。本人の意志も関係なく、一方的に。とんでもない中年狸だった。

このメモに書かれたことが何を意味するのか。書かれた文面では何を意味するのは分からない。が、行ってみるしかないだろう。

「あれ……石和くん一人？ 源叔父さんは？」

入れ替わりに近い形で川原が戻ってきた。石和が一人なのを不思議に思い、きよろきよろと辺りを見回す。石和はメモとお札をポケットの中にねじ込み、答えた。

「先に帰る。そう伝えるように言われた」

川原は目を丸くして、

「えええっ！？ もう帰っちゃったの？ 石和くんわざわざこんな所まで呼び出しておいて。それにあたし叔父さんの車で一緒に来たのに、帰りは一人で帰ってこと？ 叔父さん、滅茶苦茶すぎるわよ、もう。信じられないわ」

呆れ顔で額に手を当てる。

「叔父さん、昔っからああなのよ。ヒトを振り回すというか、かき乱すというか。しかもヒトの困った反応を見て楽しむクセがあるみたいだから、質が悪いのよねえ」

……それはお前も一緒だろう。反射的に突っ込みを入れそうになったが、堪える。かなりの似たもの同士だった。長く生きている分、芳田の方がヒトをからかうスキルは上の様だが。

「でも、なかなか面白い話が聞けたから、来た甲斐はあった。ありがとう、川原、助かったよ」

川原は首を傾げた。

「？　なんで石和くんが感謝するのかしら。お礼を言いたいのはこのちのほうなんだけど」

「いや、いいんだ。気にしないでくれ」

「?????」

不思議そうな顔を浮かべる。推測通り、芳田は川原には事情を話していないようだ。ならば、それでいい。こんな話を知っても、川原に不安と疑惑を植え付けるだけだ。だったら、なにも知らない方がいい。

「で、石和くん、もうこれで用事は終わりでしょう。せっかく水族館に来て、もう帰るつてのもあまりにも勿体ないと思うし……良かつたら一緒に回らない？」

「別に構わないぞ。川原も足が無くなったみたいだし、良ければ帰りも送っていいこう」

一方的な約束ではあるが、『川原を護ってくれ』と頼まれたのだ。

送っていく位はしたほうがいいだろう。すると、川上が半眼でこちらを見ながら、口元に手を当て、

「ヤケに優しいわね。ひよっとして下心あり？ 送り狼は勘弁してね？」

「あのな……」

「くすくす、冗談よ、冗談」

いたずらっぽい笑顔を浮かべる川原。石和は大きく溜息をついた。

「じゃあ、少し見て回るか。どこから見ようか？」

川原は中央に表示されているエリアマップを見ながら、口に手を当てる。

「うーん、そうねえ……あ、第一エリアでアザラシのショーやってみるみたい。みてみたいわ」

「了解だ。じゃあ、さっそく」

と、その時、「お父さんっ！」と、快活な声と共に 小さな少年が石和の元に駆け寄ってきた。息子の勝義だった。石和の足にひし、としがみつく。石和は軽く眉を潜めた。

「こら。走ったら駄目だったこの前、注意しただろ。周りの人にぶつかって怪我でもさせたら、どうするんだ？ お前も怪我するし、いいこと無いだろ」

「だって、お父さんに早く会いたかったんだもんっ！ おとーさん、みてみて！ さかないっばいだよ、ホラホラ！」

まるで聞いていない。石和は頭を掻きながら、深く嘆息した。相

変わらず、自分の言うことはあまり聞いてくれてないようだ。

「もう……勝義、一人で先に言っちゃ駄目だよ。危ないし、迷子になっただろうするつもり　　あ、武ちゃん」

勝義の後を追って、ことみと千恵子がやってきた。乳母車に乗ったことみが周りの水槽を見ながらきゃっきゃつ、と笑い声を上げている。

「おお、来たか。随分と早かったな」

「うん、電車だとそんなに時間かからなかったし。武ちゃんの間所もGPSで位置を発信してくれたから、迷わずこれだよ。ありがと武ちゃん。もう用事は終わったの……あ」

隣にいる川原に気付いたのか、千恵子の言葉が途切れた。

「あ、あの石和くん……えっと、奥さん？」

困惑気味な表情を浮かべて川原が聞いてくる。

「そっぴや、言っでなかつたな。水族館に来る前、自宅に連絡したら、『僕もいきたい』って勝義のヤツが駄々をこねてな。とりあえずここで話を聞いたら、合流してみんなで水族館を見回ろうってことになったんだ。うちの子供たちは一回も水族館に来たことがなかったし、今日は平日で空いてると思ってな。まあ、家族サービスってヤツだ」

苦笑しながら川原に事情を説明する。

「あ、あの、妻の石和千恵子です。武ちゃ

主人がいつもお

世話になってます」

辿々しい言葉で川原に挨拶し、ぺこりと頭を下げる。

「あ、ご丁寧にどうも。あ、あたしは石和くんと同じ第五研究所で働いている川原奈々恵です。可愛いお子さんですね」

「ど、どうも」

「……………」

「……………」

それきり、二人ともじっと見つめ合い、沈黙する。

「…………？ どうしたんだ、二人とも」

石和はきょとんとして、二人を交互に見る。千恵子は川原をじっと見たまま、石和の着ているスーツの裾をきゅっと握った。

「千恵子？」

「………… タイミングが悪いなあ、もう…………」

川原は俯きながら小さな声でそう呟き、苦笑した。そして、

「ごめんなさい、石和くん。あたしやっぱり帰るわね。用事思い出しちゃった」

と、言った。

「川原？ いきなりどうしたんだ。せつかく来たんだから、一緒に回ろつ。俺の家族と一緒にだからって別に気兼ねする必要はないんだぞ」

「するわよ。家族水入らずでしょ？ あたしは部外者なんだから。石和くんは家族サービスに専念しなさいって」

「だけど、帰りはどうするんだ？」

「まだ明るいから、平気よ。この時間なら例の犯人も出てこないんじゃないかしら。また明日から、お願いするわ。それじゃあね、あたしの騎士さん」

言いながらくすくすと笑って、川原は出口に向かって歩きだした。

「なんだアイツ、変な気を使うことないのに」

「……………」

「千恵子もさつきから何なんだ？ ひよっとして、人見知りしてるのか」

言うておいて、『まさかな』と思った。千恵子は確かに人見知する性格だったが、それはあくまでも子供の頃のことだ。現在の千恵子は人当たりの柔らかい女性として、それなりに人望もある。千恵子は笑顔で首を左右に振った。

「うっん、何でもない……………何でもないの。ごめんね、武ちゃん」

「おさかな〜おさかな〜」

「あ！ あれあれ！ テレビでみたことある！ 『まんぼっ』っていうんでしょっ、ねえ、おとうさん、おかあさん」

ことみも勝義も上機嫌だった。石和は水槽に張り付いてる勝義のもとに歩み寄り、頭をわしゃわしゃかき混ぜながら、頷いた。

「ああ。大きいな。もっと大きいになると3mぐらいのがいるらしいぞ」

「すごいなあ……………おおきいなあ……………」



「まんぼーまんぼー！ きゃっきゃっ」

「そっぴゃ、あつちのほうにイルカがいたな。バンドイルカってやつだ。千恵子、イルカとか好きだろう」

「うん、見てみたいかも。どっち？」

家族四人で回る水族館は楽しかった。時折、今回の事件のことが脳裏に過ぎるが、すぐさま振り払う。いまは楽しむことだけ考えよう。石和はそう思いながら、陽が暮れるまで水族館で家族と共に過ごした。

## 6 「嫉妬」

水族館を出て、久しぶりの外食を終えると子供たちは疲れたのか、帰りの車の中で寝入ってしまった。マンションの駐車場に到着してもまったく起きる様子がない。千恵子はことみを、石和は勝義を背負い、自分たちの部屋へ向かった。

寝間着に着替えさせて、勝義の部屋のベットに寝かせる。

「むにやむにや……お父さん……まんぼう……イルカ……アザラシ……えへへ……」

随分と水族館が気に入ったらしい。勝義は寝言で今日見てきた海洋生物の名前を唱えながら、笑顔を浮かべていた。そんな勝義の頭を撫でながら、石和は眼を細めて笑う。

「またいこうな」

と、小さな声で語りかけ、静かに部屋のドアを閉じた。

「どう？ 武ちゃん」

リビングに戻ると千恵子がコーヒーをカップに注ぎながら、待っていてくれた。

「ああ。よく寝てる。疲れてたのかな」

「勝義もことみもあんなにはしゃいでたもの。無理もないわ。はい、武ちゃん。お疲れ様」

そう言って、石和に湯気のでたコーヒーカップを渡す。石和は椅子に座り、カップを受け取る。

「さんきゅ。千恵子も疲れтар。お疲れ様」

「ううん。楽しかった。水族館に行ったのなんて久しぶりだったから」

千恵子は首を左右に振って笑う。石和も同様だった。久しぶりの水族館は刺激的で、童心に返ってしまった。子供たちと一緒にしゃいでしまったのが、今になって気恥ずかしく感じる。

「まあ、川原には感謝だな。水族館に呼ばれたときは本気で首を傾げたがな、結果的にはいい気分転換になった」

はははと笑いながら、コーヒーを啜る。ブルーマウンテンの味が疲れた身体に心地よい。そんな石和を千恵子はじつと上目遣いで見つめる。

「……ねえ、武ちゃん。どうして今日、水族館に行ったの？」

「ん？ 電話の時、言っただろう？ 昨夜の事件のことだよ。川原の親戚の刑事が詳しく話を聞きたいって言うからだよ」

「なんで水族館なの？ べつに水族館じゃなくてもいいじゃない。それに昨夜の事件のい事だって、他にも大勢の人がいたのに武ちゃんだけ、呼び出されるなんて……おかしいよ」

目を逸らして、俯く。石和は眉を潜め、

「なんだよ、やけに絡むな。別に深い意味なんてないぞ。刑事のヒトが水族館好きだっただけで」

そこまで言っつて、ようやく石和は理解した。千恵子の様子がおかしかった理由はそういうことだったのか。石和は深く嘆息すると、千恵子の両頬を掴み、ぐいと引つ張った。

「ひゃっ！ ひゃ、ひゃけひゃん、ひはい！ ひゃにひゆるほっ！？」

「お前な……勘違いも程々にしろ。俺は川原の親戚である刑事に会いに行つたのであつて、川原とデートする為に水族館で待ち合わせした訳じゃないぞ」

「っ！」

両頬が引つ張られた顔で大きく目を見開く千恵子。石和の推測は図星だったようだ。千恵子は慌てて、首を左右に振る。

「わ……わひゃひ、ひよんなほほ、ほほっへはい」

「嘘つけ。じゃあ、何で川原を避けたり、変な事追求してきたりするんだ。千恵子らしくもない。佐々木がこの前言った冗談でも真に受けたのか？ 川原は仕事の同僚で、それ以上でもそれ以下でもない。本当だ。第一、俺が川原と逢い引きしたと仮定して、なんでわざわざ水族館へ行くことをお前に言わなきゃいけないんだ？ 自分から浮気してますって、公言しているようなもんだろ、それは。そんな場に家族なんか呼ぶわけがない。だろう？」

そう言っつて、手を放す。引つ張った両頬をすりすりと撫でながら、千恵子は涙目で呻いた。

「痛い……武ちゃん、ひどい……ぐす」

「ひどいのはそっち。信用されてないのはショックだ。もう少し、俺を信じてほしい」

「だって……あの人の目が言ってた。武ちゃんのこと好きだって。綺麗なヒトだったし、仕事であたしよりも長い時間いられるし、不安にならない筈……ないよ」

石和は無言で椅子から立ち上がった。千恵子の後ろに回り込み、身体をぎゅっと両手で抱きしめた。

「た、武ちゃん？」

「いいか、俺たちは結婚してもう五年経つが……それでもやはり照れくさいものは照れくさい。だから、一回しか言わない。いいか……よく聞けよ」

「ほんと、咳払いして、石和は言った。」

「千恵子　お前が好きだ。愛してる。昔も現在いまも。そして、

これからもずっと」

「」

「俺は他の女にどんなに言い寄られようが好きにならない。絶対だ。何故なら千恵子、お前は俺の半身そのものだからだ。『あの時』も言っただろう？　俺はお前がいないと生きていけないんだ。七年経った現在いまでも……その想いは変わらない」

「武……ちゃん」

「だから、その……もっと自信を持ってくれ。俺に愛されてるって……自覚してほしい……って、ああクソ、ったく。やっぱり恥ずかしいな。こんなことを男にわざわざ言わせないでくれ」

「武ちゃ……ひっく……ぐ、ぐめ……うっっ……」

両肩に回した石和の腕を両手でぎゅっと掴んで、ぼろぼろと涙を

零し始めた。

「やれやれ、母親らしい余裕が最近出てきたと思ったんだが、やっぱり千恵子はいつまで経つても『泣き虫子工』のままだな」

「つく……だつて……だつて……あたしが強くなれるのは武ちゃんがいるからだよ。武ちゃんが好きだから……っひつく……」

「俺もだ。だから、頑張れる。もう変な事で不安になるな。分かったな……千恵子」

「うん……うん……ごめんね、武ちゃん……」

千恵子は何度も頷き、涙を零し続ける。石和は強く抱きしめ、落ち着くまでこのままでいることにした。

……こうしていると想い出す。七年前のあの日のことを。

かつての恋人と別れた日。親友と決別した日。そして、千恵子と恋人同士になったあの日。千恵子、石和、そして、幼なじみの……  
航<sup>わたる</sup>。

三人はいつも一緒だった。小学生の頃から、なにをするのも一緒。学年によって、仲間が増えたりすることもあったが、中心はいつもこの三人だった。

大学は互いに違ったが、家が近所同士のこともあったか、付き合いが途絶えることは無かった。だが、あの日。すべてが崩壊した。航と本気で感情をぶつけ、殴り合い、そして、石和と千恵子の前から去っていった。

……航が『あの時』最後に言ったことを想い出す。

『気付かなかったのか？ ははは、お前は鈍いからな！ いつも一

緒にいるから、家族感覚でずっと接してきたと思ってたんだ。だけど、それは罪だ。気付かないことでヒトを傷つけることだってあるんだ！ お前が千恵子ではなく他の誰と付き合おうと構わないさ！ だが、その時、なんで千恵子の想いに気付き、距離を取らなかつた？ なんて幼なじみとしてずっといることを千恵子に強要させた？ それが、どれだけ千恵子を苦しめてきたか分かってしているのか？ こんなことになった元凶はお前自身なんだよおっ！！」

「」

石和は即座に頭の中から振り払った。あの日は特別な日であったが、同時に最悪の日である。石和にとっても、千恵子にとっても、わざわざ想い出して憂鬱になることもないだろう。

「武……ちゃん？」

千恵子が潤んだ瞳でこちらを見ていた。難しい顔をしているのを見られたようだ。千恵子に悟られたくない。石和は千恵子の唇を奪い、口を塞いだ。

「んんっ！？ んっ……んふっ……」

舌を入れて唇を貪る。そのまま千恵子の胸に手を持ってゆく。千恵子のブラウスのボタンを外し、肩をはだける。下着をたくし上げ、両手で柔らかな乳房を堪能する。

「んっ……んんうっ……あっ……た、武ちゃん……好き……大好き……」

この髪も、唇も、乳房も、秘所も、温もりも。

すべて、すべて、すべて、すべて、すべて、すべて。  
自分のものだ。誰にも渡さない。絶対に。航には  
渡さな  
い。

千恵子の言葉に応えるように。石和は静まりかえったりビブングの  
中で千恵子を抱いた。



## 7 「反EPS領域」

西暦2027年12月18日、午前2時32分日本海能登半島  
東方沖

天空より、一筋の光が飛来した。青紫色をしたその不可思議な光は闇夜を切り裂いて真っ直ぐに落下してゆき、その軌道上にいた民間の調査船へと直撃した。

調査船を中心に、青紫色の光が球状に拡大してゆく。物理的障害はほとんどない。さざ波が起き、船がわずかに揺れた程度だった。

「多目的型人工衛星ヨハネより、反EPS弾、着弾確認！ アンチ反EPSを展開。探査船を起点として、アンチフィールド反EPS領域が拡大してゆきます！ 展開領域100……200……300……なおも拡大中！」  
「アンチ反EPS、空間に干渉。既存のEPS力場の数値が100から49までの減少を確認。47……41……36……EPSの数値がゼロに近づいていきます！」

探査船の中ではその不可思議な光の観測が船の中で行われていた。研究員達がそれぞれの計器に張り付き、計測、状況を報告する。その中心でこの実験の責任者である小田切が硬い表情で腕を組みながら、その様を見守っていた。歳の頃はまだ三十前後で、この組織の責任者としてはかなり若い。だが、縁なしの角張った眼鏡越しに見えるその鋭い瞳には数々の修羅場をくぐり抜けてきた自信、ヒトを扱う強い意志の光が宿っている。そして、その自信を裏付ける実績

を小田切は持っていた。

今回のこの実験。更に実績を上げるため。D-I計画の対抗手段を造り上げるため。何が何でも成功させなければならぬ。万が一、失敗に終わった場合、迅速に原因を調べ上げ、対処しなければならぬ。あらゆる事態に対処出来るよう、感覚を研ぎ澄まし、実験の報告に集中する。

「反EPS領域、500にて安定。調査船を軸として、半径五百メートルに特殊空間が展開しました」

「28……15……5……0……EPSの数値、マイナスに突入！  
反E・P・S領域、通常空間を完全浸食。反EPS展開率100

?!」  
「能力者の反応はどうだ？」

と、小田切が問う。

「発火能力者、精神感応能力者、念動力能力者、すべての能力者の力が発動しません。E・P・S力場を完全に遮断しています！」

オペレーターの報告に小田切は表情を弛め、

「どうやら……成功のようだな」

と、言った。それと同時にわっと周囲から歓声が湧いた。

「す……すげえ、すげえ！まさか本当に完成するとは！」

「このプロジェクト、動き始めたの今年の六月からだろ？この短期間に開発から実用化まで持って行くなんて、普通考えたらあり得ないぞ！」

「しかも、今までにはない完全に未知の技術よ。小田切博士は化け物ね。戸木原博士といい勝負かもしれないわ」

船内中のスタッフが喜びの声を上げ、はしゃいでいる。皆、興奮が隠せないようだ。その喜びも当然だろう。絶対強固と言われた連中の防壁をこれで丸裸に出来るのだから。

手を拱こまくだけの状況から、これでようやく離脱することが叶う。小田切は目を閉じ、ぎゅっと右手を握りしめながら、喜びを噛みしめた。

ぱちぱちぱち、と。拍手をしながら、小田切に近づいてくる男がいた。長身の男で、小田切よりも更に若い。三ツ葉社の会長、三ツ葉光一である。

三ツ葉家の長男で、四年前、先代会長三ツ葉源五郎みつばごろうが突然死したことにより、急遽会長に任命された男である。まだ二十代の若さだが、親の七光りと蔑まれることもなく、三ツ葉社内部で統率者の実力を発揮し始めていた。若さ故の未熟さはあるが、それも経験で乗り越えて、今後の三ツ葉社を率いて発展させてくれる。そう確信させてくれる男と小田切は信じていた。

「おめでとう、小田切博士。まさか、わずか半年の間に実用化の段階まで持って行ってしまおうとは……さすがだな」

光一が笑顔を浮かべ、右手を差し出す。小田切はかぶりを振りながら微笑み、その手を握った。

「いえ、理論と技術はすでに完成に近い状態にありましたから。ここまで急ピッチな作業で完成まで持って行けたのは、優秀なスタッ

フとあなたの協力があつたからです。私だけの力ではありません」

「謙遜だな。私は何もしてない。君と君のスタッフチームの力だよ」

「いえ、有人宇宙施設『あおぞら』のスタッフとの協力がなければ、この結界弾の完成はあり得ませんでした。宇宙施設内で瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートを造り、こちらからの資材調達のリスクが無くなったことも、早期完成に繋がりました。感謝します」

「はは、あのまま新井博士の技術を封印してしまうのはあまりにも勿体ないと思ったからだよ。瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの本来の使用方法は地上から宇宙へなんのリスクもなく、資材を運ぶことにあるのだからね」

「それに川上くんの存在も大きかったです。結界砲OSの作成をこの短期間で造り上げてしまったのですから……彼は天才です。ウィザードクラスの」

「うむ。そのことなんだが、そろそろ川上くんもこちらに引き上げさせたらどうだろうか？ こちらと向こうの研究所に二足の草鞋わらじというのはそろそろ限界ではないか？ 連中も研究が最終段階まで来ているとのことだ。いま優秀なスタッフは一人でも多い方がいい」

「はい。そのつもりです」

「なんなら、向こうのスタッフにも事情を話して来てもらおうといい。『第一D計画』のことを知れば、彼らもこちらに引き入れることも可能かもしれない」

小田切は首を眉を顰め、首を捻った。

「それは……まだ時期早々かと。彼らはまだ何も知らない状態です。危機感が決定的に欠落している。事態を信じられないかもしれない」

光一が顎に手を当て、「なるほど、それは確かに」と、頷く。

「しかし、我々には時間がないのではないか？ 彼らが事実を知っ

た頃にはもう手遅れということもあり得る」

「いえ、そんなことはありません。私の予想ではおそらく数日中のうちに認識を改めることになりそうですよ。少々手荒な歓迎にはなりそうですがね」

そう言っつて、小田切は薄ら笑いを造った。

そう……我々に時間はない。だからこそ、慎重に動かなくてはならない。故に手順がある。彼らは真実を受け入れられるか。そして、どう行動するか。

それを見きわめなければならない。

「で、私はどうすれば、いいのかね？ 小田切博士」

「『ASH』の出勤要請を。彼らの力が必要になります」

光一は少し驚いた顔をしたが、すぐに苦笑いを浮かべて頷いた。

「ふ、本当に手荒な歓迎だな。いくら危機感が足りないとはいえ、薬が効きすぎるかもしれないな……」

光一の言葉に小田切は笑いながら頷いた。窓から天を仰ぐと、青色の空が黒色の夜空に戻りつつあった。結界砲の効力が切れたのだろう。たちまちのうちに空間は通常に戻り、満天の星空が広がった。

「鬼が出るか、蛇が出るか……藪を突いてどちらかが必ず出る場合、お前はどちらを引き当てるんだろうな、武士……」



## 8 「佐々木と川上」

十字路の惨劇から五日後。仕事帰りの夜、佐々木勇二郎は川上弘幸と共に飲み屋へ来ていた。数日前、情報提供をしてくれたお礼として、川上に御馳走するためである。佐々木は自分がボトルキープのしきである、いきつけのバーへ招待するつもりだったが、川上が「行きたい場所がある」と言って、連れてこられたのが、この飲み屋だった。

周囲を見回してみる。客層はサラリーマンや若者などがほとんどだった。和風の雰囲気で固めてあるが、それを除けば特徴らしきものは何もない。普通の飲み屋だった。佐々木は困惑しながら、

「か、川上くん。本当にここでいいのかい？」

と、訊いた。川上は無表情のまま、小さく頷く。

「いい。ここで問題ない」

「で、でも、せっかくのお礼なのに。こんな普通の所なんて。もっと贅沢して構わないんだよ？」

佐々木がそう言うが、川上はかぶりを振った。

「変に豪華な場所は自分には落ち着かない。こういう場所が気楽で好きだ」

「そ、そうかい？ まあ、川上くんがそう言うなら、いいけど……」

張り切って、豪華な酒とつまみを川上に披露しようとしていた身としては、少々物足りない気がしたが、本人がそういうのでは仕方がない。今夜はここで楽しむとしよう。

店員に座敷へ誘導され、テーブルmp向かい合わせに二人はあくらをかいて座る。

端に立て掛けてあるメニューを二人はめくり、品をみる。和食をメインにした料理と酒の名前が記してある。最初は無難にビールと枝豆でも頼もうか。佐々木がそんなことを考えていると、

「佐々木博士は酒好きと聞いた。どんなのを飲むのか」

と、川上がメニューをじっと眺めたまま、聞いてきた。

「え？ 僕かい？ そうだね、ウイスキー、ウォッカ、ワイン辺りは結構いろいろ飲んでると思うけど。ビールもモノによって色々味が違うから好きだよ」

「日本酒は？」

佐々木は苦笑しながら、かぶりを振った。

「あの辺はちよつと、ね。何度か飲んだことがあるけど、正直、おいしくないというか……魅力がわからなかったなあ」  
「ならここのを試してみしてほしい」

川上はそう言つと、店員を呼びだし、いくつかのつまみと日本酒を二つ注文した。佐々木は困惑した。

「え？ で、でも……」



「大丈夫。きつとおいしい」

本当はビールが飲みたかったのだが、こう強く勧められると、なにも言えなくなる。仕方がないので、川上に従うとする。今夜は川上をもてなす気でいたのだが、どうにも立場が逆になっているような気がし、佐々木は苦笑した。

しばらくすると、いくつかのつまみととっくりを二つ、店員が持ってくる。川上が佐々木の手前にあるお猪口に日本酒を注ぎ、そのままじつ、とこちらを見ている。早く飲めということだろうか。

「そ、それじゃいただきます」

と、おそろおそろした動きでお猪口を持ち、佐々木はそれを口にした。すると、

「あ。おいしい……」

と、思わず感想を口にしていた。お世辞ではない。以前飲んだ人工物の固まりのような味ではなく。佐々木が今まで味わったことのない感覚が口に広がった。

「ここは一見、ただの居酒屋だが、日本中の有名な日本酒を取りそろえている穴場。だから、よく来る」

そう言いながら、再び佐々木の猪口に日本酒を注ぐ。淡々とした表情は相変わらずだが、心なしか嬉しそうな表情に佐々木は見えた。自分のお勧めを誉められたからだろうか。

「いや、驚いた。勉強不足だったなあ。日本酒がこんなにおいしか

つたなんて！ これからは日本酒のことも勉強して、色々飲んでみないとね、あははは」

一気に上機嫌になり、互いのお猪口に日本酒をそそぎ込み、飲む。飲み終わると、すぐに川上は別の日本酒を注文し、様々な味わいを佐々木に堪能させた。どれもとびきり旨い酒ばかりなので、佐々木はたちまちのうちに「ご機嫌になった」。

「……少しは元気出た様に見える」

川上はいつもの無表情の顔でそんなことを言った。

「え？」

「新井博士の一件以来、落ち込んでいるように見えた。だから、安心した」

「川上くん……」

佐々木は大きく目を見開き、川上をみた。一見、無愛想で人付き合い合いが悪そうに見えるこの男は自分の想像以上に気を使われていたらしい。

「まいったなあ……本当、これじゃどっちがもてなしているか、わからないな」

凶星だった。精一杯、何事もないように振る舞っていたつもりだったが、完全に見透かされていた。大事な人が亡くなったショックはそう簡単に切り替えられるモノではない。

頭ではこのまま嘆いてばかりいてばかりじゃいけない。そう自分で言い聞かせていても、なかなか感情は思うとおりに動いてはくれ

なかった。

大事なヒトがいなくなるというのはそういうことだ。自分が自覚しているよりも更に重い感情だ。負の感情は自身を歪ませ、肥大化した負の心は判断力を大きく鈍らせる。危うく佐々木は負の心に支配され、道を違えるところだった。

それではいけないと石和に強く叱責された。

そして、その残留した気持ちを見透かされ、川上の不器用な慰めをいま受けている。

こんな情けなく、流されやすい自分の事を叱って、心配してくれる人間が二人もいる。それが佐々木には非常に嬉しくて、仕方がなかった。

「佐々木博士」

「はは……み、みつともないな。ごめん、すぐ治まるから……」

目頭が熱くなり、自然と涙がぼろぼろとこぼれ落ちてくる。両手で涙を必死に拭いながら、佐々木は苦笑した。

きつと自分はもう大丈夫だ。新井博士という親友を失った悲しみはこれからも続くだろうし、いくらでも泣くことになるだろう。だが、石和と川上のおかげでこれからは冷静な自分とのスイッチの切り替えが出来るようになった。そう考えた。

「ホント、川上くんにはお世話になりっぱなしだなあ。情報収集にまで巻き込んでしまって。危ない橋を渡らせてしまってすまないと思ってるよ」

川上は小さくかぶりを振った。

「別に気にしてない。これは石和博士と佐々木博士だけではない。第五研究所の責任者全員の問題。他人事ではない」

「まあ、確かにね。もし、戸木原博士が細胞を持ち出したことを上層部に知れば、僕らもただじやすまないと思うしね。でも、それでも、頼み込んだ時は僕らはそれを知らなかった。だから、そのときリスクを背負わせてしまったことは素直に感謝したい」

「別にいい」

相変わらず淡々とした表情で答えるので、佐々木は思わず笑ってしまった。

「本当に不思議な人だなあ、川上くんは。自分で頼み込んでおいてなんだけど、どうして僕の無謀なお願いを受けてくれる気になったんだい？」

川上はもぐもぐと刺身を口にしながら、佐々木からふい、と視線を逸らしながら、小さな声で答えた。

「前にも言った。自分は佐々木博士のことを尊敬している。そんなひとの頼みは断れない。そう思ったからだ」

佐々木はなんともむずがゆい気持ちになり、頭を掻いた。面と向かって、そう誉められると照れてしまう。

「どうもありがとう。嬉しいよ。川上くんは口振りだと『NEXT』の存在を詳しく知っているみたいだね。学会での論文発表で知ったのかい？」

川上は頭をふるふると振り、

「昔、ネットで話題になったときに知った」

と、言った。佐々木は自嘲した笑みを浮かべた。

「僕がバッシング受けていたときだね。いまとなつては懐かしいなあ。メディアに散々叩かれたっけなあ」

「……………」

「あの頃の僕はね。新井博士の瞬間物質転送装置テレポルトゲートの開発と一緒に、どうしても改善できない欠点に苦しんでいたんだよ。理論はきつちり確立しているつもりだった。だけど、実際にナノマシンを展開すると複製した細胞に狂いが生じて、生物の生態情報を従来とは大きく離れたものに書き換えてしまうエラーが出てしまったんだ。細胞と生物の融合に失敗したのとよく似ている」

言いながら、佐々木はお猪口に入った日本酒を一気に煽る。佐々木の顔はすでに真っ赤に染まっていた。佐々木は続けた。

「その失敗の詳細が僕の助手の一人から漏れてね。そこからだよ。バッシングが始まったのは。僕が行っている研究は禁忌に触れるものだよ。自然から生まれた生物を悪魔のような姿に変えてしまう道徳心に欠ける研究だってね。失敗して醜く変態した実験動物の写真まで流出して、もう手が付けられなかった。正直、あのときは気が滅入ったなあ」

「どんな研究にも動物実験や臨床実験は必要不可欠だ。まして、ナノマシンと生物の掛け合わせはまだ発展途上の分野。失敗が続くのは仕方がない」

川上の言葉に佐々木は「ありがとう」と、言って目を細めた。

「だけどね、実験動物が何匹も、何十匹も、何百匹も、本来の生息情報とはかけ離れた醜い姿形に変貌し、死んでいき、それを僕がこの手で行ってきたのは確かなんだ。そして、そのことに何の感傷も抱かなくなっている自分に気付いたとき、すごく怖くなった。自分は神をも冒瀆する行為に手を触れてるんじゃないかってね。初めはなんとしても志を貫くつもりだった。だけど、そんな不安を抱き始めると、もう止まらなくてね。しばらく研究を放りだして、家に閉じこもっていた時期もあった位だよ」

佐々木は自分の手のひらを見つめ、拳を造った。

「だけど、それでも。どうしても『NEXT』を完成させたくてね。僕はどんなバッシングや不安にも押しつぶされる訳にはいかなかったんだ。だから、僕は研究を頓挫させなかつたし、研究を続けるために第五研究所に来たんだ」

元々、佐々木がこの第五研究所に来た理由は『NEXT』開発の資金繰りの為だった。成果をなかなか示さない『NEXT』の研究、加えて世間のバッシングにスポンサーが手を引くことになり、研究を思うように続けられなくなったのである。八方ふさがりとなった状態の時に舞い込んできたのが、『D-I計画』の担当役員としての話だった。

目標が完遂しなくてもいい、『D-I計画』に参加し、わずかでも功績を示せば、三ツ葉社が『NEXT』の研究を全面的にバックアップする。そんな条件を三ツ葉社に提示され、佐々木は迷うことなく、第五研究所に来ることを選んだ。『NEXT』の研究は一時凍結をせざるをえないが、それでもそうすることによって、研究を続けられるのなら。それが一番いい選択肢だと思えたのだ。

『D-I計画』の研究に何年かかるかは分からないが、いつか必ず『NEXT』の研究に戻り、このナノマシンを実用化まで持って行く。それが佐々木が掲げた人生での最終目標だった。

川上はじつと、佐々木の顔を見据え、

「佐々木博士はどうして、それほどまでに『NEXT』の開発に固執するのか。訊いていいだろうか」

と、言った。佐々木はとっくりを傾け、川上のお猪口に日本酒をとくとくと注ぎ込みながら、小さく呟いた。

「そうだね……僕の生きる意味　だからかな」

「生きる……意味？」

「うん。僕の両親はね。父も母もそれぞれ働いていて、忙しかったけど、仲のいい家族だった。ヒトに自慢できるくらいだね。それが僕の高校生の時、状況が一変したんだ。それが……原因かもしれない」

翳りのある表情を浮かべ、佐々木は言った。

「母親が交通事故にあったんだ。それで大怪我してね」

「　　っ！」

佐々木がそう言うと、川上が大きく目を見開いた。普段、まるきり表情を変えない川上にしては珍しい反応だった。佐々木は俯いていたため、その反応に気付くことなく、話を続けた。

かろうじて、一命は取り留めたが、佐々木の母親は下半身不随で二度と立てない身体になってしまった。片目も事故の影響で見えな

くなり、もう二度と普通の生活は出来ないと医師に告げられた。それが原因で佐々木の母親は鬱病にかかってしまった。

そこからはもうボロボロだった。莫大な入院費を請求されて、父は副業に手を付け、苛酷な労働を強いられる毎日。見舞いに行くと母は『こんな身体じゃ生きていく意味はない。死にたい。お願い。あたしを殺して』と、嘆きの言葉を連呼する。

そんな日々が続き、次第に佐々木の父は焦燥し、精神的に追い詰められていった。

そして、それが限界に達した。

ある日、佐々木が学校から帰ると、書き置きだけを残し、佐々木の父親は家から消え去ってしまった。すべてを投げ捨てての失踪だった。

そして、それを知った母はショックを受け、その数日後、入院している病院で　自殺した。看護師が目を離した、ほんの僅かの際に廊下の窓から飛び降りたのだ。

そうして、佐々木は両親を失い、天涯孤独の身となった。そんな中、自分を慕っていてくれた親戚が自分を養子にしたいと手を差し伸べてくれた。それが絶望に包まれていた佐々木を救い出してくれた。

佐々木の新しい両親は可愛がられ、高校、大学の費用、必要経費もすべて捻出してくれた。両親に捨てられた悲劇があったにも関わらず、まっとうな生活を送れたのは新しい家族のおかげだ。二人にはいくら感謝しても、し過ぎると言つことはない。



ただ、それでも。両親を失った過去は精神的外傷として残留し。佐々木の心の苦悩は癒されることなく、続いた。

どんな幸せと思う生活が続いても、寝ているとき、悪夢となって、忌まわしい過去が蘇り、その度に絶望を想い出すのだ。

あれだけ幸せと生きていた家族が。どうして、こんな無惨な形で崩壊してしまったのか。悪夢に悩まされる毎日を送るうちに、佐々木はそんなことを考えるようになった。

得られた結論は一つ。母の事故がすべての崩壊の始まりだったのだ。

人の心は脆い。たった一人の大事な人間が負の要素を持つだけで、すべてを飲み込み、関わるすべてのヒトを不幸にする。あの時、母が事故に遭っていないければ。いや、事故にあっても、もっと進んだ治療法が確立されていれば、母は下半身不随になどならず、家族は崩壊しなかったのではないだろうか。

だが、現在の医学では限界がある。医学はどんどん発達しているが、それでも限界がある。その限界を超えるには画期的な技術が必要なのではないか。

そこで、佐々木が目をつけたのが『生体ナノマシン』だった。破損した肉体を自然治癒や補助器具に頼ることなく、ナノロボットで補うことが出来れば、医学は劇的に変わる。

佐々木はそう確信した。

それから、佐々木は『生体ナノマシン』に関する勉強を死にものぐるいで勉強し、三十に満たない若さで『ナノマシン』に関する博士号をも取得し、この手の分野の第一人者となった。

これ以上、自分のような人間を生み出さないため。  
少しでも多くの人間を救う為に。

と。そこまで語って。佐々木は我に返った。少々話し過ぎてしまった。ヒトに話すには少々重い過去だ。

「ごめん、変な話しちゃったね。ちょっと飲み過ぎたみたいだ……」

佐々木は苦笑しながら、すっかり熱くなった自分の頬を手でぴたぴたと叩いた。口当たりがいいので、調子に乗って飲んでいたら、だいぶ酔いが回ってしまったようだ。

「『NEXT』を造ることによって、多くの人を救いたい。その行為によって僕のような人間を造ることを阻止したい。そう思っているでもそれは善為じゃないんだ。僕が出会いたかった奇跡を人を救うことによって、母を救ったという疑似体験したい。僕が救われた感覚を味わいたい。それだけなんだ。川上くんは『NEXT』を造り、多くのヒトを救うことを考えている僕を尊敬するって、言ってたけど、その実態はそんなものなんだよ。結構、エゴイストなのさ、僕は。幻滅させちゃったかな？」

佐々木はそう言っつて、肩を竦め、両手を広げて、おどけて見せた。川上は大きくかぶりを振った。

「そんなことはない。自分は佐々木博士のことを心の底から尊敬する。その気持ちは変わらない」

淡々とした口調でそう答える。愛想でいってるのかと思っただが、川上の瞳は真剣そのものであることに佐々木は気付いた。随分と熱

心に応援してくれるものだ。それはとてもありがたいことだし、嬉しいことだと思っただが……。

「ひょっとして……なにか理由でもあるのかい？」

「む。理由？」

「うん。例えば……『NEXT』を使うことで、誰か助けたいヒトがいるとか」

「……………」

川上は小さく頷いた。それで佐々木はようやく納得がいった。だからこそ、自分の研究に川上は食いつき、応援してくれるのだろう。

「そっか。大事なヒトなんだね？」

佐々木がそう訊くと、川上は無言で視線を逸らした。顔がわずかに赤く染まっているのは酒に酔ったせいではなさそうだ。佐々木は笑った。

「それじゃあ、約束だ。僕の『NEXT』の開発が成功したら、最初に君の大事なヒトに使わせてさせてほしい。いいかな？」

川上は大きく目を見開いた。

「……………本当に？」

「うん。お金もいらさない。川上くんが『NEXT』の利用者第一号だね」

「それは困る。佐々木博士が『NEXT』を造り、心待ちにしている人はたくさんいる。『NEXT』を最初に使わせてもらうばかりか、お金まで払わないというのは度を越えた待遇だ」

わずかに眉を顰め、かぶりを振る川上に佐々木は人差し指をちゅちゅ、と左右に振った。

「別に優遇している訳じゃないよ。お金はいらないってだけで、ちやんと報酬はいただくよ。その為に必要な条件もある」  
「条件？」

佐々木は川上の反芻した言葉に、深々頷いた。

「完成した『NEXT』のアンブルは君に渡すのでなく、僕自身が患者の元に持つていき、僕の手で打たせてほしい。そして、僕の手で川上さんの大事なヒトを救ってあげたという実感を僕に持たせてほしい。それが……僕の出す条件だ」

「……………」  
「言っただろ。僕はエゴイストなんだ。僕の手で母親を救えなかった無念を川上さんの大事なヒトを救うという行為で、晴らさせてほしい。川上さんの大事なヒトなら……きつと、僕も救われる想いを味わうことができる。そう思うんだ」

「どうかな？」と、佐々木の出した提案に川上はしばしの間を空けた後、

「……………感謝する」

と、小さな声で言った。そして、川上は無表情の仮面を崩し、ほんの僅かだったが、佐々木に向けて、微笑んだ。彼が笑う顔を見るのは第五研究所に配属してから、見るのは初めてだった。佐々木はなんだかとてもくすぐったい気分になり、笑った。もしかしたら、本当に川上の大事なヒトを救うことで、心の隙間を埋めることが出来るのかもしれない。

ならば、その日を夢見て。前に進んでいこう。まずは新井博士の

無念を晴らし、そして『D-I計画』を完遂する。

そこから始めれば、いつか必ず目標に辿り着くはずだ。母親も父親も自分は救い出すことが出来なかった。

だから、せめて。過去の自分だけでも助け出そう。悪夢の囚われた自分を開放するのだ。強く強く、佐々木はそう思った。

「それじゃ、約束の杯、ということだ」

言いながら、日本酒の入ったお猪口を川上に向けて差し出した。川上は頷き、自分のお猪口を差し出すと、互いに猪口をちん、と重ね合わせた。そのまま日本酒を口に運び、心地よい感覚が広がる。それと同時に石和の視界がぐにやりと歪んだ。

「あ、あれ？」

「……佐々木博士？」

「だ、大丈夫。らいじょう……は、はれ？」

顔は耳まで真っ赤に染め上がり、呂律がまわっていない。調子に乗って飲み過ぎたらしい。佐々木は自分の顔をぺちぺちと叩きながら、笑った。

「ははは……これはまら、まいっはなあ……はははは」

「さ、佐々木博士」

二日酔いのクスリを飲んでいるとはいえ、ちよつとまずいな、と思いつつ、佐々木はがしゃん、と、テーベルの上に突っ伏した。川上が驚きの声を上げているが、何を言っているかは分からない。

そのまま心地の良い感覚に身を委ね、佐々木は夢の世界へ旅立つ

て  
い  
っ  
た。

## 9 「人類進化促進塾」

細胞を含んだ実験体は暴走や異変を一切起こさなかった。安定してから百時間以上が経過した現在でも変化は一切無い。との因子は完全に結合し、二つの世界の完全なる混合種 統一体となつたのだ。

これでD-I計画は完全に一段落ついたことになる。第一段階の終了である。

分裂世界の实証、そして未知の異世界への扉が開く一歩手前まで来たのだ。第五研究所のスタッフは皆、手を挙げて喜んだ。

一方、第一段階が進んだのにも関わらず、戸木原淳と連絡が全くつかない状況が続いていた。一体、どここの研究所で第二段階の研究を行っているのか。なぜ、第五研究所で第二段階の研究を行わないのか。島村専務にそのことを問い合わせても、なにも答ええない。

完成した実験体の観測、資料の作成を行うよう指示があつただけで、戸木原博士に取り次いでもらえない。

幸か不幸か、戸木原淳の存在は他のスタッフにも軽視されていたので、彼の不在をさほど気にする者はいなかった。残り四人のトップがいれば第五研究所は充分に稼働する。

戸木原淳が戻ってこないのであれば、こちらで第二段階の研究に入ってしまうおう。そう考えた四人は自分たちだけで第二段階のプラ

ンを練り、その準備が進み始めていた。

石和武士も、佐々木勇二郎も。表向きは素直に研究が進行したことを喜び、次のプランに全力を注いでいる様に見えた。が、すでに心はそこにはなく、その裏側では事件の容疑者を戸木原に絞り、様々な調査を続けていた。

過去の経歴に関することや、関連情報など。川上をフルに使い、情報を収集する。

を保管している部屋の履歴も調べた。異世界生命体が保管されている部屋に入るには必ず、指紋照合と、網膜照合、開閉用の専用カード、個人別のパスワードが必要となる。そして、誰が部屋に入ったのか、監視カメラの動画と共に使用履歴が残るようになっている。

細胞を研究で利用した回数と、管理室に入った回数は一致していなかった。戸木原淳の名で用途不明の開閉履歴が六度ほどあった。やはり、戸木原淳は細胞を持ち出していたのだ。さすがに何処に持ち出されたのかは分からなかったが。

更に奇妙な点がある。

三ヶ月ほど前の履歴で、22:32と22:59、一日の、しかもわずかな時間間に二度も管理室に侵入した履歴があった。

監視カメラにはどちらも戸木原淳の姿が映っていたが、一度目と二度目の動画では違和感があった。一見何でもない普通の映像だ。

しかし……戸木原の姿がなにかおかしいような気がする。



石和は監視カメラの動画データを半年分すべて抽出し、それを徹底的に調べてみた。

そして、その違和感の正体に気付いたとき、石和は脂汗を垂れ流しながら、笑った。

笑うしかなかった。

「こいつは……最悪の状況だな」

そして 日曜日。

『人類進化促進塾のコンパニオン、横川昌美よこかわ まさみとコンタクトを取れ。篠塚登喜夫しのづか ときおに会いたいと言って、このメモを渡せ』

芳田源に渡されたメモにはそれだけが走り書きで書いてあった。

正直、これだけでは何が何だか分からない。

事件の真相に近づきたければ、彼女に会え。そういうことなのだろう。

人類進化促進塾は素養のある子供を選別して入会するシステムだ。例えば入会した子供の肉親であつても、中に入ることはできない。部外者である石和がいったところで取り次いでもらえないだろう。

そこで石和が考えたのが『適性検査』。毎週土曜、日曜日に人類進化促進塾では無料にて『適性検査』を実地している。脳内をスキャンする特殊な機械を用い、対象者になんの才能があるのかを調査してくれるのだ。『適性検査』という名目があれば、塾内に入るのはたやすい。横川昌美と接触できるに違いない。

そう思った石和は子供の勝義と佐々木勇二郎を連れて、人類進化促進塾へ向かった。勝義に『適性検査』を受けてもらい、その間に横川昌美を捜し出すのだ。

「ねえねえ、おとうさん。アレなに？ 面白いよ！ 遊園地！ 遊園地！」

遠目に見えてきた目的の建築物を指さし、勝義は目をきらきらと輝かせてはしゃぐ。石和は苦笑した。

「残念ながら、勝義。アレは遊園地じゃないんだ。中に遊ぶものなにかないんだぞ」

「そうなの？ ネネブの海賊とかコーヒーカップとかもないの？」  
「ああ。それにここが遊園地だったとしても、今日はお母さんもとみもないだろ？二人だけで楽しんだらお母さん達に悪いとは思わないか。今度みんなと一緒にいこうな」

勝義は大きく頷いた。

「うん！ みんないつしよがいい！ 佐々木のおじさんもいつしよに！」

隣にいた佐々木が驚きの表情を浮かべ、勝義の顔を見た。

「え？ 僕もいいのかい」

「みんないつしよが楽しいもん！ おじさんもいつしよだともっともっと楽しいよ！」

「あははは。ありがとう、勝義くん。絶対いくよ」

微笑みながら、佐々木は勝義の頭を撫でた。勝義は「えへへ」と笑いながら、気持ちよさそうに目を細めた。あれから、数日。ようやく佐々木にも笑う余裕が出てきたようだ。無論、親友を失った心の傷を癒すには莫大な時間がかかるだろうが、多少なりとも気持ちに整理がついたのだろう。

「しかし、これは勝義が遊園地と間違えるのも無理はない気がするな」

そう言っつて、石和はその建築物を見上げた。一言で言えば奇妙な建物。それしか言いようがない。普通の建築物から遠く離れた外観であるのは確かだ。

建物の形は円形状。ぐるぐると捻れた螺旋で形成されている。どちらかといえば、塔の造形に近いのかもしれない。高さは90m程で、七階建てのマンションがこの位の大きさだろうか、ただ、塔と呼ぶには造りが中途半端である。途中で造るのを止めたような、違和感がある。建物の頂上にはきらきらと輝くプリズムで出来たキューブが斜めに傾いた状態で乗っている。そんな奇妙なデザインだが、不思議と何処かで見たことあるような、既視感デジャヴを覚える。

「……あれはひょっとして……うん、間違いない。バベルの塔だよ」

と、佐々木が一人頷きながら言った。

「バベルの……塔？ 旧約聖書に出てくる、あの？」

「そうそう。ノアの洪水後のエピソードだよ。」

「彼 天より降りる。エホバ 天をたれてくだりたもう。御足のもと暗きことはなはだし。エホバくだりて かの人々の建つる街と塔を見たまえり。いざ我らくだり かしこにて彼らの言葉を乱し互

いに言葉を通ずることを得ざらしめん。ゆえにその名は　バベルと呼ぶる。禍なるかなバビロン　そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり』

ノアの人々は天にも届く塔を建造し、そこに住もうとした。それが神の怒りに触れた。神は人々の言語を違う言葉にして、互いの意思疎通を行えないようにした。ノアの人々は世界中あちこちの場所にバラバラに飛ばされ、バベルの塔の建築は途中のまま終わってしまった……かいつまんでいえば、そんな話だよ」

「なるほど、見たことあるような気がしたのは、そのせいか」

「これはビートル・ブリューゲル作の『建設中のバベルの塔』だと思うよ。有名な絵画だし、絵に詳しくない人でも目にしたことがあるんじゃないかな。ここの建物はそれを模倣して造ったんだと思う。頂上の造りは違うけど、螺旋の形状や中途半端な塔の造りは紛れもなく、ビートル・ブリューゲルだよ」

随分と詳しいようだ。どうやら佐々木はこういった話が好きらしい。石和は旧約聖書など読んだことも、興味を持ったこともないのて詳しい話は知らない。絵画もまた、同様だった。

「うーん。しかし、随分とまた、皮肉なデザインにしたものだね」

と、顎に手を当て、佐々木が呟く。

「皮肉って……なにがだ？」

「人類進化促進塾は人工的に人の能力を跳ね上げる機関なんだ。未だブラック・ボックスの要素が強い脳をいじくってね。別に天を指してるわけじゃないけど、それは神様にとって禁忌に近い行為なんじゃないかな。天罰でも下りそうな、不吉なデザインの様な気がするよ」

「はは、違いない。才能なんて人に教えられて行ってもんじゃないと思っしな。機械の手で掴む才能なんて俺はいららない。人より秀でた能力は自分で模索し、努力で掴むものなんだからな」  
「同感だね。まあ、それでも自分の子供をエリートに仕立て上げた  
いって親はいっぱいいいるみたいだけどね」

辺りを見回すと、子供を連れた親が次々と人類進化促進塾へ向かっていく姿が石和の目に映った。その数はかなりのものだった。これらがみんな、自分の子供をエリートにしたいと目論んでいるのだ。呆れ果てて言葉も出ない。子供は親の道具ではない。それぞれが自分の好きな道を歩み、夢を追う権利があるはずなのに。親は自分のエゴで子供の才能を勝手に引き出そうとしている。

それが子供の為。将来の為だと本気で信じ、本気で主張して。

中に入る口実の為、今日は勝義を連れてきたが、それだけだ。例え、どんな優れた才能が発見されたとしても、それを勝義に伝えるつもりは一切無い。

勝義は自由に生きて、自分なりの夢を掴んでほしい。それが才能の開花に繋がるのだから。石和はそう願っている。

「さて、僕らもいこうか。今日の石和くんは周りの人達のようにエゴイストな親を演じないとね。僕はさしずめ傲慢なる親戚のおじさんってところかな、ははは」

思い切り毒のある言葉を吐いて、佐々木勇二郎は塾の入り口に向かって歩き始めた。石和は苦笑しつつ頷き、勝義の手を引いて、佐々木のあとを追った。



## 10 「白い少女」

『ヒトは必ずなにかひとつ、他の人よりも優れたスキルを持って生まれ出てくると言われています。それは世間で『才能』と呼ばれるもので、自分の持っている才能を研磨することにより、ヒトは光り輝くのです』

中に入ると綺麗な容姿をしたコンパニオンがマイクを持って解説を行っていた。

『しかし、才能とは鉱山に埋まった鉱石のようなもので、どれが自分の才能なのか見つけ出せないことも多々あります。生涯を終えるまで自分の才能を見つけ出せない方も大勢いらっしゃいます。

そこで、人類進化促進塾では三歳〜六歳までのお子様に適性検査を受けてもらい、適正のあった子供達の手助けを行っています。脳専門の特殊なCTスキャンを使い、お子様の『才能』を見極めます。そして、個々の才能に基づいて、脳の専門家が造った特殊なカリキュラムでお子様達のスキルを確実にUPさせます。

塾に預からせていただく期間はほんの半年。期間内に確かな成果を親御様の元へ届けます。親御様から感謝の言葉を次々と頂いておられます。人類進化促進塾では日本の未来を担うお子様達の為に微力ながら力添えをさせて頂く  
』

気分が悪くなる解説だった。石和は解説の内容を頭の中から振り払い、辺りを見回した。ロビーの造りはかなり広い。大人数の来訪者に備えて造ってあるのだろう。

入り口付近に受け付けの窓口。何組もの親子が長者の列を造っている。まるで遊園地の人気アトラクションの様な有様だ。中央には待合い用に設置されたソファが何列にも渡って並んでいる。受付で『適性検査』の申込書を記入し、受理されると番号札をもらう。番号を呼ばれた人がCTスキャンのある部屋に入る。要は銀行や郵便局と同じシステムだ。

CTスキャンのある部屋はすべてで六つあるようだ。一つのCTスキャンで対応したら、ここにいる子供全員をスキャンなど出来るわけない。複数の機械が置いてあるのは当然の対応だろう。

（まあ、これなら時間はかかるだろうが、予想よりも早く事が終わるかも知れない）

石和達は長い列に並び、一時間ほどしてようやく受付に辿り着く。申込書を記入し、提出するとようやく列から解放され、自由に動けるようになった。石和はもらった書類と番号札を佐々木に手渡した。

「佐々木は勝義と一緒にそのソファで待っていてくれ。勝義を一人にするわけにはいかないからな。呼ばれたら、一緒につきそってやってほしい」

「別にそれは構わないけど……君はどうするんだい？」

「俺は例のコンパニオンを捜す。このコンパニオンって結構人数いるみたいだからな。片っ端から調べてみる」

「分かった。なんかあったら連絡を。ここ、携帯の制限は特にされてないみたいだからね」

「ああ、任せたぞ、佐々木。勝義、いい子にして待ってるんだぞ」

「うんっ、おとうさん！ 行ってらっしゃい。早く帰ってきてね！」

いつもの勝義の快活な声。石和は微笑んで頷くと、中央フロアを



離れ、コンパニオンの搜索を始めた。

受付の横にいたコンパニオンは申込用紙を記入するときさりげなく名前を見たが、違った。解説のコンパニオンも違う名前。となると何処を探せばいいのか。

「さすがに名指しで聞いたら、警戒されるか……」

ここはかつて戸木原のいた、いわば敵地だ。なるべく他のスタッフとの接触は避けたいところである。コンパニオンを指名するというのは、あまりにも不自然で、目立つ。人に聞くのは避けた方がよさそうだ。

きよろきよろと辺りを見回す。人が多いせいで、コンパニオンの姿が見つげづらいし、名前を確認するには至近距離までいかないとな札が見えない。あまりまじまじと見ると不審者に見られそうなので、横目でちらりと見ながら、一人一人確認してゆく。

「こいつは……思った以上に大変だな」

名札を五人ほど確認したが、まだ見つからない。石和はげんなりとした顔で大きく溜息を吐いた。

とにかくこの施設は無駄に広い。『適性検査』の順番を待っている間、退屈させないため、人類進化促進塾の歴史や概要などをモニターやコンピュータでデモを流したりしている。子供専用の遊び場もあるし、レクリエーションルーム、図書館などもあるようだ。

そのせいでコンパニオンも様々な場所に散っているので、探すのも一苦労だった。

「くそ、この過密の東京にこんな大きな建築物づくりやがって。た

かが塾だろ？　ここまで大きくする必要がどこにあるんだ。しかも塾にコンパニオンってどういう事だよ。あり得ない組み合わせだろ、まったく」

苛々が募り、自然と愚痴がこぼれ落ちる。すると、

「あの、すいません」

と、石和の背後から声がした。振り向くと、コンパニオンの一人がこちらを見ていた。歳は二十代前半といったところか。ボブ・ショートカットの髪が似合う、見るからに若々しい女性だった。

「先程から、この辺りを行き来しているので、ひよっとしたら、お子様が迷子になったのかと思ひまして。迷子センターのほうに連絡を入れましょうか？」

注意していたのだが、それでも端から見れば目立っていたらしい。石和は手を振って笑った。

「いえ、待っている間暇だったもので、この辺をうろついていただけです。子供は連れが見ているので、どうぞご心配なく」

コンパニオンは柔らかい表情を浮かべて、頭を下げた。

「それはどうも失礼をしました。時間が空いているのでしたら、こちらのほうにビジネス書から漫画本まで、様々な種類の本を用意した本のフロアがございます。本の種類は五万冊以上ありますので、よろしければご利用下さい。人類進化促進塾のことをわかりやすく説明したドキュメント風のデモも中央フロアのスクリーンにて流していますので、興味があれば、そちらもご覧下さい。人類進化促進塾

の事について、理解が深まると思います」

「ああ。ありがとう」

『それでは失礼します』、と言って、コンパニオンがその場から去ろうとした瞬間、石和は大きく目を見開いた。胸のプレートに『横川昌美』と書いてある。

「ちょ　　ちょっと待った！」

「え？」

石和が慌てて声をかける。

「あなた……横川昌美さん？」

「はい。そうですけど。あの、なにか？」

不思議そうな表情を浮かべるコンパニオン。ようやく見つけた。石和は肩の力を抜いて、安堵した。これで七面倒くさいコンパニオン捜しから解放される。

「いや、ちょっと聞きたいことがあって。ここにいる篠塚登喜夫って人に会いたいんですけど」

言いながら、芳田源の書いたメモを渡す。

メモを渡す行為自体に何の意味があるのかは分からないが、こちららはメモに書かれた以外の情報は何もないのだ。指示通りにしたほうが良いだろう。石和はそう思った。

が、しかし。

「篠塚登喜夫、ですか？　それはうちの講師のものでしょうか。そ

れとも所員のものでしょうか」

あくまでも昌美は営業スタイルを崩さない。それが当然と言わんばかりの口調で、そう訊いてきた。石和は困惑した。

「ご存知……ない？」

「はい。申し訳ありません。受付の方に問い合わせてみます。少々お待ち下さい。お客様のお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

「あ、ああ。石和武士です」

「石和様ですね。少々お待ち下さい」

頭を下げ、昌美は受付のほうへ戻っていった。

「……どういうことだ？」

眉間に皺を寄せ、考え込む。同姓同名の別人がいるのだろうか。いや、いくらなんでも同じ職場に。しかもコンパニオンという特殊な職で同姓同名の名前があるとは考えにくい。

だとすると、芳田源に一杯食わされたのか。その可能性も低い。腹黒い中年だとは思ったが、それは目的の為なら手段を選ばない、そういう類の黒さだ。そんな意味のない悪戯を彼がするとは思えない。第一、何のメリットもない。

が  
芳田源が彼女を指名したのにはそれなりの理由があるはずなのだ

「お待たせしました」

五分ほどして、昌美が戻ってきた。深々と頭を下げ、

「申し訳ございません。塾の講師、所員の名簿を調べましたが、篠塚登喜夫という人物はいませんでした」

「いない？ そんな筈はないんですが」

「いえ、事実です。失礼ですが、何かの間違いだと思えます」  
「……………」

訳が分からなくなった。この関係者がいうのだから間違いはないのだろう。しかし、それでは篠塚登喜夫という人物はいつたいなんなのか。ここのスタッフではないのなら、わざわざ人類進化促進塾にまで侵入した意味がない。芳田源はどういうつもりであんなメモを渡したのだろうか。これでは全くの無駄足ではないか。

ともかく佐々木と相談して、体制を立て直そう。そう思った石和は、

「分かりました。お手数をおかけして、どうも申し訳ありません」

と、言って中央フロアに戻ろうとした。すると、

「あ、お客様。お待ち下さい」

今度は逆に石和が呼び止められた。石和が振り向いた瞬間、昌美は石和の手を掴み、ぎゅっ、と握りしめた。

「こちら、お客様の落とし物です。お返しいたします」

手の中に入れられた物がなんなのか確認する間もなく、横川昌美は一礼して去っていった。右手を開くと、そこには黒色の携帯電話があった。自分のものではない。スーツの左側内ポケットに手を当

てると、自分の携帯が入っているのが分かる。

他の人の携帯と間違えたのだろうか。昌美を呼び止めようとして、寸前で踏みとどまった。携帯のランプが点滅し、外線モードになっている。どこかへ繋がってるのだ。

（なるほど。そういうことが。随分と回りくどいことをするヤツだな、ったく）

昌美の意図を理解した石和は黒色の携帯を開き、耳元に当てた。

『はっ！ なかなか察しがいいじゃないか。このままアイツに携帯を返したり、電源を切ったりしたら、そのまま相手をしないつもりだったかな』

「気付いたのは偶然だ。察しは関係ない」

『知ってるか？ 運も実力のうちってな。平行世界において、ヒトは常に取り捨選択を迫れている。強い人間は無意識化で良い選択を常に選んで、良い未来へ進んでいく。それが運を引き寄せるって事だ。つまりアンタは自分で偶然を掴んだ強い人間ってことだ。誇っていいぜえ』

「……その為にわざわざこんな持って回ったやり方してるのか？」

『ははっ！ 怒ったのか？ アンタ、短気だねえ。俺はアンタと赤の他人だ。出向く義理はねえ。それをわざわざこうして出てきてやったんだ。少しくらいゲームに付き合ってもらっても罰はあたらねえと思うがねえ』

愉快そうな声で笑う。石和は眉を潜めた。随分と破天荒な性格のようだ。

『まあ、今言った事はあくまでも二次的な要素よ。こうする必要が

あつたんだ。昌美がさつき言つたら？ 俺はその所員でも講師でもない。本当のことだぜえ』

「え……？」

『いやいや、正確には元、と言つた方がいいかあ？ 今はお尋ね者の身、そこにいる塾の連中はみんな俺にとつての敵つて訳だ。アイツが俺の唯一の外交手段つてワケ。オーケイ？』

「いや、全然事態が飲み込めないんだが……どういふことだ、いつたい？」

『ああ？ 飲み込みが悪いなあ。察しはいいけど、頭は悪いのかあ？ それともアンタ、事情なあんもしらないの？ はははっ！ あのじーさんも意地が悪いねえ。なにも知らない一般市民巻き込みやがったのか！ 災難だねえ、アンタも』

「悪いが、説明してくれるか？」

『ノンノン、駄目だね。今も言つたら？ そこは俺にとつて敵の巢窟。敵地なワケよ。この携帯だつて、ダミー回線と暗号を複雑化して、会話を傍受できないようにしてあつけどよ。それでも、その背後にいる連中なら突破しかねないのよ。長話は危険過ぎるわけ。そんな話をする暇もないし、リスクはなるべく犯さない方向でいきたいからなあ』

「……なら、どうすればいいんだ？」

『アンタが持つてきたあのメモな、筆蹟鑑定をさせてもらった。こつちのコンピュータでスキャンしてなあ。結果、本人のものと合致した。間違いなくあのじーさんが書いたメモだ。そして、じーさんから、あんたからコンタクトがあるから、協力してやつてほしいと連絡があつたのよ。とりあえず、こちらが用意した条件はすべてクリアー。コングラッチュレーション！ ははっ！ まあ、話を聞く限り利害は一致してそうだし、こつちもメリットがありそうだからなあ。色々話を聞かせてやつてもいいぜえ？』

「会つてくれるのか？」

『夜七時、ビジネスシティの外れにある、廃ビルに一人で来な。詳

しい住所はその携帯にメモリーしてある』

「一人？ 相方がもう一人いるんだが」

「相方？ 駄目駄目。俺が頼まれたのはアンタ一人。それ以外は認めない。メリットもないし、人が多いと危険も増すだろお」

「メリットはある。俺と同じ同僚で、一番信頼できる男だ。そして、彼は瞬間物質転送装置を造った最高責任者と親友だった。色々な話が聞けると思うが」

「……まさか……佐々木勇二郎？」

石和は眉を潜めた。何故佐々木の名前を知っているのだろうか。

「はは、まさかいきなりう本命を連れているとはな！ 段階を踏んでから呼び出すためだったがオーケイ、オーケイそいつを例外として認めてやろう。だが、それ以上はどんな理由があるうとナシだ。これ以上、リスクは増やしたくないからなあ」

そう言って、携帯の通話が一方的に打ち切られた。石和は黒い携帯を閉じ、ふう、と溜息を吐いた。

篠塚登喜夫。どうも、想像してたよりも危険な人物らしい。たかが話をきくのに随分と手間の込んだやり方。それに他人の名前はおろか、自分の名前さえ口にしなかったことを考えると、相当周囲を警戒している様だ。お尋ね者と言っていたが、犯罪者なのだろうか。人類進化促進塾の人間はすべて敵と言っていたのも気になる。

なにか危険なことに首を突っ込んでしまった気がする。だからといって今更止めるつもりはさらさら無いのだが。

ともかく、もうここに用はない。中央フロアに戻ろう。佐々木に話して、今夜の打ち合わせをしなければならぬ。



と。その時、石和は妙な視線が自分へ向けられていることに気付いた。誰かに見られている。周囲を見回すと石和のいるフロアの壁際に少女が立っていた。

若い少女だった。勝義と同じくらいの年頃……五歳くらいだろうか。髪は栗色のロング。大きな白いリボンで後ろを結んである。肌は透き通るほど白く、服もまた純白のワンピース。少女が背にしている壁もまた、白。

白、白、白、白。その少女は白で満ちていた。

そのせいだろうか。その少女の存在感が薄く、儚げに感じられるのは。物理的に存在しない幻覚。あるいは透明な存在。そんな錯覚を石和は感じた。

「  
」

白い少女はじつとこちらを見ながら近づいてきた。幼いが、整った綺麗な顔立ち。しかし、そこに表情はない。端麗だが、それは無機質な人形に近い。

本来この年頃の子供は喜怒哀楽を激しく主張する生き物だ。だが、この少女は表情が全くない。目もどこか虚ろだ。少女の胸元にはプレートがつけられており、『NO・016 前原香住』と書かれている。ここの塾の生徒だろうか。

「え……と。どうしたんだ、君。迷子にでもなったのか？」

白い少女の視線に戸惑いながら、話しかける。返事はない。すつと、少女は手を伸ばし、石和の持っている黒色の携帯電話に触れた。

そして、

「禍なるかなバビロン。そのもろもろの神の像は碎けて地に伏した  
り」

少女はよく分からない言葉を口にした。瞬間　　光が走った。

「　　っ！」

それは白い光だった。石和の視覚を一瞬にして奪うほど、強い強い、鮮烈な光が黒い携帯から溢れている。石和は目がくらみ、目元を腕で覆ってよろめいた。足がもつれ、床に転倒する。

「っ！　あ……あれ？」

目を開けて辺りを見回す。そこに光はなかった。通りかかった親子が転倒した石和を見て、くすくすと笑っていた。右手の黒い携帯をみるが、何ともない。間近にいたはずの白い少女はフロアの壁際に寄りかかっている。

（な……なんだ、今のは？）

腰をはたいて、立ち上がると、白い少女はもうこちらを見ていなかった。奥のフロアに向けて歩いてゆく。石和は呆然として、その白い少女の姿を見送った。

なんだっただろうか。今のは。あまりにも非現実的な光景だった。いや、そもそも今のは実際起こったことかどうかすら疑わしい。あれほど強烈な光ならば、この施設内の人間も気付くだろうし、騒ぎになるはずだ。しかし、周りの人々は何事もなかったようにこの

フロアを通り過ぎている。

幻覚か。それとも白昼夢なのか。疲れているのかもしれない

石和は額に手を当て、首を左右に振ると、黒い携帯をポケットにねじ込み、中央フロアに向かって歩き始めた。

## 11 「招かれざる客」第三段階（了）

ビジネス・シティ。様々な企業関連の建物が集中している高層ビル群。日本の中枢でもある場所。石和が勤める第五研究所は三ツ葉社本社ビルの中にあり、このビジネス・シティの中央に聳え立つ巨大高層ビルがそれだ。巨大複合企業三ツ葉社は日本の頂点に立つ企業体であり、世界でも有数の民間組織と言われている。

この高層ビル群の中でも極めて大きく、突き抜けた巨大な建築物は日本の頂点である証を主張しているのか。それとも日本を支える支柱のような意味で造られたのか。どちらにも取れるほど、三ツ葉社本部ビルの外観は周囲を圧倒させる凄みを持っている。

「向こうはあんなにも晴れやかだというのに……こっちは随分と寂しいモノだね、とても同じビジネス・シティとは思えない」

佐々木は苦笑しながら周囲と本部ビルを見比べた。暗い闇夜を塗りつぶす街灯とネオンの光が、本部ビルの存在感を強くし、遠くからでも一目で分かるほどだ。ビジネス・シティ全域に渡って、本部ビルが見えない場所はないだろう。

一方、ビジネス・シティの外れであるこの場所は街灯もさほど多くなく、人気も全くない。夜風の唸りがわずかに聞こえてくるだけで、あとは静寂が支配している。

「向こうは華の中央エリア、こっちは破棄されて、持ち主が不透明

の廃墟ビル。奥は資材なんかを入れておく倉庫街。基本的に民家は  
ないし、寂れてるのも仕方ないさ」

言いながら石和は、はあ、と白い息を手に吐いて、両手をこする。  
コートを身に纏い、マフラーを首にかけているが、それでも冷気が  
身体を蝕み、体温を奪っていく。随分と冷え込む夜だった。

適性検査が終わり、勝義を自宅に戻した後、佐々木と石和は篠塚  
登喜夫の指定した場所へと来ていた。こうして、ぼろぼろになった  
廃墟ビルで待つこと三十分。真冬の閑散とした場所でこれだけの時  
間待っていればさすがに身体も冷えてくる。手足が悴んで仕方がな  
い。だが、佐々木はこれだけ冷えた空気に晒されても、けろりとし  
た顔をしていた。そういえば、佐々木が雪国出身だったことを想い  
出す。きっとこの位の寒さは寒さのうちに入らないのだろう。

「しかし、勝義くんにはびっくりしたなあ。まさか、音楽の才能が  
あるなんて」

笑いながら、佐々木が言う。人類進化促進塾の『適性検査』の結  
果、勝義は音感、楽器を弾く才能があることがわかった。特にピア  
ノ関連の才能に特化しており、磨き方次第では相当なピアノリストに  
なれるとのことだ。

「ああ。アイツ、ピアノなんか一度も触れたこともないし、興味も  
持ったことないのに才能というのはよく分からないところに埋もれ  
ているモノだな」

「やっぱり言わないつもりかい？」

「ああ。千恵子にも言わない。さっきも言ったが、才能は自分で開  
拓して引き出すモノだ。たとえば、特A級の才能だったとしてもそれ  
は変わらない」

「……石和くんはいい父親だなあ。勝義くんが石和くんを好くわけだね」

「子供が親を求めるのは当たり前だろ。親が子供の事を大切に思うのも当たり前のことだ。あまり変なことで感心するな、佐々木」

「あははは。別に照れなくてもいいじゃないか。子供を捨てたり、虐待したり、血の繋がった家族でも不遇な境遇の子供は年々増加してるんだよ。今みたいな事を当たり前のように言えるって、すごく大事なことなんじゃないかな」

「だから変なことでヒト持ち上げるなって　　ん？」

「？　どうしたんだい、石和くん」

「誰か……来たみたいだな」

そう言つて、石和は倉庫街の奥を指さす。足音が聞こえる。暗闇の中で影が動き、こちらに近づいてくるのが分かる。警察の見回りだとまずい。この時間帯に廃墟ビルなんかで彷徨うろたっているのを発見されたら、間違いなく職質される。石和と佐々木はビルの影に隠れて、のぞき込むようにして様子を見る。

「本当だ。誰だろう。待ち合わせの相手かな」

「どうかな。見る限り警察じゃなさそうだが……」

人影が街灯の下に入ると、遠目に姿がぼんやりと見えた。背は低く、体型は小柄の男だった。きよろきよろと周囲を見回しながら、歩いている。容姿はここからだとはよく分からないが、気のせいか、どこかで見たことあるような気がした

「ん？　ひよつとして……アレ、川上くんじゃないかな？」

「え？」

佐々木の言葉に石和は目を細め、対象を見据える。こちらに近づいてくると共に男の輪郭がはっきり見えてくる。普段見慣れない私

服を着ているので分かりづらいが、確かにアレは川上弘幸だ。間違いない。

「いや。びっくりだね、こんな所で会うなんて。おーい川上くんぐっ!？」

脳天気な声でビルの影からでて、川上に声をかけようとする佐々木。石和は慌てて、佐々木を羽交い締めにして、口を塞いだ。そのまま佐々木をビルの中に引きずり込む。

「んんっ! ん っ!」

手の中でもがき、声を出そうとする佐々木に石和は人差し指を立てて、小声で制した。

「シッ! 声を上げるな、佐々木。気付かれる」

かつん、かつん、と。足音が大きくなってゆく。やがて、石和達がいる廃ビルを川上が横切る。周囲をきよろきよろと見回している。何かを探しているようだ。石和は息を潜め、川上が通り過ぎるのを待つ。

かつん、かつん、かつん。

足音が小さくなってゆく。音が完全に聞こえなくなったのを見計らい、外を見回す。どうやら見つからずに済んだようだ。石和はほう、と大きく息を吐いて、佐々木から手を放した。

「んん……んぐっ……ぶはっ! い、いきなり何をすんだい、石和くん。ひどいじゃないか!」

「大声を出すな。まだ近くにいないかもしれない。川上にここへいる

ことを知られたくないんだ」

「な、なぜだい？ 丁度いいじゃないか。僕らのこれからの行動を川上くんにも話しておこうよ。僕らから接触を望んだとはいえ、相手は犯罪者かもしれないんだよ？ 予防線は張っておいた方がいいんじゃないかな」

石和は大きくかぶりを振った。

「……駄目だ。川上は危険だ。信用できない」

「ええ？ ど、どういうことだい？ だって川上くんは同じ情報を共有する仲間だろう。それに色々協力してもらってるし」

佐々木は目を大きく見開き、困惑している。佐々木は川上と仲が良いで話すのを躊躇っていたが、仕方がない。教えるしかなさそうだ。

「……この前 管理室の開閉履歴を調べた話はしたよな？ 戸木原が 細胞を外に持ち出しているかどうか、確認するために開閉履歴と監視カメラ動画を調べたんだ」

「うん。聞いた。結果、履歴と実験回数は一致しなかったんだろう？ 戸木原博士は 細胞を持ち出していた」

「その中で、ひとつ、おかしな動画を見つけてな。一日のうちに二回も戸木原が 管理室に入った動画があった。しかも三十分もしないうちにだぞ？ おかしいとは思わないか」

「……確かにそうだね。手続きも面倒だし、誰かに見られるリスクもあるのに、そんな短時間で 管理室に入るのは不自然かもしれない」

「不自然なのはそれだけじゃない。一つめの動画と二つめの動画、見比べるとどうも妙なんだ。なにかがおかしい。それが気になっとな。調べてみた」



言いながら、石和は携帯を取りだし、かちかちとボタンを押して、画像ファイルを展開した。携帯を佐々木に手渡し、それを見せる。液晶画面には二つの画像が映っており、どちらも戸木原淳の姿があった。

「これは？」

「二つの動画の写真だ。証拠として、携帯に保存しておいた。この二つの写真の違い……わかるか？」

佐々木はじつと携帯を見つめ、眉を潜めた。

「うーん……どっちも同じに見えるけど、確かになんか違和感があるような気がする。なんだろう？」

石和は無言で、とんとん、と人差し指で頭を叩いた。佐々木は「あっ！」と声を上げた。

「そ、そうか！ 髪の毛！ 戸木原博士の髪の毛の長さが違うんだ！」  
「ああ。一枚目の画像より、二枚目の画像の方が戸木原の髪が長いんだ。長いつて言ってもわずかな差だけだな。だが、わずか三十分でこれだけ髪の毛が伸びる人間なんて存在しない。二枚目の画像は一枚目の画像の後に来ることはあり得ないんだ」

「つまり、どちらかの画像はフェイク……偽物？」

「そうだ。過去の動画をすべて洗ってみたが、その中の一つの動画にまったく同じ動画があった。一回目の侵入履歴、監視動画はすべてすり替えられたものだ」

「な、なんで？ 何故そんなことをする必要があるんだい？」

「決まっているだろう。細胞を持ち出すためだ。そして、戸木原の動画をすり替えることによって、その事実を隠蔽しようとしたん

だ。俺もその動画が一つだけだったらず気付かなかっただろうな。しかし、その三十分後。本当に戸木原淳が 管理室に入ってきてしまった。犯人もこれは予想外だっただろう。それで、わずか一時間の間に二度も入室した奇妙な状況が出来上がってしまった訳だ」

「しかし、誰がいつたい！ なんの為に 細胞を？ どうして！」

佐々木が青ざめた顔で叫ぶ。石和は佐々木から目を逸らし、淡々とした口調で答えた。

「言わなくてもお前にも分かっているだろう？ あの部屋には俺たち五人しか入ることが出来ない。強固な防壁を突破し、自分の開閉履歴を戸木原のものに入れ替え、動画までもダミーにする。このメンバーの中でそんな芸当ができるヤツは一人しか……いない」

「っ！」

「そして、この場に現れたことで決定的になった。中央のエリアでばったり会うなら、話は別だが、ここはビジネス・シティの外れである倉庫街で、しかも今は夜だ。こんな場所で偶然会う事なんてあり得ない。明確な目的を持ってアイツはここに来たんだ」

「ひ、ひよつとして、僕らは今日一日、ずっとマークされていたってことかい？」

「多分な。そういうことだと思う」

「そんな……そんな……川上くんが 細胞を？ 嘘だ……信じたく

……信じたくないよ……そんなこと……」

佐々木は顔に手を当てて、壁に背を預ける。その時 再び、足音が聞こえてきた。小さな足音が次第に大きく、石和と佐々木の耳に鳴り響く。どうやら戻ってきたらしい。

「やはり俺たちを捜しているみたいだな……厄介なことになったな」

石和は外を見て、冷や汗を垂らす。これでは篠塚登喜夫が来たら、すぐ居場所がばれてしまう。いや、それ以前に追跡者がいることに気付いたら、姿を現さない可能性だってある。どうにかして、川上の追跡を振り切らないと

更に足音が大きくなった。こちらに近づいてくる。ビルの外に声が漏れたのだろうか。それとも、中を調べてみようと思ったのか。いずれにしるここにいるのはまずいようだ。

「ちつ……佐々木、奥に行くぞ！ここにいたら確実に見つかる」

石和は振り向いて佐々木に言葉をかけるが  
返事がない。  
いや、それ以前にそこに佐々木の姿がなかった。

「……佐々木？」

一人で奥に行ってしまったのだろうか。周囲を見回しながら、石和は奥へ進む。真っ暗で何も見えない。

「佐々木、いつたい何処に うわっ！」

暗闇の中、石和の腕が何者かにぐいと引つ張られた。あまりにも唐突の事で抵抗できない。そのまま石和は捕まれた手の力に翻弄され、どこかへ引きずり込まれた。バランスを崩し、そのまま転倒する。直後、扉がばしゃん、と閉まる音が聞こえた。

「いでっ！ つつっ……な、なんだ、いつたい？」

辺りを見回すが、やはり暗闇で何も見えない。立ち上がるうとすると、頭をごんっ！と天井にぶつけた。なんなんだろうか、この部

屋は。立ち上がる程の高さもない。打った頭をさすりつつ、座り込む。

「だ、大丈夫かい？ 石和くん」

「佐々木？ そこにいるのか。いきなり引つ張ったのはお前か？」

「いや、僕もいきなり引つ張られて、この部屋に入れられて

」

「シッ！ 二人とも静かにしてください」

暗闇から佐々木ではない、第三者の声が出た。女の声だった。暗くて、見えないが石和のすぐそばにいるようだ。女性特有の甘い香りと温もりがかすかに感じられる。

「誰だ？ お前は」

「黙って！ 音も立てないで……来ますよ」

聞き覚えのある声だった。が、声の主の事を深く考える暇もない。足音がビル内に響いた。川上がビルの中へ入ってきたのだ。石和は息を潜めた。

かつん。かつん。かつん。

静寂が支配する暗闇の中、一つの足音だけが鮮明に石和の鼓膜に響く。視界が一切遮断され、音しか聞こえない状態というのは想像以上に不安をかき立てられる。なんとも不思議な感覚だった。ひとつ、またひとつ足音が聞こえる度に胸の脈動が大きくなる。足音は更に更に大きくなり、音の発信源は目前となった。見えない扉越しに聞こえる、その音。おそらく五十センチも離れていない。

そこで 足音が止まった。

「  
」  
呼吸が止まり、脂汗がぽたぽたと流れ落ちる。身体は緊張で硬直し、まるで時間が止まったかのようだ。相反して、活動を活発化する心臓の鼓動。

永遠とも思える一瞬が過ぎた。

かつん。かつん。かつん。再び足音が聞こえてきた。今度は音が遠ざかってゆく。

……どうやらビルの中を確認しただけのようだ。完全に足音が聞こえなくなると、石和はようやく硬直の呪縛から解き放たれた。

「はあ……はあ……」

顔に小さな水滴がびっしりとこびり付いている。この寒さの中、ものすごい量の汗だった。石和はそれを腕の裾で無造作に拭いながら、呼吸を整える。

「はあ……はっ……はははっ……」

頭が冷えてくると次第におかしさが込み上げてきた。毎日、顔を合わせ同じ研究をしている同僚に見つかるまいと。こんな場所に隠れ、これほどの緊張感を味わうなんて。

まるで子供の頃に体験した鬼ごっこだ。いい年になった自分がこれほど真剣に隠れん坊をしているかと思うとおかしくてたまらなかった。

急に視界が開けた。部屋の電気がついたのだ。目の前で佐々木が疲れた表情で座り込んでいた。佐々木と目が合うと、力ない声ではは、と笑った。

「どうやら、佐々木も似たような心境を味わったようだ。この状況、笑うしかない。」

自分たちが犯罪者にでもなったような錯覚を覚える。

「乱暴な真似をしてすいませんでした。緊急事態だったもので」

傍らから女性の声が聞こえてくる。目を向けると、そこには綺麗な若い女性が座っていた。私服で、化粧も落としているので印象はだいぶ異なるが、やはりその女性は見知った顔だった。

「あの時のコンパニオン……？」

「はい、あの時はどうも失礼しました」

そう言って、昌美は軽く頭を下げた。石和はそれを苦笑で返し、辺りを見回した。辺り一面がクリーム色の無機質な部屋。大人一人が立ち上がれないほど、低い天井。部屋の中もやたら狭い。

「ひょっとして、ここは荷物を運ぶときなんかを使う」

昌美は頷いた。

「はい。搬入用のエレベーターです。身を隠すには最適な場所ですよ、ここは。ドアの光は漏れませんが、電気が入っていることも、外からは分からないように細工してあります。向こうからは機能しなくなっただただのエレベータにしかみえない筈です」

体制は万全のようだ。周囲に対する警戒は並ではないらしい。

「とりあず、助かった。礼を言っておこう。で、肝心の篠塚はどこにいるんだ？」

横川昌美は首を左右に振った。

「いえ、ここにはいません。わたしだけです」

「……は？」

石和は露骨に眉を潜めた。どういふことだろうか。待ち合わせを指定した本人がいないとは訳が分からない。昌美は、胸もとから携帯を取り出し、かちかちとボタンを押した。すると、搬入エレベーターががこん、と音を立てて、動き始めた。

エレベーターが下へ下りてゆく。昌美はしゃがんだまま、頭を下げて、言った。

「どうも、大変お待たせしました。改めて自己紹介します。横川昌美です。お願いします。どうかわたしに力を……貸してほしいんです」

石和と佐々木は大きく目を見開いて、顔を見合わせた。





11 「招かれざる客」第三段階（了）（後書き）

第三段階「人類進化促進塾」了。第四段階『鹿島大学付属病院』へ  
続く。

#### 第四段階『鹿島大学付属病院』1「消息不明の子供たち」

警視庁捜査一課、警部の役職を務める芳田源五郎は下町の居酒屋に来ていた。繁華街の外れにある何の変哲もない、和食を主体にした小さな店。しかし、本物の日本酒を数多く揃えてある穴場で、昔から幾度となく足を運んでいるお気に入り場所だ。非番の日などにはよく一人で訪れ、日本酒を堪能していたりする。もっとも、今日は日本酒を味わいに来たわけではないのだが。

店の中に入り、周囲を見回す。すると、座敷席にいる一人の男がこちらにむかって小さく手を振っていた。約束の時間よりだいぶ早く来たつもりだったが、もう到着していたようだ。

「いやあ、どうもこんばんは。先に一杯やらせてもらってますよ」

男はにへら、と笑いながら、ジョッキの中で泡立つビールを煽った。焦げ茶色のサングラスをかけた三十歳くらいの男だった。左耳にはピアス、顎には伸ばした髭、ラフなワイシャツの上に色物のジャケットを羽織っている。見るからに軽薄そうな男である。

AV女優のスカウトなどをやってそうなイメージを彷彿させる。しかし、見た目とは裏腹に彼は芳田が認めるほどの実力者である。

情報屋『ジン』。あらゆるジャンルの情報に精通し、頼めばほぼ確実に望んだ情報を提供してくれる情報屋だ。警察機関の情報ネット

トワークは日本でも有数のレベルではあるが、それでもどうしても手の届かない情報というものが存在する。決して警察という立場から聞き出せない、裏の情報。それをたやすく彼は引き出し、提供してくれる。

どんな手段で、その情報を入手しているのかは一切教えてはくれない。

情報バンクに強制侵入ハッキングでもしているのか。裏世界へのコネクションがあるのか。

どちらにしろ、まともな手法ではないだろう。

まあ、野暮なことは聞くまい、と芳田は思う。どんな手段であれ、望みの情報を持ってきてくれることには代わりがないのだから。

芳田はジンの向かい側の席にあぐらを掻いて座り込み、店員に烏ウ龍茶ロンを頼んだ。

「おや。今日は日本酒じゃないんですか？」

笑いながら、ジンは首を傾げた。

「アルコールを入れると思考能力が鈍るからな。話を聞いて、考えをまとめた後にしておく。お前さんもほどほどにしておくんだな」「平気ですよ。たかがビールの一杯や二杯で、仕事に支障ウがあるほど酔っぱらったりしませんで。ひっく」

……その割には顔がだいぶ赤らんでいるような気がするのだが。いつものことではあるが、不安になる。とつと仕事の話を進めるとしよう。そう思った芳田は運ばれてきた烏龍茶のジョッキをちびちびと口に流しながら、話を切り出した。

「で、なにかわかったのかの？」

ジンに頼んでいたのは人類進化促進塾に関する情報収集である。

人類進化促進塾。子供達の才能を科学的に引き出す施設。TVなどでも大きく特集されたことのある有名な施設である。才能というあやふやなものを科学を通して、形にし、それを伸ばす手段を造り上げたことは大いに評価する。『才能は努力で引き延ばすモノ』をモットーにしてきた芳田としてはあまり好きになれない手段ではあるが、その技術だけは賞賛に値するものだと思っている。

だが、それとは別問題として。

あの施設はどうにも胡散臭い。いかかわしい臭いがする。

どうにも『子供の才能を助長する』という看板を掲げた裏で、何か行っている気がするのだ。

根拠は全くない。だが、不安を誘い寄せる駒がいくつか存在するのは確かだ。

新井武之博士の失踪。

新井博士の変貌。現在もなお続く猟奇殺人。

そして、戸木原淳。

それぞれの駒を繋ぐ線はまだ見つからないが……確実にこの三つの駒には関連性がある。それは確かだ。そして、その中心となっているのが、この人類進化促進塾なのである。

捜査から外され、戸木原を捕まえて、尋問という手段が使えない現在、この施設の情報を集めることが、真実への近道だと思ったからだ。

それに 人類進化促進塾に勤めるコンパニオン

横川昌

美といったか。彼女から得た情報が真実なのか否か確かめる必要があった。それによって、今後の捜査の方向が大きく変わるかも知れない。

そう、芳田はこの事件から外されたからといって、真実の追究を諦めたわけではなかった。どうにも嫌な予感がする。このままだと取り返しのつかない事が起こるような そんな気がしてならないのだ。

芳田の言葉にジンはやりと笑いながら、頷いた。

「わかったから、旦那をお呼びしたんですよ。とりあえず、コレをどうぞ」

そう言っつて、ジンは鞆の中からA4サイズの紙束を差し出した。

芳田はそれを受け取り、ぱらぱらとめくり、中身に目を通す。

「例の養護施設の名簿です。施設の数全部で二十五。場所は北海道や島根、沖縄、石川県など……まあ、バラバラです。東京や首都に近い施設は一切ありませんでしたけどね。それぞれの養護施設には一切因果関係はなし。名簿の横に書いてある黒丸が引取先が見つかった子供。で、赤丸が」

「……行き先不明の子供達、か」

芳田の言葉にジンは無言で頷いた。赤丸がついた子供をしてみる。どの子供も年端のいかぬ少女少女ばかりだった。ほとんどが0歳から三歳。一番年齢が高い子でも六歳くらいだ。十代の子供は一人足りとしていない。

「表向きはすべて引き取った者がいることになってはいますがね。調べてみると、それは実在しない人物だったり、実在していても海外に行っていて、連絡が取れない人物だったり、どの子供の行き先も途絶えてしまっただけですよ。で、この子達に共通しているのはすべて、親類関係がない、天涯孤独な身であること。肉親はおるか、親戚、親の親しい友人すらいありません。万が一、いなくなったとしても誰も困らない。そんな子供達です」

淡々と語りながら、ジンはジョッキに残ったビールを一気に飲み干し、大きく溜息を吐いた。そして右手の指を二つ突き出し、芳田に向ける。

「で、二つめ。人類進化促進塾の搬入についてです。人類進化促進塾では教材や資材、研究器具なんかの搬入を週二回、定期的にトラックで搬入しているんですが、調べてみると、どうもおかしい。不定期な搬入があるみたいなんです。その搬入トラックは決まって従業員、講師たちが帰った夜中から明け方にかけてくるそうです。

通常搬入リスト表はどうか入手することが出来ましたが、その夜中の搬入に関してのリストはどこを探しても見つかりません」

「……………」

芳田はすうつ、と目を細めた。行く先がまったく分からない子供達。深夜内密に搬入される荷物。この二つの点を結ぶ線はひとつしか出てこない。

「人身売買 か」

「おそらくは」

と、ジンは頷いた。

「まあ、人身売買自体はそんなに珍しい事でもない、裏の世界ならどこにでも転がってる話ですからね。そんなに大したことじゃないんですが……ちよいとこの数は尋常じゃありませんぜ」

「人類進化促進塾は塾の看板を掲げているが、実態は脳をいじくるための研究機関だから。おそらくは体のいいモルモット……使い捨ての実験道具なのかもしれんの。少なくとも愛玩用や臓器密売に使用しているとは思えん。第一、肉体が未成熟すぎて、そういった用途には不向きだろうしな」

「ま、昔から、ヒトは実験動物なんかより、はるかに優れた実験材料だといえますからねえ。慣れてしまえば、倫理観や良心なんか紙切れ同然ですし。やれやれ、人間は怖いすなあ」

ジンは苦笑いを浮かべて、肩をすくめてみせた。

「しかしまあ、驚きましたわ。いやね、正直半信半疑だったんですが、調べてみれば、彼女の言った情報で黒になりそうな場所はすべてヒットしましたからね。『この二十五の施設と搬入トラックのリストを調べてほしい』って言うてきたときは、何事かと思いましたけど。間違いなく、彼女はこのことを伝えたかったんでしょよ」

横川昌美。例の十字路の事件が起きた後、芳田は再び人類進化促進塾に足を運んだのだが、そのときに出会った女性である。

『取引がしたい』

と、彼女は単刀直入にそう言った。正直、驚いた。こつも堂々と警察相手に取引を要求してくる民間人など、芳田の長い刑事生活でも数えるほどしかなかったからだ。

彼女の取引内容はこうだった。

「私はその事件に関する情報を持っています。それを教える代わりに佐々木という男と私を引き合わせてほしい。それも内密に」

唐突すぎるその物言いに芳田は苦笑した。

「……随分と一方的な取引だな、嬢ちゃん。取引とはもっと対等、あるいは自分が上位に立っているときに持ちかけるものだ。そんな唐突で一方的な物言いでは、子供すら墮とせんぞ」

「警察では今回の事件は絶対に深部まで介入できません。あなたも半年前の新井博士失踪事件で身を持ってそれを知っている筈です」

「……………」

「あなたが人類進化促進塾に何度も足を運ぶ姿を見かけています。搜索も打ち切られたにも関わらず。それはこの事件に仕事以上の感情を抱いているからではないのですか？

そして、昨日の事件。もし、連中が絡んでいるのなら、搜索は打ち切りになり、真相は闇に葬られたままになるでしょう。しかし、私はあなたが前に進める情報を持っている。そして、私はあなたに助けてもらいたい。これでは対等の取引になりませんか？」

「……前言を撤回しよう。いい駆け引きだ、お嬢ちゃん。なかなか興味を引かれる言い方だ。しかし、佐々木というのは一体誰かの？ 佐々木という名字の人間はこの世にゴマンといる。いくら警察の情報網でもそれだけじゃ調べようがない」

「いえ、調べられます。新井博士と親友だった方ですから。私もそれしか知らないし、訳あって公式な捜査を頼むわけにはいかななくて……でもどうしても会いたいです」

「その男と会ってお前さんはどうするつもりかの？」

「……詳しくは言えません。ただ、彼の力を借りたいのです」

「力？」



『はい。そして……その力で助けたい人がいるんです』

凜とした声で。彼女はそう言った。

半信半疑、面白半分でその奇妙な取引に応じた芳田だったが、こうして与えられた情報を調べた結果、切り口になるかもしれない情報を得ることが出来た。彼女の言葉に偽りがないことが証明されたわけだ。

「いやあ、しかし、彼女、ただの塾のコンパニオンでしょう。いわば、動く看板。給料はいいでしょうが、ただの看板がそんな施設の暗部まで知っている筈がないと思うんですがねえ。彼女、いったい何者なんですか？」

「ただのコンパニオンだろうが、『女性』であるのなら、情報を得る機会はいくらでもある。助けたい人がいる、とはそういうことなのだろう」

ジンは一瞬困惑した顔をしたが、

「ああ、成る程。そういうことですか」

と、頷いた。

と。その時、芳田の胸ポケットに入っている携帯からメロディが流れ出した。メールの着信メロディだった。携帯を取り出し、メールを開くと、芳田は笑った。

「どうやらこれでワシと横川昌美の取引は成立したようだな」

言いながら、芳田は携帯のメールをジンに見せた。『無事、佐々

木博士と石和博士に合流できた。感謝します』と書かれていた。

「ははっ、ソイツはよかったですなあ。私も骨を折った甲斐があるつてもんでさあ」

「苦情も書かれていますぞ。やり方が回りくどかったです、だと」

「それはホラ、こちらにやり方はすべて任すということだったんで篠塚登喜夫の演技の電話なんか入れて、楽しんだのは否定しませんがね。彼の性格は詳しく知りませんでしたから、破天荒なキャラを造らせて頂きましたよ、ははは」

心の底から愉快そうな声で笑うジン。完全に遊んでいる顔だった。芳田が呆れ顔で溜息を吐くと、ジンはぱたぱたと手を振り、

「いや、でもね。ただ、遊んでああいうシチュエーションにした訳じゃありませんぜ？ただ単純に会わせたたのでは、人類進化促進塾の連中に目をつけられますからね。慎重に慎重を重ねたって訳です」

佐々木の親友である石和という男を餌に彼を呼び出す。確かにやたら遠回しだが、今回の方法はある程度は必要だった。芳田が仲介して直接佐々木と昌美を会わせてしまつては、芳田自身が目をつけられる危険性があつたからだ。彼女も人類進化促進塾内では一介のコンパニオンを装っていたし、連中の目から逃れるには今回のやり方は最適だったのかもしれない。篠塚の破天荒な性格はやりすぎだと思つたが。

「……ともかく、これであの嬢ちゃんとの取引は完全に成立したわけだ。上手くいけば、もう少し彼女から情報を引き出せるかもしれないが、お前さんはお前さんで情報収集を続けておいてくれ。今回の情報はいつもの口座に振り込んでおく」

そう言って、芳田は店員に日本酒の注文をした。話は一区切りついた。あとはゆっくりと酒を楽しむとしよう。注文した酒が置かれ、猪口に注いだ日本酒を口にしようとした瞬間、ジンはそれを手を前に突きだして、それを制した。

「へへっ、旦那。少しばかりそれは早いかもかもしれません？」

「……………？ どういうことだ？」

「私の話にはまだ続きがあるってことです。しかも特ダネ。ちよいとヤバイ橋を渡りましたが、どうにか情報の一端を入手しました。人類進化促進塾が秘密裏に行っている研究内容です。こいつは別料金になりますけど、いかがいたしますか？」

勿体ぶった話し方をするジン。いつもより値が張る情報だと言いたいのだろう。芳田は迷うことなく、頷き、

「買おう。聞かせてくれ」

と、言った。『どうもまいどありっ！』と、軽快な声を上げると、ジンは手を挙げ、店員を呼ぶとビールの大ジョッキとつまみを五つほど追加した。まだ飲むらしい。芳田は猪口に入った酒を静かにテーブルの上に置いた。どうやらもう少しお預けにしなければならないうのだ。こちらの我慢もお構いなしにジンは四杯目となった巨大ジョッキをぐいぐい煽り、心地よさそうな溜息を吐いている。旨そうな飲みっぷりだった。だいぶ酔いが回っているようだが、大丈夫だろうか。

「さて、話の本題に入ります。さっきの人身売買の話をしましたがおそらくそれに関わる研究だと私は思っています。この研究の為に子供を購入し、実験材料として使っているのではないかと。ある意味人類進化促進塾のコンセプト、『才能を見極め、引き出す』、とま

まったく同義の研究ですよ、ひっく」

真っ赤になった顔を皮肉気に歪め、ジンは言った。

「『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』

よ

人外の力を得るための、禁断の研究です

## 2 「横川昌美」

搬入用エレベーターを出て、廊下を歩く。横川昌美が先導し、佐々木と石和が後を追う。

「驚いたなあ……完全に放置された廃ビルだと思ったのに」

佐々木が周囲を見回しながら、呟く。壁が床がくすみ、所々ひび割れている場所があるが、綺麗に掃除されている廊下。天井に連なる蛍光灯も白い輝きを放ち、切れたものは一つとしてない。見た目少し古い印象を受けるが、上とは雲泥の差だ。

「稼働しているって言っても、この地下五階だけです。さすがにすべての階を綺麗に維持は出来ませんしね。それには手の施しようが無いくらい老朽化が進んでいますから、手を入れようと思ったら、一度取り壊して再構築しないと駄目かもしれません」

昌美が苦笑いを浮かべつつ、言った。

「まあ、それだと意味がないんですけどね。この場所は廃墟同然、奥は夜には人氣が全くなくなる倉庫街。浮浪者もほとんどよりつかないですし、隠れ家として使うにはうってつけの場所って訳です」「電気はどこから持ってきているんだ？ ビル本体があの有様じゃ通常の電力は持ってこれないだろう」

「ここには小型の発電施設があるので、それですべて賄ってます。

ガスや水道、光回線なんかも使えるように改良しました。その辺りは法に抵触する手段をいろいろ使ってるので、割愛しますけど」

石和の質問にそう答えて、『あはは』と笑う。大した徹底ぶりだった。まさかこんな場所に人が住んでいるなんて、夢にも思わないだろう。

「しかし、そこまでして隠れなければならない理由ってなんだ？ 篠塚はいつたい何をやらかしたんだ？」

「……篠塚くんは悪い事なんてなにもしてないです。むしろ逆。間違った方向に進もうとした研究を止めようとしたんです」  
「研究？ 才能を引き延ばすための？」

昌美はおおきくかぶりを振った。

「違います。あれは 悪魔の研究です。少なくともヒトの研究じゃないと思います」

憂いた表情で昌美は俯く。

「最初はただ、幼い子供の才能を最大限に引き出す。それだけを目的に人類進化促進塾がありました。だけど、あのヒトが入ってきてから、すべてがおかしくなり始めたんです」

石和は目を細め、

「ひょっとして……戸木原のことか」

と、言った。昌美はこくり、と頷いた。

「……あの人は怪物です。あの人に関わるとみんなおかしくなってしまう。だから、みんなを止めようとしても篠塚くんは止められなかった。正しいことをしているヒトが誰もいなくなつて、篠塚くんは異端者になつた。追放されて、追われる身になつてしまつたんです」

「戸木原博士が怪物？ どういうことだい、いつたい」

佐々木のその問いに昌美は答えなかった。顔を上げると、笑顔を浮かべ、

「着きました。ここです」

と、歩みを止めた。カード式ロックドアの前だった。昌美が懐から出したカードを挿入口へ差し込み、横にある暗証番号ボタンを押す。がこん、とロックが外れる音がして、ドアが自動的に開いた。

「どつぞ」

昌美に促されて、石和と佐々木は部屋の中に入った。ここに来た目的をまだ石和達は聞かされていない。一体何があるというのだろうか。中は真つ暗で何も見えない。ぱちん、と音が鳴り、視界が開けた。昌美が照明をつけたようだ。

「な……」

「こ……これは……」

目の前にあるものを見た瞬間 石和と佐々木は大きく目を見開いて、啞然とした。

見間違ひではない。酷似した機械でもない。石和達は毎日の様に

その機械に携わっているのだから、決して見間違えたりなど、しない。

全長二メートルほどある、巨大なカプセル状の機械。カプセルがひとつしかなかったり、コードが剥き出しだったり、細部が知っているものとは違つが、間違いはない。

「……………瞬間物質転送装置」

佐々木が呻くように呟いた言葉に、昌美は深々と頷いた。

「さすがですね。見ただけでこの機械がなんであるか分かるなんて……………この機械をよく知っている証拠です。やはり、あなたはあの『佐々木』さんなんですね」

目を細めて、微笑む昌美。その表情にはどこか安堵感のようなものがあつた。佐々木は混乱した。

「え？ な、何故僕の名前を？ ……君はいつたい」

「あなたのことはあの人からよく聞かされていました。佐々木は俺の親友だつて。息子の第二の父親だつて。誇らしげに語っていられましたよ」

「ま……………まさか……………」

昌美は再び頷き、そして言った。

「はい。失踪した新井博士はここで過ごしていたんです。そして、この瞬間物質転送装置は新井博士本人がここで造り上げたものなんです」



石和と佐々木の顔が驚愕に歪んだ。

### 3 「託された遺産」

昌美の話によると、新井武之博士は半年前の失踪後、ずっとここに身を潜めていたらしい。その二ヶ月後には人類進化促進塾の研究員、篠塚登喜夫も塾の人間に追われ、ここで暮らす事に。

昌美は二人の逃亡生活の補佐をしていたのだという。この場所に二人がいることは昌美以外誰も知らない。食料の調達や服、その他生活用品を購入し、誰も気付かれないように注意しながら、この廃ビルへ潜り込み、二人を支援する。

そんな生活をずっと続けてきたそうだ。

「あんたは何故そんな二人に親身に？ コンパニオンって言ったが……本当は何者なんだ？」

と、石和が問うと、昌美は手をぱたぱたと振った。

「あたしは正真正銘ただのコンパニオンです。ただ、あたしはトキくん……じゃなかった、し、篠塚くんが心配で……そ、それだけですよ？」

恥ずかしそうに顔を赤らめて篠塚の名前を訂正する昌美。トキくんというのは篠塚の愛称なのだろう。成る程、と納得する。野暮な

突っ込みはしないほうがよさそうだ。

しかし、その逃亡生活は十の昔に終焉を迎えているのだろう。ついでこの間、新井博士の変わり果てた姿を目撃したばかりなのだ。あの悪夢のような光景がすべてを証明している。

そして、ここに来てもお姿を現さない、もう一人の男もまた

「……二人とも、もうここにはいないんだな？」

その言葉に、昌美はこくと頷く。

「石和さんの電話に出たのは篠塚くんではありません。篠塚くん役を演じた別人です。人類進化促進塾内であたしがあいつた会話をするのは非常に危険なので、少し回りくどい方法を取らせて頂きました。どうもすいません」

申し訳なさそうな顔で頭を下げる。そうなるにあの芳田という刑事の意図のままに動いていたことになる。それが若干癪に障るが、真実を得るためだ。仕方がない、と割り切ろう。

「いや、それは別にいいが、どうして二人はいなくなっただんだ？ この場所がばれたのか？ それとも外に出たときに見つかって捕まったのか？ そもそも、なんで二人は追われる身となっていたんだか、俺たちにはさっぱり分からない。一から説明してくれないか？」

昌美は頷き、部屋の壁に掛けていた鞆の中から何かを取りだし、それを佐々木の前に差し出した。何の変哲もない、一枚のビデオディスクだった。

「これは？」

「新井博士があなたにへと。『もし自分に万が一のことがあったら、これを佐々木に渡してほしい』そう言われてました。中にはあなたへのメッセージが入っています。これを見ていただければ、現状を理解できると思います」

「新井博士が……僕に？」

佐々木は呆然としたような表情でそれを受け取った。ディスクを持つ佐々木の手がかすかに震えている。佐々木の中で様々な想いが渦巻いているのだろう。石和は佐々木の肩を叩き、無言で頷いた。しばらく固まったように佐々木は動かなかつたが、やがて、表情を引き締め、『うん』と頷いた。

ビデオディスクはその部屋に置いてあるワーク・ステーションでも動く規格のもので、その場で見せてもらうことにした。電源を入れて、ディスクを挿入する。

起動音が響き、再生が始まる。モニターが暗くなり、何も見えなくなつた。音も何も出ない。1分ほど待ってみたが、なにも映らない。困惑して、石和は昌美の方に目を向ける。何故かモニターから少し離れた位置で、耳を塞ぎながら目を瞑ってる。

彼女の不思議な挙動に眉を潜めた瞬間

『わっ！！』

と、大きな男の叫び声が聞こえてきた。鼓膜が麻痺しそうな大きな声だつた。画面一面にひげ面の男のアップが映っている。あまりにも唐突な出来事に啞然としてしていると、

『わははははは、引つかかったじやる！ 驚いたじやる！ 佐々木の驚いた顔が目には浮かぶわい！ はっはっはっはっ！』

野獣の様な男が豪快な笑い声と共にそんな事を言った。

「す、すいません。新井博士がこれの最初を見せるとき、許す限りの大音量で最初を見せて、驚かせてやれと。そういう指示だったので……」

申し訳なさそうな表情で、昌美は音量を普通に絞った。

まるきり発想が子供だった。いい年をした大人がこんな悪戯をすると誰が思おうか。完全に意表を突かれた形になり、石和の心臓がばくばくと驚きを訴えていた。

「は……ははは……新井さんらしいや」

佐々木は微笑みながら、モニターに触れる。

「新井さん……本当にここにいたんだ……新井さん」

佐々木の目からぼろりと涙がこぼれ落ちた。佐々木のその表情は半年ぶりに再会した懐かしさと、嬉しさ、そして悲しさが入り交じった複雑な表情をしていた。

顔が離れ、モニターに新井博士の全身が映った。黒髪、ひげ面、身体は筋骨隆々。似合わない白衣を羽織り、椅子の上に鎮座している。

一度見たら忘れようのない、圧倒的な存在感。間違いない。新井

武之博士である。

『久しぶりじゃな、佐々木。元気にしとるか？ ワシは世間では失踪したことになるが、この通り、ホレ元気いっぱいじゃ。むん！』

そういつて、カメラの中で筋肉をアピールするポーズを取る。長い逃亡生活を続けていたはずなのだが、やつれた様子は微塵も見あたらなかった。肉体だけではなく、精神的にもタフなヒトなのだろう。

『何故ワシが失踪したのか。何故、こんなところに瞬間物質転送装置があるのか。無論それには理由がある。そして、このビデオは万が一ワシに何かあったとき、お前に真実とあるものを託す為のものじゃ。そういつた仮定で話してゆくから、そのつもりでな』

自分の髭をもしゃもしゃといじりながら、新井博士は話し始めた。

『まず何故ワシがここにいるのかじゃが……分かりやすく一言で言え、三ツ葉社に喧嘩を売ってしまったんじゃよ。連中にとって、外部に漏れてはまずい情報をワシは持つておる。その情報を武器に意気揚々と攻め込んでいつたら、逆に捕獲され、監禁されてしまったんじゃ』

『なんとも情けない話じゃな』と、付け加えながら新井博士は肩をすくめ、苦笑した。

『しかし、人類進化促進塾の研究者である篠塚という男がワシを助けてくれてな。監禁されていた人類進化促進塾の地下から逃げおおせ、この廃ビルに逃げ込んだ、という訳じゃ。自分の研究に疑問を

感じ、良心の呵責からワシを助けてくれたそうじゃが……ヤツは命の恩人じゃ。篠塚のおかげでワシはこうして無事でいられるんじゃないからな」

「……やっぱり人類進化促進塾の中にいたんだね、新井さんは」

佐々木の呟きに石和は「ああ」と、答えた。新井博士を捕らえた人物は戸木原とその情報がばれてはまずいと思う連中だろう。

『篠塚はワシに非常に協力的だな。ここでの環境を整えてくれた上に、瞬間物質転送装置を造るためのパーツを横流ししてくれたんじゃない。まあ、そのせいで篠塚はワシを匿っていたことが発覚し、彼もまた追われる身となってしまったんだが。正直、悪いことをしたと思っておる。ワシには他に頼る身もない。彼の好意に甘えるしか選択肢はなかったんじゃない。だが、ワシもヤツらの目を逃れ、ただただ隠居生活に身を投じていたわけではない。ここでの逃亡生活を初めて六ヶ月あまり、いよいよ反撃に転じる時がきたんじゃないよ。この瞬間物質転送装置・改を使つての！』

意気揚々と叫びながら、新井博士は傍らにある瞬間物質転送装置のコントロールをばん、と叩いた。

石和は眉を潜めた。確かにこんな場所に瞬間物質転送装置があることに驚いたが、これの存在が反撃の鍵となるのが分からない。しかも、見たところ送信機しかない。ほかの場所に受信機があるのだろうか。いや、それ以前に瞬間物質転送装置は未完成の筈だ。そんなものをわざわざ造って一体どうするつもりなのか、さっぱり分からない。

『佐々木は不思議に思ってるじゃろうな。何故ここに瞬間物質転送装置』

装置があるのか。こんなものをここでわざわざ造って、何のメリットがあるのか、と。結論から言おう。聞いて驚くな、佐々木。

テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置は 十の昔に完成していたのじゃ。

そして、現在五十二台のテレポルト・ゲート瞬間物質転送装置があちこちで稼働しており、そのすべてのメンテをワシが行っていたんじゃよ。まあ。あくまでも極秘。一部の人間しか知らないし、使用するのもごくわずかな人間だけじゃがな』

「なっ

テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置が……完成していた？」

啞然とした声を上げる石和と佐々木。昌美の方に視線を向けると、深々と頷き、

「はい。本当です。テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置は完成して、すでに実用化されています。三ツ葉社関連の施設のみですけど」

と、言った。

『何故、テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置の完成が隠蔽されていたか。色々理由はあるが、この技術は人類にとってオーバーテクノロジーであることが一番の問題なんじゃ。考えてもみる。物質をほとんどのタイムラグもなく、一瞬で運んでしまう技術じゃぞ？ 戦争の進軍、暗殺などに利用すれば恐るべき効果を発揮するじゃろう。』

そして、生物と生物を融合することで造られる生物兵器への利用 挙げればいくらでも出てくるわい。現在の人類にはこの技術は手に余るんじゃ。この技術を公表すれば、必ず世界に波紋を呼びかけることになる。

だから、表向きは失敗という嘘で塗り固め、三ツ葉社内部のみで使用することにしたんじゃよ』



石和は新井博士に会ったときに、話していたことを想い出していた。

元々、この技術を生み出したかと思っただきつかけは人類の宇宙進出を手助けする為だったさうだ。未だに宇宙へ行くには莫大な費用とリスクがある。しかし、瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートがあれば、宇宙と地上へのリスクがゼロになり、誰もが宇宙へ進出できる。物資を宙へ送り届けるのも、一瞬で事足りる。そうなれば、人類の宇宙進出も夢ではなく、様々な夢が広がる。宇宙に夢を持っていた新井博士はそれを目標にこの瞬間物質転送装置を造り上げたさうだ。

しかし、現実は厳しい。世界にこの技術を提供すれば、新井博士の危惧した状況が間違いなく起こる。人類はどうしようもなく愚かだから。人々は人類の発展よりも間違いなく、個々のエゴを優先するだろう。なんと悲しい話である。

『さて、実働する五十二台の瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートがあると踏まえた上で完成させたのが、この『瞬間物質転送装置・改』テレポルト・ゲートと言う訳じゃ。こいつは特別製の。現在、実働している五十二台の瞬間物質転送装置ゲートに強制的に介入し、転送することが出来る優れモノじゃ。

つまり、この廃ビルから瞬間物質転送装置がある場所ならどこへでも飛べるといふことなんじゃ。無論、向こうからの操作は受け付けない、一方的な介入じゃ。これは誰にも止められん。電源ケーブルを斧で切断でもしない限り、向こうは一切拒絶できないのじゃよ。すこいじゃろ?』

自慢げに笑みを浮かべながら、ぼんぼんとその瞬間物質転送装置テレポルト・ゲート・改を叩く。

『ワシと篠塚はコイツを使って、今晚、ある場所へ飛ぶつもりじゃ。

それは事件の元凶となった場所で、事件の発端でもある。内密に侵入できるよう、篠塚が管理コンピュータに侵入し、その内部構造も綿密に調べてくれたんでな。ヒトが全くいない状態のときに飛ぶことが出来る。それでも安全とはいえん。次に見つかり、捕まれば今度こそワシの命運は尽きるじやろう。極めて危険　いや、無謀な行為だと思う。しかしこの事件の決着はワシ自身がつけなければならんのじゃ。何故ならこれは瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートがあったからこそ起きた事件だからじゃ。これを造ったワシには止める義務がある。何を犠牲にしてもな』

新井博士は決意の宿った目をカメラに向ける。そして、こちらに向けて、深々と頭を下げた。

『家族とお前にはスマンと思っておる。もし、お前がこのビデオを見る様な事態に陥っていたら、ワシはもうダメじやろう。代わりに家族を支えてやってほしい。ワシがいなくても充分生活は出来るほどの金は残してあるつもりじゃ。あとはメンタル面だけが心配でのワシの家族はお前を慕い、信頼している。特に息子の総一郎はお前に懐いとるしな。優しくしてやってほしい。そして、この瞬間物質転送装置テレポルト・ゲート。ワシに万が一のことがあったら、お前に託そうと思う』

「え……？」

新井博士の唐突なそのその言葉に。佐々木の目が大きく、見開いた。

『勝手なことをしてスマンが、以前研究所で使っていた佐々木の網膜と指紋のデータをこの瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートに取り込ませてもらった。コイツはワシか、佐々木でないと決して動かせない機械だということじゃ。コイツの使い道は佐々木、お前が決めてくれ。破壊するのも

いい。放置するのもいい。ワシが探していた真実を探すのもいい。すべては佐々木の判断に委ねることにする。ワシはどんなことになっても、なにも言わん。お前が考えて、決めてほしい』

「そんな……」

佐々木は俯き、小刻みに揺れる拳をぎゅっと握りしめた。

『一方的で勝手な願いなのはわかつとる。許してくれとしかワシの口からは言えん。もうどうあつてもワシは元の生活にはもどれんから。前に進むしかないんじゃ。例え先が泥沼だったとしてもな。だから……後は頼んだ』

頭を上げ、カメラに向けた顔は満面の笑顔だった。そして、まるでいつもの挨拶のような別れの言葉を口にする

『じゃあ、元気で暮らすんじゃぞ！ 早く嫁さんをもらえよ！ さらばじゃ！』

その言葉を最後に。画面が真っ暗になり、ビデオが切れた。それでも佐々木はしばらく無言で、モニターを見つめたままだった。それですべてが終わりだと思いたくなかったのかもしれない。

「……いつも一方的なんだね、新井さんは。直猛突進な性格でトラブルに自分から突っ込みたがる。そして、僕はいつも気が付かないうちに巻き込まれたりして……戸惑いながらも、そんなトラブルが嫌いじゃなかったけど。自分の最後まで……自分の都合でまた僕を巻き込んで……あははは、ひ、ひどいや。本当に最後の最後まで新井さんらしい……つく……う、うつつ……」

「……………」

佐々木にかける言葉などない。この後の結末を自分達は知っているのだから。何を口にしても空々しい言葉になってしまっただろう。

テレビ・レポート  
瞬間物質転送装置を使い、ある場所へ侵入したが、発見され捕獲された。そして　　という経緯でそうなったかは分からないが、新井博士は　細胞を投与され、ヒトを捕食する怪物に変貌した。十字路の事件以降、大きな話は入ってこないが、被害者が出ている話はいまもTVなどで報道されている。新井博士は未だ街を徘徊し、殺人を繰り返しているのだろう。

これ以上ないほど、酷い結末だった。死よりも残酷な、バッドエンド。

救いようがない。なさ過ぎる。

新井博士に協力をしていた篠塚という男もまた。

帰ってこなかったということは……無事ではないのかもしれない。下手をすれば、新井博士と同じ末路を辿っている可能性もある。二人の試みは完全に失敗だったということだ。

そして、これは他人事ではない。自分自身もまた、危険な領域に踏み込みつつあることを知る。

これは　　関わってはいけない情報だ。下手をすれば命に関わる闇の領域。

新井博士が語っていた一言。『三ツ葉社を敵に回してしまった』  
その結果が、数ヶ月に及ぶ逃亡生活と最悪の結末。ぞっとする。自分がその立場になったとしたら、自分はどうするだろう。家族を捨ててまで、真実を追うことが出来るのだろうか。

石和は両手を目の位置にまで挙げて、手のひらをじっと見つめる。手が汗ばみ、かすかに震えていた。これまで感じなかった負の感情が石和の中で、駆けずり回り始めていた。これ以上踏み込むのは止めた方がいいのかも知れない。

自分には千恵子がいる。勝義がいる。ことみがいる。

三人は自分の宝物だ。どんなことがあるうが、決して失いたくはないし、巻き込みたくはない。

家族の為にも、何もなかったことにして、このまま普通の生活に戻るのが一番かもしれない

「……なにを考えてるんだ、俺は」

眺めていた手をぎゅっと、握り拳に変えて、石和は大きく首を左右に振った。

何事もなかったことにする？ お笑いだ。そんなことが出来るはずがない。何故なら、自分はD-I計画の担当者だからだ。今回の事件は間違いなく、細胞が絡んでおり、一番の容疑者はうちのグループの主任研究員だ。

それだけではない、他の研究責任者 川上弘幸も 細胞を持ち出しているのだ。

そして あの十字路の惨劇。

無理だ。無関係でいられるはずがない。

すでに自分は巻き込まれてしまっているのだ。自分でも気付かないうちに。

戸木原が第五研究所を離れ、なにをしようとしているかは分からない。

川上が 細胞を持ち出し、何に使用しているのかは分からない。

しかし、細胞を知る数少ない存在の自分たちにはそれを止めなければならぬ義務がある。でなければ、取り返しのつかないことになる。

細胞。あれは外の世界に持ち出してはいけないものだ。

石和は目を瞑り、軽く深呼吸をする。

(考える。どうすれば主犯を捕らえ、引導を渡すことが出来るのか。冷静に理論的に考えるんだ)

以前、自分が佐々木に言って諭した言葉を思い出す。今度は自分にその言葉を言い聞かせる番だ。落ち着いて、少し考えをまとめてみるとしよう。

石和はデスクの椅子に座り、思考の底へ潜り込んだ。

#### 4 「昌美の決意」

新井博士は瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートを使った『ある研究』のを知り、怒りのまま、人類進化促進塾へ乗り込んだ。その研究の責任者が戸木原淳。新井博士と戸木原が言い争いをしていた目撃証言があることから、それは間違いないだろう。

そして、それが原因で人類進化促進塾の地下へと監禁されてしまった。それに見かねたのか篠塚登喜夫という人類進化促進塾の研究員が、新井博士を監禁から解放し、脱出させた。そして、この廃ビルの中で逃亡生活を続けていた。簡単に話をまとめるところということだ。ここで、大きな疑問点がふたつ浮上してくる。

まずひとつめ。新井博士の言っていた事件とはなんなのか。

これに関しての情報はまったくくない。先程昌美に聞いてみたが、新井博士が失踪した原因はまったく知らないと言ったことだった。

……と、なると、事件の概要を知っていたのは、篠塚登喜夫だけということになる。

新井博士は瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートがあったから、起きた事件だと言っていた。そして、それを阻止するが為に自分の人生を犠牲にした。よほどのことだろう。

しかし、これは予想がつく。明らかとなった三つの駒から結論を

導き出せる。

テレポート・ゲート  
瞬間物質転送装置を使用した事件。

細胞を持ち出していた戸木原。  
人外の怪物となった新井博士。

三つの駒が揃ったことにより、疑惑が確信に変わった。

そう……戸木原は人体と細胞を融合する実験を秘密裏に行っていたのだ。

第五研究所で無能を装っていた戸木原が。影で生物と細胞の融合に成功していたということだ。石和達の第五研究所では遺伝子操作を行うことにより、ようやく融合と安定を果たせたというのに。戸木原はその一歩先をいつていたのだ。

何故、動物ではなく、ヒトを使った研究が進められていたのか。それは分からないが。

「それにしても……いつたいアイツは何者なんだ？」

小さな声で独りごちる。国内で最高と言われるスタッフが集まった研究所の研究を影であっさり追い越すとは。恐ろしい才能の持ち主だ。

第五研究所で見てきた戸木原博士からはまるでイメージが湧かないほど、ギャップのある実力者である。同一人物であることが疑わしくなるほどに。

(いや……本当にヤツは俺の知っている戸木原と同一人物なのか？



やはり、戸木原を名乗る別人じゃないのか？)

そんな疑問が湧いてくる。

以前、戸木原は無能を装っていたと推測したが、本当にそんな装いが可能なのだろうか？

数日ならともかく、半年も演技した人格を装うには無理がある。そんなことをしても、必ず何処かボロが出るはずなのだ。

目的も不明瞭だし、そういった人格面に関してもなにかがおかしい、違和感がある。

おそらく 戸木原にはまだ、何かがあるのだ。それを調べる必要がありそうだ。

ふたつ目。新井博士と篠塚が何処へ跳んだのか。

戸木原が人類進化促進塾にいたことから、施設の中にある瞬間物質転送装置トゲートに跳んだと考えるのが妥当だが、それだけでは確信が持てない。石和は額に手を当てながら、

「あなた、行き先は知らないのか？」

と、昌美に向けて言った。

「え？」

「新井博士と篠塚の跳んだ場所だ。二人の世話をしていたんなら、最後に二人が何処にある瞬間物質転送装置テレポルトゲートへ跳んだのか。分からないか？」

昌美は俯きながら、かぶりを振った。

「……分かりません。瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートを造っていることは知っていました。目的も行き先も教えてもらえませんでしたから」

「人類進化促進塾の中、という事は考えられないか？ 戸木原はこの研究員だったんだろう？」

「可能性はありますけど……篠塚くんからも人類進化促進塾に瞬間物質転送装置ポルト・ゲートがあるなんて話は聞いたことありませんので、なんとも……その、すみません」

頭を下げようとする昌美を手で制して、再び思考の底に潜る。なにか……なにか方法はないか？ 人類進化促進塾の中に瞬間物質転送装置ポルト・ゲートがあり、そこへ跳んだと呼べる確信があれば、なにかの切り口になるかもしれない。五十二台の瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの場所が分かれば、確信が持てるのに

「　　っ！」

そこでようやく『ソレ』に思い当たった。そうだ。手がかりはある。

石和は瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの横にあるコンソールに駆け寄り、パネルに指を滑らせた。しかし、反応がない。網膜と指紋の照合が得られないと扱えないようだ。

「佐々木！」

カプセルの元で泣き崩れている佐々木に向かって叫ぶ。

「こっちに来てくれ。コンソールの認証を解除するんだ！」

「え……？」

涙に濡れた目をこすりながら、困惑の表情を浮かべる佐々木。説明するのもしどかしく、石和は佐々木の腕を引っ張り、無理矢理コンソールにある椅子に座らせた。

「ちょ……うわわわわっ！ な、なんなんだい、石和くん。今日の君はなんかちよつと乱暴だよ。ちゃんと説明してくれないと、訳がわからな」

「説明はあとだ！ この機械の認証はお前でないと解除できない。認証して、コンソールを扱えるようにしてくれ！ 調べたいことがあるんだ」

石和の一方的な言い方に佐々木は混乱した表情を浮かべたが、「わ、わかった」と、言って、パネルを操作して認証画面へと移動した。

網膜認証スキャンに顔を近づけ、赤外線が網膜をスキャンする。コンソールの傍らにあるプレートに左手を当てる。網膜スキャンと指紋認証の機械から、『ピッ』という音が流れ、コンソール画面に『complete!』という字が表示された。これで認証は解除されたはずだ。再び石和はパネルに指を滑らせる。

「第五研究所で使っていたOSとほとんど変わらない……これなら大丈夫だ」

ひとりごちながら、手慣れた手つきで画面を切り替えてゆく。

「い、石和くん……いったいなにを？ そのコンソールになにがあるっていうんだい？」

戸惑いを隠せない表情で、聞いてくる。石和は手を休めずに、

「瞬間物質転送装置テレポート・ゲートの場所を調べるんだ。もし、この機械が本当に現存する五十二台の瞬間物質転送装置テレポート・ゲートへ跳べる機械であるのなら、瞬間物質転送装置がある場所が記録されているはずだ。そして、最後に跳んだ使用履歴が残っているとしたら」

佐々木ははっ、とした表情を浮かべ、叫んだ。

「そうか！ 新井博士が跳んだ場所が特定できる！」

石和は頷いた。

「そうだ。おそらくそこが新井さんの言っていた事件の元凶となる場所だ。そこを調べれば、なにかわかるかもしれない！」

言いながら、石和はコンソールのエンター・キーを押した。画面が切り替わり、地図が表示される。

アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス……日本を始め、様々な国で赤いマークが点灯している。この赤い点が瞬間物質転送装置テレポート・ゲートがある場所に違いない。てっきり国内だけで使用しているのかと思っていたが、世界のおちこちに設置していたようだ。地図の外にも赤い点があり、そこには有人宇宙施設『あおぞら』と書かれている。

「すごい……宇宙まで」

大きく目を見開きながら、佐々木が呟く。『あおぞら』は三ツ葉重工が携わった宇宙ステーションの名前だ。おそらく物資の搬入に瞬間物質転送装置テレポート・ゲートを利用しているのだろう。新井博士の望んだ使用用途だ。これを期に宇宙進出が一気に進むのかも知れない。

日本にカーソルを合わせ、ボタンを押す。すると、日本国の地図と共に設置された施設の名前がずらりと表示された。国内の瞬間物質転送装置テレポの数は全部で三十一台。半分以上の瞬間物質転送装置テレポ・ゲートは国内にあるようだ。施設や会社名をひとつひとつ調べてゆくが……そこに人類進化促進塾の名前はなかった。石和は眉を潜めた。

「人類進化促進塾じゃ……ない？ だとしたら違う研究所か？ いたい何処に？」

「石和くん、使用履歴を調べられるかい？ 各地の地図を出すより、そっちのほうが手っ取り早いと思う」

石和は頷き、メニューを開き、『使用履歴』のウィンドウを出す。履歴が消去されていたら、足取りは掴めなくなってしまうが……果たして、残っているのだろうか？ 万感の想いを込めて、石和はインター・キイを押す。すると、画面が切り替わり

「……あつた」

小さな声で、呟く。画面には四つの履歴が表示されていた。

『十二月九日 AM 02:15 鹿島大学付属病院 11GAT

』

『十二月九日 AM 02:18 鹿島大学付属病院 11GAT

』

『十二月九日 AM 03:26 鹿島大学付属病院 11GAT

』

『十二月九日 AM 03:29 鹿島大学付属病院 11GAT

』

日付はつい最近のものだ。転送先は石和の知らない場所だった。

「かしまだいがくふぞくびょういん鹿島大学付属病院？ ……なんで病院にテレポート・ゲート瞬間物質転送装置が？」

額に手を当てて、考える。訳が分からない。隣で佐々木がモニタ  
ーを覗き込みながら、

「いや…川上くんに調査を頼んだとき、戸木原博士が造った研究  
員のメンバーに鹿島大学付属病院の名前があつた。これもひよつと  
して、戸木原博士が絡んでいるんじゃないのかな」

「病院に戸木原が？ まさか」

「大学病院の半分は研究機関として機能しているし、可能性はある  
んじゃないかな。この病院の資金提供が三ツ葉社であるなら、ここ  
にテレポート・ゲート瞬間物質転送装置が置いてあつても不思議じゃないと思う。それ  
に病院なら」

佐々木の声がそこで途切れた。

……人体実験の素材に事欠かない。そう言いたいのだろう。

石和は目を細め、鹿島大学付属病院の見取り図を画面に出した。

随分と細かいところまで調べられるようだ。この病院に設置されて  
いるテレポート・ゲート瞬間物質転送装置は全部で四つ。独立した地下のブロックにあ  
るらしい。石和は画面の見取り図を指さし、

「見る、佐々木。この地下の部屋 入り口がない。別のブロック  
テレポート・ゲートに瞬間物質転送装置が一台設置されている。そして、この施設の中  
テレポート・ゲートには三台の瞬間物質転送装置がある」

「つまり……テレポート・ゲート瞬間物質転送装置がないと中に入れな  
い仕組みになつ

てるってことだね。三台のうち一台は出入り用の送信機。そして、もう二台は研究用に使用されているものなんじゃないかな」

「多分な。一つの施設に四台に、瞬間物質転送装置テレポート・ゲートがないと入れない建物、か。それだけで充分いかがわしい香りがするな……」

更に調べてみると、四台のうち、二台の瞬間物質転送装置テレポート・ゲートの欄に『Danger!』と赤い文字が表示された。どうやら、このマークが付いている場所には転送できないらしい。

「なんだ？ 回線が遮断されているのか……いや、違う。OSのプログラムが書き換えられているんだ。侵入防止の為か？」

佐々木はかぶりを振り、

「だとしたら、他の二台も書き換えられているはずだよ。場所も同じ部屋にあつて、二台だけプログラムが書き換えられているってことは――」

「……大当たり、ってことだな」

石和が皮肉気に唇を歪めて言い、佐々木が深々と頷いた。

間違いなく、ここには何かがある。

新井博士と篠塚が跳び、帰ってこなかった場所　ここで人体をベースにした『鍵キ』が造られていたに違いない。

さて、これからどうするべきか。鹿島大学付属病院のことをどこかのデータ・ベースで調べるべきか。それとも。

……そこでようやく気付いた。横川昌美が何故、自分たちをこへ連れてきたのか。佐々木に遺言となったビデオディスクを渡す。それもあつただろうが、それだけではない。

『力を貸してほしいんです』

搬入エレベーターの中で。彼女は自分たちに向けて、そう言っていた。

つまりは、そういうことだろう。

「アンタはまだ諦めてないんだな。そして、その為に俺たち……いや、佐々木をここに来るように仕向けたって訳だ。違うか？」

石和は昌美に向けてそう訊くと、深々と頷いた。

「私をその転送先に飛ばせてください。篠塚くんを助けたいんです」「駄目だ」

にべもなく石和が告げる。昌美の顔が強ばった。

「何故です？ 篠塚くんを助けるには他に方法がないんですよ。そして、あなた方は新井博士がああなつてしまった真実を知りたいはずです。だとしたら、この機械を使うのは必然の筈です」

「万全の用意をして挑んだはずの新井博士と篠塚が帰ってこなかったんだ。こちらの位置は補足されていないかもしれないが、それでも警備は強化されているだろう。突発で俺たちが跳んだところで、すぐさま補足されるのがおちだ。危険すぎる」

「カメラを持って、転送します。ネット経由でこちらでモニター出来るカメラです。それを使って現場を押さえれば、万が一私が捕まっても、そちらにメリットが」



石和は立ち上がり、コンソールをばん、と強く叩きながら激昂した。

「誰がそんなことをしてほしいと頼んだ！　いくら真実を掴むためとはいえ、自分の犠牲を前提にした行動をするなんて間違っている！」

「でも、そのくらいの覚悟をしないと、篠塚くんは助けられません！　あたしにはその覚悟があります！　あたしが犠牲になったって構わない！　篠塚くんを助けられるなら、それでも構いません！」

「馬鹿なことをいうな！　新井博士や篠塚がなんでアンタに何も言わず、跳んだのか分からないのか？　アンタを巻き込みたくないのだ！　そのアンタが跳んで二人が喜ぶと思っているのか！　命を粗末にするな！」

「自分の大切なヒトを助けたいと想うのがいけないことなんですか！　なにもしないで諦めるなんて事、私にはできません。トキくんを助けたいんです！　このあたしの手で！」

石和の言葉に一步も怯まず。彼女は真摯な表情でそう言い返した。石和は椅子に座り直し、俯きながら、嘆息した。

「残酷なことを言うようだが……篠塚が無事である可能性はかなり低い。新井博士がどうなったかは知っているだろう？　生きていても篠塚がああなあってしまっている可能性は否定できない」

「……分かってます。可能性が限りなくゼロであることは。それでも、自分のこの目で確かめるまで、私は絶対諦めません。トキくんは私の大事な、大事な人なんです。私の半身とってでもいいくらいの。私はあの人がいないと生きていけない。だから、私を……跳ばせて……ください。っ……お願い、します」

「……………」

言葉の最後の方は声が震えていた。泣くのを必死に堪えているようだ。

昌美のその言葉に。

石和はかつての自分を想い出していた。

『きつとお前は……俺の半身なんだ。だから、お前がいないと生きていけない。そんな当たり前の事にも、今まで気付けずにいたんだ、俺は。ごめん、ごめん……千恵子』

七年前のあの日。航と決別したあの夜。

自分は千恵子を抱きしめながら、そう言った。その言葉に偽りはない。そして、その想いは現在でも変わらない。自分は彼女がいないと生きていけない。だから、もし彼女に何かがあれば命がけで護るだろう。

昌美も同じだ。眼に宿る強い光と表情がそれを表している。だから、昌美の気持ち痛みほどよく分かる。自分が同じ立場であったら、誰が反対しようが、間違いなく跳ぶことを選ぶだろう。

……だが、それでも。彼女を跳ばすべきではない。石和はそう思う。これは自分ではない、他人の生き死に関わる問題だ。それならば自分や佐々木が跳んだ方がまだ

「五分」

と、その時だった。石和が頭の中で葛藤を続けていると、佐々木が唐突に口を開き、そう言った。

「え？」

「ぜつたいに無茶はしない。感情を先行させて行動しない。手がかりがあつても、なくても五分で必ず戻る。これがこの瞬間物質転送装置・改ゲートを使う条件だ。守れるかい？」

佐々木はそう言つて、五本の指を強調するように手のひらを昌美に突き出した。昌美はぼかん、としていた。そんなにあつさり承諾するとは思つていなかったのだらう。

「佐々木！ お前までなにを！」

石和の言葉に佐々木は苦笑いを浮かべて言った。

「本当は……僕が行きたい。僕が跳んで新井さんの無念を晴らしてあげたい。だけど、この装置は僕しか扱えないんじゃないかそうもいかない。もし僕が捕らえられたら、そこで終わってしまうからね。だから……横川さんの意志を尊重してあげようと思う」

「危険だ。ミイラ取りがミイラになるだけだ」

「それでも、いくしかないと思う。川上くんに調査を頼むことが出来なくなった以上、僕らの力で真相を掴むチャンスはここにしかないんだ。だから五分だけ。臆病すぎるぐらい慎重になって、跳ぶんだ。逆に言えば発見されなければ、僕らは何度も跳ぶことが出来る。やってみる価値はあると思う。横川さん、もう一度言つよ。五分だ。守れるかい？」

昌美は表情を引き締め、深々と頷いた。

「はい。守れます。必ず五分で戻ってきます」

その言葉に佐々木は微笑み、

「石和くんもそれで納得してほしい」

と、言った。

「しかし……」

「……」

「……」

佐々木と昌美の目を交互に見る。目の奥に決意の光を宿してしまっている。石和は知っている。こういった目をした人間にはなにを言っても無駄であることを。

正直、危険な博打である。しかし、佐々木のいうことはもつともだった。川上の情報収集が使えなくなった現在、これしか前へ進む方法はない。

それに石和には決定権はない。この瞬間物質テレポート・ゲート転送装置・改は佐々木に委ねられ、その使い道を選んだのだから。忠告はできても止めることは出来ない。

無理矢理止めたところで、二人は躊躇わず転送先へ跳び、目的を果たそうとするだろう。

（仕方が……ない、か）

佐々木も昌美も。二人とも覚悟を決めている。だとしたら、自分も腹を括らないといけないう。石和は大きく溜息を吐き、観念した。

「……好きにしる」

昌美の表情が和らぎ、笑顔が広がった。

「佐々木さん、石和さん……その、どうもありがとうございます！」

深々としたお辞儀をする昌美に石和は無言で手を振って、立ち上がった。

「だが、やるからには徹底的にだ。俺と佐々木、二人でこのコンソールを操り、0・1秒でもはやく、こちらへ戻ってこれるようにフォローする。アンタも感情に流されたり、現場でパニックになったりしないよう、心の準備をしておいてくれ」

「わかりました」

昌美は力強く、頷いた。

「佐々木、このOSの中にマニュアルは入っているか？ 基本動作は第五研究所にあるものと変わらないみたいだが、受信機と送信機の切り替えなんかは覚えておかないとすぐに対応できないだろう」

佐々木はコンソールのパネルを叩きながら、

「ちょっと待って……うん、入ってる、入ってる。そうだね。基本動作は一緒だし、切り替えもそんな難しい操作は必要ないみたいだ。石和くんだったら、すぐ扱えると思う」

「シミュレーション・プログラムは？」

「勿論、入ってる。通常操作から緊急時の対処の仕方まで。その辺の市販プログラムより丁寧な造りだよ」

「上等だ。じゃあ、一つずつこなして、練度を上げてゆこう。向こ

うに人がいない時を狙い、彼女を転送させる。その後、五分以内にむこうの瞬間物質転送装置を送信機に切り替え、こちらへ再転送。<sup>レポート・ゲート</sup> シュミレーションを納得いくまでやるぞ」

言いながら、上に羽織っていたコートを脱いだ。コートを着たままでは操作がしにくい。この部屋は暖房も効いているし、上着がなくても支障はないだろう。

と。その時、石和は妙なことに気付いた。自分の胸元が光っている。青白い光が着ているジャケットの中からこぼれ出ている。

なんなのだろうか、この光は。胸元に手を入れ、探る。

「……携帯？」

人類進化促進塾の中で横川昌美から渡された黒い携帯だった。携帯全体が蒼白い光を放っている。この光は以前見たような気がする。

そう……人類進化促進塾の中で、幼い少女に携帯を触られた時だ。あの時ほど強烈な光ではない。小さく淡いものだが、この蒼白さはあの時のものだ。

(あれは白昼夢じゃなかったってことか？ この携帯はいつたい……?)

右手で掲げて、まじまじと眺めていると、やがて光は消えてなくなった。それっきり光らない。携帯を開いて中身を確認したが、着信もメールも来ていなかった。

「それじゃあ、まずマニュアルを出して、と。じゃあ石和くん、これを読んで　　って、どうしたんだい？　携帯なんかぼうつと眺めちゃって」

きよとんとした表情で訊いてくる佐々木。石和は携帯から目を離さず、

「なあ、佐々木。その……変なことを訊くんだが。携帯って光るものなのか？」

「え？　そりゃあ光るんじゃないかな。メールや着信が来たときに」

「いや、そういうんじゃない。その携帯全体が蒼白い光に包まれる変な現象というか」

「???」

「いや、分からないのならいいんだ。なんでもない」

手を振って、話を打ち切り、昌美の元へいく。

「なあ、この携帯なんだが……」

「ああ、それですか。ただの使い捨て携帯ですので、そちらで処分して頂いても」

「いや、そうじゃなくてだな。この携帯って、なにか特別な機能があったりするの？　例えば携帯全体が蒼白い光を発するような機能とか」

昌美は少し考え込み、

「いえ、特になにも。基本的な性能だけで、そんなオプションはなかったと思います」

と、言った。

「……………」

では、さっきの光はいったい何なのだろうか。薄気味が悪い。

「おゝい、石和くん。なにをしてるんだい？ マニュアルを確認して、シュミレーションを始めよう」

背後から、佐々木が急かしてくる。考えても分かりそうもないし、なにか実害がある訳でもなさそうだ。石和は黒い携帯を再び胸元にしまい込み、コンソールのパネルに手を伸ばした。

「悪い。それじゃあ始めようか」

石和は気付かなかった。携帯を閉める瞬間、液晶に不可思議な文字が浮かび上がっていたことに。それは 人類進化促進塾の中で白い少女が口にした、奇妙な言葉だった。

禍なるかなバビロン そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり



## 5 「ASH（アッシュ）」

ビジネス・シティ。倉庫街。

夜の闇に数少ない街灯が周囲を照らし、静寂が支配している。空気はこれ以上ないほど、冷たく冷え込み、空は白くくすんでいる。ほんのわずかではあるが、雪がちらついていた。これ以上天候が悪化するようなことになれば、間違いなく本格的な雪がビジネスシティ一帯に降り注ぐことになる。

常に人通りや車通りがある中央なら雪が積もる可能性は少ないが、倉庫街は人気もなく、車もこの時間ではまったく通らない。これ以上降りが強くなれば、間違いなく倉庫街が白銀一色に染まってしまふであろう。

「……ありゃあまあ、降ってきたつすねえ」

大型搬入トラックの運転席で暇を持てあましていた、からさわただひろ唐沢忠広が開けた窓から手を伸ばし、雪の感触を確かめながら、そんな言葉を零した。分厚い生地で出来た紺色の作業着を着込んでおり、頭に被った帽子に登美丘工業と書かれたロゴが大きな字で刻まれている。

「天気予報じゃけっこう降るって言ってましたし、あんまり降ると

作戦に支障が生じそうすね。おゝいやだいやだ」

大げさな身振りで、両手で自分の身体を抱きしめる唐沢。助手席にいた小田切はその拳動を一瞥したが、すぐさま目を逸らし、耳に手を当てて俯いた。彼もまた、登美丘工業の制服を身に纏い、帽子を深く被っている。左耳には小型のインカムをつけており、いつでも『状況』を開始できるように身構えていた。小田切は目を細めて言った。

「降り積もるにはまだ時間がかかるだろう。いまの降りならまだ問題ない。それに逆に考えれば、雪が激しくなれば人通りがなくなるから、我々が動きやすくなる」

「はははっ、モノは考えようって感じっすね。まあこの寒さの中、こんな場所に来る奴なんていないと思いますけどね」

愉快そうに笑いながら、煙草に火をつけ、紫煙を揺らめかせる。

小田切は眉を潜めた。

「……リラックスするのはいいが、油断はするな。相手は『常識の力』が通じない連中だ。なにがあるか分からないからな」

「分かってますっつて。大丈夫っすよ」

唐沢は手をぱたぱたと振りながら、頷く。小田切はずれた眼鏡をくいと人差し指でなおしながら、嘆息した。どうにも緊張感に欠ける男である。研究員としては有能な男であるし、いざというとき実行力と度胸があるので頼もしい男ではあるが。

元々、今回の仕事は畑違いもいいところだ。しかし、今回の作戦の発案者は他でもない、小田切自身なのだ。

戦闘は向こうに任せるとしても、それ以外の指揮は小田切が執る

必要があった。

特にヨハネに搭載された反EPS弾を実践で使用するのは初めてなのだ。念には念を押して、行動しなければならぬ。チャンスが訪れたとしても、おそらく今回使用できるのは一度きり。失敗は許されないのだから。失

と、その時。小田切の左耳のインカムから、声が聞こえてきた。

『アルファ5よりアルファ0。聞こえるか？』

淡々とした感情が希薄な声。川上弘幸からの連絡だった。小田切はインカムを人差し指でたんたん、と二回軽く叩き、答えた。

「こちらアルファ0。どうした？」

『状況報告。たった今、EPSの反応を感知した。人類進化促進塾内で観測されたときほどではないが、かなりの高エネルギー反応。恐らく仕掛けてくる』

「場所は？」

『例の廃ビルの中だ。一度、あの中で微弱なEPSを感知したが、やはり間違いない。あのビルの中からEPSは放出されている』

小田切は眉を潜めた。

「しかし、先程調べたときは何も無い、只の廃墟ビルだった筈だ。目標の二人は一体何処に潜んでいるんだ？」

『我々はだまされていた。搬入用のエレベーターが巧妙に偽装されている。電源の通っていないエレベーターだと思っただが、特定の周波数をエレベーターの中にある機器に送ると、稼働するように細工されている。おそらくこの地下に目標の二人はいる』

「……なるほど、ようやく尻尾を掴んだという訳だ。しかし、搬入用エレベーターか。川上、稼働するように出来るか？」

『五分もあれば可能。しかし、この狭い搬入用エレベーターでは移動が不便だ。見つければ格好の標的となる。他にもルートを構築したほうがいい』

「分かった。作業班をそちらに向かわせる。非常用ドアを強制的に切開しよう。通常エレベーターもワイヤーを使えば、下へ降りられるだろう。計三カ所の侵入口を構築する。川上は搬入用エレベーターの作業にすぐ取りかかってくれ」

『了解した。通信終了』

川上との通信を終えると、小田切は回線を切り替え、全隊員用のオープン・チャンネルを開いた。

「アルファ0より、各員。標的を補足した。作業班は直ちにポイント1203に急行し、侵入ルートを構築せよ。ルートは計三つ。搬入用エレベーター、通常エレベーター、非常階段だ。繰り返す、ルートは計三つ。搬入用エレベーター、通常エレベーター、非常階段だ」

『ブラボーリーダー、作業班、了解』

「第一分隊、及び第二分隊は作業班の警備に当たれ。反EPS弾を展開した後、状況を開始する」

『デルタリーダー、第一分隊、了解』

『エコーリーダー、第二分隊、了解』

復唱の聲が小田切の鼓膜に響く。それと同時に搬入トラックのコンテナが静かに、ゆっくりとゆっくりと開いてゆく。搬入用トラック

クはあくまでも偽装に過ぎない。コンテナの中から武装した男達が  
統率された動きで、飛び出し、目標である廃ビルへ向かって走り出  
す。灰色の制服を身に纏い、両手にはサブ・マシンガンが装備され  
ている。制服の左肩にワッペンが縫いつけられており、『ASH<sup>アッシュ</sup>』  
というロゴが刻まれていた。

「うっひょおー、すっげえ。H&KのMP7ですぜ、アレ！ 第二  
分隊の方の武器は…まさか、C18FS!？」

唐沢が目を輝かせて、窓から外へ顔を出して、叫ぶ。

光学兵器C18FS。三ツ葉社が独自に開発した小型の高出力レ  
ーザー・ガンである。第一分隊が装備するMP7とほぼ同等の大き  
さと重量で、50?のアスファルトを軽く貫く程の威力を持ち、十  
二秒間の連続照射が可能だ。まだ試作段階だが、自衛隊の次期装備  
の候補として挙げられている兵器らしい。

「しっかしまあ、こうやってみると、なにかの特殊部隊や軍隊みた  
いっすね。とても警備会社の人間にはみえないっすよ」

「似たようなものだろう。『ASH<sup>アッシュ</sup>』は三ツ葉社関連の警備会社と  
なっているが、それはあくまでも表向きのことだ。テロ組織や犯罪  
者に対抗するには、どうしても力がある。圧倒的な武力がな。いわ  
ば、『ASH<sup>アッシュ</sup>』は三ツ葉社を守護する為の民間の軍隊といつてもい  
い」

「大仰っすねえ。確かに海外じゃあテロ対策にそういう組織も必要  
かもしれないけど、ここは日本っすよ。それに相手は特殊能力を  
持っているとはいえ、丸腰でしょ？ 臨戦体制で挑むのはいささか  
大げさな感じがするんですけどねえ。まるで戦争しにいくみたいっ  
すわ」

その物言いに。この男がいま、いかなる状況に置かれているか、把握できていないことを小田切は知った。小田切は表情を消して、胸元から黒い光沢を放つなにかを取り出した。

「え……？」

瞬間。唐沢の顔が凍り付いた。

ベレッタM92FS。拳銃だった。小田切は無言で銃口を唐沢に向けた。

「それ、本物　　っすか？　　は、ははは……なんの冗談すか」

唐沢が引きつった笑みを浮かべ、銃と小田切の顔を交互に見ている。

「……お前はなにもわかっていない。現在どれだけ危機的状況にあるのか。大仰？　　これでも足りないくらいだ。能力者は例え重武装だったとしても、光学兵器を使用したとしても、真っ向から対抗したのでは絶対に叶わない。反EPSアンチを使うことにより、ようやく互角に持つていけるのだ」

言いながら、銃の標準を唐沢の脳天に合わせる。唐沢の引きつった笑みが、ぐしゃりと歪み、『ひ……！』とかすれた悲鳴を上げた。

「緊張感がなければ、これから始まる作戦に生き残れない。油断と常識の概念を捨てる

んだ。見た目に惑わされるなミーティングで何度も何度もそう言ったはずだ。にも関わらず、それを受け入れられないのなら、作戦が始まった途端、パニックを引き起こし、マイナスのファクター

を生むだけだ。混乱した連中が被害を拡大したあの十字路の事件のようにな。そんな輩は……… 必要ない」

「そ、そんな………冗談、すよね？ 冗談って言うてくださいよ、主任………」

その言葉に答えず、小田切はトリガーに指をかける。そのままなンのためらいもなしに、トリガーを引く。撃鉄ががちんと音を立て、下り

「　　っ！」

………それで終わりだった。他にはなにもない。唐沢は強く目を瞑り、身体を強ばらせ、硬直を続けていたが……… なのにも起こらないのを不審に思ったのか。おそろおそろといった様子で目を開いて、こちらを見た。不発だった。というより、端からマガジンを入れていないのだ。銃弾など出るはずがなかった。小田切は顔を弛め、

「実感できたか？」

と、言った。

「え？ あ、あの………」

「いま危機感を感じただろう？ その気持ちをお忘れな。少なくともこの作戦内では平凡な日常と常識、倫理観を忘れ、常に気持ちを張り詰めておけ………そして、万が一のとき、自分の身は自分で護るんだ」

そう告げて、小田切はベレッタと実弾が入ったマガジンを唐沢に手渡した。唐沢は呆然とした表情でその銃をぎゅっと握りしめ、ごくりと唾を飲み込んだ。

『デルタ・リーダー第一分隊よりアルファ0。ポイントに到達。このまま周囲の警備に当たる』

『エコー・リーダー第二分隊よりアルファ0。ポイントに到達。このまま周囲の警備に当たる』

『ブラボー・リーダー作業班よりアルファ0。ポイントへ到達。これより作業へ入る』

インカムに入る『アッシュASH』からの連絡。小田切は一人頷き、答える。

「アルファ0、了解。フォックスノット第三分隊、ゴルフ第四分隊はA装備にて待機。各員、警戒を怠るな」  
『了解』

小田切はトラックの窓越しに見える廃ビルを眺めながら、小さな声で呟いた。

「さあ、俺たちの『戦争』が始まるぞ、武士……」



## 6 「量子分解と原子分解」

テレポルト・ゲート  
瞬間物質転送装置の欠点はブラフだとビデオでは言っていたが、  
厳密に言えばそれは違う。ふたつの個体識別情報が完全に認識され  
ず、ひとつに融合してしまう欠点があったのは事実で、それはけっ  
きよく改善できないままだったらしい。

個体識別の技術を断念した新井博士はそれをハードウェアの改善  
で克服した。

テレポルト・ゲート  
瞬間物質転送装置のプログラムはスキャン、分解、変換、転移、  
変換、再構築、と六つのプロセスに別れて実行される。スキャンは  
カプセル内の物質構成情報を読み取るものだが……このスキャンで  
わずかな異物が混入していたら、次のプロセスに移れないよう安全  
装置を組み込んだのだ。

そして、カプセルの中では徹底的な洗浄と消毒する機能をつける。  
そうすれば、分解する際に虫などが入り込んで、人体と他生物が融  
合してしまうなどという、最悪な事態は避けられる。

「あまりにも簡単で拍子抜けしてしまうほどの解決法だな、こりゃ  
あ……」

石和武士はコンソールに表示されているマニュアルの文章を読み

ながら、苦笑した。

解決と呼ぶにはお粗末な気もする。まあ、そういった最悪の事態が回避されるのであれば、三ツ葉社系列のみで使用する分には問題はないのだろうが。

「あ、あの……準備出来ました」

部屋のドアが開き、外から声が聞こえてきた。石和が振り向き、ドアの外を見ると、そこには横川昌美が立っていた。顔を赤らめ、身体をドアの影に隠すようにしている。

「ああ、ご苦労様。入ってきてくれ」

「は、はい……」

昌美はやや躊躇する様子を見せながら、部屋の中に入ってきた。全裸 ではないが、身体にタオルを巻いただけの姿だった。両腕で自分の洋服の入った袋を胸元でぎゅっと抱きしめている。

「っ！」

傍らでコンソールのパネルを操作していた佐々木の手が止まり。顔が一気に赤く染まった。女性の裸に免疫がないのだろうか。硬直して動揺まるだしの佐々木を見て、昌美は視線を避けるようにふいと顔を逸らした。

「……その、こ、これでいいんでしょうか」

石和はちらりと昌美を一瞥したが、すぐさまモニターへ目を移す。

「待ってくれ。シュミレーションも充分だが、一応、補足マニキュア  
ルも見ておかないとな。もう少しで読み終わる。佐々木、代わりに  
彼女の身体、チェックしてくれ」

「ええええっ！ ぼ、僕が!？」

「ああ、念入りに頼む」

「……………」

啞然とした表情で昌美を見る。昌美は羞恥に身体を震わせている。  
今日会ったばかりの男に肌をさらすのだ。当然の反応だった。昌美  
は無言で洋服の入った袋を佐々木に手渡し、身体に巻いたタオルに  
手をかけた。

「え？ あ、あの…………… ちょっと！ ままままって!」

佐々木はその行為を大声で制す。

「え……………？ で、でも、これがあると確かめられないんじゃないか……………」  
「そ、そうだけど……………その、心の準備が!」

佐々木の言葉を聞いて、石和は額に手を当てて嘆息した。止めて  
どうする。

「佐々木、お前なあ……………思春期の男女の初行為じゃないんだから、  
その位で過剰反応をするな。これじゃあ、川上の事を笑えないぞ」  
「い、いや、だって！ そう言われても意識してしまうものは仕方  
がないというか……………」

慌てふためきながら喚く佐々木の言葉を石和は手を振って、遮つ  
た。

「分かった、分かった。じゃあ佐々木は俺の代わりに補足マニユアルに目を通しておいでくれ。大したことは書いてないが、いざというとき、なにか役立つ情報があるかもしれない」  
「う、うん。分かった」

真つ赤な顔を縦に振りながら、佐々木は石和と役割を交代した。石和は昌美の元に歩み寄り、淡々とした口調で告げる。

「待たせたな。それじゃあ、さっそく始めるか。タオルを取ってくれ」  
「……………」

昌美は無言で頷き、身体を隠していたタオルをゆっくりと外し、一糸まとわぬ姿となった。タオルを受け取りながら、昌美の身体を見る。形の整った乳房、引き締まったウエスト、ボリユームのあるヒップ。容姿が重要視されるコンパニオンだけあって、プロポーションは一級品のようだ。

女性特有の甘い香り、羞恥でほんのり染まった身体が色気を倍加させている。

その色香に石和も一瞬我を忘れそうになったが、すんでの所で踏みとどまり、無表情を装った。変に意識しては彼女の羞恥心を煽るだけだ。とっととチェックを済ませるとしよう。

髪の毛、耳、首、上半身、下半身、指の爪、足の爪、一つづつ、肉眼で確認する。

「……………特に問題はないようだな。ピアスもついてないし、首飾り、

アクセサリ、マニキュアなんかの付着物もなし。髪留めが残ってたりしてないな？ 生理用品なんかも駄目だ」

「大丈夫です。身体に身につけたモノはすべて外しました。化粧品も大丈夫です。何度も確認しました」

「そうか。システムスキャンで不純物が付いていたらエラーが出るし、カプセル内での洗浄、消毒が行われる。とはいえ、初めて跳ぶんだ。臆病なくらいチェックするくらいで、丁度いい」

そう言っつて、石和は微笑んだ。チェックが終わると昌美は両手で胸を隠しながら、

「あ、あの……瞬間物質転送装置テレポート・ゲートで跳ぶヒトはみんなこうやって裸で跳んでいるのでしょうか？」

と、言った。石和は頷いた。

「さつきも説明したと思うが、瞬間物質転送装置テレポート・ゲートは物質と生命体を同時に飛ばすことは出来ない。生命体は量子分解、物質は原子分解、分解の種類が異なるからな。だから、ヒトは生まれたままの姿ソフトで、しかも清潔な状態でないとスキャンしたときシステムが次に移行しない。現在の技術では裸で跳ぶ以外方法はないんだ」

「そ、そうなんですか。瞬間移動テレポート・ゲートについても不便なものですね」

「五十二台の瞬間物質転送装置テレポート・ゲートが配置されているポイントを調べたが、九割が工場関係の施設だった。つまり、ヒトが跳ぶために設置された訳じゃないってことだ。おそらくほとんどが物資の搬入を目的として建造されたモノだと思う。企業としての効率を上げるにはそれだけでも充分利用価値があるはずだからな」

「それじゃあ……ヒトが跳んだりすることは」

「ほとんどないだろうな。それに安全装置が付いているとはいえ、自分の身体が一旦分解されて、再構築されるんだ。心理的な抵抗はかなりあるだろうしな。実際試そうとするヤツは少ないはずだ」  
「……………」

昌美は青ざめた顔で、両腕で自分の身体をぎゅっとと抱きしめた。その手がぶるぶると震えている。怖くて仕方がないのだろう。無理もない。

「止めておくか？」

「え…………？」

「怖いのは恥じゃない。俺がアンタの立場でも怖くて躊躇するだろう。別に止めても構わないんだぞ」

「……………」

石和のその言葉に。昌美は目を閉じながら、しばらく黙り込んだ。が、やがて恐怖を振り払うかのようにおおきく首を左右に振った。

「平気です。あたしは決めたんです。トキくんを助けるって。その為にこの機械でトキくんが行った場所に跳ぶんだって。だから…………あたしはどんなに怖くても迷いません。いきます」

強い強い、意志を込めた口調で。凜とした表情で、彼女はそう言った。

「いいんだな？」

「はい」

彼女の意志は変わらない。ならば、これ以上は何も言うまい。石和は再びコンソールに歩み寄り、パネルに指を滑らせた。起動のプ

ロセスを再確認し、佐々木と昌美に告げる。

「  
始めよう。鹿島大学付属病院へ彼女を転送する」  
「了解」

佐々木が頷き、起動プログラムを起動する。瞬間物質転送装置の  
テレポルト・ゲート  
透明カプセルが淡い光を放ち、扉が自動的に開いた。

「それじゃあ、横川さん。そこから中に入って」

昌美は佐々木の言葉に頷き、全裸のままカプセルの中に入った。  
入り口がばしゃん、と音を立てて閉まる。

「フェイズ12より開始する。転送対象物を生物に設定。量子分解  
転送モードを起動する。第一段階。対象物を洗浄し、不純物を洗い  
落とす」

言いながら、石和がパネルを操作すると、カプセル内のあちこち  
からお湯が噴き出し、中にいる昌美の身体に降り注いだ。三十秒ほ  
どで終わると、次は消毒液が噴き出す。昌美は目をぎゅっと瞑り、  
身体の洗浄に耐える。そういった洗浄と消毒を幾度か繰り返し、最  
後は温風で身体を乾かし、ようやく第一段階が終わる。面倒で手間  
のかかる作業であるが、生物を転送するには一番重要な段階である。

「第二段階。転送対象の構築情報を取得する。佐々木、頼む」  
「了解。スキャン開始」

石和の言葉に佐々木が頷き、カプセル内のスキャナーを起動する

スキャナーの起動音と共にいくつもの赤い横線が下から上へと走り、昌美の肉体構築情報を読み取ってゆく。

肌、髪の毛、爪、内蔵、骨、魂に至るまで、すべて、すべて、すべて。

それは昌美のすべて。『存在そのもの』の情報だった。

「 スキャン終了。 個体識別情報1。 個体情報率100%?。 物質、他生物の情報は認められず。 その他すべて問題なし」

「了解。 第二段階終了。 これより第三段階に入る」

「 転送座標をGATE11にセット。 GATE11のシステム、起動…… 起動確認。 GATE11の電源、及び128項目の動作チェック開始…… チェック終了。 GATE11システム、オールグリーン」

「 GATE11周辺チェック…… チェック確認。 生体反応なし、監視カメラに人影は見あたらず」

すでに刻は深夜だからだろうか。 向こうのセンサーに反応はない。 周辺にヒトの気配は皆無。 跳ぶなら現在が絶好の機会だろう。

「次。 第四段階。 転送準備に入る」

そう言いながら、石和の身体に緊張が走る。 対象物の分解。 そして、転送。

いよいよ 本番である。

どくん、どくん、と。

心臓が大きく脈動している。 両手を軽く握りしめると、手が汗ば



んでいるのが分かる。どうやら、緊張しているようだ。当然だ。今までヒトを転送させたことなど、只の一度もないのだから。もし、失敗したら……という懸念が石和の思考を蝕む。が、軽く頭を左右に振って、負の思考を振り払う。

大丈夫だ。ここまでは何の問題もない。三ツ葉社関連限定とはいえ、すでに実用化されているのだ。きつと上手くいく。いくに決まってる。

カプセル内の昌美が不安そうな表情を浮かべ、こちらを見ていた。石和は唇を笑みの形に歪め、彼女の目を見て、頷いた。すると、昌美の顔がゆるみ、笑顔で頷き返してきた。

昌美は静かに目を閉じ、身体の力を抜いた。すべてを委ねる。そんな表情だった。

向こうはこちらを信用してくれている。ならば、その信頼に応えるまでだ。

パネルを操作して、第三段階のウィンドウが開く。そして告げる。

「量子分解アンカー起動。転送対象を量子分解し、電流へと変換する」

「りよ……了解！ 量子分解開始！」

佐々木もまた、緊張していたのだろう。声をつわづらせながら、パネルを操作している。指が止まり、躊躇した様子を見せるが、すぐさま意を決した表情を浮かべ、『実行ボタン』を押していた。

瞬間

光が走った。

カプセルの中が白色に染まり、電光がスパークする。昌美の肉体が素粒子レベルにまで、分解され 転送電流に変換されているのだ。まばゆい光が部屋全体を包み込み、ラップ音が部屋のいたる場所まで鳴っている。

石和はまぶしげに目を細めながら、モニターを見る。量子変換率の数字が百？を満たし、『complete!』の字が表示された。

「転送……開始！」

すかさず石和はパネルを操作し、転送を実行した。カプセル内の光が一気に収縮し、一点に集中してゆく。更に激しい電光が部屋全体を暴れ回ったが、それも一瞬のこと。カプセルの中心の光が猛り狂う電光を吸い込んでゆく。まるでそれはすべてのものを吸い込む、ブラック・ホールのようなだった。

やがて、光がすべて治まった頃に。ゆっくりと、石和は細めていた目を開いた。周囲を見渡す。すでに光はなんの痕跡もなく、消え去り。瞬間物質転送装置のカプセルの中も、また。

元々何もなかったかのよう。

横川昌美の姿がきれいさっぱり消え失せていた



## 7 「侵入、鹿島大学付属病院」

それは不思議な感覚だった。

自分という存在がひどく希薄になり、そのまま空気に溶けこんでゆくような、そんな感覚。

意識も、視界も、触感も。

すべてが曖昧な世界に自分はいる。足が地面に付いておらず、ふわふわと宙に浮いているような感じがする。境界線が取り払われた色のない世界。曖昧な表現だが、そんな例えがしつくりくる。なにもかもがどうでもよくなり、この感覚に身を委ねたくなる。

それが急速に終焉を迎え、覚醒する。

それまであちこちに溶けこんでいた自我と肉体が一点に収束し、形を造ってゆく。触感が、視界が、意識が 回復してゆく。

「  
っ！」

がくん、と。横川昌美はひざを折り、そのまま跪いた。急激に重みに戻ったので、自分の身体がびつくりしたらしい。

ゆつくりと、ゆつくりと。昌美は目を開いた。自分の身体を見つめる。手のひらを自分の目線にまで挙げ、時間をかけて両手を指を閉じて、握り拳を型どる。それをまた時間をかけて開いてゆく。いつもどおりの感覚である。

次に自分の顔、上半身、足などを両手でぺたぺたと触り、自分の

身体の感触を確かめる。

これもまた、特に異常は感じられず。いつも通りの感覚だった。

「成功……したのかしら？」

一人呟き、周囲を見回す。無機質な透明のカプセルの中。それは先程と変わらないが、周囲の景色が違う。石和と佐々木の姿が見えたららない。辺り一面、視界は闇に包まれ、ほとんどなにも見えない。

昌美はカプセルの出口から外へと出た。淡い光を放つ瞬間物質転送装置インゲートを見ると、それは明らかに廃ビルの地下にあるものと異なっていた。

……実感はないが、どうやら無事に跳べたようだ。

昌美は安堵の溜息を吐いた。正直、跳ぶのは怖くて仕方がなかったのだが、こうして跳んでみれば、なんてことはない。むしろ、心地よい感覚といってもいいくらいであった。

安全が保証されるのなら、次はなんの躊躇もなく跳ぶことができそうだ。

「んん、そ、それにしても寒いわね……」

自分の身体を抱きしめながら、ぶるつと身を震わせる。無理もない。自分は今、全裸なのだ。加えて、ここは暖房もなにも効いていない密室。今晚は雪になるという話だったし、寒くない方がおかしい。ここに来てまだ数分も経っていないのに、もう身体の節々が冷えてきている。昌美はほう、と白い息を両手に吐き、かじかんだ手を温める。

と、その時。テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置のカプセルが再び白い光に包まれ、電光がスパークした。

光が止むと、そこにはさっきまではなかった茶巾袋がカプセル台の中心にぽつん、と置かれていた。

向こうから送ってくれたものだろう。中には下着と洋服、それといくつかの備品が入っていた。中から下着と服をすぐさま引っぱり出し、身に纏う。ラフなＴシャツとジーパン。

動きやすさを優先した服を選んでおいた。まだこれでも寒いが全裸より遙かにましである。

続いて、袋の中にあるものを確認する。

小型のビデオカメラ、インカム。掴んだ証拠を記録するための道具である。

このビデオカメラは起動すると、テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置のメインコンピュータを介して、テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置・改のモニターへ映像が送られるように設定されている。カメラは百円玉程度の大きさで黒い縁取りをされた円の中心に小さなレンズがある。ピン留めがついており、Ｔシャツに挟んでおけば、昌美とほぼ同じ視点で、こちらの状況を把握することが出来る優れものだ。インカムも同じ原理で、向こうの石和と佐々木に連絡できるように調整されている。昌美はカメラをＴシャツの上の部分に挟み、左耳にインカムをつけた。双方に電源を入れ、インカムに向かって話しかける。

「え、と、こちら横川。石和さん……聞こえますか？」

最初、軽い雑音が鳴ったが、すぐ音がクリアになり、聞き覚えの

ある声が聞こえてきた。

『こちら石和。よく聞こえる。感度良好だ』

その声を聞くと昌美は妙な安心感に包まれた。不思議なものだ。まだ会ってほんの数時間しか経っていないというのに。彼を信頼し始めている自分がいる。

それがなんだか妙におかしなことに思えて、昌美は一人顔を弛め、笑った。

『どうやら、上手くいったようだな。どうだ？ 調子は。身体になにか異常とかないか？』

「あ、はい。ぜんぜん平気です。むしろなんか身体の調子が良くなった感じがして……変な言い方ですけど、生まれ変わったような

そんな感じですよ」

『量子分解されると、肉体にあった余分な負荷がなくなるという話を聞いたことがある。安全が保証されるなら、量子分解は悪い事じゃないという訳だ』

「そうですね。これならもう跳ぶことに不安はありません」

『結構だ。それじゃあ時間もないことだし、さっそく行動に移ってくれ。こちらにその建物の見取り図があるから、俺の指示に従って動いてくれ』

石和の言葉に相づちを打ちながら、昌美は茶巾袋の奥にある最後の備品を取り出した。

飾り気のないデザインをした殺傷兵器。

グロック17。拳銃だった。以前、篠塚に万が一のときの為に、と手渡されたモノだった。こんなものを持っていたら銃刀法違反で捕まってしまうので、廃ビルの中に起きっぱなしにしていたのだが

……いま、護身用としてこれ以上有り難いものはない。コッキングレバーをスライドさせて、銃弾を装填する。

「トキくん……あたしを護ってね」

額に銃身をつけて、祈るようにそう呟く。これで準備は万端だ。ジープのベルトの隙間にグロックを挟み込むと、昌美は暗闇に包まれた無人の部屋を後にし、廊下へと出た。どこにでもありそうな普通の廊下だった。

天井に無機質な光を放つ蛍光灯が放たれており、それがずっと真っ直ぐに続いている。周囲を見回すが昌美がいま出た場所以外、扉がまったく見あたらず、無機質な壁が延々と続いているだけだった。窓もまったく見あたらぬ。地下にある施設なので当然だろうが、なにか妙な閉鎖感がある。

『その辺に監視カメラはない。真っ直ぐに進んでみてくれ。人の気配に細心の注意を払ってくれ』

石和の指示に従い、廊下を進んでゆく。近くに隠れる遮蔽物がないので、この廊下で遭遇したら、一発で見つかってしまう。靴は履かず、靴下のままである。足音を鳴らさず、いつでも駆け出せるようにするため。そして、小さな、わずかな音も見逃さない為に。

どくん、どくん、どくん。

心臓の脈動が加速する。身体が強ばり、息が詰まる。身体が緊張してしまっている。これではいざというとき、即座に動けない。パニックを引き起こしてしまう。



(落ち着いて……落ち着かなきゃ。じゃないと、トキくんを助けられない)

自分にそう言い聞かせ、大きく深呼吸して、身体から意図的に力を抜き、前へと進んでゆく。

『……………妙だな』

ぼつん、とインカムから、石和の声が響いた。

『そちらに跳ばす前から気になっていたんだが……警備体制が全然強化されていない。監視カメラも設置されていないし、警備員も今のところ全く見あたらない。新井博士と篠塚が侵入したのなら、何らかの対策が講じられていてもおかしくないのに……何故だ?』

「侵入されたといつても、瞬間物質転送装置・改テレポート・ゲートがなければこの施設に入る方法はないんですね? 逆に新井博士がいなくなれば、他にこの施設に侵入する術はなくなります。だからではないでしょうか?」

『だが、瞬間物質転送装置・改テレポート・ゲートはこうして健在だ。新井博士がいなくなってもこの装置がある限り、再び侵入される可能性がある。向こうもそれは否定できない筈だ。隔離された施設なのに、内部のこのお粗末さ。どうにもこの矛盾が気になってな』

「確かに……そうかもしれませんけど」

相手はそこまで考えていないのではないのだろうか。なにせ、通常の出入り口が存在しない施設だ。中の警備まで強化しようとは考えなかったのではないだろうか。

『いや、すまない。どうもすんなり事が進みすぎているのが気になってな。気は抜かないで、進んでみてくれ。突き当たりを左だ。す

ぐに左折しないで十分に注意してからな』  
「はい」

はやる気持ちを抑え、昌美は慎重に、素早くT字路となっている廊下の左右を確認する。

辺りは静寂に包まれ、やはり人の気配はまるでしない。昌美は左に曲がり、廊下を全速力で駆け抜けてゆく。

「はあ、はあ、はあ……」

大した距離を走っている訳でもないのに、もう息が乱れている。

額に触れると大量の汗がべっとりと付着する。覚悟を決めたつもりだった。なにがあっても捨て身で動けるつもりだった。しかし、この『見つかるかもしれない』という恐怖はそんな強い覚悟をも凌駕し、自分の意志とは無関係に身体を極度の緊張状態にさせてしまう。

昌美は今までこういった経験は皆無だった。当然といえば当然である。普通に生きていけば、危険な施設に潜入するという特殊な環境下に晒されることなど、まずあり得ないからだ。

今まで体験したことない空気と環境。

見つかったら確実に捕まるといふ、極限状態。

生まれて初めてのしかかる重量感プレッシャーは想像していたよりも、大きく、気を抜くと押しつぶされてしまいそうだった。

(でも……トキくんはこの重量感と戦い続けてきたんだよね、ずっと)

走りながら、昌美は最愛の人のことを想い出す。

篠塚は新井博士と出会うあの日まで、ずっと一人で戸木原という怪物と戦い続けてきたのだ。それは孤独で、苦しい戦いであったことだろう。

## 8 「能力者計画（ネオチャイルド・プロジェクト）」

戸木原淳が人類進化促進塾に入ってきたのは現在から二年以上前のことだ。あらゆる分野に対応できるスーパーバイザーという肩書きで出向を命じられたのだという。

元々、脳専門の研究所から塾へと昇華した施設である。閉鎖的な感情もあり、外部のものを研究グループに入れるのに反対意見は多かった。出向命令を出してきたのは三ツ葉社<sup>スポンサー</sup>だったので、それを受け入れるしかなかった。

余所者にないが出来る。ほとんどの研究員がそんな想いを抱いていた。しかし、いざ入ってきてみれば、その認識が間違っていることに気付かされた。

戸木原は人類進化促進塾で行っている各グループの研究をわずか二週間という短期間ですべて把握した。そして、そこから更に研究を更に進め、子供達の才能をより効率よく引き出す案を提示し、それを実現させたのだった。

専門のスタッフは形無しである。入ってわずかな期間で、どの研究員よりも優れた研究成果を見せつけたのだから。

優れていたのは研究者としてのスキルだけではない。指導者としても一流だった。適材適所という言葉があるが、彼はよくそれを理

解しており、研究員一人一人の特技、不得意なことを把握し、そこから人間関係を含めた最も効率の良い研究グループを編成し、更に実績を上げた。

明るく、ユニークに富んだ彼の会話は皆の心を和ませた。人当たりも柔らかく、どんな小さな小さな意見でも真剣に聞き入り、どんなくだらない雑談でも聞き流すことなく、応対してくれる。

誰もが憧れる実力者。誰もが認める指導者。

最初は彼を妬むものも多かったが、次第に戸木原という人格に惹かれ、彼は人類進化促進塾の大黒柱として、機能しはじめていた。

会う機会の少ないコンパニオンの間でさえ、戸木原の評判は高く、友人達の間でも噂されていたのを昌美は覚えている。

実際、好感が持てる男性であると昌美自身もその時は思っていた。

そして、一年前。

戸木原淳は新たな計画を推奨した。眠っている才能を引き出す、というコンセプトは変わらず。まったく新しいベクトルの才能を引き出す計画。

『神は天に辿り着こうとした人々を裁き、混乱バラルさせたが、その行為はそんなに罪深きことなのか？ 否。天を目指すというのは、遙かなる高みを目指すこと。愚者から賢者へと昇華したいということ。我々は進化しなければならぬ。次世代の進化は人の手で造り出さなければならぬ。なぜなら我々は他の生物にはない、知恵の力を手に入れた選ばれた種族なのだから。新たなる進化の鎖は我々の手

で紡ぐのだ。神の元へ近づこう。それが長い長い道程であったとしても。着実に一歩、一歩と。昇っていける力が我々にはあるのだから」

彼の演説は多くのヒトの心を捕らえ、その計画は実現した。

ネオチャイルド・プロジェクト  
『能力者計画』の発動である。

その研究グループの中には篠塚登喜夫もいた。システム・エンジニアとしての腕を買われ、計画のシステム責任者として抜擢されたのである。計画発動当初、篠塚は戸木原に心酔するスタッフの一人だった。

『昌美、俺もいつか彼の様になりたいんだ。彼のようなすごい実績を上げてみたい』

憧れとやる気に満ちた口調でそんなことを言っていたのを思い出す。昌美は笑顔で篠塚に言った。

『出来るよ、トキくんならきっと。トキくん努力家だから。きっと頑張っていけば、もっともっとすごいエンジニアになれるよ』

『ははは、昌美にそう言われると、本当にそうなるような気がしてくるから、不思議だな』

『くすくす。だったら、いっぱい応援するね。頑張っつね、トキくん』

『ああ、ありがとうな、昌美』

篠塚は目を細めて笑顔を浮かべる。昌美は篠塚の笑顔が好きだった。そして、ひたむきに努力するその姿も。だから、篠塚の頑張りを全力で応援しよう。苦しいときは励ましてあげよう。いつか彼の願いが叶うことを夢見て。昌美は心の底からそう思った。

しかし、その想いは長く続くことはなかった。

ある日、研究の実験に失敗した。そのときに何があったのかは詳しくは知らない。篠塚も多く語ろうとしなかった。ただ、

『俺は……大事な人の子供を壊してしまった』

絶望に満ちた声で、篠塚はそう言っていた。『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』の研究は随分とリスクのある研究で、対象者の精神に異常を来したり、最悪死んでしまうこともあるそうだ。

身近なヒトが壊れてしまうまで。篠塚はその罪悪感が全くなかつたらしい。子供達をただの実験動物として見て、数値と適正値だけに目を向けてきた。気付かないうちに子供たちを『ヒト』として見なくなっていたのだ。

それに気付いた篠塚は恐怖した。自らの行いに。そして、戸木原の行いに。

篠塚は研究グループを抜け、『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』の反対を周囲に呼びかけた。『禁忌に触れるこの研究を続けるべきではない。即刻研究を中断するべきだ』と。

だが、その声は皆に届かない。その言葉を聞いても、何を言っているのか分からない、という困惑が皆の顔に浮かんでいたという。

禁忌と倫理感の欠落。以前の篠塚と同じである。自分たちがとんでもないことをしているのにまるで気付いていないのである。

そこで、ようやく理解した。皆は戸木原に憧れていた訳ではない。

支配されていたのだ。

それを自覚することもなく。いつのまにか彼の思うがままに動いている。

あり得ない。一人の人間がそれほどのカリスマを持ち、研究グループすべての人々の倫理観を欠如させるなんて。それではまるでなにかの宗教ではないか。

ふと、こんな考えが篠塚の頭を過ぎる。

もし、この『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』を人類進化促進塾で行うために、この施設の研究者をすべて虜にしたとしたら……？

篠塚は額に手を当てて、かぶりを振った。

そんなことは不可能だ。あり得ない。もしそんなことが出来るモノがいたとしたら、それはヒトではない。

怪物だ。

しかし、現実には戸木原はこうして、研究グループの実験とスタッフの心を掌握している。それをことなげに行うことが出来る戸木原は一体何者なのか。

篠塚は戸木原の異質さに戦慄を覚えた、

そうして皆がすべて彼に取り込まれ、取り込まれなかった篠塚は異端者となった。篠塚はあらゆる方法で『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』の中止を試みたが、ことごとく失敗した。警察や法的機関の力を借りようとし



たことがあが、何故かそれすらも届かない。

それでも篠塚は諦めなかった。例え、誰も理解してくれなくても、誰も味方がいなくとも。もう二度と大事なヒトを自らの手で壊してしまうような悲劇を起こしてはならない。

そういつた決意を胸に篠塚は戸木原に立ち向かっていった。

そんな時だった。篠塚と新井博士が出会ったのは。

彼もまた、戸木原の行いに怒りを覚えた一人だった。たった一人で、戸木原と正面から戦いを挑んだのである。篠塚の立ち向かい方もあまり利口とは言えない直猛突進だったが、新井博士はそれ以上の愚直直進だったらしい。

戸木原が影で行っていた研究を本人に直に突きつけ、研究の中断と世間への公開を迫ったのだ。

新井博士は即座に人類進化促進塾の人間に囚われ、地下の研究施設に監禁された。新井博士が監禁されている話を知った篠塚は散々悩んだ末、彼の救出を試みることに決めた。戸木原という強大な壁に立ち向かうには、一人では駄目だ。同じ想いを共有する仲間が必要だと悟ったからだ。

システム・エンジニアとして働いていた篠塚は研究施設のシステムをすべて掌握していたので、新井博士の救出はさほど、難しいことではなかった。監禁された部屋を開閉し、彼を人類進化促進塾の外へ脱出させ、持ち主が不透明な廃ビルへ逃げ込んだ。そこで篠塚はすべてを新井博士に話し、協力を求めた。

『……思った以上に戸木原の行いは業が深いようじゃな。一体ヤツは何を企んでおるのか』

すべてを話し終えると新井博士は眉根を寄せながら、低い声で唸った。

『俺にもそれは分かりません。彼の狂った研究心が生んだものか。それとも他になにか目的があるのか。しかし、戸木原博士の行いはそのまま放置しておいていいものではありません。どうにかして、彼を止めないと……』

『ワシはすでに逃亡者として後戻りできない状況じゃが……篠塚くんと言ったな。君はいいのかな？ ワシと違って、篠塚くんはまだ後戻りすることが出来る。これ以上踏み込むには覚悟がいる。警察機関がまともに機能していないことを考えると、ワシらに他の味方はいない。よく考えて行動した方がいい』

『覚悟なんて……とづくに出来ています。私はあの人を間近で見してきた男です。戸木原博士の異様さをよく知っています。現在、人類進化促進塾がどんな状態であるかも。そこで戸木原博士を貶める行為をすれば、決して周りの研究員は俺を許さないでしょう。それでも俺は償わなくてはいけないんです。大事な、大事なヒトの子供を手にかけた罪を』

『……』  
『それに……新井博士を無断で脱出させた事で、もう事態は動き始めてしまってるんですよ。もう既に賽は投げられて、引き返せないだから……新井博士。あなたに協力してほしい。俺とあなたの目的は同じのはずです。どうかよろしく願います』

篠塚はそう言って、頭を深々と下げた。新井博士は唸りながら何かを考えていたが、それもわずかな間のこと。目に意を決した光を

宿すと、篠塚の背中をばん、と叩き、笑った。

『わははははっ！ 立場が逆じゃぞ、篠塚くん。君はワシを助けた。それを恩に着せて、協力しろ、ぐらい言ってもいいんじゃないぞ』

言いながら、ばんばんと篠塚の背中を力強く叩き続ける。

『げ、げほっ！ そ、そんなこと出来ませんよ。俺はべつに恩に着せるためにあなたを助けた訳じゃないので……げほっ！』

もの凄い力でばんばんと背中を叩いてくるので、篠塚は貯まったものではない。篠塚は目を白黒させながら、げほげほと咳き込んだ。

『わっはっはっはっ！ 気に入った！ 篠塚くん、ワシは君を全面的に信頼する。そして、ワシの力で出来ることがあれば可能な限り力になる。いや、これはワシの望みでもある。お互い協力しあっていこうじゃないか。よろしく頼むぞ、篠塚くん』

新井博士はにやりと笑うと右手を差し出してきた。篠塚も笑みを浮かべ、新井博士の大きな手をぎゅっ、と握った。

『はい……よろしく願います』

そうして、ようやく篠塚は孤独な戦いから抜け出し、強力なパートナーを得たのだった。

それから、昌美は出来る限りの支援をして、二人に協力してきた。なんの知識も技術もない自分には生活に関することしか援助できなかったが、それでも二人の役に立ちたかったのだ。二人とも揺るが

ぬ決意を地盤とし、反撃の鍵を握る瞬間物質転送装置。改を造る。

やがて、新井博士の逃亡を手引きしたことが発覚し、篠塚も逃亡者となるが、それでも気持ちは揺らぐことなく。目標に向けて、日々を謳歌していった。

気持ちしが張り詰めた毎日が続くが、新井博士の豪快な性格が周囲の空気を和らげ、過度の緊張をほぐしてくれた。

不謹慎なことかもしれないが、昌美はその逃亡生活を楽しいと思っていた。三人で秘密を共有し、目標に向かってひたすら歩み続ける。それが三人の結束を強め、一日一日を充実した日々に行っていたのかもしれない。

もつともつと二人の力になりたい。昌美は篠塚にそう言った事があった。篠塚は微笑みながら、首を左右に振って答えた。

『その気持ちだけで充分だよ。昌美は俺の側にいて励ましてくれるだけで、充分俺の力になってるんだから。本当だよ。昌美がいなければ俺は潰れていたと思う。お前がいるから俺は頑張れるんだから』

言いながら、篠塚は昌美の頬を優しく撫でる。自分の励みが力になる。そう言ってくれるのは嬉しかったが、それでも。形のあるもので篠塚の力になりたい。大好きな篠塚に必要とされたい。昌美は今までずっとそう思ってきた。

だから、自分は絶対この重量感から逃げない。そして、彼を救うまで絶対に諦めない。

なにも出来ない自分が大好きな、大好きな篠塚の役に立つ時がきたのだ。この程度の重量感がなんだというのか。篠塚も、新井博士

もこの幾倍もの重量感とずっとずっと戦ってきたのだ。それに比べれば、いま感じているこの感覚など大したことではない。

必ず篠塚を取り戻すのだ、絶対に。

そう心の中で強く言い聞かせると、不思議と緊張感が少し和らいだような気がした。

（待っててね……トキくん。必ず助けるから！）

心の中でそう叫び、昌美は身体を奮い立たせ、足を前へ前へと進めていった。

## 9 「暴走」

長い廊下を駆け抜けてゆくと、ようやく扉がある場所を見つけた。廊下を挟んで左と右、両方に扉が二つある。昌美は足を止め、扉をじっと見据えた。カードスロットと0～9までの番号が並んだテンキーパネルが扉の隣に設置されている。扉の端に『LOCK』と書かれたパネルが赤く点灯している。どうやら、ロックを外さないと中へは入れないようだ。反対側の扉も同様の造りだった。

『どうだ？』

石和の声に昌美は眉を潜めて、言った。

「駄目です。びくともしません。ロックを外さないと、入れそうもありません」

『……一筋縄ではいかないか。そこに瞬間物質転送装置テレポート・ゲートが二台あるのは、反応からして確かなんだがな』

落胆を含んだ口調で呟く石和。昌美は一人、大きくかぶりを振った。

「他を探しましょう。ロックのない部屋もあるかもしれませんが。直接的でなくても、なにか手がかりになるものがあれば………それを見つけます！」

時間がない。やはり五分で救出するというのは無理がある。それならば、せめて。篠塚がここにいるという手がかりだけでも見つけ

たい。その可能性だけでも手に入れて帰りたい。

「石和さん、サポートをお願いします。せめて、時間いっぱいまで探したいんです」

「……分かった。だが、くれぐれも無茶はするなよ。残り時間二十九秒、リミットが来たら、どんな中途半端な状態でも引き返せ。いいな？」

「分かりました」

昌美は再び走り出した。緊張感に身体を強ばらせ、タイムリミットに焦燥感を覚え、それでも走る、走る、走る。そんな状態でも強い意志があれば身体は動く。どんなことがあっても恐慌状態にはならない。そんな自信がいまの昌美にはあった。

「サポートするといっても、その施設の構造はそう複雑なものじゃない。そこにはすべてで五つの部屋しかない。つまり、アンタが調べるのはあとふたつ。そのふたつの扉を調べ、どうにもならなかったら、すぐに転送室まで戻るんだ」

「はあ……はあ……昌美、です」

走るスピードを緩めず、呼吸を乱したまま、昌美はそんなことを呟っていた。

「……は？」

「石和さん、あたしのこと出会ってからずっと『アンタ』って言うて、一度も名前で呼んでないじゃないですか……あたしには横川昌美って……はっ、立派な名前があるんです、から……」

「そうだったか？　しかし、今は名前のことなんてどうでも」

「よくは、ないですよ……はあ、はあ……名前って、信頼関係を築

き上げるのに一番大事なことだと、思います」

「……」  
「まだ出会って、ほんの数時間、ですけど……はっ……あたしは石和さんのこと、信頼してますから……頼られるヒトだって思ってますから。だから、あたしのこととは名前で……昌美って読んでください……はあ、はあ……お願い、します」

ほんの少しだけ間を空けて。ぶっきらぼうな口調で石和は言った。

「……昌美。これでいいか？」  
「ぶっ……くすくす」

その愛想のない呼び方がなんだかおかしくなって。昌美は吹き出していった。

「な、なんだ。なにがおかしい」

「これで……二人目です。父親以外で、はっ……男の人に名前を呼ばれたの」

「な」

「ちなみに一番目はトキくんです。石和さんは二番目のヒトですね

……はあ、はあ」

「お、お前なあ」

「すみません、冗談です。んっ……でも信じてるのは本当ですよ、ありがとうございます」

そんな会話を小声で交わしながら、石和の指示した場所へ向かい、辿り着く。

……が、やはり扉はロック式のもので、固く閉ざされたままだった。



あと一つ。五つ目の扉に最後の希望を抱き、昌美はその場所へ向かったが、やはり扉のタイプは同じ。ロック式の扉だった。分厚い鉄で出来たドア。バーナーでも持ってこない限り、人力でここをこじ開けるのは不可能だろう。

冷たい扉に両手を添え、絶望的な気分にあふれる。この向こうには篠塚がいるかもしれないというのに。どうやっても向こうには届かないというのか。

「はあ、はあ……こ、この扉、そちらのコンピューターで開けることは出来ないんですか？」

「確かにこの瞬間物質転送装置・改は他の瞬間物質転送装置に強制的に介入して、メインコンピューターを乗っ取ることが出来るが……」

「それはあくまでコンピュータで管理しているものだけに過ぎない。その扉のロックを制御している機械はシンプルなコンピュータで完全なスタンド・アロンなんだ。メインコンピューターで管理している訳じゃないから、開きようがない」

「そ、それじゃあ、正規の方法でここのロックを解除、はっ……する以外、方法はないってことですか？」

石和はやや間を置いて、言った。

「あるいはその機械を通して、暗証番号を解析出来れば……だが、俺も佐々木もそんな技能はない」

「……………」  
「すまない。俺たちの力じゃここまでが精一杯だ」

そう簡単に事が運ぶとは思っていなかったが。ここまで来て何一つ手に入れない。手がかりの断片さえ。昌美にはそれが悔しか

った。

『諦めるのはまだ早い。新井博士や篠塚もなんの準備もなしに跳んだ訳じゃないと思う。おそらくこのロックを解除する対策を考えていたはずだ。それを探っていこう』

「でも、ここまで来て、なにも手がかりがえられない、なんて

『瞬間物質転送装置・改テレポート・ゲートを使って、鹿島大学病院の施設に侵入することが出来た。警備は薄い。ロックを外さないと部屋の中には入れない。わずか、五分でこれだけの事と情報を得たんだ。十分な成果だろう。欲張りすぎだ』

「……………」

『焦るな。まだ好機チャンスはある。じっくりと対策を練って、もう一度出直そう。五分が過ぎた。タイムリミットだ、昌美。約束通り、もどってこい』

「……………」

昌美は歯がみした。両手を強く握りしめ、身体を小刻みに震わせる。なにも出来なかつた歯がゆさが頭の中でぐるぐると回っている。

まだ足りない。もう少しこの施設を調べれば、何かしらの手がかりが得られるのではないか。そんな考えが頭に過ぎる。

しかし、約束は約束だ。自分は五分で必ず戻る。その言葉に頷いたのだ。だとしたら、どんなに未練があるとしても、戻らないといけない。

「……………」

かろうじて、了承の言葉を絞り出すと、その扉から目を背け、未練を断ち切るかのように走り出した。

『よし、それじゃあ、転送室へ戻ってくれ。戻り次第、転送出来るようにすでに準備してある。着いたら、服と装備品を茶巾袋に入れて転送機に置いてくれ。その後、昌美、お前をこちらへ引き戻す』  
「了解です」

そう言って、頷こうとした刹那、だった。

ばしゅん、と。

機械的な音が唐突に鳴り響いた。さほど大した音ではない。周囲が異様に静まり返っているのです、たまたま昌美の鼓膜にも届いた。その程度の小さな小さな音、だった。

だが、昌美が異変に気付くにはそれで充分だった。昌美は足を止め、ゆっくりと振り返った。その音がなんなのか。確かめるために。

「…………え？」

瞬間　昌美は大きく目を見開き、啞然とした。

『昌美、どうした？　はやく転送室へ　っ！』

石和の言葉が途中で途切れた。昌美の見た光景はすべて向こうに映像として転送されている。どうやら、石和も気付いたようだ。

扉が　開いている。カードと暗証番号を入れなければ動かない筈の扉が。今まで固く閉ざされていたはずの扉が。何故か、開

いていた。昌美は息を飲んで、元来た廊下を引き返し、扉の前に駆け寄る。

見間違いではない。先程まで灯っていた赤いランプが消え、グリーン色の『OPEN』の字が淡く点灯している。扉は横にスライドしたままで、再び閉まる様子はない。

ドアの中を覗き込むと、真っ暗だった。廊下から入る光でかろうじて奥が見える。部屋ではない。階段だった。それも相当長そうな地下への階段。

「この中に……トキくん、が……」

昌美は夢見心地な表情で、ふらり、と中へ入ろうとする。

『駄目だ!』

その刹那、石和の制止の音が昌美の鼓膜に大きく響き渡り、びくん、と身体を震わせた。

『中にはいるな。すぐに戻ってくるんだ! 急げ!』

怒鳴り声に近い石和の声。昌美は俯きながら、その言葉に抵抗を覚えた。

「でも……少しくらい中を確認してからでも  
『馬鹿か、お前は! よく考えるんだ。扉が都合良く独りでに開いたとも思っているのか? この施設内に誰かがいるんだ! そして、俺たちの行動を把握している! 扉を開いて、俺たちを挑発しているんだ。いいから早く戻れ! 転送室を占拠されたら、お前は

戻れなくなってしまう』

「……………」

分かっている。そんなことは言われなくても。だが、目の前に手がかりになりそうなものがあるのだ。それを目の当たりにして、どうして中を確認せずに戻ることができようか。

『ぜったいに無茶はしない。感情を先行させて行動しない。手がかりがあっても、なくても五分で必ず戻る。それが約束の筈だ。目先の誘惑に囚われるな！ 取り返しの付かないことになるぞ！』

「……………」

石和の言うことは正しい。これは目の前に垂らされた餌だ。あまにも露骨過ぎる。不自然すぎる。この中へ入れば、なにがあるかも分からない。

だが、理屈でそうと分かっているとしても、あらがえぬ誘惑がある。この中に篠塚がいるかもしれない。いなかったとしても手がかりがあるかもしれない。

そう思うと、何もかもがどうでも良くなってくる。昌美は石和の制止を振り切って、中に入り、そして駆けだした。

『駄目だ、昌美やめ』

』

「ごめん……………なさい」

昌美は心の底から石和に詫びながら、インカムの電源を切った。無謀なことは分かっている。だが、もう自分の想いを止められそうもない。昌美は地下へ続く階段を降り始めた。



「駄目だ、昌美やめろ！ 戻るんだ！」

瞬間物質転送装置・改のコンソールに映るモニターを見ながら、  
テレビポート・ゲート  
石和は大声で叫び、彼女の暴走を阻止しようとした。しかし、必死の呼びかけに応じず。

『ごめん……なさい』、とかすれた声で昌美はそう言って、インカムの電源を切ってしまった。これではもう、こちらの声は昌美には届かない。

「くそつ、最悪だ！」

石和はぎりつと歯を食いしばりながら、コンソールの端に拳を叩きつけた。一番心配していたことだった。篠塚と昌美の関係は詳しく知らないが、想いの深さだけはひしひしとこちらに伝わってきた。それ故に想いも暴走しやすい。なにかの引き金があれば、彼女は自制が効かなくなってしまうのではないか。

そんな不安が心の片隅にあった。あれだけ反対したのもその危険性があったからだ。そして、予想は最悪の形で的中した。

「切り捨てる………しかないのか」

これは彼女の失態だ。あれだけ念を入れて言っておいた約束を向こうから一方的に破棄した。こちらが接続を切っても向こうは文句を言えない。昌美もそれは充分承知の上での行動だろう。しかし

『自分の大切なヒトを助けたいと想うのがいけないことなんですか！ なにもしないで諦めるなんて事、私にはできません。トキくんを助けたいんです！ このあたしの手で！』

『……………分かってます。可能性が限りなくゼロであることは。それでも。自分のこの目で確かめるまで、私は絶対諦めません。トキくんは私の大事な、大事な人なんです。私の半身といってもいいくらいの。私はあの人がいないと生きていけない。だから、私を……………跳ばせて……………ください。っ……………お願い、します』

彼女がほんの数時間前に言っていたことを思い出す。半身が引き裂かれた想い。助けられない悔しさ。その痛みと苦悩が石和には分かりすぎるほど、分かった。

だから、昌美の暴走を石和は無謀とも愚かだとも思わない。ただ、悲しいだけだ。想いは強ければ強いほど弾けやすいのだから。

「少しだけ……………待とう」

我ながら、甘い選択だと石和は思う。向こうにテレポルト・ゲート瞬間物質転送装置・改の位置を補足されれば、自分の身も破滅だ。だが、それでも彼女を見捨てたくない。

せめて、補足される動きを見せるまでは。待ってみよう。幸い、切られたのはインカムの電源だけで、ビデオカメラはまだ稼働中だ。彼女の行動は把握できている。石和は佐々木に向かって、告げる。

「佐々木、原子分解モードのまま待機だ。量子分解モードもすぐに出来るようにしておいてくれ。一応、ギリギリまで粘ってみよう」



「……………」  
「佐々木？」

「あ、ああ、ごめん。了解。ギリギリまで待とう」

佐々木が困惑した表情を浮かべながら、パネルを必死に操作している。石和は眉を潜めた。

「どうしたんだ、変な顔して。なにかあったのか？」

「いやなんか、急にパネルの文字の片隅に変な文字が表示し始めて……………」

「っ！ まさか、もう補足されたのか？」

「違うと思うけど……………なんだろう、コレ。バグなのかな。どういう意味なのか、さっぱりわからない」

佐々木の傍らに歩み寄り、石和はモニターを覗き込んだ。画面の左下に赤い文字で何かの文章が走っている。文章が一通り表されると文字が消え、また再びその文章が最初から書かれてゆく。その繰り返しだった。その文章自体の意味は分からない。

しかし

「なんだ？ この文章、何処かで……………」

文章の最後の一節を目にした瞬間、石和はようやくそれに思い当たった。

禍なるかなバビロン そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり

そつだ。佐々木が人類進化促進塾の前で言っていた言葉。そして、

白い少女が石和の携帯に触れて口走った言葉である。

「気が付いたかい？ 旧約聖書の一節が延々と表示され続けているんだよ。バベルの塔の行<sup>くだり</sup>だね。バグにしては表示される文章が変だし、この文章を消すこともできない。いったい何なんだろう？」

言いながら、佐々木は原因を模索する。石和はふと、懐にある携帯が気になった。白い少女が口にしたあの言葉。蒼白い光。何か……妙な予感が、する。懐に手を入れて、黒い携帯を取り出してみる。先程のような不自然な光は発していない。

だが、携帯を開き、中を見ると

禍なるかなバビロン そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり

画面に映っている文章とまったく同じものが携帯に表示されていた。それだけではない。その文章が表示されるタイミングも。消えるタイミングも。再表示されるタイミングも。

そのすべてが。佐々木が見ているモニターのものと同じだった。寸分の狂いもないユニゾン。それが携帯と瞬間物質転送装置<sup>レポート・ゲート</sup>・改のモニターの中で延々と繰り返される。

「な んだ、これは……」

明らかに異様なこの状況に。石和は大きく目を見開いて、肌を泡立たせた。



10「災いなるかなバビロン」 第四段階「鹿島大学付属病院」(了)(後書き)

第四段階「鹿島大学付属病院」了。第五段階「罪と罰と進化」へ続く。

## 第五段階『罪と罰と進化』 1 「異形の棲む部屋」

長い長い螺旋状に造られた階段を下ってゆく。周りには離れた場所に電灯が定期的に配置されているが、それぞれの電灯の位置が離れているため、やたら薄暗い。階段の横幅はさほど大きくないのも手伝って閉鎖的な印象を受ける。先行きの見えないその光景が昌美の想像力を掻き立て、身体を突き動かす原動力となつてゆく。

この奥にはなにがあるのか。篠塚がいるのだろうか。早まる心臓の鼓動。呼吸を乱し、ただひたすら下を目指してクリーム色をした無機質な階段を駆け下りる。

篠塚に会いたい。

篠塚の声が聞きたい。

篠塚に頬を撫でてもらいたい。

篠塚に抱きしめてほしい。

ただ、篠塚のことだけを頭に描き、横川昌美は走り続ける。

微塵もペースを乱すことなく。二分余りの時間を全力疾走し、ようやく長い下りの終着地が見えた。地下のフロアへと辿り着いたのだ。

眼前にあるのは大きな扉。中央にあるレバーをがちゃりと回すと、ドアが開いた。鍵はかかっているようないようだ。扉を開き、一片の躊躇もなく、その中へ入った。

「はあー、はあー……こ、こは……」

昌美は胸に手を当て、乱れに乱れた呼吸を必死に整えながら、周囲を見回した。

巨大な部屋だった。部屋という表現は正しいのか。そんな疑いを持ちたくなるほどの、大きな空間が広がっていた。900平方メートルはあるのではないだろうか。その部屋に幾列にも別れたベッドらしきものが設置されていた。シーツも何もない、皮で出来た大きな、大きなベット。それが部屋の奥まで、定期的な配置ですらりと並んでいる。いったいいくつのベッドが設置されているのか。見当も付かない。それほどの数だった。

そこに 『何か』 が寝ている。

がしゃがしゃ、と音を立てる『何か』。奇妙な、獣の様な呻き声を上げる『何か』。

部屋のあちこちのベッドから、そういった奇妙な音が聞こえてくる。ここからではベッドに寝ているモノがなんであるのかは分からない。

「う……」

昌美は右手で鼻と口を覆った。ひどい悪臭がする。何か腐ったような、そんな臭い。それに動物園などでよく漂っている特有の臭い……獣臭がする。その他にもよく分からないモノが入り交じり、ひどい悪臭となって昌美の鼻を刺激した。

「う……うっ、うほっ……」

昌美は込み上げる吐き気を必死に堪えながら、後ずさりをした。異様だ。これだけ広い空間にこんなにも濃密な悪臭が充滿しているのは。いったい何なのだろうか、ここは。尋常ではない空気が漂っている。

ここまで自分を突き動かしてきた感情の熱が急速に下がり、冷めてゆく。代わりに沸き上がってくる感情は異質なモノに対する恐怖。これ以上はいくな。危険だ。見なくてもいいものまで、見てしまう。きつと後悔することになる。

そんな想いが頭の中をじわりじわりと蝕んでゆく。気付けば、身体が小刻みに震えていた。昌美は大きく頭を左右に振って、その気持を無理矢理振り払う。

怖くなどない。ここがどんな場所であろうが関係ない。篠塚を助けるのだ、絶対に。

昌美はTシャツをたくし上げ、腰に挟んでいた拳銃 セーフティ グロツクを取り出し、両手で握った。トリガーに手をかけ、安全装置を外す。そして、昌美はゆっくりとした足取りで、歩き始めた。無尽蔵に並ぶベットへと近づいてゆく。

オオー……………ン

なにか……………声が聞こえる。犬の遠吠えのような、甲高い声。そして、合間に聞こえるじゃらじゃらと鉄と鉄がかち合うような音。獣をベットに鉄の鎖で拘束しているのだろうか。

タ…イ……………マ……………ケ…テ

否。獣ではない。呻き声の他にに聞こえる。弱々しく、はつきりと聞こえないが。昌美が耳にし、理解できる言語。ヒトの声だった。

イ、タイ……サ……タスケテ

「っ！」

助けを懇願する声。やはり、間違いない。ヒトが寝ているのだ。

昌美はおそろおそろと、一定の距離を保ちながら、ベットの中が見える位置にまで移動した。

「え……？」

瞬間　昌美の意識が凍り付いた。そこにはよく分からないものが、いた。予想通りそれは獣ではなかった。だが、ヒトでもない。生き物の基本構造を無視した歪な物体。

曖昧な表現であるが、それしか言いようがない。言葉に出来ない。こんな生物はみたことも聞いたこともない。

全長三メートルはあるだろうか。全身が鮮やかな蒼色で、その皮膚は鱗にも似たモノがびっしりと敷き詰められている。腕らしきモノがあるが、長さも太さもまちまちで、指の数も右手は五本、左手は八本と統一性がない。何故か足は三本あり、昆虫にも似た細い毛が生えている。鱗に覆われたメートル半はある尻尾がびくびくと蠢いている。首の先に顔はなく、代わりに腹の部分にヒトの顔らしきモノがあった。顔の左半分は焼けただれたようなケロイド状。浮き彫りになっている右顔は肌色で、唯一人間らしい形状をした部位であるが、目がヒトのそれとは違う。まるで宝石のような鮮やか



で、不気味な眼球だった。眼球がぎよろりと動き、昌美の方へ向く。赤い紅い、ルビーの様な目が大きく見開いた。

そして、あちこちの歯が抜け落ちた口がぱくぱくと動き、言葉を紡いだ。

イタイ……ミ……タ、スケ、テ

異形の右手がゆっくりと昌美に迫る。

「ひっ……！」

昌美は短い悲鳴を上げ、ベットから更に距離を取った。じゃらじゃらと鳴り響く鎖の音。

ベットのあちこちに鉄の鎖がついた拘束具が取り付けられており、ベットから離れることは出来ないようだ。

なんなのだろうか。この生き物は。無茶苦茶だ。デタラメ過ぎる。まるで子供の落書きをそのまま具現化したかのようなようだ。こんな生き物がいるはずがない。昌美は息を飲んで周囲を見回した。

それは化け物の博覧会だった。

眼球がやたら大きく、爬虫類の様な鱗に覆われた頭で、身体が女性であり、腹部が妊娠したように膨れ上がっている生き物。

毛細血管が剥き出しで、下半身がまったく存在しない生き物。

身体の内臓が腐食して全身が緑色になり、どろどろに溶けても、なお生体活動を続けている生き物。

足が八本あり、手が一本しかない奇形児のような生き物。

身体が透明なゼリー状で、内臓の活動がすべて透けて見えるヒトの形をした生き物。



え、身体に力が入らない。足がすくんでしまって、動けない。初めての感覚だった。いや、少なからず、こういった感覚の経験はあるが、ここまで強烈な衝動は初めてだった。

恐怖、という感情。身体が動かなくなる程の感情の揺さぶり。怖い怖い怖い、ここから逃げ出したい。そんな負の感情が昌美の身体の中を駆けずり回り、頭が真っ白になり、なにも考えられなくなつてゆく。

と。

「神は天に辿り着こうとした人々を裁き、混乱バラルさせたが、その行為はそんなに罪深きことなのか？」

その時だった。かつん、かつん、と。床に響き渡る足音と共に。何かの音が昌美の鼓膜に入り込んできた。

「……っ！」

昌美は身体をびくん、と震わせ、心臓を鷲づかみされたような感覚に囚われた。異形の呻き声ではない、ヒトの声だった。謳うような口調で。なにかを訴えかけるような、熱を帯びた言葉を続ける。

「否。天を目指すというのは、遙かなる高みを目指すこと。愚者から賢者へと昇華したいということ。我々は進化しなければならぬ。次世代の進化は人の手で造り出さなければならぬ。なぜなら我々はこの生物にはない、知恵の力を手に入れた選ばれた種族なのだ。新たな進化の鎖は我々の手で紡ぐのだ。神の元へ近づこう。それが長い長い道程であったとしても。着実に一歩、一歩と。昇つ

ていける力が我々にはあるのだから」

聞き覚えのある声だった。昌美は息を止めて、背後へと振り返った。そこに一人の中年男が立っていた。白髪を後ろにまとめたオールバック。人懐っこそうな笑ったような顔の造りの男。綺麗な白衣を身に纏い、笑顔で昌美を見下ろしている。

「あなた……は」

間違いない。人類進化促進塾のスーパーバイザーとして入り、今では塾内のすべての実権を握る男。新井博士を、そして、篠塚を窮地に追い込んだ男。

戸木原淳だった。

## 2 「再会」

「これは一年前、塾内で僕が演説した言葉の一部だよ。覚えているかな？ ああ、そういえば横川さんはコンパニオンだから、発表会には参加していなかったね。ははは、ごめんごめん。ついっつかりしてたよ」

戸木原は朗らかな表情で笑い、頭を搔く。

「……………」

異様だった。この悪夢に満ちた光景の中、人類進化促進塾の中にいるときとまるで態度も口調もまるで変わらない、戸木原のその姿そのギャップの差がひどく、おぞましい。戸木原は怪物である。昌美はいま、篠塚から聞いた言葉ではなく、そのことを肌で実感していた。

「神聖なる進化の研究施設へようこそ。横川昌美さん。僕は心の底から、君の来訪を歓迎するよ。出来ればちゃんとした手順で入ってきてほしかったけどね。まあ、ここは普通の入り口がないから、仕方ないかな。はははは」

この明るい口調に耐えられない。昌美は立ち上がり、手にあるグロック拳銃を戸木原に向けて突きだした。戸木原は目を丸くして、眉根を寄せた。

「おやおや、いけないなあ。君みたいに可愛い女の子がそんな物騒

な物を。それは何処で手に入れたのかな。あ、ひょっとして、モデルガンなのかな？」

昌美の牽制に戸木原はまったく動じない。笑顔のまま、少しづつこちらへ近づいてくる。昌美はトリガーに指をかけ、大声で叫んだ。

「本物よ！ 中に弾も入ってる。それ以上近寄らないで！」

腕の震えが止まらない。この状態でも撃つたとしても銃身がぶれてまともには当たらないだろう。それを見透かされているのか。それとも銃自体に驚異を感じてないのか。戸木原はまるつきり感情に揺らぎを見せない。

「怖いなあ。随分と嫌われたものだね。ホラ、これでいいかな？」

戸木原は苦笑いを浮かべながら、足を止めた。昌美は大きくかぶりを振りながら、かすれた声で呟く。

「あなたはいつたい……何者、なの？」

戸木原は一瞬、きよとんとした顔で昌美を見据え、その後、笑った。

「あははは、嫌だなあ。知っているだろう。僕は人類進化促進塾のスーパーバイザーをやっている戸木原淳だよ。最近、塾の施設になかなか顔を出せなかったから、忘れちゃったのかな。だとしたらちょっと悲しいな。色々忙しくてね。一応、研究所のほうはちょこちょこ顔を出してはいたんだけど」

「何故、あなたがここにいるの！ ここは一体なんなの！？」

戸木原の声を遮り、昌美は叫んだ。戸木原は周囲を見回しながら、言った。

「言っただろう？ 神聖なる進化の研究施設だつて。ここは進化という命題に挑み、敗れていった者達の眠る、墓場。そして彼らは偉大なる挑戦者だよ」  
「挑戦者……たち？」

昌美が反芻した言葉に戸木原は深々と頷いた。

「そう。彼らはヒトだよ。いや、今はそのなれの果てと言った方がいいかな」

なにを言っているのか分からない。このベットに並ぶ異形の群れが人間だというのか。

「……君は分裂世界、という言葉を知っているかな？」

「え？」

「厳密には違うんだけど……世間ではパラレルワールド、並列世界、エヴェレット解釈と呼ばれている、それに近いものと考えればいいかな。世界は生き物なんだよ。世界変動が起こる度に世界は分裂して、細胞のように増殖してゆく。可能性の数だけ未来はあり、自分という存在も唯一無二ではない。横川昌美さん、君の存在も可能性の数だけ無尽蔵に存在することだよ」

「  
」

「だが、私たちの進む世界の根は行き詰まっている。ヒトという存在は知恵の力を得た強い存在だけど、同時に脆い存在でもある。み

んな気付いているんじゃないかな？ ヒトは確実に自滅の道歩み始めている。このままじゃ、ヒトという生物は滅びるしかないんだ。だから 僕は強制的に進化する道を選んだんだよ。自然の摂理に逆らってね。知恵の力で、他世界の力で、閉塞された世界の根に新しい要素を植え付けよう。そう考えたんだ。その研究過程が、この部屋という訳さ」

……話が抽象的すぎる。なにが言いたいのか、さっぱり分からない。戸木原は薄い笑顔を浮かべて、言った。

「瞬間物質転送装置」  
テレポート・ゲート

「っー！」

その言葉に昌美の目は大きく見開いた。

「君は新井博士と行動を共にしていたらしいね。だったら、知っているよね？ あの機械には生物と生物を融合する力がある。新しい進化の鎖を紡ぐにはヒト以外の生物を遺伝子レベルで取り込む必要があったんだ。そして……それを実行した。そういうわけさ」

そう言って、戸木原は再び辺りを見回した。幾列にも並んだベツトに横たわる異形の集団。苦しげに呻く声と、鎖の音と、濃密な悪臭。

つまり、これは。ここにいるのは、すべて

くらり、と。眩暈めまいがした。心臓の脈動が激しく音を立て、視界がぶれる。戸木原は続けた。

「無論、既存の生物を融合するだけじゃ意味がないんだ。それじゃ



あ、世界には干渉できない。まったく違う進化過程を経て来た世界の根と僕らの世界の根が交差する機会が五年前にあってね。そのときに向こう側の生物がこちら側に流れ出てきたんだ。世界が違えば、住む生物も変わるんだ。すごいと思わないかい？ その生き物は僕らの常識の概念からかけ離れた生体構造をしていたんだよ！ 僕らの住む世界のどんな強靱な生物よりもきつと強く優れている。そんな生き物の世界因子があれば、僕らの世界はきつと変わる。新たな進化を遂げることが出来る。そう確信したんだ」

……よくよくみれば、みんな面影がある。人外の生物ではあるが、必ずどこかにヒトらしき部位が残っている。戸木原は言った。『成れの果て』であると。そう。こんな生物は存在しない。自然に生まれてくるはずがないのだ。

もし、そんな生き物があるとすれば、それは極めて作為的な

「ところが上手く事が進まなくてね。細胞 あ、この他世界の生物はアルファというんだけど……細胞は他の生きている生物に投与すると浸食し、対象の生体情報を書き換える特性を持っているんだ。その書き換えの力が思いのほか強くってね。結果、訳の分からない生き物になってしまふ。僕が欲していたのは、双方の世界の因子を含んだ安定した素体だからね。上手く安定しなくて、本当に苦労したんだ」

イタイ、タスケテ、コロシテ、シニタイ。

周囲には苦悶に満ちた声が充満し、昌美の耳に入り込み、怨念となって昌美の精神を蝕んでゆく。視界が暗澹あんたんとし、背筋に不快な悪寒が駆け抜ける。

「特に 細胞の書き換えが終わってしまうと、人の手には負えない力を持った、やっかいな生物に変貌してしまうからね。細心の注意が必要だった。それに実験動物と違って、ヒトの遺体を処理するのは難しいんだ。だから、あえて彼らの命は絶たず、細胞の浸食を食い止めるナノマシンを投与して、ここで過ごしてもらっている。それに偉大な進化の実験に貢献してもらった彼らの命を絶つのは忍びないからね」

「なんて……こと、を……」

かすれた声で、呟く。戸木原は俯きながら、眉を潜めて言った。

「ここにいる皆には済まないと思ってる。でも、これは必要なことだったんだ。犠牲なしに成功はありえない。大いなる進化を成し遂げようとするならば、なおさらだよ。彼らは大いなる挑戦者で、新たな進化の礎となったんだよ。すでに事を得た。『柔らかい細胞』の技術を手に入れ、融合と安定の研究は完成したんだ。ここにいる人達のおかげだよ。彼らの犠牲は無駄にはしない。絶対にだ」

「っ！」

感情にまかせて、昌美はグロツクのトリガーを引いた。銃声が轟く。銃弾は明後日の方向に飛び、戸木原のいる位置から1メートルほど離れた床に弾痕が刻まれた。戸木原は相変わらず、微塵も動揺した様子を見せない。

「……狂ってる。そんなことのために、こんな多くのヒトの命を！」

戸木原は眉を潜めおおきくかぶりを振った。

「心外だなあ。彼らはみんな生きてる。僕は誰も殺してなんかいな

いよ」

「ふざけないで！　こんな状態になって生きてるって言えるの？　これが進化の研究？　ただ、瞬間物質転送装置テレポート・ゲートを使って、ヒトの命を弄んでいるだけじゃないの！」

「……………」

「新井博士を返して！　篠塚くん……………トキくんに会わせて！　あたしの大事な人達を返してよ！！」

感情に身を任せて激高する。戸木原は肩を竦めて、大きな溜息を吐いた。

「……………君はどうやら大きな勘違いをしているようだね。ふたつ訂正させてもらうよ。まずひとつ。ヒトと細胞の融合。これは確かにヒトを人工進化させるのに必要不可欠なことだけど、それ自体が進化に繋がるモノじゃない。あくまでも過程として必要なんだよ。異界の門を開く『鍵』としてね」

言いながら、戸木原は右手で鍵を捻るような動作をする。

「『鍵』を使うには扉が必要。これは当然のことだよ。しかし、扉は目に見えない場所にある。だから、扉を顕現化させる必要があるんだ。僕はその為に人類進化促進塾で『能力者計画』ネオチャイルド・プロジェクトを発動させたんだよ。『門』の素体を造り出す研究プロジェクトとしてね。『鍵』と『門』と『結晶体』。このみつつが揃えば、必ず世界は変わる。人間という存在は救われるんだよ！」

理解不能。戸木原がなにを言っているのか分からない。ただ一つだけ分かるのは、戸木原が常人の神経を持っていないということだけだ。彼の言動にはまったく倫理観というモノが感じられない。まるで昆虫か、ヒト以外のなにかと対話しているような気持ちにさせ

られる。それがひどくおぞましい。

戸木原は笑みを浮かべながら、続けた。

「そして、ふたつめ。いま『篠塚くんに会わせて』って言ってたよね？ ひよつとして君は篠塚くんに会いたいが為にここへ来たのかな？ だとすると、二人は恋人同士だったりするのかな？ いやいや、分かるなあ。その気持ち。彼は優秀だったし、努力家だった。彼のひたむきな所は異性には魅力的に映るだろうね。しかし

」

言いながら、戸木原は眉根を寄せ、大きく首を左右に振った。

「残念ながら、その気持ちは本物じゃなかったみたいだね。ヒトは内面より、結局外見が優先される生き物だってこと、自分で証明しちゃったんだよ、君は」

「なにが……言いたいのか？」

「だから、会わせても、何もないだろう？ 君と篠塚くんはとっくに再会を果たしているんだから」

「え……？」

「それに気付かない。それが君の罪だよ」

そう言つて。戸木原は哀れみの表情を浮かべながら、昌美の前にいる異形に目を向けた。

どくん、と。

心臓が大きく脈動した。再び、目の前の異形に目を向ける。そこには青色をした怪物がいる。手が二本、足が三本、腹の部分に顔が埋もれている気色悪い形状をした生き物。ソレは苦悶の表情を浮か

べながら、蠢いている。その怪物は繰り返し、なにかを呟いている。

イタイ……タスケテ、と。

否。それだけでは、ない。あまりにもかすれた声なので聞き取れなかった。それとも、その言葉を無意識に排除していただけなのかもしれない。

その過酷な事実を。受け入れたくなくて。だが、もう避けられない。聞き入れたくなくとも、その怪物の発する言葉に耳を傾けてしまふ。意識してしまう。

イ……タ……マ……ケ……テ

イ、タイ……サ……タスケテ

イタイ……ミ……タ、スケ、テ

イタイ、マサミ、タスケテ

昌美の耳がその声を捕らえ、頭がその意味を認識する。してしまった。

「あ、ああ……あああ……」

### 3 「新しい子供たち」

昌美の顔が、声が、絶望に染まってゆく。身体から力が抜け、ぺたん、と床に座り込んだ。おぞましい。生理的嫌悪を感じるその無茶苦茶な構造をした生き物。じやらり、と鎖の音を立てながら、再び化け物の手が昌美に向けて伸びる。今度は避けなかった。ベットに近づき、歪なその手を迎え入れる。その手がぎこちなく昌美の頬を撫でた。

「そ、んな……」

覚えている。篠塚はいつも自分の頬を優しく撫でてくれた。昌美は篠塚のその行為が大好きだった。篠塚の手からぬくもりと優しさを感じられたから。その感覚がたまらなく心地よく、幸せだったから。昌美はその手をぎゅっと握りしめた。

「トキ……くんっ」

ぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。よく見れば、腹に埋もれている顔は篠塚そのものだ。眼球が赤く染まり、歯が抜け落ちてはいるが。面影はかろうじて残っている。気づけなかった。それどころか、畏怖し、生理的嫌悪すら感じてしまった。それが情けない。

「わたし……ごめんっ、うつ……ごめんな、さいっ……うあああ  
あっ」

そんな昌美を見て、篠塚は目を細めて、微笑んだ。彼の左手が彼女の涙を拭い、唇が震えるように動いた。声にならない声で。目の前にいる昌美にも聞き取れない程、小さな小さな言葉。だが、昌美にはその言葉の意味が分かった。その言葉に込められた強い想い。それを感じ取っていた。

ア、イ、シテル

「っ！」

息が詰まり、胸がいつぱいになる。昌美は両手で篠塚の手を強く握りしめ、何度も頷いた。

「ぐすつ……わ、たしも……わたしもだよ。愛してる。ごめんね……トキくん……」

その手にかつての触り心地は感じられない。指は八本あり、粘着質な液体にまみれ、以前の面影は微塵もない。だが、それでも変わらないものもある。篠塚の温もり。この頬から流れてくる暖かさは紛れもない、彼だけの温もり。

そして、篠塚の笑い顔。昌美は篠塚の笑顔が大好きだった。だから、覚えている。篠塚がどんな笑い顔を浮かべるのか。それは姿形が変わっても決して変わるモノではない。

紛れもない。この異形は篠塚登喜夫だった。

再び会えた喜び、

彼の温もりを感じられた喜び。

しかし、それ以上の絶望が彼女の心を、身体を支配する。

こういつた結末は予想していない訳ではなかった。新井博士があの有様なのだ。五体満足でいるはずがない。心の片隅ではそう思い、それでも、篠塚が無事である可能性にすがりつき、それが彼女を突き動かしてきた。

だが、目の当たりにした現実はあまりにも過酷で。一片の希望も見出せない、無惨なもので。彼女の希望は地面に落としたガラス細工のように粉々に砕け散ってしまった。

(……もう、なにもかもどうでも、いい)

昌美の頭が白く霞みかかり、身体から力が抜けていく。

「間が悪かったね。篠塚くんは最後の失敗作でね。柔らかい細胞を入手する直前に実験が行われたんだ。もう少し早く柔らかい細胞の存在を知っていれば、篠塚くんもそんな姿にならなくてすんだのにな。残念だよ」

真っ白になった頭の中になにか、雑音ノイズが入り込んでくる。ひどく耳障りな音。微塵の罪悪感も倫理観もない。淡々としたモノでもなく、悪意に満ちたモノでもない。ただ、ありふれた日常の言葉を語るかのようにな。現実を語る雑音ノイズ。

雑音ノイズは告げる。自分の最愛のヒトは失敗作であると。彼はもう二度と元に戻ることはない。ミキサで混ぜ合わせた飲み物は決して元のカタチには戻せない。それと同じだ。

「あ、でも考えようによってはこのほうが良かったのかな。新井博士は完成された素体で双方の世界の因子も混在し、これ以上ないく







唸然としながらも、昌美は再び標準を定め、発砲する。八発、九発、十発。幾度もの銃声が轟き、高速回転した銃弾が戸木原の肉体目掛けて、牙を向く。が、やはり結果は同じ。

途中で銃弾が静止し、銃弾が地面に散らばるだけだった。彼の身体には届かない。

「あ……な、なんで？ どうして!？」

戸木原は地面に散らばった銃弾を指先で一つ取り上げ、ふうと嘆息した。

「危ないなあ、横川さん。こんなものが身体の中に入ったら、死んでしまうよ。僕はアルファ細胞を取り込んだ人達と違い、普通の人間だからね。『みんな』が護ってくれなければ、危ないところだった」

そう言って、戸木原は白衣のポケットの中に右手を伸ばし、何かを取り出した。透明色の棒だった。長さは十センチほど、太さは1センチほどの小さな棒。ガラスでもプラスチックでもないみたことのない材質で、上下には棒を覆う丸い金属が付着しており、そこから幾本にも別れたコードがはみ出ている。

戸木原が棒を握りしめると、淡い水色の光を放ち始めた。あの棒はなんなのか。いったい何が起きているのか。そんな困惑の気持ちを抱く暇もなく、事態は次の状況に移っていた。

なんの脈絡もない。不自然という言葉がぴつたりと当てはまる、タイミングで。

それは現れた。

昌美の左脇腹になにかが触れた。昌美が身体をびくつ、と震わせ、横を見ると、そこに女の子がいた。

若い少女だった。年齢はまだ三、四歳ほどの、長い髪の毛を両端で結んだ、アップスタイルの少女。飾り気の一切ない白い服を身に纏い、虚ろな眼差しで昌美をじっと見つめ、昌美の脇腹に手を添えている。いつの間に近づいたのだろうか。少女の存在にまったく気付かなかった。少女は小さな唇を開き、

「許さない」

と、言った。

「え……？」

「よくも新井博士を。トキくんを。許せない。戸木原淳。この男だけは絶対に許せない。わたしはどうなってもいい。この男だけは許してはあげない」

まるで感情の籠もっていない朗読のような口調だった。虚ろな眼差しになにも映さず、淡々と。機械的な口調で。『それ』を口にす

「どうして？ どうしてこんなことに？ どうして戸木原には銃が聞かないの？ おかしい。いったいなにが起こってるの？ あの光る棒はなに？ この子は一体いつの間に？ どうして？ どうして？」

昌美は大きく、目を見開いて少女を見た。この少女が口にしてい

る言葉はひよっとして

「どうしてこの子はあたしの考えていることをしゃべってるの？」

と、少女が。昌美に向けて、そう言った。

「　　っ！」

昌美は肌を泡立てながら、少女の手をはたき払いのけた。少女は眉一つ潜めず、再び昌美に向けて手を伸ばしてくる。昌美は狼狽しながら、たたらを踏み、少女から距離を取った。

「こ、この子、ひよっとして……トキくんの言った『ネオ・チャイルド能力者』！？」

昌美の呟いたその言葉に「ご名答」という返事と拍手の音が聞こえてきた。

戸木原の方に目を向けると、そこにも子供がいた。戸木原の左隣に短髪の幼い少年が一人。右隣には髪の毛がセミロングの幼い少女が一人。不自然なほどの唐突さで、そこに立っていた。

「この子供は非常に僕に慕ってくれていてね。僕もこの子供達の父親のつもりで、接している。だから、僕になにか危険があると護ってくれるんだよ。可愛い、いい子供なんだ、本当に」

満面の笑顔を浮かべながら、両手で子供達の頭を撫でる戸木原。子供達は何も反応しない。虚ろな目で身体のを抜いたまま、戸木原のされるがままになっている。

「そして、父親思いのこの子供達は僕に危険を及ぼす対象を排除しよ

うとするんだ。だから 気を付けた方がいいよ、横川昌美さん」

戸木原がそう言った瞬間、戸木原の足下に散らばっていた無数の銃弾が重力の枷から外れたかのように。ふわりと宙に浮き始めた。

「え………？」

昌美は呆然として。その不可思議な光景に意識を凍らせた。

夢を見ているようだった。いくつもの銃弾が戸木原の傍らにいる少年の目元で踊っている。虚空でぐるぐると回りながら。手を触れることもなく、外部から力を与えるわけでもなく。意志だけの力で銃弾を浮かせ、操っている。既存の物理法則を一切無視した現象。これをこの少年が本当に行っているというのか。篠塚に話は聞いていたが、実際にこうやって目の当たりにしても、実感が湧かない。それほど非現実感が漂う光景だった。

ネオ・チャイルド  
『能力者』。

脳の中に埋め込まれた思考伝達金属サイコ・メタルを介して世界に干渉出来る者達。

『Embodiment Power System (E・P・S)』 (具現力干渉システム) と呼ばれる特殊フィールドを意志の力で形成し、その中で『具現する力』を展開出来ることが可能な子供達の総称である。

彼らは世界にある『具現する力』にアクセス接続することが出来る。イメージした力を現実空間へマテリアライズ顕現化することが出来る。

その力は強大であり、世界そのものを変容させかねない程のものだ。

それが戸木原淳が人類進化促進塾内で行ってきた『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』であり、昌美の眼前にいる少年少女達はその成果そのものだった。

#### 4 「幻想に沈みゆく」

少年が昌美へと視線を移し、目をすうっと、細めた。そして、

「禍なるかなバビロン。そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり」

少年はよく分からない言葉を口にした。

刹那、宙に浮いている二つの銃弾が『消失』した。次の瞬間に訪れたのは二つの音。何か弾けたような　そんな音、だった。

息を飲んで背後へ振り返ると、床と壁にヒビが入っていた。

「え？」

なにが起こったか分からない。少年の目元から、更に二つの銃弾がふつと消え、今度は昌美の右耳と左脇腹に熱い衝撃が駆け抜け、激痛が走った。

「う……っ！　ぐっ！」

呻き声を上げながら、両手で耳と脇腹を押さえる。押さえた箇所から、赤い血がじわりとにじみ出る。次第に血の量は増してゆき、両手を濡らし、地面にぼたぼたとこぼれ落ちた。それで昌美はようやく理解した。自分が撃たれたことに。あの少年は銃という媒体を使わずに、銃弾を飛ばしたのだ。本物と寸分違わぬ威力で。

幸い二発とも直撃はせず、皮膚と肉がわずかにえぐれた程度で致



命傷ではないようだが。

最初は標準合わせ。

二回目は標準の微調整。

三回目が本命といったところか。

機械のような手順と精密さで。少年はなんの感情の揺らぎを見せずに。標的を見据えて、目を細めた。目元にあった銃弾がすべて消失した。昌美に向けて

銃弾が加速する。

「きやつ！」

その直前、昌美の腕がなにかにぐいと引つ張られ、昌美は床に転倒した。青い歪な腕が昌美の腕を握っている。篠塚だった。昌美の背後にいた篠塚は無数の銃弾の直撃を受け、身体のうちこちらから、緑色の体液を吹き出し、苦悶の呻き声を上げた。

「トキくん！」

昌美はすぐさま立ち上がり、叫んだ。脇腹が痛み、ぐらりとバランスが崩れそうになるが、歯を食いしばり、踏み留まる。改めて戸木原に標準を合わせ、銃のトリガーを引く。

十三発、十四発、十五発。

しかし、やはり結果は同じ。銃弾は戸木原の前で止まり、からんからんと音を立てて床に落ちる。銃弾は届かず、彼の身体を貫けない。

（だったら！ 止めることが出来ないくらい近い距離で！）

昌美は銃を構えたまま、戸木原の元へ駆け出そうとした。が、その瞬間　　昌美の身体がが《・》くん、と崩れ、そのまま跪いた。再び立ち上がり、戸木原の元へ行こうとするが、何故か足が進まない。身体が鉛のように重く、動かない。比喻ではない。本当に重量感がのしかかり、身体が動かないのだ。

「くうっ……な、なに、コレ……きゃあっ！」

悲鳴を上げて、昌美は転倒する。腹ばいの状態で倒れ、そのまま起き上がれない。身体にのし掛かる重量感益々強くなり、押しつぶされそうな感覚に悲鳴を上げた。

「ぐっ、う……ああああああああああああっ！！」

骨がみしみしと音を立てているのが分かる。重い。苦しい。まるで、大きな生き物に踏まれ、そのままじりじりと押しつぶされるような、そんな感覚。歯がみしながら、戸木原の方へ目をみやると、隣にいる髪がセミロングの少女が目を細めて、じっとこちらを見据えている。どうやらあの少女がこの状況を造り出しているらしい。

ケラレディ・オペレーション　ネオ・チャイルド  
「重力操作。この子の能力者としての力だよ。文字通り、この子は自分が見て『認識』した領域の重力を自在に操ることが出来る。重くすることも、軽くすることもね。驚いたかな？　ヒトの脳にはこんな可能性が眠っているんだよ。すごいだろう」

自慢げに戸木原が語る。篠塚が寝ているベッドの足がばきんと音を立てて、砕けた。ベットが傾き、篠塚の身体がずり落ち、獣の咆哮のような悲鳴を上げる。

この頑丈そうなベットの足が砕けるなど、相当な重量がかかっている証拠だ。立ち上がることはおろか、腕を上げることすら出来そうにない。

（こ、これが本当にこの子供達がやっていることなの……？ 信じられない……）

篠塚から『能力者』ネオ・チャイルドの話聞き、こうしてその能力を体感していても、未だ現実感が湧かない。

篠塚があれば、反対していた理由がいま、分かった気がした。これほどの『能力』ちからを個人が持つようになれば、世界は確実に変容するであろう。瞬間物質転送装置と同様、現在の人類が触れてはいけないモノだ。

身体の重みが肺を圧迫し、空気がすべて押し出される。

「か、は……っ！」

苦しい。息が吸えずに、呼吸が止まる。昌美の顔が紫色に染まり、視界が白くかすんでゆく。

このまま……死ぬのだろうか。昌美は漠然とそんなことを思った。一人なら、希望の残っている時であるのなら、どんなことをしても生き延びたい。そう思ったことだろう。しかし、今は希望の灯火は完全に消え去り、絶望しか残されていない。そんな世界で生きていても、意味などない。

（「う……ごめんね……トキくん、何も、出来ないで。でも……きっと、これで終わりじゃない。終わりなんかじゃ……ない、よ）

篠塚もここで息絶えれば、地獄の苦しみから解放される。そして、死の後も続きがある。そう信じよう。もし、死後の世界が存在するのならば。そこで一緒になればいいのだ。そこで幸せになる。篠塚も偽りの肉体から開放され、あの世で元に戻るに違いない。自分にとって篠塚は半身そのもの。

きっと、死んでも離れることなんて、ない。だから、このまま死の重圧を受け入れ、魂だけの存在になれば、きっと二人は幸せになれる。それでいいではないか。昌美は心の底から、そう思った。

が

「う……くっ……はっ！」

そんな想いとは裏腹に。昌美の身体は動いていた。うつ伏せになったまま肘を前に、前に出して、ずりずりと進む。耳と脇腹からは絶え間ない痛みが襲い、血が溢れ出ている。痛みを堪えながら、昌美は左手にあるグロック拳銃を固く握りしめた。決して、手放さないように、強く、強く。

そして、頭の中ではこの窮地から活路を見出そうとしている自分が、いる。端から見たらさぞ滑稽な、惨めな光景に映るだろう。どうして、そんな行いをしているのか。そんな行為になんの意味があるのか。昌美は自分の行為に違和感を感じた。が、すぐにその理由が分かった。

（ああ……そうか。あたし、悔しいんだ）

ここで死んでしまっても構わない。それは偽ざる自分の気持ちだ。しかし、このまま死んだら、あまりにも意味がない。新井博士を、

篠塚を、ここにいるみんなの命を弄んだ戸木原をそのままにして、このまま死んでしまうのは悔しすぎる。

この男は……この男だけは許せない。この男のした行為に報いをせめて、一矢だけでも報いないと、皆が浮かばれない。救えない。だから

「うっ……ああ、あっ」

酷く重い拳銃を両手で握りしめ、トリガーに指をかける。そして、狙いを定める。これが最後の博打。銃弾にも重力の干渉できるのなら、銃など、なんの役にも立たない。

しかし、戸木原が言っていたことが本当であるなら。ひよつとして、と思うことがあった。もし、推測が当たっていれば、これで活路を見い出せる筈！

「うあ……あああああああっ　　！！」

最後の力を振り絞り、過酷な重力の大きさに逆らい、昌美はトリガーを引き絞り、発砲した。銃声が響き渡り、銃弾が高速射出される。

予想通りだった。この少女は見て『認識』したモノの重力の操作を行うことが可能と戸木原は言った。しかし、昌美は逆にこう考えた。

『認識』ということとは、ひよつとすると見えないモノの重力の操作は出来ないのではないか、と。

グロツクの中に入っている銃弾は外からは分からない。銃弾は高速で射出される為、視認はできない。よって、銃弾は重力の干渉を受けない。

しかし、あの少年は別だ。高速であろうが、何だろつが、銃弾を防ぎ、操るスキルを持っている。だから、戸木原に撃つたとしても、同じ事の繰り返しだろう。

だが　それが上ならばどうだろう？

昌美が狙った先は戸木原ではない。それよりも遙か高見にある、天井だった。銃弾は見事、狙い道理の軌道を走り、命中した。

がしゃあん、と大きな音を立てて。天井で灯っていた大きな蛍光灯の一つが粉々に砕け散っていた。光が消え、蛍光灯は細かい破片となつて、戸木原に、少年に、セミロングの少女に降りかかる。

セミロングの少女は目を瞑り、両手で顔を塞いだ。瞬間、身体にのし掛かっていた重さが嘘のようにかき消えた。セミロングの少女の視線がそれで、重力の枷から開放されたのだ。昌美はすかさず動いた。身体は酸素を渴望していたが、それを堪え、呼吸を止めたまま戸木原の元へ駆け寄る。戸木原も少年も蛍光灯の破片に怯み、こちらを見ていない。

これならば、あの少年も『能力』<sup>ちから</sup>を使えないだろう。いまという一瞬が、絶好の機会だった。至近距離にて、グロツクの銃口を戸木原の頭に当てる。ゼロ距離射撃。

銃弾の残りはあと一発だけだが、これならば、素人の昌美でも確実に当たる。外すことなどあり得ない。完全に意表を突いた形とな

り、戸木原は驚愕の表情を浮かべていた。また脇腹になにかが当たる感触がしたが、昌美はそれを無視し、銃のトリガーに力を込め、銃弾を解き放った。躊躇はまったくなかった。

大きな銃声が響き渡った。昌美の両手に反動がのし掛かる。これ以上ない手応えだった。

とっさに思いついたことで、博打の要素が高かったが、昌美の読みは見事的中した。戸木原も昌美がこういった形で重力の枷を抜け出し、反撃に転じるとは予想もしていなかったのではないだろうか。

だが、それでも。戸木原に銃弾は届かない。彼を仕留めることは出来ない。

銃の引き金を引いた瞬間、どんっ、と。昌美の『背中』に衝撃が走った。銃弾を放つときに生じた反動の衝撃と。後方からの衝撃。それが、ほぼ同時に昌美の身体に襲いかかった。

「え………？」

啞然、とする。何故だろうか。背中が熱い。たまらなく熱い。

「な………に、これ………」

自分の背中を触ってみる。ぬちゃりとした生暖かい感触の液体が付着する。血だった。耳や腰から溢れているモノではない、まったく新しい血。始めは『点』の様に小さかった背中の赤い染みが、どんどん広がり、昌美のＴシャツを真っ赤に染め上げてゆく。身体から力が抜け、目が霞んでゆく。

「ふう……びつくりしたなあ。まさか、そんな手でこの子達の『能力』から逃れるなんて、さすがの僕も肝を冷やしたよ。本当に横川さんは只のコンパニオンなのかい？」

脳天に銃弾を叩き込んだ筈の戸木原が。驚いた表情で、ふうと溜息を吐いていた。彼の額に銃創は皆無。無傷だった。

「え？ なん……どうし つ、う……ごぼっ!？」

胸の奥から、何か熱いモノがせり上がってきて、昌美はそのままそれを吐き出した。大量の血だった。昌美は胸を右手で強く押さえながら、がくん、と跪いた。身体に力が入らない。何が何だか、訳が分からない。

「不思議かい？ 何故、僕が無事なのか。ちなみに僕はなにもしない。助けてくれたのは、そこにいる彼女だよ」

そう言つて、戸木原は昌美の背後に目を向けた。振り向くと、そこにはアップスタイルの少女が佇んでいた。先程、昌美の身体に触れ、思考を読んだ少女だった。

「ひよつとして、この子の能力は精神感応とでも思っていたかな？ 違う違う。確かにそういう能力もあるけど、それはあくまでもこの子の持つ能力の副産物に過ぎないんだよ。そもそも、不思議に思わなかったのかな？ この子達がいきなり現れたことに」

……確かに、そうだ。不自然なほど、唐突にこの子供達は現れた。なんの気配もなしに近づいて、自分の身体に触れてきた。まるでいきなり現れたかのように



「！……ま、さか」

「気付いたかな？ そう、君が考えている通りだよ。この子達は『跳んだんだよ』。足で動くというタイムラグを一切無くしてね。しかし、新井博士の瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートの理論とはちよつと違うかな。遠くの距離を一瞬にしてゼロにしまうほど万能じゃない。自分の触れた対象の構成情報を読み取り、EPS領域を展開する。跳ばしたい対象と跳ばしたい位置のふたつにね。仮に跳ばしたい対象をAとして、跳ばしたい位置をBとしようか。そのAとBのEPS領域を切り取り、空間ごと差し替えてしまうんだ。

Aがあつた空間にはBが入り、Bがあつた空間にはAが来る。つまり、AとBの空間の交換だね。結果、対象は動いて移動するといふタイムラグを無くして、一瞬で移動できるといふわけさ。視認できる距離しかEPS領域は展開出来ないから、瞬間物質転送装置テレポルト・ゲートほどの汎用性はないかもしれないけど、こうした用途には十二分の力を発揮する能力だよ。生命体と物質、双方同時に転移できるし、構成情報さえ読み取つてしまえば、物質のみを転移することも可能だしね」

戸木原は微笑みながら、白衣のポケットの中からボールペンを取りだし、アップスタイルの少女に向けて手招きした。持っている棒が光り、少女は戸木原の元に歩み寄る。そして、少女は戸木原の持つボールペンに触れ、

「禍なるかなバビロン。その諸々の神の像は碎けて地に伏したり」

と、先程の少年と同様、よく分からない言葉を口にしていた。瞬間、戸木原の持つボールペンがかき消えた。まるで初めからそこにいなかったかのような自然さで。

「え……あ……ぐっ！」

と、次の瞬間、昌美の身体に衝撃が走り、激痛が襲いかかった。胸元をみると……そこには黒く、細長い棒　ボールペンが深く食い込んでいた。まるでそこに初めからあったような自然さで。

「あ……うう……げ、げほっ！　げほっ！」

再び大量の血を吐き出す昌美。紅い液体が床をびしゃびしゃとこぼれ落ちる。

「つまり、こういうカラクリだよ。わかったかな？　横川さんの構成情報はさっき、この子はすべて読み取っていたからね。こういう使い方も出来るんだよ」

昌美は真っ赤に染まったＴシャツを両手で強く握りしめながら、床に崩れ落ちた。横たわった身体を中心にじわりじわりと血だまりが広がってゆく。かすれゆく意識の中で昌美はようやく理解した。

自分は撃たれたのだ。

銃弾が銃口から放たれる瞬間に、少女は昌美の身体を通じて銃の構成情報を読み取り、銃弾のみの空間と何もない昌美の背後の空間を切り抜き、差し替えたのだろう。つまり、自分で自分の背中を撃ってしまったという不可思議な状況をこのアップスタイルの少女は造り出したのだ。

だがしかし。昌美にそんな理屈はもうどうでもよかった。意識が、視界が、次第にかすれ、暗い闇に引きずり込まれてゆく。ひどく……眠い。

(どうして、だろう？ どうして、こんな、こゝとになったの……かな……？)

あんたん 暗澹としてゆく意識の中。ふと、石和のことが頭に浮かんだ。篠塚に会いたい一心の為、彼の忠告を無視してしまった。約束を破ってしまった。危険な試みであることは分かっていたのに。自分の我が儘を聞いてくれたのに。自分のことを心配してくれたあの人を……裏切ってしまった。

「ごめん、なさい……佐々木さん、石和さん、約束、まも……れ、なく、て。ごめん、ね、トキ……くん。助けて……あげら、れなく、て」

ひゅーひゅーと息を漏らしながら、声にならない声で三人に詫びる。崩れたベットから呻き声が聞こえた。壊れたベットの合間から異形の手がこちらに向かって伸びていた。

指が八本ある歪な手。篠塚の手だった。

最後の力を振り絞って、昌美は手を篠塚に向かって伸ばした。ここからでは篠塚のいる場所まで距離がありすぎて、手は届かない。それでも、届くと信じて。温もりが感じられると信じて。二人は手を伸ばし続けた。

「ト、キ……く、ん……だい、す……」

最後まで、言葉を紡ぐことも叶わず。だが、昌美の中ではその手は届いたという幻想を抱いて。彼女の手がぱたと落ちて、その意識は深い闇の底へ沈んでいった。それっきり昌美の身体は微動だにしない。

「おやおや、いけないなあ。まだ授業レクチャーの途中だというのに、こんなところでリタイヤしちゃうのかい？ 仕方ないなあ、横川さんは」

昌美の意識が途切れた後も、戸木原の口調は変わらない。明るく朗らかなまま、言葉に応えることのない昌美に向けて、言葉を浴びせ続ける。

「でも、大丈夫だよ、横川さん。君は死なない。篠塚くんを想う気持ちに僕は心打たれたんだ。君たちの想いは本物だ。だから、ずっとずっと二人が一緒にいられるように僕が手伝ってあげるよ。喜んでくれると嬉しいなあ。そして」

うつ伏せになっている昌美の元へしゃがみ込み、昌美のTシャツに口を近づけ、戸木原は満面の笑みを浮かべた。嬉しそうな声で、楽しそうな声で。戸木原は彼らに向かって、話しかけた。

「もしもし、佐々木くん、石和くん、聞こえているかなあ？」

## 5 「Who are you?」

『もしもし、佐々木くん、石和くん、聞こえているかなあ?』

陽気な声が聞こえる。瞬間物質転送装置・改のスピーカーから発せられるその声は、聞き覚えのある声。戸木原淳のものだった。

石和武士も佐々木勇二郎も。モニターを眺めたまま、呆然としていた。昌美の行動は音声、映像共に超小型カメラを通じて、リアルタイムで中継されていた。

巨大な部屋に収容されている異形の集団。新井博士のこと、篠塚登喜夫の末路、『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』、『ネオ・チャイルド能力者』、そして、横川昌美の死

想像を絶するあまりの事態に頭がつかない。石和の顔は強ばり、頭の中は真っ白に染まっている。いったい何が起きているのか。この目の前にいる人物はなんなのか。

『ん? おかしいなあ、返事がない。ああ、これは小型のカメラでマイクしかついていないのか。どこかに連絡を取り合うための通信機がある筈なんだけど……』

画面がぐらぐらと揺れる。戸木原が昌美の身体をまさぐっているようだ。戸木原に昌美の身体から溢れ出た大量の血が付着し、びちゃびちゃと音を立てる。手が、白衣が、顔が赤く染まるが、彼は微塵も気にした様子がない。まるで子供が公園の砂場で泥遊びをしているような、そんな光景に見えた。

『ああ、あった、あった。インカムかあ。ネット回線を利用して、長距離の通信が出来るタイプの、なかなかいい性能のインカムみたいだね。本格的だなあ。それじゃあ電源を入れてっ』

カメラがぶれが収まると、モニターに戸木原の顔がアップで映っていた。自分でカメラを持ち、レンズを自分に向けている。耳にはインカムが。二つとも昌美の身体から取り外したようだ。傍らに映る昌美の身体はもうぴくりとも動かなかった。

『さて、改めまして。佐々木くん石和くん、聞こえてるかな？ 聞こえてるよね？ まさかフォネティック・コードを使わなきゃ返事しないなんて、意地悪はしないよね？』

戸木原は顔が半分昌美の血で染まった状態のまま、無邪気な笑顔でそう言った。そのあまりの異質な光景に。身体の奥から、何かがかせり上がってくる。かつてないほどの衝動。ここから逃げ出したいという強い強い想い。それは生物なら誰もが持っている天然の危険信号。恐怖という感情。石和は震えた手でインカムのスイッチを入れ、かすれた声で答えた。

「お前は……誰だ？」

『ん？ その声は石和くんの声だね。ようやく答えてくれた。嬉しいよ、うん。久しぶりだね、石和くん。元気していたかな？ 隣に

は佐々木くんもいるんだろう?』

「お前は誰なんだ、一体!」

身体中にこびり付いた恐怖を振り払うかのように。石和はかたかたと身体を震わせながら、大声で戸木原に怒鳴りつけた。戸木原は驚いた顔を浮かべ、

『ひどいなあ、いくら久しぶりだからって。自分の上司の顔も忘れちゃったのかい? 戸木原だよ、戸木原淳。第五研究所の主任研究員だよ。こんなこと言うまでもないことだろう? あ、ひよつとして、連絡を取らなかったこと、根に持つてるのかな。ごめん、ごめん。作業の方に夢中になっちゃって、連絡するのすっかり忘れていたよ。コレじゃあ、主任失格かな? いや、社会人として問題あるよね、うん。本当にごめんよ、石和くん。反省してる』

「……………」

違う。これは自分の知っている戸木原ではない。顔も、声も、身体も。すべて覚えがあるモノなのに。内面がまるで違う。違いすぎる。戸木原はもつと傲慢で、無能で、目がぎらついた自尊心だけが高い男だったはずだ。

いま石和の目の前に映っている男は朗らかで、口調も違う、落ち着きもある、目元も妙に優しい顔をしていて、まるで別人だ。戸木原は眉根を寄せて、首を傾げた。

『どうしたんだよ、石和くん。さつきから、変だぞ。あ、そうか。君たちにはこの人格じゃなかったね。最近、第五研究所の人達に会ってないから、すっかり『形成』するのを忘れていたよ。いま、いる研究所はこの人格で『適応』しているから、君たちの知っている人格に戻すのは難しいかなあ。第五研究所にいけば、また戻るとは

思っけど』

意味が……分からない。いったい何の話をしているのだろうか。演技？ それとも多重人格者？ それとも、やはりこの戸木原は似た顔をした別人なのだろうか。

いや、それどころかもっと根本的な部分にも疑問が浮かぶ。この目の前にいる男は本当に『人間』であるのかという疑問

昌美が以前言っていた言葉を想い出す。

『……あの人は『怪物』です。あの人に関わるとみんなおかしくなってしまう。だから、みんなを止めようとしても篠塚くんは止められなかった』

怪物。そんなことがあるはずがない。そんなことがあるはずがない。彼はどう見ても人間だ。ヒトでなかったら、目の前にいるこの生き物は何だというのか。

常識的な自分がそう否定する反面、心の底ではそれが正しいという気持ちが膨れ上がってくる。この男は異質過ぎる。従来の人間の枠に当てはまるとしても、なにかが壊れ、なにかが突出している。

……怖い。怖くて、たまらない。歯がちがちと音を刻み、足がすくむ。今すぐすべてをかなくなり捨てて、ここから逃げ出したい。

そんな負の欲求が石和の身体中を駆けずり回る。視線を佐々木に向けると俯いたまま、コンソールに両手をつき、肩をがたがたと小刻みに震わせていた。彼もまた、恐慌状態に陥っているのかもしれない。こちらが混乱しているのを察したのか、戸木原は苦笑して、



言った。

『はははは、まあ、いいじゃないか、人格のことなんて、どうでも些細なことだよ。それよりも、石和くん。こうして、君に連絡をとったのは他でもない。お礼を言いたかったからなんだよ』

「お礼……？」

『うん。君のおかげで『D計画』が本格的に進むことになったからね。一言、お礼を言っておこうと思って。本当にありがとう、石和くん。これで、研究は最終段階を迎えることになる』

「なに、を、言ってる……？ 計画はまだ第一段階が終了し、第二段階の研究が始まったばかり」

擦れた声で言った石和の言葉を遮って、戸木原は大きくかぶりを振った。

『違う、違う。そうじゃない。最初のD計画のとき。いいかい？ 第五研究所で行われているD計画は僕にとって本来のD計画じゃないんだ。第五研究所での計画が始まるもつともつと前から進められていた、本当のD計画。そうだな……第五研究所で行われていた研究を『第二D計画』だとするなら、僕が五年前から行っていた研究は『第一D計画』とでもいえばいいかな。他世界生命体アルファが 世界と 世界を繋ぐ要であると判明したとき、発案されたもう一つの計画だよ』

「もうひとつの……『D計画』？」

そんな話は聞いたことがない。最初アルファを収容したよつのは研究所で行われていた研究のことだろうか。しかし、アレはアルファの調査と研究で、まだ本格的な分裂世界における研究は始まってなかった筈だ。もし、そんなものがあるとすれば、それは

「勿論、非公式のものだよ。その計画は。そもそも僕にとって『第二D計画』の存在自体が『第一D計画』を力モフラージュするために造られたものに過ぎないんだ。他世界の存在の実証と観測が『第二D計画』だけど、アルファの存在自体がすでに他世界の存在を実証していると思わないか？ 他世界の観測というけど、そんなものを観測できたとしても、なににも変わらない。『第二D計画』は慎重に慎重を重ねて造った計画だから、世界の観測は出来ても干渉は出来ないからね。計測や情報を得ることが出来ても、今回の計画だけではそれ以上は望めない。違うかな？」

……当然のことだった。『D計画』は世界そのものに触れるという、ある意味危険きわまりない計画なのだ。

特に『分裂世界』についてはまだまだ未知の要素が多く、すべての仕組みを理解できていないのが現状だ。下手なことをすれば、どんなアクシデントがあるかも分からない。世界そのものが変容、最悪の場合、消失してしまうことすら充分に考えられる。

それ故に慎重に慎重を重ねて、研究を進めてゆくのは至極当然の事だ。少なくとも、十分な調査を経てからでなければ、世界に干渉する計画は危険すぎる。それが三ツ葉社上層部とD計画担当の共通の見解であった。

『だけど、それじゃあ駄目なんだ。リスクを背負い、色々試さなければ何も分からないし、何も始まらない。研究っていうのは様々な犠牲の上に成り立っているんだよ。だったら、アクシデントを恐れずにもっともつと踏み込んだ実用的な計画を行うべきだと思わないかな？』

「なにを……するつもりなんだ？」

石和の問いに戸木原は微笑を浮かべた。

『僕と横川さんの話はそちらでも傍受していたんだろう？』『進化』だよ。閉塞した状態が続くヒトという生物。このままでは確実に人類は衰退し、終焉を迎えることになる。手遅れになる前にこの世界に新しい進化の種をまきたいんだ。それが『第二D計画』の真意であり、目的でもある』

「……だらない」

と、その時。それまで俯き、沈黙を護っていた佐々木が初めて声を上げた。肩がぶるぶると小刻みに震え、コンソールの上についた両手の指がかぎ爪状に折れ、がりがりコンソールを削る。口元が大きく歪み、そこから見える歯と歯の間から、ぎり、と歯がみの音が漏れた。

「さ、佐々木？」

石和が困惑の声を挙げるのとはほぼ同時だった。石和が頭に装着しているインカムを佐々木は強引にむしり取り、憤怒の表情を浮かべ、マイクに向かって叫んだ。

「なにが実用的な計画だ！ あなたはそんなありふれた終末妄想に囚われて、横川さんを殺したのか！ そんなくだらないことの為に篠塚さんを実験動物にしたのか！ そんな……そんな事のために新井さんを……！」

コンソールの上に拳を叩きつけながら、佐々木が吠える。感情の爆発。どうやら佐々木は異質な光景と真実を叩きつけられたおぞましさよりも、そういつた行いに対する怒りの方が勝ったようだ。

新井博士を実験体に仕立て上げた怒り。昌美の暴走を防ぐことが出来なかった無念さ。

そういつた思いが一点に凝縮し、激怒という感情が破裂する。その怒りを戸木原にすべて注ぎ込み、佐々木は叫ぶ。モニターに映る戸木原の顔が驚愕に歪んだ。

『その声は佐々木くんだね。久しぶり。いやいや驚いた。佐々木くんでも怒ることがあるんだね。いつもここに笑顔の佐々木くんしか知らないから、すごくビックリしたよ』

胸に手を当て、ほうと嘆息する戸木原。これだけの怒りを叩きつけられても彼の感情はまったく揺らがない。佐々木は拳を強く握りしめながら、普段見せないような鋭い目つきでモニターを睨み付け、低い声で告げる。

「戸木原博士。あなたは狂ってる……病院でしかるべき処置を受けた上で、自分の行った罪を償うべきだ。こんなことをしたって『ヒト』という生物はなにも代わりはしない！」

佐々木の言葉に戸木原は苦笑いを浮かべ、

『ははは、これはまた手厳しいなあ。確かに終末論や人類の進化論はどこにでもありふれている思想だ。人類が衰退していると言っても今すぐどうこうなる訳じゃないし、進化については未だ人類はどういった過程で生物が進化してゆくのか、ほとんど解明出来ていない。安っぽいと思われるのも無理はないかもしれないね。』

『ただどね、佐々木くん。僕たちは『進化』の機会を得た。それは確かかなことなんだよ。世界線と世界線の交差。次元衝突を逃れ、』

次元震だけの被害で済んだ上に、世界の生物を入手するという恩恵を受けた。これがどれくらい低い確率で起こったことか。君たちなら分かるだろう？ この万に一つの奇跡に我々の世界は報いるべきだとは思わないかい？ そう、僕たちの世界は『進化』するべきなんだよ。』

「馬鹿げている……！ 細胞との融合で怪物を造り上げて、創造かみ主気取りか！ そんなことをして何になるというんだ！」

佐々木の言葉に戸木原はおどけたように肩を竦めて見せた。

「やれやれ、君も横川さんと同じだね。何も分かってないなあ。いかい？ 僕は 細胞とヒトの融合で『進化』の道が開けるなんてさらさら思っ  
てないよ。細胞とヒトの融合はあくまでも『鍵キ』に過ぎない。『第二D計画』でも 世界への通り道を作るために『鍵キ』が必要だよ。それと同じだよ。『第一D計画』にも『鍵キ』は必要なんだ。ただし、観測する為の『鍵キ』ではなく、進化する為の『鍵キ』で、少々方向性は違うけどね」

「進化する為の……鍵キ？」

佐々木が眉を潜めて、反芻した言葉に戸木原は目を細め、

「佐々木くん、ひとつだけヒントをあげるよ。君は『具現する力』という言葉を知ってるかな？」

と、言った。

『万物の構成する力。この世にある、ありとあらゆる自然から出来た生命体や物体、あるいは現象には皆、この『具現する力』が宿り、形を形成している。ヒトの手で造り上げた人工物は別だけどね。もし、この力が僕たちの肉体から失われたら、僕らは形を成すことが

出来ない。存在することを許される為に必要な根本的な力。それが『具現する力』だよ』  
「……それが、どうしたっていうんだい」

教科書通りの説明をする戸木原に佐々木は苛立ちを隠せない声で言った。

『具現する力』は一部の研究機関しかまだその実在を知らされていないが、それは佐々木にとっては聞き慣れた言葉であった。

生命体を一瞬で別の所へ移動させる技術が搭載された『瞬間物質トランスポート装置』。この機械にも『具現する力』を使用した技術が利用されているからだ。

生物には常に『具現する力』が宿っており、その力によって個体を形成しているが、『瞬間物質トランスポート装置』で対象の量子分解を行うと同時に『具現する力』も霧散してしまうのだ。受信機で対象を再構築をしたとしてもこの『具現する力』が宿っていないと、個体を維持することが出来ず、消滅してしまう。だから、対象を再構築する際に『具現する力』を送り込む技術を使用しなければ、生物の転送は成り立たないのである。

その技術と力の存在は新井博士からよく聞かされていたし、対象を形成するときの技術理論で意見を求められたこともあったので、佐々木は『具現する力』のことをよく知っていた。とはいえ、『分裂世界』と同様、まだまだ解明されていないことの多い、未知の力であるのだが。

『僕が人類進化促進塾で研究していた『能力者計画』。これにもその『具現する力』が深く関わっているんだ。能力者（あの子）達の

力は君たちも見ただろう？ この世を変容させかねないほどの圧倒的な力。だけど、その能力は目に見たほど万能じゃない。きちんとした法則に従って、あの力は顕現化しているんだ。脳内に埋め込まれた『思考伝達金属』<sup>サイコメタル</sup>を介して、自分の視覚で認識した領域に『Embodiment Power System』<sup>E</sup>（具現力干渉システム）と呼ばれる特殊フィールドを造り出す。EPS領域は大気中にある『具現する力』を一点に集中させて人工的に造り上げた特殊な力場で、『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>はこのフィールドの中で自分の『才能』を具現化し、展開することが出来るんだ。この領域の中でだけ子供達はイメージした力を顕現化することが出来る。それが僕が今まで研究し、そして実現可能な状態まで持つて行った『能力者計画』<sup>ネオチャイルド・プロジェクト</sup>という訳さ』

そこまで語って。戸木原は右手の人差し指をぴつと立てて、笑顔を浮かべながら、言った。

「さて。ここで二人に質問。この『能力者計画』<sup>ネオチャイルド・プロジェクト</sup>は『第一D-I計画』<sup>ネオ・チャイルド</sup>において、絶対不可欠なものなんだけど……僕がどうして『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>を造り出す必要があったのか。……分かるかな？」

「……………」

佐々木は眉を潜め、言葉を詰まらせた。一瞬、彼の問いかけに怒りよりも困惑が勝ったようだ。それは石和も同様だった。戸木原が何を言っているのか。訳が分からない。

「通常の人間ではどうやっても持ち得ない特殊な能力を自在に扱う『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>。この子供達を量産し、世に放つのが戸木原の目的なのだろうか？」

「いや……違う気がする。確かにそれでも確実に世界は変容をもた

らすだるうが、彼の求めているものはまったく別のモノだ。『D-I 計画』と呼ばれるからには、分裂世界　　世界に関わるプロジェクトの筈だ。

……昌美と戸木原が対峙していたときに言っていた彼の言葉を想い出す。

『『鍵』を使うには扉が必要。これは当然のことだよ。しかし、扉は目に見えない場所にある。だから、扉を顕現化させる必要があるんだ。僕はその為に人類進化促進塾で『ネオチャイルド・プロジェクト能力者計画』を発動させたんだよ。『門』の素体を造り出す研究プロジェクトとしてね。『鍵』と『門』と『結晶体』。このみつつが揃えば、必ず世界は変わる。人間という存在は救われるんだよ！』

『『鍵』と『門』と『結晶体』。』

『『鍵』と『結晶体』については第五研究所で行われていた研究のことで大体理解できる。『鍵』は世界と世界の混合種で互いの世界を引き寄せ合う為に必要な存在だ。その為に細胞と新井博士の肉体を融合させ、双方のバランスが整った統合した存在を造りあげたのだ。』

『『結晶体』はおそらく、大量の生体エネルギーを貯蔵し、流出できる存在だろう。生物を通じて、世界をこちら側に引っ張ってくるには大量の生体エネルギーが不可欠になる。』

その為には『鍵』の能力をフルに発揮させる電源が必要なのだ。冷蔵庫、エアコン、TVなど、様々な機能を持つ電化製品がこの世には存在するが、電源となる元がなければ、これらは只の箱に過ぎない。



それと同じである。『鍵<sup>キィ</sup>』という電化製品とは別に『結晶体』と呼ばれる電源がなければ、『鍵<sup>キィ</sup>』はその役割を果たすことは出来ない、ということだ。

『鍵<sup>キィ</sup>』の動力の元となるのが、生体エネルギーで、このエネルギーが大量に備蓄でき、それを『鍵<sup>キィ</sup>』に送り込めるような生物を造る必要がある。

それが『結晶体』であり、第五研究所で現在行われている第二段階の研究である。この二つの素体が完成すれば、『D-I計画』は成る。

簡単に言ってしまうえば『D-I計画』とは五年前に発生した『次元震』をもう一度起こすことなのである。世界を起点に世界を引き寄せ、世界線と世界線を交差させ、接触させる。その小規模な衝突によって、二つの世界の絶対次元壁の一部に穴を造り、そこから世界の観測を行う。それが石和の知っている『D-I計画』の全貌だった。

だが、戸木原の言う『第一D-I計画』には石和の知らない用語が一つある。

『門<sup>ゲート</sup>』の存在だ。

人類進化促進塾で行われていた『能力者計画<sup>ネオチャイルド・プロジェクト</sup>』は『第一D-I計画』には絶対不可欠なものだと戸木原は言う。

『能力者<sup>ネオ・チャイルド</sup>』と『門<sup>ゲート</sup>』。

『具現する力』と『EPS領域』。

『世界』と『世界』。

……やはり、分からない。これらの要素がどうやったら、進化に繋がるのか。そもそも『門』<sup>ゲート</sup>を顕現化させるということ自体、意味が分からない。次元震以外の方法で、向こう側への入り口を造るということなのだろうか。だが、それと『進化』の因果関係がまったく分からない

……いや、待て。『門』<sup>ゲート</sup>という言葉に囚われていたが。ひよっとして。『門』<sup>ゲート</sup>は入り口を造るという意味ではなく、逆の意味だったとしたら。

戸木原は言った。『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>とはEPS領域を造り出し、『具現する力』<sup>ネオ・チャイルド</sup>に干渉することの出来る者達だと。その中に『具現する力』<sup>ネオ・チャイルド</sup>を反対の方向へ作用させることが出来る『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>がいるとしたら

## 6 「悪夢の始まり」

「  
」  
頭の中でパズルのピースがかちり、と当てはまる。瞬間、石和の思考が真っ白に染まり、身体に電撃が流れたような衝撃が駆け抜けた。肌が泡立ち、眩暈が起こる。平衡感覚が失われ、身体が崩れ落ちそうになる。

「ま……さ、か」

それは最悪の予想だった。そんな筈はない。そんな筈はない。そんな筈はない。あり得ない。自分の予想は大きな外れだ。そんなことをすれば、すべてが終わる。終わってしまう。第一、戸木原自身も只ではすまないではないか。

「……石和くん？」

傍らで佐々木が怪訝な声で話しかけてくる。だが、石和はその声に答える余裕はない。佐々木の持つインカムを無造作に掴み、低い声で戸木原に話し掛ける。

「戸木原……お前はさっき言ったな。『リスクを冒さなければ、何も試せないし、何も始まらない』、と」

ガクガクと震える腕を必死に堪えながら、言葉を紡ぎ、問う。自分の推測が間違っていることを祈りながら。

「……答える。そのリスクとはなんだ？ 第一計画でなにをやるう  
としている？ お前はひよっとして自分自身の命まで顧みない行動  
を起こそうとしているんじゃないか？」

石和の言葉に戸木原は一瞬驚いた表情を浮かべたが　　すぐさま、  
満面の笑顔で大きく頷き、そして言った。

『驚いたなあ。ちょっとした余興のつもりだったんだけど。まさか  
これだけのヒントで真相に辿り着いちゃうなんて。やっぱり石和く  
んは頭が切れるなあ。第五研究所のメンバーの中でもぴか一の秀才  
だよ。うん、多分正解。答えは聞かないし、聞いても答えないけど  
ね。面白くななくなっちゃうから。でも多分石和くんの考えている『  
D-I計画』の予想は合っているよ。リスクは他人だけじゃなく、自  
分も共有しなくちゃ不公平じゃないか。どうせならみんな仲良くね』  
「　　っ！」

最悪の返事だった。呼吸が止まり、心臓の鼓動が加速する。石和  
は悲鳴のような叫び声を上げた。

「狂ってる……お前は狂ってる！ そんなのは　　進化じゃない！  
ただの『混沌』だ！」

『混沌。いい響きだねえ。僕らは生物の進化する過程のことはまっ  
たく分かってないけど、進化の前にはなにかしらの混乱があったと  
思うんだよね。混乱は混沌に繋がり、新しい道を造り出す。きつと  
造り出してくれる。それこそが『僕たち』の望む進化だよ。自分の  
身がどうなるうと僕自身が道標となるなら、本望だよ』

「ふざけるな、そんなことをしたら進化どころじゃない！　　すべて  
が終わってしまうっ！」

石和の叫びに、戸木原は大きく首を左右に振って、目を細めた。

『終わりじゃない。これが始まりなんだよ』

「……………」

ぎりりと歯がみしながら、戸木原の目を見る。迷いの一切ない瞳の光。この男は本気だ。本気で自らの命すらも、自分の研究に捧げようとしている。正気の沙汰ではない。

「い、石和くん。いったい何が…………？」

傍らで佐々木が困惑した表情を浮かべている。状況が把握できないのだろう。しかし、石和には説明している余裕はない。黙殺してモニターの中にいる戸木原を睨み据える。

『…………さて、名残惜しいんだけど、そろそろお別れの時間だね。これ以上放っておいたら横川さんが本当に死んでしまうし、D-I計画のタイムリミットがもう間近なんだよね。早く準備をしなくちゃ間に合わなくなる。その刻を逃したら、次はいつになるか分からないからね。その好機を最大限に生かすため、万全の準備を整えておかないとね』

「タイムリミット…………？」

石和が怪訝な声で反芻するが、戸木原はなにも答えず、微笑を浮かべた。そして、

『それじゃあ、始めようか』

と、言った。

そのとき だった。突如として、部屋にある機器に異変が起った。先程からモニターの片隅で表示され続けていた奇妙な文字の繰り返し。これが巨大な文字となって、戸木原の映る中央のモニターを除く全域に浸食し始めた。

彼 天より降りる エホバ 天をたれてくだりたもう 御足のも  
と暗きことはなはだし エホバくだりて かの人々の建つる街と塔  
を見たまえり いざ我らくだり かしこにて彼らの言葉を乱し互い  
に言葉を通ずることを得ざらしめん ゆえにその名は バベルと呼  
ばる。禍なるかなバビロン そのもろもろの神の像は砕けて地に伏  
したり彼天より降りるエホバ天をたれてくだりたもう御足のもと暗  
きことはなはだしエホバくだりてかの人々の建つる街と塔を見たま  
えりいざ我らくだりかしこにて彼らの言葉を乱し互いに言葉を通ず  
ることを得ざらしめんゆえにその名はバベルと呼ばれる。禍なるかな  
バビロンそのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり彼天より降り  
る

幾度も幾度も赤い文字で繰り返される旧約聖書の一節。それがO  
S画面の上に刻まれ、赤い字に犯されてゆく。レポート・ゲート瞬間物質転送装置・  
改だけではない。新井博士のメッセージを見るときに使用していた  
ワーク・ステーションのモニターにも同様の現象が発生し、画面が  
赤色に染まっている。

「な……」

石和は唾然として、周囲を見回した。慌ててコンソールに指を滑  
らす、反応は皆無。OS画面はまったく変わらない。赤色の文字  
に埋め尽くされたままだ。

「駄目だ！ 認証も入力もまるで受け付けてくれない！」

傍らで佐々木がコンソールを必死に叩きながら、悲鳴のような声

をあげる。こうなるともう、網膜や指紋認証も何の意味も持たない。この部屋にあるコンピューター関連の機器は完全に使い物にならなくなっていた。

ハッキング  
強制侵入されたのだろうか。防火壁を突破された様子など微塵もなかったというのに。こちらが気付かないうちに侵入されたのかも知れない。

ファイアーウォール  
いや、もしそうだとしても、スタンド・アロンであるワーク・ステーションにまで影響が及んでいるのはおかしい。ネット回線に繋がっていない、しかも独立したコンピューターに侵入するなど、物理的に出来るはずがない。あり得ない。

「っ！……そうか、これか！」

石和は懐から、黒い携帯を取り出し、開いた。部屋中のコンピューターと同様、携帯の液晶画面が旧約聖書の一節で埋め尽くされている。

昼間、人類進化促進塾で遭遇した一人の少女。彼女はこの黒い携帯に触れて、こう言った。

『禍なるかなバビロン その諸々の神の像は碎けて地に伏したり』

これがどういった現象でこうなったのかは分からない。だが、これだけは間違いない。あの少女は『ネオ・チャイルド能力者』だ。そして、あの少女は戸木原の指示でこの黒い携帯に何かを仕込んでおいたのだ。その結果がいま起きているこの現象であり、あの少女の力なのだろう。

おそらくは。今までのすべての行動は戸木原に筒抜けだったに違

いない。

「くそっ！」

自分が今まで気付かなかつた迂闊さに腹が立つ。石和は歯を食いしばりながら、黒い携帯を思いつきり床に叩きつけた。ばきん、と音を立てて携帯が真っ二つに割れ、電源と共に液晶から字が消え失せるが、周囲の状況は何一つ変わらない。瞬間物質転送装置・改もワークステーションも。この部屋にあるすべてのコンピューター関連の機器は赤い旧約聖書の一節に支配され、一切使用できない。すべては手遅れだった。

そして、状況は次の段階へと移行する。

瞬間物質転送装置・改テレポルト・ゲートの機器からがりがりとしたハードディスクを読み込む音が聞こえてくる。モニターを見ると、赤い字で埋め尽くされたモニターの下でOSが勝手に動き、画面がくるくると切り替わっている。それに伴い瞬間物質転送装置・改テレポルト・ゲートのカプセルが淡い光を放ち、低い唸りを上げ始めた。

瞬間物質転送装置・改テレポルト・ゲートが 起動しているのだ。

「石和くん、送信機が受信機に勝手に切り替わっている！ モードも原子分解から量子分解に変更されている！ どこかにシステムが乗っ取られているんだ！」

佐々木が狼狽しながら、叫ぶ。

「い、いや、違う。原子分解と量子分解のモードが同時に展開しているんだ。な、なんだ、これは……プログラムが書き換えられている



「!?」  
「くっ……」

どうにかしてシステムを取り戻せないかと必死にコンソールを叩くが、やはり反応は皆無。こちらの入力はまったく受け付けない。電源を落とすことすら出来ない。

「くそっ、どうにか……どうにかならないのか!」  
『無駄だよ』

と、楽しそうな戸木原の声が響く。

『そちらのシステムはこちらが把握しているからね。入力は一切受け付けないよ。いま、瞬間物質転送装置・改は完全にこちらの権限で動いている』

「ぐっ……い、一体なにを」

呻くような声を絞り出した石和に戸木原は満面の笑顔で、右手をすつと前に差し出しながら、言った。

『贈り物だよ。僕から石和さんと佐々木くんへ。色々お世話になったお礼。喜んでくれると僕も嬉しいなあ』

次第に瞬間物質転送装置・改の転送カプセルが大きくなうなり声を上げて、本格的に稼働する。部屋のいたる場所でラップ音がぱちぱちと鳴り、蒼白い電光がスパークする。強烈な白い光が視界を覆い、まぶしくてまともに目を開けていられない。石和は両腕で光を遮り、目を細めた。転送時に発生する放電現象。

こちらの意志とは無関係に

何かが強制的にこの場所へ転

送されてくる。

戸木原は笑顔のまま、カメラのレンズに指に付着していた昌美の返り血を塗りたくった。モニター一面が紅く染まり、戸木原の顔が見えなくなる。

『今までご苦労様。そして、改めて礼を言わせてもらうよ。ありがとう、石和くん。本当に助かったよ。万が一生き延びることが出来たら、また話す機会があるかもしれないね。僕はその日を楽しみにずっと待ってるよ。それじゃあ、またね。石和くん、佐々木くん』

その不吉な言葉に石和は反射的に手を伸ばし言葉を発しようとしたが、その前にモニターの電源は切れてしまっていた。インカムもノイズが走り、なにも聞こえない。向こうで完全に通信を遮断してしまったようだ。

そして、それと同時に。部屋中を包み込んでいた瞬間物質転送装置ト・改のカプセルから発せられていた強烈な光が消え失せていた。あれだけ激しく唸りを上げていた機器の稼働音も止み。静寂が辺り一面を支配していた。

その心臓の脈動が大きく、石和の体内に響く。

瞬間物質転送装置ト・改のカプセルの中に目を据える。空だったカプセルの中に。

なにか、ある。なにか、いる。誰か　　いる。

カプセルの扉がばしゃん、と音を立てて開く。『ソレ』はゆっくりと蠢き、しかし、しっかりとした足取りで、この地に舞い降りた。

小さな身体と、小さな足と、小さな手。小さな頭とあどけない顔。しかし、瞳には外見相応の色はなく、機械の様な無機質さが宿っている。一系まとわぬ姿で、その場に立ちつくしている。

先程、モニターの中で惨劇を演じていた少年。

戸木原が人工的に造り上げた『新しい子供』。

ネオチャイルド・プロジェクト  
『能力者計画』の成果そのもの。

ネオ・チャイルド  
『能力者』の姿が石和達の眼前にあった。

少年はすうっと、目を細め、

「禍なるかな、バビロン。その諸々の像は碎けて地に伏したり」

と、旧約聖書の一節を口にし、次の瞬間、部屋が大きく鳴動した。それは常識の枠に囚われた現実の時間に終わりを告げる合図であり、非現実的な悪夢が始まる合図でもあった。

石和は大きく目を見開き、絶望に身を震わせた。

## 7 「瓦礫の養虫」

ズン……！、という鈍い音が響き渡った。部屋にあるデスクと本棚が蠢動して、宙に浮かぶ。木で出来た本棚の中には研究に使用していたであろう、様々な専門書が隙間なくびっちりと詰め込まれている。デスクにもワークステーションの本体、モニター、プリンタなどの機器が上に乗せられていて、双方には相当の重量があるはずだ。

にも関わらず、その少年は人の手や機械の力を使うことなく、それを軽々と持ち上げている。傾いた本棚からばらばらと本がこぼれ落ちるが、本は地面に落下することなく、宙に散らばってゆく。まるで池の上に浮いたゴミの様に。

「……………」

石和武士は声もなく、呆とその光景を眺めていた。

非現実的な空間。そこには一片のリアルさもない、荒唐無稽な空間が広がっている。モニター越しに見ても実感が湧かなかつたが、それは目の前で行われても全く変わらない。

夢のような景色だった。現実と夢の狭間を行き来している様な感覚に囚われ、我を忘れる。

石和の視線と少年の視線が重なった。少年がこちらを見ている。

我を忘れ、白く霞みかかった思考に赤色の信号が点灯する。おそらくそれはヒトという生物が持つ、天然の警告信号だったのだろう。

しかし、それを認識するよりも早く、『具現する力』が鋭い刃となって、石和へと牙を向く。宙に浮いていた本がウンツ、と鈍い唸りを上げて、こちらへ飛んでくる。

石和の右頬に軽く本が擦り、痛みが走る。その次の瞬間、背後からゴンツ、という鈍い轟音が響き渡った。身体を強ばらせて、背後へと目を向ける。

壁に 穴が空いていた。直径十センチほどの大きなくぼみが出来、本がバラバラになって、床に散らばっていた。

続けて背後に鈍い音が何度も響き渡り、壁に同様のくぼみがいっつも出来上がっていく。

石和の右頬からだらりと血が流れ、床にぼたぼたとこぼれ落ちた。

「  
」  
啞然、とする。理屈では知っている。紙という媒体は個々ではひどく弱いモノだが、多くの紙が集まるとかなりの強度を発揮するということは。ハードカバーなどの厚紙でできた表紙のモノなら尚更だ。専門書関連の本では厚みもあるし、ハードカバーで出来たモノも多い。本棚にある本はその辺の鈍器と変わらぬ威力を発揮するにとだろう。

だが、理屈では分かっているも只の本が凶器と化して、自分に牙を向くなど、誰が想像出来ようか。出来るわけがない。しかも、こ

の壁の抉れ具合からして、威力は相当なモノだ。当たれば、無傷では済まないだろう。

石和の頭に戦慄が駆け抜ける。避ける。逃げる。ここから抜け出せ。そういつた感情が湧き出てくるが、身体は動かない。あまりにも現実離れたこの光景にどう対応していいのか分からない。完全に恐慌状態に陥っていた。

そこへ、弾丸と化した本の群れが石和の身体のおちこちに突き刺さる。

「が……っ！ あっ……ぐ、ううっ！」

右肩に、左腕に、胸に激痛が走った。あばらがめきめきと音を立てているのが分かる。石和は苦痛に顔を歪ませ、膝について、胸を押さえ踞すくった。

少年は更に目を細め、右手を真上に上げると、そのまま大きく振りかぶった。それと共に大きな本棚がぐらりと動いたかと思うと、本棚そのものが唸りを上げて、こちらへ襲いかかってきた。

「っ！」

そこでようやく身体が動いた。思考と身体を動かす間のタイムラグは皆無で、ほとんど無意識の行動だった。身体を捻り、その場から飛び退く。

刹那、石和の頭上で爆発にも似た轟音が響き渡り、石和の鼓膜をびりびりと刺激した。木で出来た棚の破片が周囲に飛び散る。身体を丸め、両手で顔を覆い、破片を避ける。おそるおそると頭上を見

上げると、壁一面に大きな亀裂が入り、その中心には巨大な穴がぽつかりと空いていた。

「な あ……」

石和は大きく目を見開いて、声にならない声を上げた。滅茶苦茶だ。あんなものが当たったらひとたまりもない。少しでも動くのが遅れていたら、どうなっていたか。最悪の想像に石和はガクガクと身体を震わせた。

「あ、あ、あ……」

恐慌状態に陥ってるのは石和だけではない。佐々木も同様だった。ネオ・チャイルド『能力者』の起こす現象と己の身に降りかかる危機の直面に頭と身体がついてこない。地面にへたり込み、身体を大きく痙攣させている。少年は佐々木の身体へ視線を向け、右手を正面に突きだした。

無機質な瞳を細め、大きく開いた手のひらに力を込め、指を少しづつかぎ爪状にしてゆく。ワークステーションの本体とモニター、デスク、椅子、本、本棚の破片、デスクに乗っていた定規、ボールペン、カッターナイフ、等々。宙に浮いていた様々な家具や器具がゆらり、と動き始めた。それらは佐々木の身体にぺたぺたと張り付いてゆく。

まるで電磁石のようだった。部屋にある機器や器具が瓦礫となつて、佐々木の身体に吸い付き、その現象は留まることががない。佐々木の身体が瓦礫に埋もれてゆく。その姿は木にぶら下がる虫を彷彿させる。

みのむし 蓑虫。それは瓦礫で構成された巨大な巨大な蓑虫だった。だが、

それは身を守るための防具としてではない。中にいる存在を閉じこめ、幽閉する為のものだった。

「い、さわ、く……ぐ、あ、ぎ。あ……」

佐々木が苦悶の声を挙げながら、石和に向けて手を伸している様に見えた。瓦礫で形成された佐々木の身体はすでにヒトの形を成していないので、どこが腕か、頭か、それすらも分からない。

少年は右手を小刻みに震えさせながら、力を込め、ゆつくりとゆつくりと指を閉じてゆく。それは柔らかな果物を片手で握りつぶす仕草にも似ていた。

ぎちぎち。ぎちぎち。

音が聞こえる。佐々木に張り付いたワークステーションと鉄の椅子が絡み合い、形が歪んでゆく。椅子の脚の部分であるパイプが音を立てて、砕け散った。あらゆる瓦礫が破壊の悲鳴を上げ、ぐしゃぐしゃに変質してゆく。巨大な手に驚づかみにされ、そのまま握りつぶそうとしているかのようだ。

みしみし。みしみし。

そして、その中から聞こえる奇妙な音。中にいる佐々木の肉と骨が悲鳴を上げている。瓦礫の山に押しつぶされそうになっているのだ。

「ぐあ……あ、あ、ぐる……じ……がはっ!？」

言葉にならない声が瓦礫の山の中から聞こえてくる。少年の手の



ひらはゆっくりと拳の形を造ってゆく。その度に瓦礫は凹み、縮ま  
ってゆく。

その先にある結末は。

瓦礫の鎧に押しつぶされ、原型が分からないほどぐしゃぐしゃに  
なった肉の塊。赤黒い血で彩られた、見るも無惨な佐々木の姿だっ  
た。

「　　っ！」

最悪の光景を想像して、石和は我に返った。そうだ。モニター越  
しに見た、昌美に降りかかった不可思議な光景は虚構でもなんでも  
ない。紛れもない現実だ。そして、現在目の前で起こっている事象  
も悪夢ではない、現実自分たちの身に起こっていることなのだ。

震える身体に鞭を打ち、石和は立ち上がる。瓦礫で出来た糞虫の  
場所まで駆け寄り、瓦礫を両手で掴み、思い切り力を込めて引っ張  
った。

「くっ……くそっ！　離れろ、この！」

全力を込めて引っ張るが、瓦礫の破片はびくともしない。佐々木  
の身体と同化したように離れない。地面に落ちていた椅子のパイプ  
を拾い上げ、瓦礫の隙間をがんがんと叩く。力の限り、全力で。そ  
れでも、やはり効果はない。それどころか、圧力は益々強まってい  
る。プレッサーにかけられた廃棄車の如く。瓦礫の糞虫は潰れ、収  
縮してゆく。

「づぐ……があ。あ、あ………」

瓦礫の中から佐々木の悲鳴が漏れ、その声は段々擦れ、弱まってゆく。

「佐々木！ くそっ！ 離れる！ 離れる 離れる！ 離れ  
！」

ぐん、と。不意に石和の右腕が硬直した。鉄のパイプを持った右腕が動かない。見えない何かに腕を掴まれ、引っ張られるような、そんな感覚。石和は身体を左右に振ってもがくが、その力を振り払うことが出来ない。そのまま、石和の右腕は真上に引っ張られ、その身体が宙に浮いた。

「なっ！ うああああああっ！？」

横を見やると、少年の視線が石和の身体に定まっていた。どうやら、EPS領域の中に捕らえられたらしい。少年が無造作に左手を横に振ると、それに連動して石和の身体が真横に飛び、入り口付近の壁に叩きつけられた。

だだんっ！、と背中に走る強い衝撃。

「か……はっ！」

肺にたまっていた空気が強制的に排出され、石和の呼吸が止まった。胸が苦しい。背中が痛くて痛くてたまらない。そのまま地面まで落下し、再度身体が叩きつけられる。石和は咳き込みながら踞り、身体に襲いかかる激痛を必死にこらえる。

「げほっ……げほっ！ く、そ……」

駄目だ。叶わない。あの少年の使う『能力』ちからは常軌を逸脱した強力なモノだ。只の人間である自分があんな力に真っ向から立ち向かえるわけがない。

どうすればいいのか。このままでは佐々木が死んでしまう。最悪の光景が現実のものとなってしまう。せめて、昌美が持っていた銃のような武器があれば、少しは違うかも知れないのに。

……いや、駄目だ。銃など何の役にも立たない。彼らには銃が効かない。それは昌美が証明してみせたではないか。だからこそ、彼女は標的ではなく天井を撃つことで、EPS領域を

「っ！　そ、そうか！」

石和は身体を起こしながら、周囲を見回した。

どこだ？　どこにある？

はやる気持ちを抑えながら、周囲に目を配り、目的のモノを探す。あるはずだ。この場所が部屋として機能しているなら必ず付いている。付いていない筈がない。

壁に叩きつけられた場所が入り口付近であるのが幸いした。石和の頭上にそれはあった。

部屋の電灯のスイッチ。そして、その左上には電気を司る機器であるブレーカー。

スイッチでもいいが、ブレーカーのほうが手っ取り早い。石和は

身体の痛みを堪えながら、立ち上がり、ブレーカーのスイッチに手を伸ばし、ブレーカーの電源をすべてオフに切り替えた。

瞬間　　部屋の中が闇に包まれた。部屋に供給されている電気を遮断したのだ。天井についている蛍光灯にも電気が回らず、光が消えるのは当然のことだった。

そして、それこそが石和の最大の狙いである。昌美が土壇場で行った行為は彼らの最大の弱点を教えてくれた。

そう。『能力』<sup>ちから</sup>は目で認識した場所でなければ展開できないのだ。

戸木原は言った。『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>は脳内に埋め込まれた『思考伝達金属』<sup>サイコ・メタル</sup>を介して、自分の視覚で認識した領域に『Embodiment Power System』<sup>Power System</sup>（具現力干渉システム）と呼ばれる特殊フィールドを造り出す』と。

このEPS領域が『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>としての『能力』<sup>ちから</sup>を展開する為に必要不可欠なモノであるのなら。そのEPS領域を造り出す為の視覚を遮断してしまえばいいのだ。

戸木原の話を聞いただけではこの推測には思い至らなかったかもしれない。昌美の行ったあの最後の行為があったからこそ、思いついた突破口だった。

暗闇の奥から、がしゃがしゃと何か落ちる音が聞こえてきた。その音が自分の推測が間違っていないかったことへの確信に繋がった。

EPS領域が消えたのだ。

石和は暗闇の中、その音に向かって走る。暗闇といっても完全な闇ではない。

テレポート・ゲート  
瞬間物質転送装置・改の電気は別の回線を経由しているので、ブレーカーを落としても電源が消えることはない。管制モニターやパネルから発するかすかな光が灯っている。そのわずかな光から、自分のいる位置と、佐々木のいる場所がかるうじて判別することが出来た。瓦礫の糞虫の姿は失われ、辺り一面に佐々木にくっついていた瓦礫があちこちに落ちて、散らばっている。その瓦礫の山の中に佐々木の顔が見えた。ぐったりとした表情で目を閉じている。

「佐々木！」

叫びながら、瓦礫の山に駆け寄り、瓦礫を一つずつ取り除いてゆく。

「佐々木、大丈夫か。しっかりしろ！」

「う……」

眉間に皺を寄せながら、呻き声を上げる。周囲の瓦礫の取り除き、身体を抱きかかえる。服は破れ、あちこち擦り傷だらけだった。佐々木が目をうつすらと開いた。笑みを浮かべ、ぎこちない動きで頷く。どうやら致命的な傷はなさそうだ。石和はホッと溜息を吐いた。

しかし、気を抜いている暇はない。こんな対処法はあくまで一時的のぎだ。ブレーカーのスイッチを入れれば再び部屋に光が灯り、視界は開ける。現在でもモニターの光に近い場所にいけば、少年の視界に入るかもしれない。早々に行動を起こした方がいいだろう。

石和はコンソールの元にかがみながら近づき、ディスクのイジエクトボタンを押した。ばしゃっ、という音と共に挿入口からディスクが吐き出される。それをディスクケースに入れ、ポケットにねじ込み、佐々木の元へ戻る。そして、

「佐々木、ここから抜け出すぞ」

と、小声で言った。

「え……？」

「アレは子供じゃない。常軌を逸した力を持った化け物だ。俺たちがどう足掻こうと対抗することは不可能だ。このビルを出て、何処かへ助けを呼ぼう」

「し、しかし、ここには瞬間物質転送装置が！ まだ横川さんが！」

石和は大きくかぶりを振った。

「こうなってしまうてはもう、無理だ。どうしようもない。それよりも俺たち自身が生き延びることを考えるべきだ」

佐々木は俯きながら、歯がみした。

分かる。佐々木の気持ちは石和には理解できる。ここにある瞬間<sup>テレ</sup>物質転送装置・改は新井博士の形見そのもの。ましてや、この機械は新井博士から託されたものなのだ。それを放棄するのに躊躇があるのは当然のことだろう。

昌美のこともそうだ。こうなってしまったのも彼女の暴走が原因であるが、それでも向こうにいる昌美を放っておきたくない。そう

想ってることだろう。

それは石和も同じ思いだった。彼女を助けてやりたい。いまでも強く強く、そう思っている。彼女の篠塚を助けたいという強い気持ち、訴える姿が頭に強くこびり付いている。

出会ってから短い時間だったが、彼女との間に奇妙な信頼と連帯感が生まれていたのを石和は感じ取っていた。そんな彼女を見捨てたくなどない。

だが、無理だ。もうすべては手遅れなのだ。

テレポート・ゲート  
瞬間物質転送装置・改はシステムを乗っ取られ、こちらの入力を受け付けてくれない。これではもう手の施しようがない。

昌美は向こうで完全に捕らえられてしまっている。しかも、彼女は傷つき、もうすでに死んでいるかも知れない。万が一、生きていたとしても戸木原の元でなにをされるか分からない。向こうで実験体となり、あの異形集団の一人になってしまう可能性も否定できない。

テレポート・ゲート  
瞬間物質転送装置・改も。横川昌美も。すべては諦めるしかないのだ。

石和はポケットに手を入れ、先程コンソールから取り出したディスクを取り出し、佐々木の眼前に差し出した。

「これは……？」

「昌美の小型カメラに映った映像を記録したモノだ。この中に昌美が見て、体験した真実がすべてここに残っている。つまり、これは

新井博士、篠塚、昌美の三人が自らをも犠牲にして手に入れた貴重な情報って訳だ」

「……っ！」

その言葉に、佐々木は大きく目を見開いた。

「これを然るべき場所へ提出して、戸木原の行った事をすべて世間に公表するんだ。それが残された俺たちがするべき仕事だ」

「だ、だけど、いいのかい？ 石和くんは反対していたじゃないか。新井さんのことを世間に公表するのを」

佐々木が戸惑った声で、言う。以前、車の中で言い争いをした時ことを言っているのだろう。石和は頷いた。

「あの時とはもう状況が違う。あの三人の想いに答えられるのは俺たちだけだ。昌美達の行為を無駄にしないためにも、今は逃げるべきだ。そして、俺たちの目的を果たす。この情報を武器にして、戸木原の暴走を止めるんだ」

「……………」

佐々木は憂いの表情を浮かべたが、それも一瞬のこと。すぐさま決意の光を宿し、石和の持つディスクを手を取った。

「どうやら、このディスクを佐々木の前に差し出した意味を理解してくれたようだ。このディスクは新井博士、篠塚、昌美、三人の想いそのものだ。そして、その想いを佐々木は自分の意志で引き継いだのだ。」

ならば、新井博士に託された想いを自らの意志で引き継いだ佐々木が護るべきだ。長い長い逃亡生活を続け、目的の為に瞬間物質転送装置・改を造り上げた新井博士の努力に報いる為にも。



石和の言葉に佐々木は無言で、力強く頷いた。

と。その時だった。瞬間<sup>レポート・ゲート</sup>物質転送装置・改が再び低い唸りを上げ始めた。やがて、蒼白い光が部屋中に広がってゆき、電光が走り始める。

「な……!!」

石和は驚愕に顔を歪めた。

## 8 「困〜おとじ〜」

「こ、これは……まさか、転送現象!？」

佐々木が狼狽した声を挙げる。石和は眉を潜め、舌打ちをした。まただ。更なる追い打ち。あの男はまた、『能力者<sup>ネオ・チャイルド</sup>』を送ってくるつもりだ。

ひよつとしたら、あのときにいた三人をすべて送ってくるつもりなのかもしれない。一人でも手の余る『能力者<sup>ネオ・チャイルド</sup>』がこれ以上いたら、どうなるか……。想像しただけで怖気が走る。確実に逃れられぬ死が待っているに違いない。焦燥感が精神を浸食するその最中、石和の耳に嫌な音が混入された。

<sup>テレポート・ゲート</sup>瞬間物質転送装置・改の唸りに混じって、ぴた、ぴた……。といった小さな音が聞こえる。少しずつ、その音が大きくなってゆく。間違いない。『能力者<sup>ネオ・チャイルド</sup>』の少年がこちらに向けて、近づいてきているのだ。石和の身体に冷たい感覚が駆け抜け、肌を泡立たせた。

「くっ……! 佐々木、行くぞ。抜け出す好機<sup>チャンス</sup>は今しかない!」

そう言って、石和は入り口に向けて、全速力で駆け出した。もはや一刻の猶予もない。急いで脱出しなければならない。

「わかった!」

佐々木がその声に答えて、石和のあとに続く。壊れた椅子やデス

クが石和の真横を横切り、壁に衝突した。轟音が響き渡り、粉々に砕け散った破片が石和の身体に当たる。モニターの光とカプセルの発光現象で視界が回復し、EPS領域を造り出すことが出来たようだ。

しかし、まだ薄暗いせいか、狙いが定まっていられない。石和は足を止めることなく、石和はドアの開閉ボタンを押し、廊下へと走り出た。

ドアは電気を利用した自動ドアだが、今は非常用に内部電源に切り替わっている。ブレイカーを一旦、上げて電源を入れ直すリスクを冒さずにするのは幸運と言えるだろう。一瞬でも電灯をつければ、その瞬間、EPS領域の檻に捕らえられてしまいかもしれないのだから。

続けて佐々木が抜け出し、自動ドアがしまる。すかさず、佐々木はポケットの中から一枚のカードを取り出した。

「はあ、はあ……ちょ、ちょっと待つて！ 横川さんが転送する前、このカードを預かったんだ。これを使って、いくつかの条件を重ねれば、この自動ドアを完全にロックすることが出来るはず！」

言いながら、佐々木はカードを挿入口に入れ、ボタンを操作する。がちゃん、と重い音が内部から響き渡り、ドアのロックがかかる。挿入口からカードが排出されると同時に電源が落ちた。

「これで内部からもこのドアは開かない……完全に幽閉状態だよ……はあ、はあ……」

佐々木がそう言った次の瞬間　ごんっ、と鈍い音が響き渡り、

厚い鉄で出来た頑丈そうな扉に歪みが生じた。巨大なハンマーで思い切り叩いたとしてもこんな歪み方はしないだろう。佐々木はじりと後ずさりをした。

「そ、そんな……」

「ごん、ごん、と鈍い音が続いて響く。子供達が『能力』ちからを行使して、ドアを開けようとしている音に違いない。

「ごん、ごん、ごん、ごん。」

単調なその音は、石和の焦燥感を掻き立てる。あの分厚い扉を強引にこじ開けようとするとは……やはりあの子供達は規格外だ。自らの『能力』ちからを用い、必ず突破してくるに違いない。

「いこう！ ここから脱出しよう！」

佐々木は石和の言葉に無言で頷き、二人は同時に駆けだした。

長い長い、一本道の廊下。石和と佐々木は全力でその廊下を駆ける。駆け抜けてゆく。

逃げ。逃げ。逃げ。早くしないと、ドアが突破されてしまう。この廊下は何の遮蔽物もない一本の長い廊下である。

『能力者』ネオ・チャイルド達が外に出てくれば、一目で彼らの視界に入り、EPS領域に捕らえられてしまうだろう。

あの子供達がここに出現した理由は考えるまでもない。機密情報を手にした自分たちの抹殺が目的だろう。

今度、EPS領域に捕らえられたら、確実に殺される。ヒトとしての尊厳を無視した最悪の死の手がすぐそこまで伸びていた。

ここには電源を落とすべき、ブレーカーのスイッチもない。どこかにはあるのだろうが、それを探す余裕もない。今はあの扉が容易に破られないことを祈り、地上を目指す。それだけだ。それしかできない。

地上に上がれば……地上にさえ上がれば、なんとかなる。助かる。自分たちの持ち帰った情報を公表できる。そこにすべての希望を乗せ、その想いを力に変換し、身体を動かす原動力とする。

(地上にさえ上がれば、すべては……)

どうなのだろう。ふと、石和の頭にそんな不安が過ぎった。

人目の多い場所へいけば、彼らは追ってこられない。少なくとも『能力』<sup>ちから</sup>を行使してなど来ないだろうと、踐んでいたが……実際はどうなのだろうか。

圧倒的な、『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>のその『能力』<sup>ちから</sup>。おそらく、自分たちはまだその片鱗しか見ていないが、それでもそれが常軌を逸脱した強力なモノであるということは実感した。今でも身体を止めて、深く考えれば恐慌状態に陥ってしまいそうだ。

もし、繁華街へ出ても彼らが追うことを諦めなかったら。

もし、彼らが『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>の『能力』<sup>ちから</sup>をヒトの多い街で使用したとしたら。

街は大混乱に陥るのではないだろうか。

新井博士が十字路で暴れ、大混乱となっていたあの光景を思い出す。アレが街に出たら、それ以上の騒ぎと惨劇が起きるのではないか。そう考えると、不安がどんどん拡大してゆく。多分、あの子供達は諦めない。だからこそ、わざわざ瞬間物質転送装置・改に強制侵入<sup>キング</sup>までして、送り込んできたのではないか。

(……いや、考えるな。いまは。それを考えてはいけない)

石和は小さくかぶりを振って、その考えを振り払った。自分に与えられた選択肢は限りなく少ない。

ここで『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>に捕らえられ、殺されるか。

逃げ延びて、機密を世間に公表するか。

二者択一。それだけだ。ならば、後者を選ぶしか道はないではないか。今から最悪の結果を気にしていても始まらない。今は子供達の手から逃れ、生き延びる。それだけを考えよう。

そんな葛藤を続けながら、走り続けていると、ようやく終着地が見えてきた。

搬入用エレベーター。丁字路に別れた中心に自分たちが乗ってきたエレベーターが眼前にあった。これに乗れば、地下から地上へ上がれる。この廃ビルから抜け出すことが出来る。背後を見やるが、まだ『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>達はドアを突破していないようだ。これからのことは分からないが、これで一時の安堵を得ることが出来る。

石和は息を乱しながら、エレベーターの脇に付いているボタンを押した。ボタンなど一度押せば充分であるが、はやる気持ちを抑え

られず、何度もボタンを連打してしまう。

……しかし、扉はその気持ちに答えることはなかった。開かない。何故か、ドアが開かない。

「え……？」

何かの間違いかと思い、再度ボタンを連打する。が、やはり結果は同じだった。搬入用エレベーターの扉は固く閉ざされたままだった。

「はあ、はあ……ど、どうしたんだい、石和くん。早くエレベーターに乗らないと『ネオ・チャイルド能力者』が……」

「開かない……エレベーターが動いてないんだ」

「え？」

背後にいた佐々木が目を丸くして、エレベーターの前に駆け寄り、ボタンを押す。石和と同様、何度も何度も繰り返し押しすが、それでもエレベーターは微動だにしない。

そもそも、妙だ。エレベーターの稼働ランプすら点灯していない。つまり、このエレベーターには

「そ、そんな……このエレベーター、電源が入っていない!？」

絶望的な声で佐々木が叫んだ。

「でもどうして! 来るときは普通に動いていたのに!」

石和は無言で大きく頭を左右に振った。

分からない。分からないが、ここで立ち往生しているわけにも行かない。いつ、『ネオ・チャイルド能力者』がここへ来るかも分からないのだ。

「通常のエレベーターを調べよう。佐々木は非常口を！ どこかに非常階段があるはずだ」

「わ、分かった！」

石和の指示に佐々木は頷き、二人は再び駆けだした。通常のエレベーターは搬入用エレベーターの近くにあり、すぐに見つけることができた。しかし、搬入用エレベーター同様、何度ボタンを押しても、ボタンが点灯することも、扉が開くこともなかった。

「はあ、はあ……石和くん、だ、駄目だ。非常口は見つかったけど、ドアがロックされていて開かないんだ！」

再び搬入用エレベーターの前に戻ると、佐々木が悲痛な声で告げた。

「こっちもだ。稼働ランプすら点灯していない」

石和がそう言うと、佐々木の顔が青色に染まった。つまり、それは。この廃ビルの地下から抜け出せないことを意味していた。完全にこの巨大な密閉空間に閉じこめられてしまったことになる。

「ト・ゲートだけど、いったい何故？ 廊下の電灯はついてるし、エレベーター瞬間物質転送装置・改の電源は健在のままなのに、どうしてなんだ？」

佐々木の疑問はもつともだ。電気までもネットで管理している訳ではないだろうから、システムを乗っ取られたとは考えにくい。だ



とすれば、他に動かない理由があるはずだ。

なにかの拍子で電源が落ちたのか。それとも、昌美が意図的に電源を落としていたのか。昌美はそんな素振りを見せていなかったか

……

「……そういえば、昌美がこの搬入用エレベーターを動かすとき、なにかしていなかったか？」

石和の呟きに佐々木は頷き、

「う、うん……携帯電話をなにかいじっていた気がする」

と、言った。

「」

そうだ。思い出した。この廃ビルは巧妙にカモフラージュをしているので、外部からはこの搬入用エレベーターが稼働しているかどうかは分からない、と昌美は言っていた。

つまり、このエレベーターは動かないのではなく、通常の方法では動かないように細工されていたのだ。昌美が携帯電話を操作した後、搬入用エレベーターは動いた。おそらく、昌美がいじっていたあの携帯電話。電波をある箇所に流すことによって、稼働するような仕組みにでもなっていたのだろう。だとすると、この搬入用エレベーターを稼働させるにはあの携帯電話が必要ということになる。

しかし、昌美はもういない。転送時に携帯までは向こうへ持って行ってないと思うが、『ネオ・チャイルド能力者』を閉じこめたあの部屋に置いてあ

る可能性が高い。

とてもではないが、今からでは取りには戻れない。危険すぎる。

「くそっ！」

石和は一人悪態付きながら、額に手を当てた。

どうすればいい？ どうすればいい？ なにか…… なにか方法があるはずだ。必ず方法はある。ない筈がない。もしなければ、携帯電話になにかしらの異常があった場合、昌美達も外に出られなくなってしまうのではないか。必ずそのトラブルに備えて、別の予備を用意してあるはず。

問題はその方法だ。電源が入らないのはそういう風に細工したからであって、使えないわけではないのかもしれない。つまり、通常の回線に戻せばいい。それが出来る場所といえば……。

と、その時。ここに入ってきたときに昌美と話していた会話が石和の脳裏に過ぎった。

『電気はどこから持ってきているんだ？ ビル本体がああの有様じゃ通常の電力は持ってこれないだろう』

『ここには小型の発電施設があるので、それですべて賄ってます。ガスや水道、光回線なんかも使えるように改良しました。その辺りは法に抵触する手段をいろいろ使ってるので、割愛しますけど』

それだ。この地下のフロアには発電施設がある。それに連動した電気を司るコンソールのようなモノがあるに違いない。

「佐々木、昌美を転送する前に補足マニュアルを読んだよな？ あれの中の項目に発電施設の項目がなかったか？ 俺は途中までしか読まなかったが、確かそんな感じの項目があった気がするんだが」

記入されていた可能性は高い。電圧や電源が落ちてしまったとき、必ずなんらかの処置が必要になるからだ。佐々木は腕を組みながらしばし考え、

「う、うん……そういえば、あつたような気がする。ソーラーシステム型の小型発電機。太陽光をエネルギー変換して、蓄電池にためるタイプのヤツが設置されているとか」

「間違いない。それだ。テレポート・ゲート瞬間物質転送装置を使用するには相当の高圧電流が必要とされる。それらを管理するコンソールが必ずある。多分、そこにエレベータの回線を戻すシステムも搭載されているはずだ！」

「で、でも、もしなかったら？」

「この廃ビルという限られた条件下で、テレポート・ゲート瞬間物質転送装置・改なんてとんでもないものをあの二人は造つたんだ。必ずなにかしらの予防策を講じてあるさ。万が一閉じこめられた場合、必ずどこかに何かが用意してある。すべての抜け道を塞いだのも籠城を想定してのことだろうしな。搬入用エレベーターが稼働しなくても、非常用口か、通常エレベーターの電源か、どこかに抜け口を造つてあるに違いない。そして、一番可能性が高いのがその発電施設を司るコンソールなんだ！ 佐々木、その発電施設の場所はわかるか？」

佐々木は頷き、丁字路の左の方角を指さした。

「うん。こつちにまっすぐ行って、突き当たりの丁字路を左折。そのまままっすぐに行って一番奥の部屋がその施設だった筈だよ」

石和はちらりと背後を一瞥しながら、

「分かった。もう時間もない。俺は一か八か発電施設のコンソールに賭けてみたい。佐々木、お前はどうか？　俺の賭けに乗るか？　それとも他に方法があれば」

佐々木は大きくかぶりを振り、すかさず答えた。

「ないよ。石和くんという事はもつともだし、可能性が高いと思う。そして、僕には他に方法が思いつかない。だったら、発電施設のコンソールに賭けてみるよ」

「そうか。それじゃあ……」

石和はポケットからあるモノを取り出した。

インカムだった。予備としてポケットに忍び込ませておいたものだ。最初から佐々木に渡しておけばよかった。そうすれば、昌美も同時に佐々木の意見も聞きながら、行動できただろう。今更言っても仕方のないことだが。

石和は自分が持っているインカムとの同調を終えると、スペアのインカムを佐々木に放り投げた。佐々木が驚いた表情でインカムを両手で受け取った。

「こ、これは？」

「見ての通りインカムだ。回線は繋がってるから、スイッチを入れれば通信は出来る。ネットや中継機を経由していないから、通信距離はそんなに遠くないが……まあ、この地下施設で使用するには充分な筈だ」

「ど、どういうことだい、石和くん。なんで、こんなものを？」

困惑する佐々木に石和は低い声で告げた。

「佐々木、お前は一人で発電所にいってくれ。俺はここに残る」  
「え……？」

意味が分からない。佐々木はそんなの表情を浮かべていた。石和は顔を後ろに向けて、顎をくい、と捻った。石和が顎で指す場所はいま逃げてきたばかりの廊下の道。

「ごん、ごん、ごん、ごん。」

遠くから鈍い音が響き続けている。奥のドアがぐしゃぐしゃに変形しているのが遠目にも分かった。すでにドアの原型は留めていない。あれほど厚い鉄で出来たドアが今にも壊れそうだった。

「こ、こんな短時間で……」

「見ての通りだ。あれじゃ扉が壊れて、子供達が出てくるのは時間の問題だ。二人で一緒に発電施設に行つて戻ってきたら、確実にドアは壊されて、あいつらは出てきているだろう。そして、その後は間違いなく『<sup>ネオ・チャイルド</sup>能力者』の餌食になる。だから、ここは分散する方が得策なんだ。佐々木は一人で発電施設に行つて、出口になる電源を探してほしい」

「だ、だけど、それじゃあ……石和くんはどうするんだい？」  
「言っただろ。ここに残るって。時間を稼ぐ。囿ネオ・チャイルドになって『<sup>ネオ・チャイルド</sup>能力者』達が発電施設に行かないようにする」

「無茶だ！」

佐々木は大声で叫んだ。

「石和くんだつて身を持って知つたじゃないか！ 『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>はヒトの規格を逸脱した化け物だ。僕たちなんかじゃ絶対かないつこない！ しかも僕たちには対抗する武器も何も無い。それなのに一人で残るなんて滅茶苦茶だ！ 死んでしまおう！」

「別にあれに対抗しようなんて思つてない。佐々木が突破口を開くまで、逃げ回るだけだ。なんとかやつてみるさ」

「それでも無理だ！ 二人で発電施設のコンソールを調べるべきだよ。そのほうが効率よく調べられる」

「駄目だ。コンソールを調べている最中に襲われたら、一巻の終わりだ。逃げ場がないし、『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>に発電施設を破壊されたら、今度こそ、外に出る手段がなくなってしまう」

「だったら、僕が！ 僕が代わりに残る！」

「言い出しつぺは俺だ。それにこの発電施設のコンソールにも佐々木の網膜と指紋登録が施してあるかもしれない。もし、そうだったら、どうする？」

石和の問いに佐々木は口淀んだ。

「だ、大丈夫だと思う。新井博士と篠塚さんがいなくなつても、横川さんは一人でここを動かしていたんだから」

「……かも、しれないな。だが、可能性はゼロじゃない。そうなつた場合、俺が行つてもその行動が無意味になり、そのタイムラグで間に合わなくなるかもしれない」

「だ、だけど……だけど……っ！」

佐々木の顔がくしゃくしゃに歪む。今にも泣き出しそうな顔だった。石和は苦笑しながら、右拳の甲の部分で、佐々木の胸をとんと軽く叩いた。

「勘違いするなよ、佐々木。俺は死ぬ気なんて、さらさらないから

な。一番生き残る事が出来そうな手段を選んだ。それだけだよ。俺には千恵子がいる。子供達がいる。あいつらの為にも、俺は生きなきゃいけない。だから、やられたりはしない。絶対だ。上手く逃げおおせて見せるさ」

「いさわ……く、ん」

「それにあいつらの『能力』には欠点がある。気付いたか？ 『能力者』・チャイルドは視覚を利用してEPS領域を造り出しているから、視界を遮断してしまえば、EPS領域は展開出来なくなるんだ。こいつを上手く利用すれば、能力ちからは使えなくなり、ただの子供になる。何とかなるさ」

「うっ……うっ……い、いさわく……」

佐々木はぼろぼろと涙を零し始めた。石和は佐々木のその濡れた瞳を見ながら、告げる。

「俺の賭けに乗るって言っただろ？ だったら、俺の指示に従ってくれ。ここから脱出できるかどうかは佐々木、お前次第だ。頼んだぞ」

佐々木はしゃくり声を押さえ、零れる涙を両手で拭いながら、苦笑いを浮かべ、

「んっ……前々から思ってたけど、石和くんの言う事って、なんだか偉そうだよな。同じ研究所責任者である僕らにも指示出すのに違和感がないっていうか」

と、言った。

「む。そうか？」

「しかも、無自覚。見てて違和感がないし、やっぱり石和くんはリ

「ダーに向いてるんだよ。戸木原博士がいなくなったら、第五研究所の統括になったらどうだい？」

「よせよ、俺にはリーダーは向いてない。気まぐれで、我が儘だからな」

石和は唇を笑みの形に歪めながら、拳を佐々木の胸元に突き出した。佐々木が力強く頷きながら拳を握り、石和の拳に、こん、と当たった。

「頼んだぞ」

「うん。石和くんも無茶はしないで……と、言っても無理だよな」

「ああ。相手が怪物だからな。無茶しないと生き残れない」

「だったら、約束してほしい。絶対に死なないで。生きて、二人で必ずここから脱出しよう」

「ああ。俺は死なない。絶対にだ」

互いに頷くと、再び石和と佐々木は拳同士を重ね合わせた。そして、それが作戦開始の合図となった。佐々木は駆けだした。一刻も早く発電施設にたどり着き、地上への扉を開放するために。石和はその姿を見送る。佐々木が突き当たりの道を左折し、その姿が見えなくなるまで、その後ろ姿を見つめ続けた。

「さて、と」

石和は独りごちながら、正面の廊下へと目を移した。

「こん、こん、こん、こん。」

廊下の奥から鈍く響く、扉を叩く音。扉を破壊する音。単調で一定なリズムを刻み、その音が続く。不気味だ。音が一つ、また一つ



と鳴り響く度に心臓が驚づかみされたような感覚に囚われる。

遠目からでも分かる。もうすでに扉としての機能が失われつつある。ぐにやりと歪んだその扉は溶けた飴を彷彿させた。あの調子ではあと十分も持たないだろう。

腹を括らなければならぬ。

気付くと、額からぽたぽたと冷たい汗がこぼれ落ちていた。両手を見ると、指がふやけるほど大量の汗でぐっしりと濡れていた。その手が小刻みに揺れている。震えている。手だけではない。両足も大きく震え、己の意志では止めることが出来ない。

「まったく……俺も意地っ張りというか強がりというか。我ながら呆れるな……」

冗談めいた一人の呟きさえ、震えている。声も、身体も、心も、すべてが震えている。

怖いのだ。怖くて、怖くてたまらない。

本当はこんな場所に留まりたくなどない。

モニター上でみた昌美のあの姿。目の当たりにした『ネオ・チャイルド能力者』の『ちから能力』。瓦礫の叢虫と化した佐々木の姿。思い返すだけでぞつとする。あれともう一度、しかも自らの意志で対峙するなど正気の沙汰ではない。ましてや、こちらには対抗する武器などは一つもないのだ。こんな状況で佐々木が突破口を開くまで、どうやって時間を稼げばいいのか。まるで分からない。

何処かの部屋に入り込んで、部屋を暗くしてやり過ごすか？

駄目だ。そんなことをしても意味がない。あの『能力者』ネオ・チャイルド達の目をすべて引きつけないければ、囷としての意味がなくなる。そうなれば、発電施設に行った佐々木にまで被害が及んでしまうだろう。

どこかの部屋におびき寄せて電灯を破壊して、部屋を真っ暗にし、そのまま閉じこめてしまうか？

それも駄目だ。なんの武器もない状態ではブレーカーの破壊に時間がかかる。鈍器を探し、壊している間あまりにも無防備になるので、その間に『能力者』ネオ・チャイルドのEPS領域に捕らえられてしまえば、それで終わりとなる。

それに部屋を暗闇にしてしまうと自分自身も視界を奪われてしまうので、諸刃の剣である。EPS領域の消失も視界の遮断が原因だと状況から推測しているが、ひよっとしたら、なにかの例外があるかもしれない。視界の遮断だけに依存するのは危険すぎる。

……なにも、浮かばない。なにも、突破口が見つけれない。  
次の瞬間に扉が破壊され、『能力者』ネオ・チャイルドが目の前に現すかもしれないという、この状況で、打開策のひとつもない。これで怖くない方がどうかしている。

だが、佐々木の前でその姿を見せるわけにはいかなかった。自分が恐怖し、『能力者』ネオ・チャイルドに対し、何の策もないことを知ったら、間違いないく佐々木はこの案に反対しただろう。二人で発電施設に行く案を強く押ししたに違いない。

しかし……それでは駄目なのだ。恐怖による不安は紛れるかも知れないが、それだけである。確実に『能力者』ネオ・チャイルドに追い込まれ、地上への帰還が困難となる。

だから、おそらくこれが現状で生き残るために必要な最善の方法。二人で生き残るために。やるしか、ない。

「……………ネオ・チャイルド『能力者』に姿をさらしながら、逃げまくる。捕まったら、ゲームオーバー。ははは、まるで鬼ごっこだな」

一人笑いながら、そんなことを呟く。鬼ごっこ。勝義によく付き合わされたのを想い出す。千恵子と三人で公園の中でよく遊んだものだ。少し気恥ずかしい想いをしながらも、童心に返るのも悪くないと思つた。運動が苦手で、あたふたしながら逃げ回る千恵子。笑いながら追いかける勝義。楽しかった。柄ではないかも知れないが、そう思える時間だった。

……………そうだ。これも鬼ごっこだと思えばいい。子供達とのたわいのない遊び。どうやったら子供達に捕まらずに済むか。楽観的に考え、挑んでみよう。

どんなときでも冷靜的に理論的に。そうすれば必ず突破口は見つかる。見つかるはずだ。そう信じよう。

「千恵子……………頼む。俺を護ってくれ」

最愛の妻を頭に思い描く。彼女の元へ必ず帰る。彼女を抱きしめる。強く強くそう念じ、その想いを糧とし、挫けそうになる心を、身体を奮い立たせる。

そして、石和は動き始めた。生き残るための最善の方法を探す為に。

そうして、世界で一番危険な鬼ごっこが始まった。

## 9 「胎動」 第五段階『罪と罰と進化』了

＊

『アルファ5よりアルファ0。聞こえるか』

『こちらアルファ0。感度良好。送れ』

『状況報告。強力なEPSを感知。餌に獲物が食いついたと推測する』

『こちらでも感知した。数は3……いや、4か。かなりの数だな。大漁つてとこだな。大収穫だ』

『指示を求む。頃合いだと思っが』

『ああ。直ちに『おおぞら』に到達。ヨハネのフィラデルフィアを起動させる』

『了解。『おおぞら』に到達する。交信終了』

『アルファ0より全隊員へ。餌に獲物が食いついた。繰り返す。餌に獲物が食いついた。これより、状況を開始する。第一分隊及び、第二分隊は指定のポイントで待機。反EPS領域を展開すると同時に突入する』

『デルタ・リーダー 第一分隊、了解』

『エコー・リーダー 第二分隊、了解』

『フォックスノット 第三分隊、ゴルフ 第四分隊はポイントC、ホテル 第五分隊、インディア 第六分隊はポイントDに移動開始。すみやかに配置につけ』

『フォックスノット・リーダー 第三分隊、了解』

『ゴルフ・リーダー 第四分隊、了解』

『ホテル・リーダー 第五分隊、了解』

『インディア 第六分隊、了解』

『了解』

『これ以降の指示はアルファ0よりアルファ・リーダーへ移行する。各員の健闘を祈る』  
『了解』

多目的型人工衛星『ヨハネ』。

上空36000キロメートルに位置する静止衛星で、三ツ葉重工が独自に開発し、打ち上げた多目的型の衛星である。

情報バンク、GPS機能や衛星通信を利用した秘匿回線、宇宙空間の科学観測を行う為の機能、気象観測、海洋観測、等々……。

複合企業三ツ葉社に関する様々な情報を蓄積、管理することを主軸に置き、様々な機能がこの『ヨハネ』には搭載されている。

『ヨハネ』の機能は大きく分けて七つの衛星としての機能があり、それは新約聖書に出てくるアジア州に位置していた七協会の名前がつけられ、管理されている。

エフォス、スミルナ、ペルガモン、ティアテイラ、サルデイス、フィラデルフィア、ラオディキア。

その中の一つのフィラデルフィア。その中に搭載された機能の一つがゆっくりと稼働しつあった。

『これより、反E P S砲の初期起動に入る。第一段階。フィラデルフィアの防壁を解除せよ』

『了解。フィラデルフィアの防壁を解除します。認証システムにフ

イラデルファイア権限者の網膜パターン照合、パスワードを認証中……  
レベル5  
：ファイラデルファイア防壁解除確認。システムをティアテイラからフ  
レベル5  
イラデルファイアに移行します』  
『ファイラデルファイア・システム起動……起動確認。システムチエツ  
クスキャン実行中……スキャン終了。システムに特に不備はありません。  
せん。全項目オールグリーン』  
『第二段階へ移行する。反EPS砲のシステムを起動し、発射管を  
アンチ  
開け』  
『了解、反EPS砲、システム起動します』  
アンチ  
『了解。反EPS砲、発射管、開きます』

有人宇宙施設『あおぞら』の管制塔で幾人ものオペレーターが管  
制塔にあるヨハネの管理パネルを操作し、『ヨハネ』に設置されて  
いる反EPS砲の回路を開いてゆく。

無限に広がる真空の宇宙空間を背景に浮かぶ巨大な有人宇宙施設  
『あおぞら』。この施設は全長約158.5?、幅約122.7  
?、中心は様々なモジュール、左右には巨大な太陽電池パネルが設  
置されている、ヒトが広大な宇宙空間で造り上げた巨大構造物だ。

宇宙空間の科学観測を名目に造られた施設だが、その目的の一つ  
として、『ヨハネ』の管理、メンテナンスがある。

『あおぞら』とさほど距離の離れていない場所に『ヨハネ』が設置  
されているのもその為であり、直接衛星と干渉できるため、中のソ  
フトと共にハード面も直接手を施すことが出来るのである。

『あおぞら』の管制塔からヨハネへ。電波による指示が送り込ま  
れ、『ヨハネ』はそれまで形を成していた観測衛星ではない、兵器

衛星としての形を取り始めた。ヨハネの中に折りたたまれていた発射管がスライドして、長い長い砲身を露わにした。衛星から青紫の光が灯り、その光が広がってゆく。

『ヨハネ』に設置されているスラスタが射出口から蒼白い光と共に噴射され、角度が調整される。少しづつ、少しづつ。わずかな誤差が目標との距離との距離が開いてしまったため、コンピューターの軌道計算により、その誤差を限りなくゼロに近づける。目標を確実に射抜くために。

その長い砲門が目指す先は 地表に存在する、とある構造物。

目標、日本の首都。東京。ビジネスシティの外れにある倉庫街。持ち主不透明の廃ビル。

現在、石和武士と佐々木勇二郎が幽閉されている建物だった



9 「胎動」 第五段階『罪と罰と進化』了（後書き）

第五段階『罪と罰と進化』了 第六段階『崩壊』へ続く。

第六段階『崩壊』 1「だいすきなおとうさん」

大好きな大好きな父親が言った。『これから楽しい遊びをしよう』と。

『お父さんのいうことを聞いて、遊んでくれるととっても嬉しくて、楽しくなるよ。これは絶対だ。お父さんの保証付きだよ』

明るい笑顔でそう言って、父親は少女の顔を覗き込んだ。少女の脳裏に自分の父親の顔が浮かび上がり、それが目の前の父親の顔と全く異なることに違和感を感じたが、次の瞬間、脳内の映像が霧散し、目の前の父親像と重なった。

なにも不思議なことはなくなった。いや、元から不思議なことなどなかったのだ。紛れもなく、目の前にいるのは少女の父親だった。

大好きな大好きな父親が言うことだ。きっとそれはすごく楽しいことなのだろう。まだ『遊び』も始まってないのに、少女の胸には歓喜が込み上げてきて仕方がなかった。

だから、少女は父親の言うことに大きく頷いた。

どうしたらいいのか？ どうしたら、もっともっと楽しくなるのか？ 少女は父親に訊いた。

『ふたりのお兄ちゃんと遊ぶんだ。追いかけてこでね』

追いかけてこをするのはとても楽しいことらしい。子供たちが『鬼』で、二人の兄は『子』。

少し変わったルールがあつて、『子』はすぐに捕まえてはいけな  
いらしい。すぐに捕まえてしまつたら、追いかけてこが面白くない  
から。じっくりじっくり時間を掛けて追いかけて。

『子』が動かなくなつて、逃げなくなつてしまつたら、そこでよ  
うやく捕まえてもいいとのことだ。

しかし、追いかけてこするのは少女ではなく、他の子たちの役割  
らしい。

それを聞いて少女は悲しくなつた。自分だけ仲間外れなのかな？  
と。少女は訊いた。

少女の父親は首を大きく振つて言った。

『違うよ。君には追いかけてこをもつともつと楽しくするために、  
別の遊びを用意したんだよ。お父さんの言うとおりの所に行つて、  
あることをしてほしいんだ。そうすれば追いかけてこをしているお  
兄さんたちはもつともつと喜ぶから、君も嬉しいだらう？』

どうやら鬼をビックリさせるための作戦らしい。それはとっても  
面白そうなことだった。少女の胸が更にドキドキと高鳴つた。

そうして、少女は意気揚々と行動を開始した。

さあ、行こう。楽しい、楽しい追いかけてこの始まりだ。

パパを、おにいちゃんたちを、たくさんたくさん喜ばせてあげよ  
う



## 2 「行動開始」

ごん、ごん、ごん、ごん。

鈍い音が廊下に響き渡っていた。一定のリズムでその音は鳴り響き、その音が聞こえる度に廊下の一番奥にある鉄のドアがひしゃげ、形を変えてゆく。どんな強靱な力を持つ人間でも力任せに開けることなどは絶対に不可能な筈の頑丈な頑丈な扉。

それが既存の物理法則を無視した力で歪められてゆく。

『ネオ・チャイルド能力者』。

存在を得るために必要不可欠なエネルギー『具現する力』に干渉できる子供たち。この子供達には通常の物理法則は一切通用しない。大気中に存在する力を圧倒的な力に変換し、その力を牙にして、扉をこじ開けようとしている。

その音を背景に石和武士は行動を開始していた。

まずは現状把握。分かっているべきコトからまとめてみる。

絶対的な『ちから能力』を行使する『ネオ・チャイルド能力者』が自分と佐々木を狙っているという事実。捕らえられれば、間違いなく横川昌美の二の舞となるであろう。

現在、『ネオ・チャイルド能力者』は『テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置・改』を管理していた部

屋にロックをかけ、閉じこめているが、『能力者』ネオ・チャイルドは『能力』ちからを行  
使し、扉を壊して開こうとしている。

『能力者』ネオ・チャイルドの数は不明。が、複数であることは確実。三人……いや、下手をすればもっと多い数の『能力者』ネオ・チャイルドが転送されてくる可能性だつてある。しかし、扉を壊すことに手間取っていることを考えると、『能力者』ネオ・チャイルドが大勢転送されてくることはないかもしれない。想定として、自分が相手をするのはモニター越しに見た三人の子供である可能性が最も濃厚だ。

いずれにしろ、石和のやるべきことはたった一つ。

彼らの目を引きつけ、ひたすら逃げることだ。間違つてもアレに  
対抗しようと思つてはならない。子供たちの視界に入るだけで危険  
なのだ。とてもではないが、なんの武器や訓練も積んでいない自分  
にアレが倒せるとは思えない。

だから、逃げる。ひたすら逃げまくつて時間を稼ぐ。その間に佐  
々木が上手く、エレベーターを稼働させるのを祈るしかない。

だが、ただ闇雲に逃げ回っていても、あの『能力者』ネオ・チャイルドたちのEP  
S領域から逃れられるとはとても思えない。時間を稼ぐにはそれな  
りの環境と道具が必要となる。

石和はその環境を造り出し、彼らから逃れる道具をなにか見つけ  
出さなければならぬ。

否。そう簡単にそんな道具が見つければ苦労はしない。例えそん  
な道具があるとしても、探している最中に『能力者』ネオ・チャイルドがあのだアを  
突き破つて、出てきてしまつたら。そんなあちこちを探している

時間などない。だとすれば、発想を逆転させなければならない。

そう。道具を見つけないのではなく。

この環境に適した道具を造り出すのだ。

一見無茶に思える案だが、石和にはそんな事が出来る条件を満たした場所にひとつ心当たりがあった。

このビルにある倉庫だ。

新井博士と篠塚はここで瞬間物質転送装置・改を造り上げたのだ。テレポート・ゲートそれを造り上げるには様々な部品や薬品が必要となる。すると、当然それを保管した倉庫がある。

先程、緊急のマニュアルを読んだとき、予備パーツの置き場所の位置も載っていたので、そこへいけば他にも色々なモノが置いてあるに違いないと、石和は践んだのだ。

石和はあの能力に対抗できるような力や技術はなにも持ち合わせていない。だが、石和には科学者として培ってきた専門知識と頭脳がある。ならば、それを利用するのだ。

直線的な力ではなく、科学者としての見解で対抗するのだ。

佐々木と別れた後、そう決断した石和は倉庫の位置を思い出しながら、倉庫に向かって、まっしぐらに駆けていった。マニュアルに載っていた地図通りの場所へたどり着くと、すぐさま自動ドアを開き、中に入り込んだ。

広々とした部屋だった。幾列にも別れた棚が並び、様々な器具が

整理されて置いてある。手前の棚にはティッシュペーパーや整髪料、洗濯洗剤などの日用品、その脇には非常用の保存食料、発煙筒、キャンプ用品が一式置いてある。奥にはガラスの棚に入った薬品や部品棚の小さな引き出しに電子部品の名前が書かれており、その数は膨大だ。

石和は周囲を見回しながら、使えそうな機材を漁る。予想通り、専門的な薬品や機材が揃っている。綺麗に整理されているので、位置も分かりやすい。

石和はさっそく行動を開始した。ここへ来る最中、『ネオ・チャイルド能力者』の能力を防いだことを思い返しているうちに、子供たちに対抗できるモノを思いついたのだ。

部屋の電源を切る以外で、EPS領域を封じる武器。それを今から即席ででっち上げる。武器とも呼べない単純な代物かもしれないが、上手くいけばあの子供たちに対して有効な武器になることだろう。

石和は非常用に置いてあったキャンプ用の着火剤を手に取り、チューブの中身を強化ガラスで出来た試験管に出して、他の薬品と混ぜ合わせ始めた。

この場所からでも定期的に『ネオ・チャイルド能力者』がドアを叩く音が聞こえてくる。部屋に響き渡るその音は鈍い音から甲高い音に切り替わりつつあった。ドアが完全に壊れつつあるのだ。

石和が思い描いた武器は機材さえ揃っていればすぐ出来上がるモノであるが、それでも時間が足りない。彼らは今すぐにも簡易牢獄の中から抜け出そうとしているのだ。どんなに急いで造ったとし



ても間に合うかどうか。石和は焦る気持ちを必死に堪え、冷や汗をばたばたと垂らしながら、作業を急いだ。

その最中、耳に装着したインカムのイヤホンから声が聞こえてきた。

『はあ、はあ……い、石和くん、僕だ。聞こえるかい？』

佐々木の声だ。石和は手を休めずにインカムのスイッチを入れて、短く答える。

『感度良好だ。良く聞こえる』

『はあ……よ、よかった。まだ無事なんだね。状況はどうなんだい？』

「佐々木と別れてから、まだそんなに経ってないだろ。あいつらは籠の中だ。もう今にも這い出てきそうな感じだけだな。そっちは？」  
『はあ、はあ……いま、発電施設の入り口……い、石和くんの予想通りだったよ。扉の開閉システム、僕と新井さん、横川さんのみの生体認証がシステムになっていて、他の人では開けないようになってたよ』

どうやら、佐々木を行かせて正解だった様だ。代わりに石和が行っても、どうにもならなかっただろう。

「あとは、そこにエレベーターの電源の切り替えがあるかどうかだな。急いでくれ。早ければ、早いほど、俺の生存率は上がるからな。頼んだぞ」

『わ、分かっている！ 今ロックが解除された。これから、色々調べてみるから！ 石和くんもそれまでなんとか持たせてほしい』

「了解だ。俺も子供に殺される、なんてシチュエーションで人生終

了したくないからな。せいぜい足掻いてみるさ」

そんな軽口を叩きながら、石和は通信を切った。そうだ。相手は規格外とはいえ、子供なのだ。子供に殺されてたまるものか。この不条理な鬼ごっこを終わらせ、必ずここから抜け出してみせる。そんな想いが胸に込み上げてくる。

「……子供？」

不意にその言葉に引つかかるモノを感じて、手を止めた。あまりにも圧倒的な能力の前に霞んでしまっていたが。『能力者』ネオ・チャイルドはすべて年端もいかなない子供達ばかりだ。

ひよつとしたら……あの子達の頭の中は年相応のものなのではないか？

そんな考えが、石和の中に浮かび上がる。

現在だつてそうだ。『能力者』ネオ・チャイルドは時間を掛けて能力を使い、あの扉をこじ開けようとしている。新しく転送されてきた『能力者』ネオ・チャイルドの力がどんなものは分らないが、あの三人のどれかならば能力を掛け合わせて使えば、もつと早く扉を早く破壊できるのではないか。どうにも、能力の使い方が拙いつたぬ様な気がする。

だとすれば、こちらにとっては好都合だ。駆け引きの幅が広がるし、生存率もぐつ、とあがることになる。力とは単純な能力だけではない、頭脳と掛け合わせて、初めてその力を発揮するのだ。

それならば　こちらにも勝機が見えてくる。

「いや……樂觀するのは危険だな」

石和は独りごちながら、かぶりを振った。正直、その判断を下すには材料が少なすぎる。彼らに感情らしきモノがなかったことや、やたら旧約聖書の一節を口にすることも気に掛かる。この状態で迂闊な駆け引きは禁物だ。確実に、安全性が高い手段を講じて挑んでいくべきだ。このゲームでのやり直しは一切ないのだから。

と。

ズン…！、と鈍い音が扉の外から聞こえてきた。今まで扉を叩いていた音とは異なる、今までで一番大きな音だった。

「……来たか」

石和は目を細めて、作業を止めた。どうにか二つ完成した。配分も適当だし、これが石和の狙い通りの効力を発揮するかも分からないが。そこはぶつつけ本番で、上手くいくことを祈るしかない。石和はジャケットの内側ポケットの左右に完成したモノを交互にしまい込んだ。そして、棚にあった発煙筒を見て、利用価値があることに気付いた石和はありったけのストックをポケットに突っ込んだ。

これでふたつの武器を手にすることが出来た。これらがあの子供たちに対して効果を発揮してくれると信じたいところである。

準備は万端だ。さあ、始めよう。世の中で一番苛酷で理不尽な鬼ごっこを。

石和は一人開幕の合図を頭の中で告げると、震える足に鞭を打って立ち上がり、部屋の外へ抜け出した。



### 3 「鬼」ついでに「策略」

元来た道を戻り、エレベーターの前にまで戻ると、小さな子供が二人、通路の一番奥の部屋から出てくる姿が石和の目に映った。

子供達を閉じこめていた鉄の扉は溶けた飴のようにぐにやりと歪み、只の残骸と化していた。どんな侵入者をも阻むはずのその分厚い扉は床に崩れ落ち、二度と扉としての役割は果たさないだろう。

それは普通の人間では到底行えぬ、所業である。これを目の前にいる小さな子供達が行ったかと思うと、背筋が凍る思いだ。

石和は目を凝らして、奥の廊下を見つめる。部屋から出てきた『ネオ・チャイルド能力者』は二人。一番最初に転送されてきた短髪の少年。そして、髪の色がセミロングの少女だった。

石和は二人の子供が皮で出来た衣のようなものを身に纏っていることに気が付いた。少年が『テレポルト・ゲート瞬間物質転送装置』で転送されてきたときは裸体だったので、少女が転送されてきた後、わざわざ戸木原が原子分解モードで送って、着せたのだろう。

アダムとイヴはエデンを追放されるときに神から皮の衣を与えられたと言うが、それを意識しての演出だろうか。どこまでもふざけた男である。

もう一人、アップスタイルの髪型をした少女が向こうにはいたはずだが、その子の姿は見当たらない。

二人を始末するのに三人の『能力者』ネオ・チャイルドはいらないと、戸木原は実践のだろうか。完全に見下されていることが石和の癪に障ったが、人数が少ないと言うことはこちらにとってには好機でもある。

二人の能力の目から逃れ、なんとか活路を造ろう。

石和はそう考えながら、二人の少年少女の能力を思い出す。

短髪の少年は超能力で言う『念動力』に近い能力を持っている。自分の身体の何倍もある物体をEPS領域の中で自在に動かすことが可能のようだ。その能力の凄まじさは身を持って、体験している。おそらく少年の目で見たものを対象にEPS領域を造り、物体を自在に操っているのだろう。常に動いて、少年の視界に定まらないようにしなければいけない。要注意だ。

セミロングの少女の能力は『重力操作』グラビティ・オペレーションと、戸木原は言っていた。視認した領域の重力の操作を自在に行えるらしい。ある意味この能力は短髪の少年より厄介かもしれない。

昌美が重力の束縛に囚われたことを思い出す。少女の視界に囚われただけで、身体の自由を奪われてしまうのだ。一度捕まってしまうたら、彼女の視線から抜け出さない限り、開放されることはない。一度囚われたら、そこで終わり。あまり見通しのきく場所だとなんか遠くにいても重力の檻に捕らえられてしまうかもしれない。あの少女の目に捕らえにくい環境に誘い込む必要があるそうだ。

いずれにしろ、ここでじっと待っていたら、即座に終わりを迎えることになる。子供達の目を引きつけ、何処かの部屋に入り込む。そこからは出たトコ勝負である。

少年と少女の顔が石和の元へ向いた。どうやら、石和の存在に気付いたようだ。感情の抜けたガラスのような瞳がこちらの姿を捕らえた。少年は目をすうっと細め、抑揚のない口調で『例の言葉』を口にする。

『禍なるかなバビロン。そのもろもろの神の像は砕けて地に伏したり』

すると、部屋の中にあつた残骸が宙に浮かび、辺りに漂い始めた。あの子供が有する『念動力』の能力だ。何度見ても現実感のない、不可思議な光景である。現在、自分がいる世界は現実ではない、夢の世界にでもいるような錯覚に陥る。

宙に浮いた瓦礫の群れがもの凄い速度で自分に向かって、襲いかかってきたのを見て、石和は慌ててその感覚を振り払った。惚けている場合ではない。一瞬の油断が致命傷になりかねない状況なのだ。石和は歯を強く食いしばりながら、腰を低く落とした。

ワークステーションのモニターや本体などの様々な機器が壁にぶつかって、粉々に砕け散っていく。石和はその瓦礫の雨をかくぐりながら、前へ前へと進む。

その最中、ポケットから発煙筒を一つ取り出し、着火する。煙が出始めたのを確認すると、廊下の奥に向かって、投げつけた。子供たちの3メートル程手前にこんつ、と音を立てて落下し、そこから煙が吹き出し、辺りに漂い始めた。煙幕を造るためだ。発煙筒の煙は廊下のような閉鎖空間では充満しやすい。

これによって、『ネオ・チャイルド能力者』たちの視界を遮断し、見渡しが効く廊下に障害を造る。石和の視界も遮断されてしまうが、電灯の電源を

落とすよりははるかにましなはずである。

「もう一つ……っ！」

叫びながら、石和は二つ目の発煙筒を放り投げる。弧を描いて、床に落下する。二つの発煙筒が大量の煙を吐き出して相互に混じり合い、辺り一面を白い世界に塗り替えていく。

やがて、石和の視界から子供たちの姿が見えなくなった。

これだけ視界を塞げば、EPS領域を展開することは難しいだろう。瓦礫などを凶器として飛ばすことも出来ないはずだ。

石和はそう推測したが、それは的外れな見解であった。

煙の中から瓦礫の破片が飛び出してきた。瓦礫は石和の左頬をわずかにかすめ、そのまま鋭いナイフの様に壁へ突き刺さった。継いで、煙の中から瓦礫の群れが飛び出してくる。

「う、あああっ！」

石和は驚愕に顔を歪めながら、身体を捻り、瓦礫の群れを避ける。慌てて踵を返して、廊下が両脇に別れたT字路まで後退する。

突き当たりまで駆け抜け、左に折れようとした瞬間、石和の身体に衝撃が走った。轟音と砕け散った何かの破片が身体中のあちこちに直撃し、その衝撃で石和の身体が吹き飛び、床をごろごろと転げ回った。

床を擦った摩擦で着ているジャケットの肘とズボンの膝の部分が



びりびりと破れ、その双方から痛みが走った。肌がずる剥け、血がじわりと滲み始める。

痛みを堪えながら、石和は顔を上げ、衝撃のあった方向へ目を向けた。

壁に 鉄の塊が突き刺さっていた。つい先程まで、ネオ・チャイルド『能力者』二人を閉じこめる為に使用していた鉄の扉である。外した扉をそのまま能力を使って、飛ばして来たのだ。壁を見ると、辺り一面の壁が陥没して、巨大な穴が出来ていた。床には粉々になった瓦礫と壁の破片が散乱していた。

もし僅かでも左に折れるのが遅れてたら、確実にあの鉄の扉に押しつぶされ、赤く彩られたミンチになっていたことだろう。石和は込み上げてくる恐怖の感情を強く齒がみする事によって、押さえ込み、立ち上がった。

「くそっ……どういうことだ？」

不可解だった。視界は完全に塞いだはずなのに何故、EPS領域を展開できるのだろうか。何か自分の推測が間違っていたのだろうか。壁に背を貼り付け、振り向き様、そっと、煙に包まれた奥の廊下を横目で覗き込む。すると、煙の奥から二つの影がこちらに近づいてくるのが見えた。

「な  
」

目を大きく見開いて、石和は驚愕した。相変わらず、煙は廊下一帯に充満している。しかし、どういう訳か、少年と少女の周りには煙が全くなかった。まるで壁があるかの様に煙を完全に遮断してい

る。

少年の正面、半径二メートル程の半円にはまったく煙が入ってこない。EPS領域を展開して、あの煙を完全にシャットアウトしているのだろう。

それで、ようやく分かった。てっきりあの少年は標的の物体にEPS領域を造り上げ、自在に動かしていると予想していたのだが、どうやらそれは大きな勘違いだったようだ。

横川昌美が銃を撃ったときのことを思い出す。あの少年はその銃弾の動きを無力化していた。銃弾は高速回転で撃ち出される為、視認できない筈だ。

あれは銃弾を視認して止めたのではなく、少年の展開したEPS領域に触れた事によって、銃弾を無力化したのである。

つまり、あの少年は自分を中心とした一定の領域に円状のEPS領域を展開することが出来るのだ。そのEPS領域の中では自分の意志と念動力がダイレクトに接続されており、少年の意のままに物を操作することが可能なのだろう。

それが例え、視認できない物体だとしても、あの領域内では止めることは造作もないというわけだ。だから、あの領域には煙もいかないし、瓦礫や鉄の扉も自在に飛ばすことが出来た。そう言うわけだ。

戸木原が言っていた。『あの力はきちんとした法則に則って、顕現化している』、と。成る程、能力によって色々能力を発動させるまでの過程や法則があるようだ。そして、その制限内では無敵の力を発揮出来るというわけだ。

だが 逆に考えれば、その能力を発現できるのは限られた領域だけということだ。

「はっ……！」

石和は大きく息を吐き出し、駆けだした。手には三本目の発煙筒すでに着火済みだ。T字路の中心に躍り出て、『ネオ・チャイルド能力者』に自分の姿をさらす。石和と言う餌をアピールするためだ。ただし、向こうがEPS領域を造る暇は与えない。

走るの速度はまったく弛めず、発煙筒を子供達に向けて、思い切り投げつけた。少年のEPS領域は発煙筒を跳ね返すが、EPS領域の外を煙が覆い、再びその姿が見えなくなる。これで彼らは能力を使えないはずだ。

あの少年はEPS領域の範囲でしか、その力を展開することは出来ない。だとすると、現在EPS領域の外にいる石和にはその能力を干渉させることは出来ないと言ふことだ。だから、能力発動の推測に間違いはあったが、対処の仕方はこれでいいのだ。

飛び交う瓦礫の雨は確かに驚異的な力だが、あれはEPS領域から外へ投げ飛ばしているだけであって、その軌道は直線的だ。近くにある瓦礫が攻撃してきたり、石和の身体が捕らえられることはないはずだ。辺りを煙で覆っておけば、狙いも定められないので、充分発煙筒は盾としての役割を果たしてくれる。

もう一人の少女はこちらを視界に捕らえないと、『グラレティ・オペレーション重力操作』は使えないはずなので、視界を遮断してしまえば重力の檻に囚われる心配はないはずだ。

石和はそのまま足を止めずに奥の廊下へと突き進んでゆく。佐々木が向かった方向とは真逆の方角だ。子供達が丁字路の突き当たりに来て、石和の姿を見据えた。そのまま、二人は石和を追い、ゆっくりとした足取りで、廊下を闊歩する。

「よし……いい子だ……」

二人が分散する可能性も危惧していたが、どうやら石和の思惑に乗ってくれたようだった。これでいい。あとは何処かの部屋に誘い込んで、子供達をかく乱し、佐々木がエレベーターを復旧させるまでの時間を稼ぐのだ。

再び瓦礫の雨が石和にかけて降り注ぐ。石和は腰を低くかがめて、その瓦礫を避けながら、発煙筒に着火し、視界に壁を造って進んでゆく。

子供達を振り切った後も、定期的に発煙筒を床に落とし、煙幕を張っておく。こうしておけば、子供達には石和がどの方向へ向かったかへの道標になるだろう。

「はっ……はっ……はっ……！」

石和は呼吸を乱しながら、廊下の突き当たりまで、駆け抜け、右に折れた。

壁には『Cブロック』と書かれたプレートが掲げている。

周囲を見回すと、左右にそれぞれよっつの扉があった。石和はその扉を前から順に片っ端から扉を開き、中の部屋を確認してゆく。

この辺のブロックの構造はまるで把握していない。そんなものを調べてる暇など全くなかったからだ。あの二人を何処へ誘い込むのか。急いでそれを決めなければならない。

どんな場所が適切だろうか。石和は空けた部屋の中を見回しながら、考える。

狭い個室？ 論外だ。身動きが取りづらい場所ではあつという間に子供達の視界に囚われ、EPS領域を展開されてしまう。

なるべく広い場所がいい。少年のEPS領域がまるで行き届かない位、大きな大きな部屋。かといって、あまりガランドウな部屋だとどんなに動き回っても『重力操作グラビティ・オペレーション』を使う少女にEPS領域を展開され、捕まってしまう。ある程度遮蔽物がある部屋がいい。それを盾にすれば、EPS領域に囚われることなく、時間を稼ぐことが出来るだろう。

部屋の面積が大きく、遮蔽物のある場所。それが最適だと、石和は判断した。

しかし、そう都合良く、そんな条件の揃った部屋がここにあるのだろうか。ましてや、ここは廃ビルだ。どこかの会社が使用していたものらしく、広い部屋はそれなりにあるのだが、遮蔽物がある場所となると、かなり限定されるだろう。

廊下に発煙筒をばらまいて、あちこちを逃げ続け、それで時間を稼ぐべきか？

いや、発煙筒の煙はあくまでも目くらましで、子供達の進行を食い止めるのには全く役に立たない。発煙筒ももうほとんど残ってな

い。佐々木の元へ行かせない困的な意味もある。やはり、部屋に誘い込んで、かく乱するのがこの状況下においては一番ベストに思えた。

そんな分析を行いながら、部屋を調べ続け、6つめの部屋。

そこには石和の考えた条件が揃っている部屋があった。試しに電灯のスイッチを入れて見ると、ぱっと灯りが灯った。

辺りを見回してみる。そこには奥行きのある巨大な空間が広がっていた。高い天井の部屋で、広さは108平方メートル、天井高は3.5mはあるだろうか。デスクが定期的な位置に置かれており、部屋のあちこちに大型の機器や椅子などが乱雑に置かれている。

このビルが健在のとき、オフィスとして使用していた場所だろう。電灯がついたり、辺りの機器に埃があまり積もっていない所を見ると、新井博士たちが物置かなにかに利用していた場所のようだ。

これだけ広ければ、あちこち動き回れるし、身を隠す場所もたくさんある。鬼ごっこに利用するにはもってこいの場所だろう。

石和は乱れた呼吸を必死に整えながら、インカムのスイッチを入れて、マイクに向かって話し掛ける。

「はあ、はあ……さ、佐々木。俺だ。き、聞こえるか……？」

『……石和くん？ 感度良好、よく聞こえる』

ここからでも電波は問題なし。連絡を取りながら、行動することに支障はないようだ。

「……どうだ、状況は？ はっ……エ、エレベーターの電源は確保

できそうか？」

『心配はいらない。新井さんと篠塚さんはここの非常用電源に独自の管理コンピュータを繋いで、それぞれの部屋を管理していたみたいだ。各部屋の電源は勿論、エレベーターの電源の切り替えもこちですべて操作出来る筈だよ』

佐々木の言葉に安堵の溜息を漏らす。これで操作できるコンピューターが別の場所に設置してあったら、手の打ちようがなかったところだ。

「そうか……じ、時間はどの位かかりそうなんだ……？ はあ、はあ……」

『およそ五分から十分！ それまでにはなんとか。急ピッチで作業を進める。すまない、それまでどうにか堪えてくれ！』

「はっ……了解だ。なるべく早めに頼む。こちらも多分、そんなには持たない……急いでくれ」

『わかった！ エレベーターの電源が入ったら、すぐ報告するから』！

短い会話を終えて、通信を切る。石和は呼吸を整えながら、ジャケットの裾で額からこぼれ落ちる汗を拭いた。

「はあ、はあ……十分か……少しきついかもしれないな」

佐々木の報告は希望を抱くには十分なモノだったが、それ以上に不安が大きい。あの怪物相手にあと十分も鬼ごっこを繰り返すことが出来るのだろうか。

正直、その自信はまったくない。EPS領域に囚われたら、一巻の終わりという綱渡りの状況をも十分も持続できるとは思えない。

「一か八か、やってみるか……」

先制攻撃を仕掛けてみよう。あれに敵うなんて、微塵も思っていない。だが、不意をつけば、一時的に無力化することぐらいは出来るかもしれない。少しでも自分に有利な状況を造っておかないと、時間を稼ぐのはかなり難しい。

とりあえず、武器だ。なにか、武器の代わりになるものがほしい。そう思った石和は周囲を見回した。部屋の脇に山と積まれた折り畳み式の椅子がある。石和はその一つを引っ張り出し、手に取った。椅子の脚の部分はステンレスのパイプで出来ている。これなら、鈍器として使用できるだろう。相手は規格外の怪物とはいえ、見た目はただの子供なので、こんなもので殴りつけるのは正直、かなり抵抗がある。

が、そんなことを言っている場合ではない。例え自分の倫理に触れようが、やらなければ、自分が死に、それは佐々木の死に繋がる。やるしかない。

と。その時だった。静寂に包まれていた空間に二つの甲高い雑音ノイズが石和の耳に入り込んできた。足音だ。それと同時に聞こえてくる、ごん、ごん、と何かがぶつかるような鈍い音。

石和がそつと、ドアの外を覗き込むと　その瞬間、黒い影が過ぎった。轟、と鈍い唸りを上げて石和の目の前すれすれを横切り、そのまま黒い影は突き当たりの壁に衝突した。壁が大きく陥没し、その衝撃で廊下側に付いている窓ガラスのいくつかに大きな亀裂が入った。



大きく目を見開きながら、壁にめり込んだ黒い影に目を向けると、そこには先程、石和に向けて投げつけてきた鉄の扉の残骸がそこにあった。反対側を見ると廊下の一番奥で少年が冷たい瞳でこちらを見据えていた。丁寧一度壁にめり込んだモノを丁寧にここまで持ってきたらしい。石和の身体中に冷たいモノが駆け抜け、氷のような汗が床に音を立てて、落ちた。

「躊躇してる場合じゃ……なさそうだな」

石和は小刻みに震える右手で、ジャケットの胸ポケットから、あるものを取り出した。

#### 4 「反撃と戦略」

20cm程の長さがある強化ガラスで出来た試験管だった。中にはどろりとした黒い液体が入っており、口は特殊なパテで密閉してある。口の中から伸びている捻れた紙は導火線代わりに埋め込んだものだ。中に火薬庫と着火剤を混ぜたモノが塗ってある。

先程、倉庫にて造り上げた即席の武器である。

上手く出来たかどうかは使ってみないと分からない。だが、予想通りの効果が現れれば、確実に子供達に一泡吹かすことが出来るだろう。

少しずつ近づいてくる足音に神経を集中させながら、石和は柱の陰に隠れた。この柱の影ならば、完全な死角となり、向こうからは見えないはずだ。

足音の大きさを、大体の目測を計り、石和はズボンのポケットに入っていたライターで、試験管の導火線に火をつける。

(十……九……八……)

かつん、かつん、と。響き渡る足音に合わせ、石和は頭の中でカウントを始めた。定期的な感覚で数を数え、数が少なくなる度に、足音が大きくなり、導火線がじじ……と音を立て、火花と共に短くなっていく。

(七……六……五……)

足音が間近まで迫る。二人の子供は確実にこの部屋に向かってきている。胸の鼓動が高鳴り、焦燥感が込み上げてくる。今すぐに試験管を投げつけたい衝動に駆られるがそれを必死に堪える。

まだ、早い。確かにこれは状況を打開する効果を内包している武器であるが、タイミングが合わなければ、何の効果を表すことなく終わるだろう。

(四……三……二……)

足音と共に石和の足下に影が差し込んできた。子供たちがこのオフィスに入り込んだのだ。

(いまだっ……！)

心の中で1のカウントを行うと、ほぼ同時に。石和は柱の影から飛び出した。オフィスの入り口に目を定め、その試験管を入り口に向けて、投げつけ、石和は目を強く瞑った。

瞬間　　光が走った。試験管の中から白い閃光が溢れだし、その光がオフィス中に広がった。

フラッシュ・バン  
閃光手榴弾。

石和が考え、子供たちに対抗するために簡易で造り上げた武器の名称がそれだ。試験管の中には粉末上のマグネシウムと着火材などをかき混ぜ、密封して入れてある。マグネシウムは火を与えると、化学反応を起こして、強烈な光を発する。

それを狭い領域で爆発させてやると、その威力は倍増し、閃光手榴弾ユ・バンとしての効力を発揮する。

『能力者』ネオ・チャイルドは目を使わなければ、EPS領域を展開できない。それを防ぐためには視界を遮断してやればいいのだが、電灯を消したり、煙で視界を防ぐのは諸刃の剣だ。

だが、閃光によって、目をくらませてやる事が出来れば、こちらには視界を封じられることなく、行動を起こす事が出来る。

石和の造った閃光手榴弾フラッシュ・バンはあくまでも簡易のもので、本物の閃光手榴弾シュ・バンの威力には遠く及ばない。

しかし、少年の目の前で広がった閃光は彼の目を眩ませるには十分な光量だった。強烈な光を直視して、少年が両手を目に当てて、悶える。

これで少年のEPS領域は完全に封じ込めた。今という瞬間が最大の好機チャンスだった。石和は両手で折りたたみ式の椅子を強く掴み、少年に向けて、駆け出した。

「う……ああああああっ！」

石和は大きな咆哮を上げる。走る勢いを利用して、椅子を大きく振りかぶり、少年の脳天めがけて振りかぶる。

状況が把握できない少年にこれを防ぐ術はない。がっつ！、と鈍い音が響き、石和の両腕に衝撃が駆け抜けた。

椅子が直撃したのは少年のこめかみと肩だった。本当は脳天を叩

き、一撃で昏倒させるつもりだったが、少年が激しく動いていたので、頭をかすめ、そのまま滑り落ち、肩に直撃してしまった。

少年はまだ倒れていない。石和は再び、椅子を持ち上げ、振りかぶった。力を込めて、少年の頭を向けて振り降ろす。

その瞬間　少年のこめかみから、赤い血がだらりと垂れ落ちてくる様が石和の目に入り込んできた。

それと同時に石和の脳裏に自分の子供である勝義の姿がフラッシュバックし、それが目の前にいる少年の姿と重なった。そこにためらいが生まれ、振りおろす両手に力が入り、身体がこわばった。

相手は人間ではない、『ネオ・チャイルド能力者』という怪物だ。それでも、自分の息子とほとんど変わらぬ子供を殴りつけるという行為に本能が拒絶したのだ。

「くっ……！」

狙いが大きく外れ、椅子は少年の背中に直撃していた。威力も一撃目ほど効果はなく、呻きながら、ふらついているが、致命打には至らない様だった。

自分の甘さに嫌気が差す。躊躇が、己の身を滅ぼすというのに。必死に沸き上がる罪悪感と嫌悪感を振り払いながら、椅子を振り上げ、みたび三度少年に叩きつけようとする。

が、しかし、『ネオ・チャイルド能力者』は三度目の好機を石和に与えてはくれなかった。

がくん、と。石和の両手に異様な重みがかかった。真後ろに引つ張られる様な感覚に捕らわれ、椅子が前に振り降ろせない。椅子だけでは足りない。石和の身体そのものが真後ろにくいぐいと引つ張られる。背後を振り返るが、なにもない。不可思議な力が石和の身体を捕らえていた。その力は段々と威力を増していき、立っているのが困難になる。

バランスを崩し、後ろに倒れ込みそうになるのを堪えるが、引つ張る力が強すぎて、どうにもならない。一度足を滑らせると、踏ん張りが効かなくなり、石和の身体が折り畳み式の椅子と共に宙を飛んでいた。石和はそのまま、オフィスの真横にある壁に叩きつけられた。

「ぐっ……あっ！」

だだんっ！、と、石和の身体が壁でバウンドする。背中に強烈な衝撃が駆け抜け、肺にある空気を根こそぎ搾り取られる。

激痛を堪えるため、歯を強く食いしばり、正面を睨み据えると、入り口付近でセミロングの少女がこちらの姿をとらえていることに、石和は気付いた。どうやら、閃光手榴弾フラッシュ・バンの直撃を受けたのは少年だけ、後ろにいた少女には効果が得られなかったようだ。

冷たい光を宿す双眸を細め、少女は眉間に力を込める。EPS領域を展開しているのだらう。石和の全身にじりじりと重量がかかり、四肢が鉛にでもなったかのように重く動かなくなつてゆく。

石和はその感覚に眉を顰めた。あの少女の能力は『グラビティ・オペレーション重力操作』だった筈だ。少年はまだ目に手を当て、ふらついていることから、EPS領域を展開出来ていないように思える。なのに何故、『念動力』

を使われたかのように、自分は壁に張り付いているのか。

「そ、そうか！ 方向の変換、か ！」

どんどん強まってゆく自分の身体の重さから、その能力の性質を石和は理解した。

『重力操作』は重量を自在に変換するだけでなく、重力の方向すらも変えることが可能らしい。

壁に叩きつけられたわけではない。あの少女は壁を重力の基点に定め、そこへ向けて自分の身体は落下したのだ。

「くっ……このっ！」

まずい。このままでは完全に身動きが取れなくなってしまう。石和は背中中の激痛を必死に堪えながら、ジャケットのポケットをまさぐり、発煙筒を取り出した。着火し、自分の周囲に煙を撒く。目の前が白く染まり、少女の姿が見えなくなると、石和は壁から、本来の重力がある床へうつ伏せに落下した。

「がつ！ く、そ……はあ、はあ……」

身体中のあちこちがじん、と痛む。両腕を抱えて、踞りたい衝動に駆られたが、そんなことをしている余裕はない。

身体に無理矢理鞭を打って、石和は起き上がった。腰を低くかかめ、煙と辺りに設置されているデスクに自分の姿を隠しながら、その場から離脱した。

入り口付近に置いてある、机や椅子、鉄パイプなどが一斉に浮き上がった。床から天井まで様々な機材がくるくると回転しながら渦巻き、宙を踊る。

どうやら、少年の目が回復したらしい。

宙に浮いている物体が縦横無尽蔵に飛び交う。四方の壁に叩きつけられ、凄まじい轟音と共に砕け散った機材の破片が至る場所で降り注ぐ。

その様は台風そのものだった。石和はうつ伏せになり、匍匐前進ほふくをしながら、奥にある柱の影に隠れ、瓦礫の台風を凌ぐ。

「はあ……はあ……はあ……」

柱を背にして、座り込み、乱れた呼吸を必死に整える。

試みは失敗だった。負傷を負わせることには成功したが、この能力の展開具合からいって、支障を与えるレベルにまで行かなかったようだ。少しの間でも意識を失ってくれれば、相手をする『能力者』ネオ・チャイルドが一人になり、負担が減ったのだが。あんな中途半端な攻撃では逆に怒りを煽っただけかもしれない。

石和はジャケットをまさぐり、中にあるものを確認する。発煙筒があるが、残りはあとひとつしか残っていなかった。内ポケットには手作りの閃光手榴弾フラッシュ・バンがひとつ。

このふたつだけで、残りの時間を稼がなければならぬ。わずかな時間でこれだけのことがあったのだ。この二つだけの武器で、逃げ切るのは不可能に近い。



「はあ、はあ……くそっ……他になにか方法はないか？ なにか……」

目に手のひらを当てて、考える。どうすれば、この窮地から脱することが出来るのか？

………いっそのことブレーカーを落として、電灯を消してしまうか。身動きが取れなくなるが、それは相手も同じの筈。時間を稼ぐには最適だし、ある程度安全も確保できる。

「いや……駄目か。やはりそれだけでは防ぎきれない」

石和はかぶりを振って、自分の案を却下した。ブレーカーは入り口付近にあり、現在子供達がいるのもそこだ。そこに辿り着くまで発煙筒と閃光手榴弾フラッシュ・バン、双方を使う必要がある。

こんな作戦ですべての武器をここで使用するのはいささか怖い。成功してもブレーカーを元に戻されれば終わりなのだ。電源を切った後、ブレーカーを破壊してしまえばいいのだが、そんな時間をあの子供達が与えてくれるとは思えない。

先程のようにもたつくことがあれば、どちらかの子供のEPS領域に囚われ、能力の餌食になるのがオチだ。危険すぎる。

しかし、他に道がないようにも思える。完全な手詰まり状態にあるのなら、一か八かでやるしかないのかもしれない。せめて、ブレーカー以外で電源を落とす方法があれば、また状況は変わってくるのだが

「っ！ そ、そうか！ その手があった！」

石和は小さな声で叫び、一人頷いた。ようやく閃いた。この方法なら、この状況を打開できるかもしれない。石和はインカムのスイッチを入れて、佐々木に通信を繋ぐ。

「佐々木！ 俺だ。聞こえるか？」

「石和くん？ すまない。もう少し頑張ってくれ。あとちょっとでエレベーターのシステム画面に」

石和は佐々木の言葉を強引に遮って、叫んだ。

「聞きたいことがあるんだ！ さっき、そこでは各部屋の電源の切り替えが出来るって言ったな。それは部屋についているブレーカーとは無関係に操作できるのか？」

「え……？ う、うん。こちらは電力の供給源だからね。こっちの電源をカットしてしまえば、ブレーカーのスイッチは使えなくなると思うけど……」

思った通りだ。これなら、なんとかなるかもしれない。そう思った石和は佐々木に自分の作戦を説明し始めた。

「いいか、佐々木。よく聞いてくれ。俺は現在Cブロックのオフィスにいます。俺が合図をしたら、オフィスとこの廊下の電源を一気に落としてくれ。それで『能力者』ネオ・チャイルド二人をオフィスの中に閉じこめる」

「『能力者』を？ で、でも大丈夫なのかい。さっきの実験室は特別な扉で造られていたけど、他は普通の扉だったと思う。閉じこめても、能力を行使されたら、すぐにできてしまふんじゃないあ……」

「大丈夫だ。さっきも言ったと思うが、『能力者』ネオ・チャイルドのEPS領域は視界を遮断することで防ぐことが出来る。ここはさっきの実験室と違い、パネルのランプやモニターの光もない。電灯を消してしまえ

ば、完全な闇になる。そうなれば、『能力者』ネオ・チャイルドは能力の使えないただの子供だ。外に出ることは出来なくなるはずだ」

そうすれば、この鬼ごっこも最後まで付き合わなくて済む。安全な状態でこの廃ビルから脱出することが出来るはずだ。

「急いで準備してくれ。俺はこの部屋から抜け出すために、強行突破を図る。上手くいけば、すぐ地上に出られるはずだ。頼んだぞ」  
『わ、わかった！　すぐ準備する！』

佐々木との通信を終えると、石和は手にある発煙筒のキャップをぐい、と捻った。キャップ部分を取り外し、いつでも着火出来るように準備しておく。石和は周囲を見回し、警戒態勢を取る。『能力者』イルドがどこから来ても、すぐ対処できる様に。

心臓の脈動が加速する。ここが正念場だ。発煙筒、フラッシュ・パン閃光手榴弾、最後の武器をすべて用いて、ここから離脱する。

この瓦礫の暴風雨が止んだタイミングを見計らって、発煙筒で視界を塞ぎ、その隙を見計らって、フラッシュ・パン閃光手榴弾を使い、目を眩ませる。その隙に外に出て、出口を塞ぎ、電源を落とす。それが石和の考えた作戦だ。

ただ、発煙筒によるかく乱はこの短時間で何度も使ってしまったので、警戒されているかもしれない。

しかし、よくよく考えてみると、『能力者』ネオ・チャイルドが発煙筒そのものを消すと言つ行為に一度も及んでないことに石和は気付いた。『能力者』イルドにとって、視界が遮られることは能力そのものを封じられることと同意だ。

にも関わらず、自分の付近にある煙を除けても、煙の元凶である発煙筒を一度も排除しようとしなかった。ここに入ってくる時も微塵も周りを警戒していなかった。

あえて放置しているのだろうか。それとも、煙そのものを止めるという行為に考えが及ばないのだろうか。後者だとすると、先程推測したとおり、頭の中身は見た目のまま子供なのかもしれない。もし、その推測が当たっているなら、突破できる可能性は高い。

だが、それはあまりにも都合のいい考えだった。

例え、思考が子供だったとしても。その『能力』の束縛から逃れることは極めて困難であることを石和は身を持って知ることになった。

突然、石和の隠れている柱に黒い影が差した。怪訝に思い、頭上を見上げる。

すると　そこに少女が、いた。

瓦礫の暴風雨が降り注ぐオフィスの中、少女が宙に浮いていた。石和の頭上の１メートルほど上に位置し、ガラスのような無機質な瞳が石和を見下ろしている。

「な……」

石和は大きく目を見開いて、擦れた声を上げた。迂闊だった。少女の能力は『重力操作グラビティ・オペレーション』なのだ。自らの身体の重力を操作し、宙からやってくることは充分考えられたはずなのに。そこまで考えが行

き届かず、床のみに意識を集中していた。

「くっ　　こ、このっ！」

石和が慌てて、距離を取り、手にある発煙筒に着火しようとするが、その前に。

『禍なるかな　バビロン　その諸々の神の像は碎けて地に伏したり』

少女が旧約聖書の一節を口にし　　その言葉を皮切りに石和と子供達の鬼ごっこは終わりを告げた。

## 5 「最後の策」

ぐんっ、と急激に右腕が上に引つ張られる感覚に囚われた。腕が天を刺すように真上にあがり、そのまま動かない。石和は歯がみしなから、手を降ろそうとするが、右腕はびくともしない。その引つ張られる力に逆らえず。発煙筒が手から離れ、宙に舞い上がる。そのまま発煙筒はぐんぐんと上昇し、4メートル近くある高さの天井へごんっ、と鈍い音をたてて張り付いた。

否。これは落下だ。

少女は石和の右腕と発煙筒の重力の方向を逆へ 真上に変換したらしい。しかも、Gによる負荷を右腕のみに集中している。右腕のみが上へ向けて落下しようとする働き、他の肉体部分は下へ向けて、重力が働いているという、本来ではあり得ない矛盾。石和は苦痛に顔を歪めた。上へ引つ張られる力が段々と強まり、身体が宙へ浮いてゆく。手足をばたつかせて、地上へ留まろうとするが、束縛された重力の力に逆らうことが出来ない。石和の身体はそのまま天井に向けて、勢いよく落下した。

天井に叩きつけられた瞬間、右腕にごきん、と鈍い音が鳴り響き、石和の視界が真っ赤に染まった。

「ぐっ！ が、ああああああ

っ！？」

絶叫する。とてつもない激痛が肩から電流の様に駆け抜ける。ど

うやら、天井に強打した衝撃で肩の骨が外れてしまったらしい。右腕がじんじん痺れて、まるで力が入らない。

痛みを堪えるため、左手で右肩を押さえつけたかったが、それすら少女は許さない。

右腕から全身へ。重力の方向の力が全身に浸透し、完全に天地が逆転する。そのまま全身にGの負荷が強まり、完全に天井に束縛された状態になった。

四肢を天井に貼り付けられ、まるでピンで身体を縫いつけられた昆虫の標本の様だ。少女は宙から床へふわりと舞い降り、人形のような無感動な顔で、天を仰ぎ、その様を見つめた。

そんな完全に身動きが取れない状態へ更に追い打ちがかかる。宙へ浮いた少年が石和の傍らにやってくる。周囲にあった机や機材が一拳に宙へ舞い上がった。少年が右手を開き、石和に向けて突き出すと、浮いた物体が石和の身体に向け、集まってゆく。開いた手のひらが小刻みに震わせながら、少しずつ閉じてゆく。かぎ爪状になったその指はまるで何かを握り潰そうとしているかの様にも見えた。

その少年の動作に連動して、石和の身体に宙に浮いた物体が次々と吸い付き、その姿を覆い隠してゆく。磁石の様にびつちりとくっついた鉄パイプや80kg以上はありそうなオフィス用デスク、プレス加工の板金で出来たロッカー、鉄パイプの椅子などがじりじりと圧力を強め、石和の身体を締め付ける。

この光景には見覚えがある。佐々木が少年に襲われたときに目の当たりにした、『瓦礫の叢虫』である。あの時と同じように、石和の身体を機材や机で潰そうとしている。

あの時はEPS領域を封じることにより、佐々木はこの『瓦礫の  
害虫』から抜け出すことが出来た。

しかし、今度はどうにもならない。この部屋には石和を助けにく  
れる人間など誰もいないのだから。圧力がぎりぎりとかわってゆき、  
やがてその力は石和の肉体の限界を超えていた。

ぐしゃり、と奇妙な感触が石和の右腕に走った。無数の鉄パイプ  
と椅子がひしゃげ、右腕に絡みつき、肉を、骨を押し潰していた。  
石和の腕があり得ない方向へ曲がる。

続いて、胸に密着したデスクが身体を圧迫し、石和の肋骨をへし  
折った。べきべきと音を立てて、折れた肋骨が内臓に突き刺さる。

「あつ……がつ、ああつ！ ぐつ……ごぼつ！？」

身体中の至る場所から、今まで味わったことのない激痛が石和を  
襲う。石和は擦れた悲鳴を上げながら、口から大量の血を零した。  
内臓を痛め、ひどく出血している様だ。

天井が凹み、石和の身体がめり込んでいく。相当頑丈に造ってあ  
るようだが、この圧力の掛かり方ではそのまま天井を突き破ってし  
まいそうだ。

絶体絶命だった。二人の『能力者』ネオ・チャイルドから同時にEPS領域を展開  
され、攻撃を受けている。発煙筒は手から離れ、煙で視界を遮断す  
ることはもう出来ない。これでどうやって反撃に転じればいいのか。

もう どうすることも出来ない。



恐怖と絶望が石和の精神をじくじくと浸食してゆく。

視界と意識が薄れ始める。思考することすら億劫になり、死への恐怖心が薄れてゆく。もうなにもかもどうでもいい。すべてを諦め、自分の人生の終焉を受け入れたくなる。

そうして、意識がブラックアウトしそうになる寸前　　不意に石和の脳裏にある光景が浮かび上がった。それは石和武士が最も大切に想う女性　　石和千恵子。彼女の笑顔だった。

「　　っ！」

次に浮かんでくるのは勝義とことみの笑顔。千恵子と石和の子供。それらはすべて石和の大切な宝物。石和の生き甲斐、だった。

このまま千恵子と、子供達ともう会えなくなる。幸せにすることが出来なくなる。そう考えた途端、死よりも怖い恐怖が石和の頭を電流のように駆けめぐった。

それで石和は覚醒した。

(……ま、まだだ。まだ手はある……あるはずだ！)

胸中でそう呟く。どんな絶望的な状況下でも諦めてなるものか。自分は絶対に生きて、千恵子の元に返る。そう誓ったのだから。石和はそう思いながら、目に強い光を宿し、思考を再開した。

左手で握りしめたモノの感触を確認する。

フラッシュ・パン  
閃光手榴弾。まだこれが残っている。これを子供達の間近で使えば、EPS領域を消去することが出来るはずだ。しかし、その為には子供達の至近距離にまで飛び込まなくてはならない。この身体が束縛された状態でそんなことが可能なのだろうか。

痛みと瓦礫に密着する感覚に気を失いかけながらも、石和はその方法を思いついた。危険きわまりない、一歩間違えれば確実に死ぬ方法だ。

だが、もうそんなことを言っている場合ではない。このままでは確実な死が待ち受けているのだ。どのみち死ぬのならば一か八かの賭に出るべきだ。

『……さわくん……石和くん！ どうしたんだい！ 応答してくれ！ 石和くん！』

耳元で聞こえる佐々木の声。先程から、何度もこちらにコールしていたのは気付いていた。右手はすでに使い物にならないが、幸い、左腕は無事だった。鉛のように重い左手を強引に持ち上げ、ぎこちない動きでインカムのスイッチを入れる。

「はあ……はあ……げ、げほっ！ さ、佐々木。俺だ……」

『石和くんっ？ い、いったいなにが つ！ ま、待って、今すぐその電源を切るから！ 準備はもう出来ているんだ！』

石和のかすれた声と瓦礫が軋む音に状況を察した様だ。把握が早いのはこの状況下ではありがたい。しかし、電源を切るだけではダメだ。この状況を打開するためには、先ほど考えた手ではもう通用しないのだ。

「さ、佐々木。さっきの案は忘れてくれ……はあ、はあ……か、代わりに俺が合図したら一秒だけこの部屋の……で、電源を……としてく……れ……」

『い、一秒？』

「ああ、詳しいことを話している時間は……ない。たっ、頼む……が、げほっ……ごほっ！」

『わ、分かった！』

通信を終えると、石和は左手で握りしめていた閃光手榴弾フラッシュ・バンを口に持っていていき、導火線が下になるようにして、口にくわえた。そして、手を胸ポケットにつっこみ、ライターを取り出す。せき込みたい衝動に駆られるが、それを必死で押さえ、ライターに火をつけ、導火線をあぶった。

火花が瞬き、ばちばちと音を立てて、導火線が少しづつ短くなつてゆく。

瓦礫の締め付けはきつくなる一方で、あとわずかな時間で、石和の身体は四散し、原型をとどめないミンチになってしまうことだろう。視界が暗澹とし、意識が飛びそうになる。

強く唇をかみしめることで、石和はその意識を保つ。そして、導火線が短くなってきたところを見計らい、石和は左手に試験管を持ち変えて叫んだ。

「いまだっ……！」

『っ！』

その合図と同時に。オフィスの電灯が一気に消え失せた。部屋が真っ暗になり、その次の瞬間、石和の肉体を束縛していた感覚がな

くなくなった。

視界が遮断され、EPS領域が消失したのだ。EPS領域から開放された瓦礫は何の働きも成さない、ただの物体だ。がらがらと音を立てて、石和の身体に張り付いていた機材やデスクが離れ、従来の重力の法則に従い、地面に向けて落下してゆく。石和は最後の力を振り絞り、落下が始まる前に天井を蹴り上げ、真横に飛んでいた。

一秒が過ぎ去り、再び電灯が灯る。視界が回復すると床でセミロングの少女が呆然と天井を見上げている。

『念動力』の力を用いて、浮遊していた少年はEPS領域という名の翼をもがれ、少女の傍らに落下しつつあった。

上から襲い来るのは大量の瓦礫。重量のある無数のデスクが少女に向けて落ちてくる。それに気付いた少女が目細めて、EPS領域を展開しようとする。

その瞬間を狙って。石和は落下した状態のまま、試験管を彼らに向けて、思い切り投げつけた。

少年と少女の中間の位置で閃光手榴弾が炸裂する。

マグネシウムが化学反応を起こし、試験管から強烈な閃光が溢れだした。不意を突かれ、光の直撃を浴びた少年少女の目は完全に眩んだ。

子供たちはEPS領域を展開することが出来ない。目の前の脅威よけることも、能力を発動させて、それを防ぐことも叶わない。

石和が天井から床へ落下し、地面に身体が叩きつけられるのほぼ同時に。

轟音を立てて、瓦礫が二人の身体に降り注いだ。

重量のある無数のデスクの下敷きになり、ぐしゃり、と少女の身体が押しつぶされる音を石和は聞いた。瓦礫の下から鮮血が迸る。

石和は顔を歪め、思わず目を背けた。天井から地面の間は4mにも満たない高さだが、重量が80kg以上もある業務用デスクが落下すれば、地面に辿り着く衝撃は幾倍にも膨れ上がる。

他の瓦礫や機材も一斉に落下するので衝突時の衝撃は相当なものだ。子供の肉体ではこれに到底耐えられない筈である。

天井に張り付いた瓦礫を利用して、EPS領域を無力化した子供達を押しつぶす。これが石和がとっさに考えた策であった。

1秒間だけ電灯を消したのはみつつ理由がある。

- 一つは暗闇にすることによって、EPS領域を無力化すること。
- 二つは視界を確保し、瓦礫と共に落下することを防ぐこと。
- 三つは『ネオ・チャイルド能力者』に二重のかく乱をかけること。

一つめは当然、天井に張り付いた石和の身体を開放させるための手段だ。そして、無力化した瓦礫を子供達に向けて落下させるためでもある。

二つめは視界を遮断したままでは石和自身がどうなるか分からないため、どうしても視界を確保する必要があった。だから、わずか

一秒という時間に暗闇を限定したのである。ただ、視界が回復したとき、再びEPS領域を造られたら、瓦礫で子供達を押しつぶすという石和の目論見が防がれる可能性がある。

そこで取った手段が三つめのかく乱である。残った閃光手榴弾フラッシュ・バンを使い、子供達の目を眩ませ、完全にEPS領域を封じ込める。そうすれば、子供達に落下する瓦礫を防ぐ手段はない。重量のある机や機材に埋もれ、子供達を一網打尽に出来るという訳だ。

そして、その作戦は成功した。あの有様では子供たちは致命的な大怪我……いや、下手をすれば死んでいる可能性がある。どちらにしろ、子供たちは行動不能な状態に陥ってる筈だ。石和はそれを確信した。

もし、天井ではなく地面で同じ事を行われていたら、突破口は見出せなかっただろう。

子供たちが瓦礫の下敷きになることに警戒心を抱いていなかったところを見ると、やはり精神面は見た目通りの子供だったのかもしれない。

とっさに思いついたその作戦は、残酷きわまりないものだった。だが、こうしなければ石和自身が死んでいたのだ。仕方のないことであるし、誰もそれで石和を攻めることはないだろう。

しかし、それでも。生まれて初めて、ヒトを傷つけてしまった。しかも自分の持つ子供と変わらぬ、少年少女を。その事実が嫌悪感と罪悪感を生み、石和の頭の中を駆けずり巡った。自らの行為に恐怖する。石和は歯がみしながら、身体を小刻みに震わせた。

だが、状況は石和を罪悪感に浸りきることを許さなかった。事態は次の状況に移っていたからだ。

少女が潰れた瓦礫の中から 突如、光が走った。

無論、それは石和が投げつけた閃光手榴弾フラッシュ・バンのモノではない。それよりももっと強烈で、異質で、石和に害悪を及ぼす要素を内包した、そんな光、だった。

光が広がってゆく。その光は石和の視界をすべて包み込み、身体をも飲み込み、広大なオフィスすべてに浸透する。

そして、炸裂した。

強烈な振動と衝撃波が少女がいた場所から伝播して広がり、部屋中の窓ガラスが粉々に砕け散り、廊下に飛び散った。

何が起こったのか。訳が分からないまま石和は絶叫し、その声は凄まじい轟音の中に飲み込まれていった。

## 6 「死の否定」

ズズン……！、という音が響き渡り、大地がぐらぐらと揺れる。発電施設の中で佐々木勇二郎は大きく目を見開いて周囲を見回した。一体何が起こったのだろうか。

ここではない、部屋の外からの振動だ。しかも、かなり大規模なモノだったように佐々木には感じられた。インカムのスイッチを入れて、マイクに向かって叫ぶ。

「石和くんっ、どうしたんだ！ 感度があつたら、応答してくれっ！ 石和くんっ！」

佐々木の懇願もむなしく、石和の返事は返ってこない。イヤホンからは雑音ノイズが流れ、他には何も聞こえない。完全に通信が途切れてしまっていた。

「石和くん……くっ……！ どうしてっ！」

歯がみして、両拳でコンソールを叩く。間違いなく、あの振動に石和は関わっている。それは確かだ。そして、通信に出られなくなるような状況下に陥っているのだ。

先程の通信では声に覇気がなく、通信を取るのがやっとといった様子だった。説明してくる余裕すらなかった所を見ると、『ネオ・チャイルド能力者』の襲撃を受けている真っ最中だったのだろう。先程の合図もどうい



う意図があるのか分からなかったが、石和の思惑は上手くいったのだろうか。いずれにしろ、通信が途絶えた所を見ると、石和の身に何かあったのは間違いないだろう。

不意にモニター越しに見た、血まみれで倒れている昌美の姿が石和と入れ替わり、それが鮮明なイメージとなって、佐々木に脳裏に浮かび上がった。

「　　っ！」

最悪の予想だった。慌てて頭を左右に振って、そのイメージを振り払った。そんなはずはない。石和は佐々木に約束したのだ。

『自分は死なない、絶対に』、と。

どんな状況下であろうと、必ず石和は生きている。佐々木はそう信じている。少なくとも、この目で確かめるまではもしもの可能性などは一片も考えてはいけないのだ。

佐々木はすぐさま石和の元へ駆けつけたい欲求を抑え、発電施設を管理するコンソールに手を伸ばし、パネルを叩き始めた。

石和の元へ向かうのは後だ。佐々木に課せられた任務はエレベーターの外部電源を回復させ、外への脱出口を造ることだ。今、ここを離れてしまえば、元に戻ってくることは困難となるだろう。だから、佐々木は何が起こったとしても、自分の責務を終えるまで、ここを動くわけにはいかないのだ。

ここの管制プログラムは篠塚が組んだものだろうか。分かりやすい手順でプログラムの進行を説明してくれる。昌美が使用すること

も考慮に入れていたのかもしれない。

モニターに表示される手順に従って、佐々木はプログラムを切り替えのウィンドウが表示される段階にまで持ってゆく。

「あつた……これだ……」

佐々木が一人頷きながら、呟く。モニターのウィンドウには搬入用エレベーター、通常エレベーター、非常口のシャッターの三つの図が表示されており、図の下には通常電源と携帯による操作の二種類の切り替えボタンがあつた。

これを切り替えて、更新ボタンを押せば、電源は復旧し、エレベーターが使用できるはずだ。佐々木はすぐさま、搬入用エレベーターの欄にカーソルを合わせ、電源の切り替えボタンを押した。

と。

「な  
」

佐々木は大きく目を見開いた。急にエレベーターと搬入用エレベーターの欄に赤い×印が現れ、ボタンが反応しなくなった。切り替えて、実行ボタンを押してもエラーのアラームが鳴り、プログラムが実行されない。図の上には『OFF LINE』という字がちかちかと点灯している。

「オフライン!? そんな馬鹿な! 今まで繋がっていたのに、どうして!」

一度プログラムを終了し、再起動をかけたが、結果は同じ。『O

FF LINE』の表示は消えない。

「どづいう……ことなんだろう？」

つい今し方まで繋がっていたのに、突然切れるのは不自然すぎる。さっきの振動の影響でケーブルが断線したのだろうか。いや、他の電源はまだ生きている。エレベーターと搬入用エレベーターだけが突然使用できなくなるのはおかしい。

それとも『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>の仕業だろうか。そう考えれば納得はいくが、非常口のシャッターの電源は生きている。わざわざ逃げ口を一つだけ用意するのに何の意味があるのだろうか。

色々考えを巡らせてみるが、どれも明確な理由は思い浮かばない。

どちらにしろ、非常口の電源は生きている。これを復旧させれば、外に出られることは間違いないのだ。原因を探っている時間はないし、ここは非常口を開放し、脱出を図ることにしよう。そう思った佐々木は非常口の電源を切り替え、シャッターの開閉ボタンを押した。ドアを開けて、耳を澄ますと、どこからか、がらがらと何かの音が継続して聞こえてくる。シャッターが開いた音に間違いないだろう。

これで、退路は確保できた。あとは脱出するだけである。ここから非常口は近い。走って駆け抜ければ、すぐさまこの廃ビルの地獄から抜け出すことが出来るだろう。

だが、抜け出すのはまだ早い。やるべき事がまだ残っている。佐々木は部屋の中を見回し、『あるモノ』を掴み、両手に抱えると、発電施設を後にして、駆けだした。

通信が繋がらないのなら、仕方がない。直接、石和の元へ赴き、そのことを伝えるしかない。『ネオ・チャイルド能力者』の脅威に怯え、このまま廃ビルから一人離脱するような考えは佐々木には一片も浮かばなかった。

新井博士を失い、川上には裏切られ、佐々木の大事な親友はもう石和しか残っていない。これ以上大事なヒトを失うことは死よりも恐ろしいことに思えた。だから、どんなに怖くても躊躇するわけにはいかない。石和を助けるのだ。

向かう先はCブロックのオフィスルーム。石和の通信が途切れた場所である。

石和は必ず生きている。無事である。強く強くそう信じて。佐々木は全速力で廊下を駆け抜けていった。

## 7 「戦慄と絶望」

「う……」

かすれたうめき声を上げて。床へうつ伏せに倒れていた石和武士はゆっくりと目を開いた。辺り一面が白く染まっていた。広大なオフィスの中、真っ白な煙がもうもと舞っている。石和が投げた発煙筒の煙ではない。先ほど石和が投げた発煙筒一つでは100平方メートル以上はあろう、このオフィスを白く染め上げることなど出来はしない。

奥の方では赤く瞬く炎があちこちでデスクなどの機材を焦がし、異臭を放っている。奥にあったあらゆる物体が何の意味も成さないただの瓦礫になり果て、辺り一面に飛び散っている。

まるで地獄の様な光景だった。石和は大きく目を見開きながら、呆然とした声を上げた。

「一体……なにが……？」

左腕に力を込めて立ち上がろうとする。が、その瞬間、身体中に凄まじい痛みが駆け抜け、再び転倒した。

「がっ……！ は、ぐう……っ！」

悲鳴を上げて悶える。右腕はまったく動かなかった。肩の骨が外れ、さらに上腕部分の骨がぼっきりと折れている。これでは動かす

ことすらままならない。脇腹は絶え間なく激痛を訴え続け、身体に力を込めることが出来ない。ジャケットとワイシャツが半分以上破れ、剥き出しになった肌の至る場所に擦り傷と青紫色状の痣が出来ている。

額から血が流れ、口から溢れ出た血と混じり合い、床へぼたぼたとこぼれ落ちた。

満身創痍だった。生まれてこの方、ここまで深い傷を負ったことはなかった。瀕死に窮している自分に現実感が感じられず、この状況を他人事のように感じてしまう。

石和は壁にしがみつき、身体を寄りかからせながら、身体を起こす。激痛を必死で堪え、足に全力で力を込めることによって、ようやく立ち上がることが出来た。

「はあ……はあ……はあ……」

大きく息を乱しながら、周囲を見回す。一体なにが起こったのだろうか。瓦礫の下敷きになった少女から強い光が零れ、それが大爆発を起こして、その衝撃波で石和の身体は入り口付近まで吹き飛ばされた。それは石和にも分かる。

しかし、何故そのようなことになったのか。それが分からない。

これも『ネオ・チャイルド能力者』が能力で起こした現象なのだろうか。しかし、既に子供たちは瓦礫の下敷きになり、潰れている。万が一、無事であったとしても、瓦礫に埋まった状態では視界の確保もままならないので、EPS領域も展開出来ないはずだ。

それにあの『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>の能力は『念動力』と『重力操作』<sup>重力ヒュー・オペレーション</sup>の筈だ。この状態は今まで二人が展開してきた『能力』とは全く別のモノに思えるのだ。

「……………」

石和はこの不可解な状況を解明するため、子供達が下敷きになった瓦礫の元へ寄ろうとした。

が、すぐさま踏み留まる。こうなった原因が分からない以上、下手に近づくのは危険だ。迂闊なことはしないほうがいいだろう。

それよりも、早くこの場から脱出しなければならぬ。傷の手当てもはやくしなければ、下手をすれば命に関わるかもしれない。一刻も早く佐々木と合流して、この廃ビルから抜け出すべきだ。

そう判断した石和はインカムのスイッチを入れて、佐々木に話し掛ける。しかし、大きな雑音<sup>ノイズ</sup>を発するばかりで、まったく繋がる様子がなかった。どうやら爆発の衝撃で壊れてしまったらしい。石和はインカムを頭からむしり取ると、無造作にその辺に放り投げ、入り口に向けて歩き始めた。

「はあ、はあ、はあ……………」

平衡感覚が揺らぎ、崩れ落ちそうになる。ただ立っているだけなのにそれがひどく億劫なことに感じられる。石和は壁に寄りかかり、体重を預け、左肩を擦るようにして、前へ前へと進んでゆく。

佐々木はどうしているだろうか。先程通信したときの話だと、あと少してエレベーターの電源は確保できるとの事だった。ひよっと

すると、もう脱出できる準備が整ってるのかもしれない。

ここまで来たら、あと少しだ。廃ビルを出ることが出来たら、自分と佐々木は助かる。命が残っていれば、千恵子に会える。子供達に会える。早く会いたい。

そんな想いが石和の胸の中にわき上がり、満身創痍の身体に最後の気力が注がれる。歩みは遅いが、一步一步確実に前へ進み、石和はオフィスの入り口をくぐり抜け、搬入用エレベーターに向かって歩き始めた。

と。

刹那、石和の背後から轟音が鳴り響いた。今度は爆発音ではない、何かが軋み、吹き飛んだような音だった。

不吉な予感が石和の背中を駆け抜け、全身が泡立った。胸の脈動がどくどくと音を立て、石和の額から大量の冷や汗が溢れ出し、床にこぼれ落ちた。

おそろおそろとした挙動で、背後へと振り返ろうとする。

その瞬間

背中に衝撃が走った。

「がっ………！」

がんつ、と鈍い音が響き渡り、石和の身体が廊下へとはじけ飛び、壁に頭が衝突した。背中に痛みが走る。額の傷口が広がり、出血が増す。双方の激痛を堪え、傍らに目を向けると、ぐにやぐにやしやげたパイプ椅子の残骸が、床に転がっていた。どうやら、石和はこれに直撃したらしい。

不吉な予感止まらない。むしろ増大する一方で、心臓が張り裂



けそうな位大きな脈動を繰り返し、身の危険を訴えている。

オフィスの中に浮かぶ、その光景。その姿。

石和がその姿を確認した、瞬間　　心は絶望に囚われ、すべての希望が無惨に砕け散った。

少年がそこにいた。周囲にある瓦礫を『念動力』で浮かべ。冷たい氷の様な瞳と微塵も感情が見えない人形のような顔を石和に向け。幽鬼の様に立ちつくしていた。

「な……………」

石和は大きく目を見開いて、少年の姿を見据えた。彼の全身は見るも無惨な容姿に変貌していた。少年が身に纏っていた革の衣はほとんどもが千切れてなくなり、裸体に近い状態だった。残った部分も焼けこげ、炭化している。

右腕が石和と同様、負傷していた。石和と異なる点は折れているのではなく、千切れかけていた。腕の皮一枚でかろうじて繋がりが、ぶらぶらと振り子のように左右に揺れ、今にも二つに分離しそうだ。顔の左半分は皮膚と肉がそげ落ち、眼球が剥き出しになっている。腹の一部は抉れ、あばら骨が剥き出しになり、腸の一部が外へはみ出していた。

石和の身体が軽傷に見えるほどひどい有様だった。

瓦礫の下敷きになったことと、爆発の衝撃の直撃を受けたこと。この双方が、少年の身体をここまで傷つけたのだらう。この状態からして、少年の命はもう長くないに違いない。

あまりのおぞましさに石和は吐き気を催し、目を背けたくなったが、少年の身体にある違和感を感じて、そこへ釘付けになった。

石和が目が付いたのは少年の腹部だった。肋骨や腸の臓器が一部露出しているその中になにか異物の様なモノが見えた。

黒い角張った箱の様なモノだった。それが血に塗れて腹の中に埋まっている。人工臓器ビースマイカーの類には見えない、明らかに不自然な物体だ。しかも、それは腹の中に埋め込まれていると言うより、臓器と共に一体化し、溶けこんでいる様な　　そんな印象を受ける。

黒い箱は明らかに不自然な存在なのに、臓器と自然に融合している、そんな違和感。

なんなのだろうか。アレは。

石和がその違和感に訝しんでいると、ふと、先程、実験室で『瞬レポート・ゲート間物質転送装置・改』が強制侵入され、少年が転送されてきたとき、佐々木が叫んでいた言葉が脳裏に蘇った。

『石和くん、送信機が受信機に勝手に切り替わっている！　モードも原子分解から量子分解に変更されている！　どこかにシステムが乗っ取られているんだ！　い、いや、違う。原子分解と量子分解のモードが同時に展開しているんだ。な、なんだ、これは……プロگرامが書き換えられている！？』

そして、次に浮かんだのは今し方起こった爆発。あの爆発は少女が瓦礫の山に押しつぶされた瞬間、起こった。まるで狙いすました

かのようなタイミングで。

原子分解と量子分解のモードが同時に展開して転送されてきた『  
ネオ・チャイルド  
能力者』。

瓦礫に潰された少女から起こった爆発。  
腹の中にある黒い箱。

三つの事実が石和の頭の中で纏まり、ある推測が口から零れ出た。

「ま、まさか……転送時に瞬間物質転送装置で、テレポルト・ゲート『爆弾』と子供の  
身体を融合　　したのか……？」

その考えはあまりにも非人道的なモノで、推測した自分を嫌悪し  
たくなるほどのモノだった。

しかし、瓦礫に潰された拍子に体内に融合された爆弾が作動した  
と考えれば、先程の爆発も納得がいく。本来なら肉体と物質の融合  
は拒絶反応が発生し、相互が受け入れないが、『あの戸木原』なら  
そういった処置を施すことも可能なことのように思えた。

最初からこの子供達を使い捨てにするつもりだったのかもしれない。  
いざとなったら子供達と共に石和達を道連れにすることを考慮  
して、そんな仕掛けを施していたのではないだろうか。

年端もいかない子供達の脳をいじくり、自らの指示に従わせ、爆  
弾を身体に埋め込み、標的もろとも自爆させる。

残虐きわまりない所業。戸木原はそれを顔色一つ変えず、笑顔す  
ら浮かべて、子供たちにこの仕掛けを施したに違いない。一度分解  
して融合を行ったモノは永遠に取り除くことが出来ないのを承知で。

石和は戸木原の狂気に改めて戦慄した。そして、その行いによって、自らが追い込まれたことを知り、絶望に身を震わせた。

爆弾の発動条件がなんであるのか。それはわからない。少年の生体活動が静止するのが条件なのか。それとも、何かの拍子で爆発するのか。石和達を確実に留めを刺すための手段だとしたら、戸木原はその両方を選ぶかもしれない。

どちらに転んでも、石和の命は確実に果てることだろう。

石和は小刻みに震える左手で窓の窪みを掴み、身体を壁に擦らせながら、必死に立ち上がる。

早く逃げなければ。確実に石和は殺される。

もう発煙筒も閃光手榴弾フラッシュ・バンもない。ここから切り抜ける策も尽きた。万が一あったとしてもろくに身体を動かせない現状ではそれを実行することは到底不可能だろう。

だから、逃げる。全力でこの場から離れる。もはや、石和にはそれしか道が残されていないかった。

足に力を込め、壁に寄りかかりながら、一歩、一歩と足を踏みだし、少年から距離を取ろうと、足掻く、足掻く、足掻く。

しかし、その進行速度は亀よりも遅い。対して少年は瀕死の身体であるにも関わらず、しっかりとした足取りで、石和に近づき、距離を縮めていく。普通なら激痛でショック死しているほどの傷の筈だ。痛みを全く感じないのか。肉体が強化されているのか。とても瀕死の人間の足取りには見えない。

石和はこれを振り切ることが出来なかった。

二人の距離が二メートル間に縮まった瞬間、少年のEPS領域が発動した。石和は束縛された。

蹂躪が始まる。

石和の左足に違和感が走った。足が何か引つ張られるような感覚。その力が強まり、石和の足が本来あり得ない方向へと捻れた。ぼきっ、と奇妙な音が響き渡り、そこから激痛が駆け抜け、口から悲鳴が漏れ出た。足の骨が折れたのだ。

「ぐ、あ……がつ……ぎいっ……っ！」

気を失いそうな程の激痛。左足の機能を失った石和はバランスを崩し、地面に転倒した。これではもう、立つことすら出来ない。翼をもがれた鳥も同然である。

少年は石和に激痛に悶える暇すら与えない。足を『念動力』で掴まれ、そのまま宙へぶら下げられる。逆さまになった石和の身体が左右に揺れた。

壁に叩きつけられ、窓ガラスの枠に残ったガラスの破片が身体に至る所に突き刺さる。

もう、何処が痛いかも分からない。意識が混濁し、朦朧としかけたところで、床に身体を叩きつけられ、無理矢理意識を覚醒させられた。

「はあ……はあ……はあ……」

なぶり殺しである。先程から少年は致命的な一撃を与えてこない。じわじわと痛めつける形で、石和に攻撃を仕掛けてくる。

少女が死んだ怒りをぶつけ、なぶり殺しをしようとしているのか。それとも元々そう言う命令を受けていたのか。それは石和にも分からない。

しかし、それももう終わりだった。

ぐんつ、と石和の上半身が反りあがった。そのままぎりぎりと音を立てて、身体が真後ろに折れ曲がってゆく。

それと同時に首が見えない力に捕らえられ、双方のその力がじりじりと強まってゆく。

「が……はっ！」

石和は背中に走る痛みと呼吸の出来ない苦しさに声にならない悲鳴を上げた。首と背骨を同時にへし折り、息の根を止めるつもりらしい。

左手と右足をばたつかせて、もがくが、そんなことではEPS領域から逃れることは出来ない。容赦なく少年は石和の身体を束縛し、息の根を止めようとする、

石和の視界がちかちかと点滅し、意識が薄れてゆく。

生きていたい。こんなところで死にたくない。生を渴望する気持

ちが石和の胸に沸き上がるが、想いだけでは状況は改善出来ない。

死神は石和の魂を刈り取るうと、鎌の刃を首筋目掛け、大きく振りかぶろうとしていた。

(……ち……え、こ……すまな……い……)

石和はもうどうにもならないことを悟り、身体力を抜いた。頭の中に最愛の女性の無邪気な笑顔が浮かび上がり、泡となって消えた。

彼女との約束を守れなかった。誓いを果たせなかった。それが石和には悔しい。千恵子は泣くだろうか。絶望に身を委ね、不幸にならないだろうか。自分が死んだ後でも、千恵子なりの幸せを見つけ、どうか、天寿を全うしてほしい。

子供たちと共に                      幸せになってほしい。

石和は消えゆく意識の中で。そんなことを想い、願った。

## 8 「諦めない」

「う

あああああああああつ！！」

と。その時、突然、誰かの叫び声が石和の鼓膜を震わせた。石和が正面をみると、誰かがこちらに向けて、一直線に突進してくる。ぼやけた焦点が定まり、その姿を捕らえ、認識する。

「さ……さ、き？」

見間違いではない。確かに佐々木勇二郎だった。左手にはなにか赤い大きな缶の様なものを抱え、そこから伸びた太いコードのようなものを右手で握りしめている。

消火器だった。佐々木は走る速度を全くゆるめず、噴射口を少年に向けて、レバーをぐつと握りしめた。

勢いよく噴射口から消火剤が吐き出され、辺り一面が白い煙で染まった。佐々木は先程石和の言った「ネオ・チャイルド能力者」の弱点を覚えていたようだ。視界を遮れば、能力は使えない。

電源を落とす以外で、なにか視界を塞ぐ方法は何かないか、と模索した結果、何処かにあった消化器を利用することを思いついたのだらう。



本来ならEPS領域外から来るものはすべて遮断できる能力を少年は持っているのだが、このときばかりは完全に彼の不意を突いていた。

少年が意識をして遮断する前に消化剤がEPS領域内に入り込み、少年の目に降りかかった。異物が眼球に入った痛みに少年が自分の両目を押さえた。

目が塞がれば、EPS領域展開できない。石和を束縛していた力が消え去り、身体がどさりと音を立てて、床に崩れ落ちた。

佐々木の突進は止まらない。少年の間近まで来ると、消火器をそのまま両手で抱え、大きく振りかぶった。

ごんっ、と鈍い音を立てて、消火器が少年の頭に直撃する。容赦のない、破れかぶれな一撃だった。少年の頭が傷が更に大きくなり、流れる血の量が増した。そのままバランスを崩し。どさり、と音を立てて。少年は床に崩れ落ちた。

「はあっ、はあっ、はあっ！」

佐々木は胸元に手を置き、呼吸を必死に整えている。顔は汗でびっしょりと濡れている。ここまで全力疾走をしてきたらしい。

「だ、大丈夫かい、石和くん……はあ、はあ」

そう聞いてくる佐々木に石和は呆然とした。まさか、佐々木がここへやってくるとは思わなかったのだ。

「さ、佐々木？ どうして……ここに？」

「はあ……ど、どうしてって、決まってるじゃないか。迎えに来たんだよ……はっ……脱出口は確保できた。は、早くこの廢ビルから脱出しよう！」

言いながら、佐々木は石和の身体に触れ、抱きかかえようとした。その瞬間、石和の身体に激痛が走り、身体が跳ねた。

「ぐ、ううっ……！」

石和が眉根を寄せて呻く。佐々木は慌てて手を引っ込め、手を離した。

「ごっ……ご、ごめん！ ヒドイ……右腕が滅茶苦茶だ。左腕の方は無事かな。持ち上げるよ。痛いかもしれないけど、我慢して。はあ、はあ……しっかり捕まってくれよ……よいしょっと！」

そう言って、左肩を抱え上げ、石和の身体を持ち上げた。石和の身体に至る所から血がだらだらと流れだし、佐々木のスーツが真っ赤に染まる。佐々木はそれを特に気にした様子もなく、苦笑した。

「はあ……は、ははは、研究漬けの毎日で、どうも運動不足だったみたいだね。ヒト一人抱えるのがこんなに大変だなんて、んっ……思わなかったよ」

佐々木はそんな軽口を叩きつつ、歩き始めた。

「急ごう。ここを出たら救急車を呼ぶから……そ、それまでは辛いだろうけど、なんとか堪えてほしい」

石和を励ましながら、佐々木は進む。先程の石和の歩みよりは早

いが、やはり、その進行速度は遅い。成人男性一人を抱えているのだ。石和は身体を全く身体を動かさないし、全体重がかかる佐々木に負担が掛かり、歩みが遅くなるのは無理もない。

石和が後ろを振り向くと、うつ伏せに倒れた少年の左腕がかすかに動いているのが見えた。まだ少年は生きている。意識を持っている。左手を床に付いて身体を持ち上げ、よろめきながらも立ち上がった。血まみれの顔を讚えて。彼の剥き出しの眼球が石和と佐々木を捕らえた。

EPS領域が展開する。周囲にあった瓦礫が宙に舞い、少年の周りをくるくると回り始める。右目を細めると、同時に少年は瓦礫の一部を石和達に向けて、飛び出してゆく。

先端が鋭利に尖ったガラスの破片だった。無数の破片が一直線に飛び交い、佐々木の背中に音もなく、突き刺さった。

「ぐ……あつ！」

顔を苦悶の表情に歪めて、佐々木は呻き声を上げた。佐々木はわずかに身体のふらつかせ、バランスを崩れかけたが、かろうじて踏み留まった。

「さ……さきつ！」

石和が擦れた声で叫ぶ。佐々木は石和の方へ向き、苦悶に満ちた表情を無理矢理笑みの形にして、強がり口にした。

「だ、大丈夫。これ……くらい！ 全然平気だから……っ！」

平気な筈はなかった。ガラスが刺さった箇所から紅い染みが滲みじわじわとスーツが血に染まっていく。それでも足の速度は弛めずに佐々木は石和を抱えたまま、出口に向けて歩いてゆく。

「……………」

駄目だ。間に合わない。石和は齒がみしながら、そう思った。

この進行速度では確実に少年に追いつかれる。そして、追いつかれたら今度こそ終わりだ。石和だけではない、今度は佐々木も少年の能力の餌食となり、二人とも助からないだろう。石和は声を振り絞り、擦れた声で佐々木に告げた。

「ささき……………お、俺を置いていけ。このままじゃアイツに……………お、追いつかれる……………ごほっ……………」

佐々木は答えない。息を乱しながら、石和の身体を支え、足を引きずるように前へ進める。

「ど、どのみち俺はもう……………だ、駄目だ。二人とも死ぬことはない。俺を置いて……………に、逃げる。お前一人なら……………がはっ……………な、なんとか抜け出せる……………はず、だ」

「……………れ」

「ここを……………で、たら、あのディスクを……………公表してくれ。そうすれば……………戸木原は……………戸木原の……………目論見は……………」

「……………まれ」

佐々木は足を止めない。腕を弛めることもなく。後ろを振り向くこともなく。石和を支えたまま、エレベーターに向けて、必死に歩

みを抜けようとしている。

少年が闊歩する。少年と石和達の距離はごくわずかな差ししか開いていない。このままでは追いつかれ、少年の射程距離に入ってしまう。石和は叫んだ。

「さ、さき……っ！ はやく……しろっ！ 頼む……から、おまえだけでも……っ！」  
「うるさいっ！ だまってくれって いてるんだっ！！」

佐々木が大声で叫び、石和の懇願を打ち消した。

「はっ……君は言ったじゃないかっ！ 『俺は死なない、絶対に』って！ 約束したじゃないかっ！ な、なのにどうして君は約束を破ろうとするんだっ！ 諦めようとするんだっ！ ふざけないでくれ！」

「お、れだって……死にたくなんて……ない。だけど、もう……どうにもできないから……ごふっ……せめてささき、だけでも……」  
「うるさい、うるさい、うるさいっ！ 僕は認めない。そんなこと認めないっ！ 絶対にだっ！ 僕はもうイヤなんだ！」

友達が危険な目に会ってるのに、何も出来ずにいるのはっ！ もう新井さんの時の様な想いをするのはごめんだっ！ はあ、はあ……も、もう二度と僕は大事な、大事な友人を失いたくないんだよっ！

「ささき……」

「き、君は死なない。絶対にだ！ そして、僕も死なない！ 二人でここを出て、生きて家に帰るんだっ！ そして、託されたディスクを世間に公表して、新井さんや横川さんの無念を晴らすんだ。だから、石和くんも諦めちゃ駄目だ！ 諦めたら、それですべてが終わってしまうっ！」

佐々木の言葉に啞然とし、次の瞬間、石和は咳き込みながら笑い出した。支離滅裂である。想いだけではどうにもならないこともある。少年と石和達の距離はあとわずか。EPS領域に囚われるまであと60秒にも満たないだろう。

それでも、石和を見捨てずに。佐々木も犠牲になることなく。静観できると本気で信じている。

「けほつ……けほつ……お。俺は以前、言ったよな。『熱くなるな。冷静に、理論的に考える』って。それなのに……佐々木は……むちやくちや、だな……」

「無茶苦茶でいいんだ！最後まで頑張ろう！諦めないで……くっ……さ、最後の一瞬まで生き延びられるって、そう信じるんだ！」

佐々木の励ましに、石和は深々と頷いた。佐々木の言う通りかもしれない。もうここまで来たら、冷静さも、理論的な考えも、一切が役に立たない。最後の一瞬まで、諦めずに生を渴望し、脱出を夢見る。きつとそれが自分達に残された最後の抵抗なのだ。例え、目前に死が迫っていたとしても。諦めずに足掻こう。石和は強く強くそう思った。

と。その時だった。



## 9 「来訪者」

不意に 大地が鳴動した。ズン……！と鈍く響き渡る轟音と共に地面がぐらぐらと揺れる。何が起こったのか。また爆発だろうか。しかし、揺れの規模はさほど大きなモノではなく、少なくとも先程のような大規模な爆発による現象ではないようだ。

だとすると、先程少女が爆発したときの衝撃で何処かが崩れ落ちたのかもしれない。そんなことを石和は推測したが、それも間違いであることに次の瞬間に気付いた。その現象はもつと異質なモノ、だった。

周囲の空気が

青紫色に染まっていた。

サングラスや色つきセロファンを目に当てたときのような感覚だった。視界一面が青紫色の奇妙な空間に変質している。蒼と赤が入り交じったマーブル状の空間が辺り一面に漂っている。

「こ、これは……一体？」

その異質な光景に佐々木が目を大きく目を見開きながら、周囲を見回している。石和も同様だった。不可思議なこの空間にただひたすら困惑する。

異変はそれだけではなかった。少年の周りで飛び交っていた無数の瓦礫が急に動きを止めた。そのまま、床に音を立てて落下してゆ



き、瓦礫はそれっきり動かなくなる。

少年は周囲を見回し、しばし沈黙した後、目を細めた。少年の周囲にある瓦礫が一斉に浮かぶが、しばらくすると再び地面に落下し、動かなくなってしまう。

それを幾度も繰り返すが、どんなにやっても結果は同じ。瓦礫はこちらに飛んでくることはなし。『念動力』による肉体の束縛も行われることはなかった。

「どづいつ……」とだ？」

石和は眉根を寄せて、小さく呟いた。少年の『念動力』の能力が弱まっている。EPS領域をきちんと展開できないらしい。こんな現象は今まで一度もなかったというのに。

この奇妙な青紫の空間が関係しているのだろうか。

一体何が起きているのか。

訳が分からず困惑していると、突如石和達の背後からばんつ、という音が響き渡った。石和が反射的に身体を竦め、振り返ると

彼の視界に無数の影が広がった。

ヒトだった。廊下の突き当たりから、無数のヒトが幾多もの足音を唱和させながら、姿を現した。無駄のない統率された動きで、彼らは石和達に向けて駆け寄ってくる。灰色の帽子と制服を身に纏った男の集団である。

男たちは両手に黒い光沢を放つ何かを掲げている。全長が340

ミリほどある短機関銃サブマシンガンだった。

なんなのだろうか、この武装集団は。石和が目を細めて、訝しんだ。この統率された動きは明らかに訓練を受けたことのあるそれだ。しかも、彼らの身に纏う制服にはなにか見覚えがあるような、そんな気がした。視界がぼやけ、思考が霞がかかった状態で石和はそれを上手く想い出すことが出来なかったが、右肩と帽子に付けられているワッペンを見て、電流が駆けめぐったようにその集団の正体を想い出した。

「ASH……だと？ ど、どうしてここへ？」

石和が擦れた声で叫んだ。ASHは三ツ葉社系列の警備会社の中にある武装組織の名前で、海外のテロリスト対策を目的として組織されたものだ。警備会社という看板を装っているが、その実は世界有数の三ツ葉社を外敵から守護する民間の軍隊である。

三ツ葉社本部ビル第五研究所でもASHの一部隊が配属されており、石和はその存在を知っていた。異世界生命体アルファの細胞を移植する実験では常に後方に彼らが待機していた。アルファ細胞が暴走し、実験体が『成体』になり、害悪を成す獣になってしまったときの為に設けられた処置であった。結局、第五研究所では実験体が『成体』になってしまうこともなかったため、石和がその活躍を目の当たりにする事は一度もなかったのだが。

そのASHが何故、この場にいるのだろうか。石和は考えるが、その理由がまったく分からなかった。そもそも、この廃ビルの出口には電気が通っていないので、完全なる閉鎖空間だったはずだ。そんな場所へどうやって侵入してきたというのか。佐々木が電源を復旧したタイミングを見計らって入り込んできたのだろうか。そのこ

とを佐々木は知っているのだろうか。

数々の疑問を掲げ、石和は佐々木に目を向けた。が、彼の顔もまた、困惑と訝しさに満ちており、この状況を分らないことが見て取れた。

ASHの一部隊が石和達の前にやって来る。石和と佐々木の身体をそれぞれ二人がかり部隊員が両腕で抱え、拘束する。

「え……？　ちよつ、ちよつと！　君たちは一体……？」

佐々木が叫び、両腕を動かすが、左右にいる隊員が双方の腕をがっちり掴んでいて動けない。隊員たちは石和達にも言葉も放つことなく、そのまま『能力者』<sup>ネオ・チャイルド</sup>である少年から、大きく距離を取った位置まで強制的に後退させた。

続いて、別の部隊がやって来る。六名の部隊員が駆け寄り、その内の五名の隊員が石和達の２メートルほど手前横一列に並び、装備している短機関銃<sup>サブ・マシンガン</sup>を両手で構えた。少年の進行方向を完全に塞ぐ壁の様な配列だった。片膝を床についてしゃがみ込み、短機関銃<sup>サブ・マシンガン</sup>のセーフティを外すと銃口を少年に向ける。六名のうち一人の隊員がその隊列の後方に位置し、立ちつくしている。石和たちと少年の姿を鋭い双眸で交互に眺めると、小型の無線機を取り出して、口を開いた。

「<sup>デルタ・リーダー</sup>第一分隊より一本部（アルファ1）。目標と思われる少年を一人補足、それと生存者二名を確保した。一人は肉体の損傷が激しい模様。本部（アルファ1）の指示を問う」

「<sup>デルタ・リーダー</sup>一本部（アルファ1）より<sup>デルタ・リーダー</sup>第一分隊。目標はすべてで四つの筈だ。<sup>ゴルフ</sup>第四分隊を速やかに他のブロックへ急行させ、他の目標の探索を行

「う」

「了解。少年と生存者への指示を問う」

『目標への無条件発砲を許可する。反EPSは300秒が限界だ。反EPS領域が消失しないうちに目標を確実に沈黙させる』

「生存者は？」

フォックスノット

『第三分隊に身柄を確保させた後、ルートBを使用し、ただちに帰還させる。地上には救護班を準備しておく。速やかに行動を開始せよ。警戒を怠るな』

「了解。通信終わり」

石和達にはその会話の意味がどういう事であるのか。さっぱり分からない。そんな混乱する石和達を余所にASHの隊員たちは行動を開始していた。

前へ並んだ五人の隊員が膝を突いたまま足を開き、身体を固定する。銃から赤いレーザーサイトが走り、少年の身体に赤いポイントが刻まれる。少年を狙い撃つつもりのようなのだ。

「　　　　　つてえっ！」

わずかな空白の後、隊列の後方に位置している部隊長らしき男が声を上げ、その声を合図に短機関銃サブマシンガンのトリガーが絞られる。

銃弾の連続射出音が響き渡った。薬莢がからからと床に落ちる音と共に少年へ無数の銃弾が降り注ぐ。

少年は左手を正面に向けて、目を細めた。少年にそういった飛び道具はまったく通用しない。少年は半径2メートル以内のEPS領域を展開することが可能で、その中に入り込んだ物体はすべて少年の意のままに操ることが出来る。それが例

え、視認できないほど高速で移動する物体でも。

少年が眉間に皺を寄せ、右手に力を込めて、小刻みに震わせると、無数の銃弾が少年の元に届かず、次々と落下してゆく。

だが、その光景に違和感を石和は感じた。つい先程までは2メートル近い位置で銃弾を無力化していたのに、現在は1メートルにも満たない位置で銃弾を防いでいる。少年の無表情は相変わらずだったが、心なしか、苦悶の表情を浮かべているように石和には見えた。

「い、石和くん……あれは、ひよっとして」

呆然と呟く佐々木に石和は頷いた。

「あ、ああ……やはり、あの子供の……EPS領域が弱まっているんだ……」

「で、でも、どうして？　なんで、急にこんな……」

石和は無言でかぶりを振った。いま、一体何が起きているのか、状況すら全く理解できないのに、そんなことが推測できるわけがない。身体を拘束された石和達は訳が分からないまま、目の前の光景を見守ることしか出来なかった。

定期的な感覚で短機関銃サブマシンガンの連続射出音が響き渡り、無数の薬莢が床を埋め尽くす。銃弾が空になると、ロングマガジンを取り替え、銃弾を再装填し、少年に集中砲火を浴びせ続ける。銃声に混じって、隊員同士の叫び声と一緒に聞こえてくる。

「駄目だ、銃弾が届いていない！　反EPSの効果がないのか!？」

「いや、確かにEPS領域を展開しているようだが、こちらが押している。おそらく、地下では反EPS弾の効力が弱いんだろ。もつと強い力で押してやれば」  
第二分隊っ、前へっ！ 頼むっ  
「！」

分隊長がそう言うと、奥に待機していた隊員が頷き、前面に出る。短機関銃サブマシンガンを持った五名の隊員は立ち上がり、牽制の弾幕を張りながら、第二分隊と呼ばれた六名の隊員たちと配置を交換した。第二分隊も先程の部隊と同様、並列に並び、少年に銃口を向けて構えるが、その武器の形が先程と違うことに石和は気付いた。銃の大きさは全長が380ミリぐらいと先程とあまり変わらないが、妙に奇抜な形で色は銀色。銃口の射出口も異様に小さい。奇妙な銃だった。隊員たちは銃のトリガー近くにある小さなレバーを動かした。すると、銃の内部から低い唸りが上がり始めた。銃からレーザー・ポイントが真っ直ぐに伸び、再び少年の身体に赤い光が刻まれる。

「撃てっ！」

分隊長の発砲の合図と共に銃とトリガーが引かれ 次の瞬間、銃口から蒼い無数の光が一直線に吐き出され、少年に向けて襲いかかった。

光は電撃の様な速さで駆け抜け、その様は獲物を刈り取る獣に見えた。あの光に石和は見覚えがあった。圧倒的な貫通力を有した光学兵器 レーザー・ビームである。

暴走した実験体を沈めるときに飛び交ったレーザー・ガン、とどめを刺すために石和自らが射出したレーザー砲。あの時のことが石和の脳裏に浮かぶ。アレと同じ性質を持つ兵器をASHは装備しているらしい。実験室のカプセルに付いていたのレーザーガンの威力

はさほど強力なものとは思えなかった。が、いま見たレーザーは大型のレーザー砲には及ばないものの、その威力は絶大だった。

今まで絶対不可侵だったEPS領域の防壁が破られたのである。四つのレーザービームはEPS領域によって、ビームの軌道をねじ曲げられ、明後日の方向へ飛んでいったが、一つのビームは直線を走ってEPS領域を突破し　そのまま少年の身体を貫いていた。

少年の左肩にぽっかりと円状の穴が空き、真っ直ぐに伸ばしていた左腕ががくん、と落ちた。

「貫通したっ！」

隊員の一人が歓喜の声を上げるが、少年は息絶えていない。身体をよるめかせながらも、それでも足を大きく開き、前進する。少年は顔を歪めながら、周りの床、双方の壁を『念動力』でめくり上げ、そのままそれを第二分隊がいる場所へ投げつけてきた。轟音が響き渡り、床に瓦礫が崩れ落ちるが、第二分隊は全員がとっさに距離を取り、それを避けた。すぐさま隊列を組み直し、レーザーガンを構えた。

「ひるむなっ！　レーザーのエネルギーをレベル5まで上げろっ！  
最大の貫通力でEPS領域を突破する！」

『了解！』  
「撃てえっ！」

と、分隊長の指示が再び飛び、第二射が照射される。先程より一回り太くなったレーザー・ビームが空を切り、少年に向けて疾走する。強力なビームと少年のEPS領域が衝突し、衝突した箇所からプラズマが生じた。双方がせめぎ合う時間はほとんどなかった。

強力な貫通力を持ったレーザー・ビームはいとも簡単に不可視の防壁を粉々に打ち砕き、直進した無数のビームが少年の身体を貫いた。

少年の体の至る場所にぽっかりと無数の穴が開き、動きが止まった。出血はなかった。レーザー・ビームで受けた傷に出血はなく。ただ傷跡が残る。代わりに口からごぼり、と音を立てて大量の血を吐き出し、床にまき散らす。

そのまま膝を落とし、顔面から床に沈み、  
そのまます少年  
は沈黙した。

「  
「  
「  
「

石和と佐々木は声もなく。呆然として、その光景を眺めていた。少年は動かない。あれほど石和が苦戦を強いられた『ネオ・チャイルド能力者』をこ  
うもあつけなく殲滅してしまうとは。

ASHの部隊は確かに強力な武装を装備しているようだが、『ネオ・チャイルド能力者』の展開するEPS領域はそんなものを平然と弾き返すほどの力を持っていた。それをこつとも簡単に覆してしまうとは。一体何がどうなっているのだろうか。

石和は改めて周囲を見回した。相変わらず辺り一面の空間が青紫色に染まっている。先程起きた振動。空間の異変。その直後に突入してきたASHの部隊。

どう考えても、これらは連動した一つの事柄に思える。



あの空間はEPS領域を弱体化させるもので、それを承知でこのASHの部隊は突入してきたのではないだろうか。そう考えれば、この無駄のないASHの動きも納得がいく。

しかし、何のために？ それが分からない。

何故、ここに『能力者』ネオ・チャイルドがいるのを知っていたのか？

何故、『能力者』ネオ・チャイルドのEPS領域を弱体化することが出来たのか？

何故、ASHはこの廃ビルに突入して『能力者』ネオ・チャイルドを攻撃したのか？

様々な疑問が石和の中で浮かび上がるが、理由が一つとして浮かばない。あまりにも唐突すぎて、推測することすら出来なかった。

この時、石和はあることを失念していた。目まぐるしく動く事態に対応できず。頭が真っ白になってしまっていた。満身創痍の身で意識が朦朧としていたせいもあるだろう。

だから、ASHの部隊員の一人が少年の生死を確認するために近づいていったのを見ても、なにも反応が出来なかった。間近に近づき、少年の身体をひっくり返そうとした瞬間、『それ』を思い出した。

「だ……めだつ！ それに近づいたら……あぶな」

石和の忠告は遅すぎた。石和の叫びに何事かと隊員が振り向いた刹那、辺り一面が強烈な光に包まれた。

白い閃光。少年の生体活動が停止し、体内の『爆弾』が作動したのだ。

少年の身体が粉々に吹き飛び、爆風が第二分隊の隊員すべてを飲み込んだ。爆音が響き渡り、再び廃ビルの地下に激しい振動が襲いかかった。

## 10 「小田切の葛藤」

雪が積もり始め、益々閑散とし始めた倉庫街に。地鳴りのような音が響き渡り、大地が蠢動した。小田切はトラックの助手席で予期せぬ振動に眉を顰め、不吉な感覚が身体中に広がっていくのを感じていた。

出だしは順調だった。

高度3600キロメートルに位置する多目的型人工衛星「ヨハネ」

遙か上空の人工衛星から放たれた「反・EPS砲」は予測通りのポイントに命中し、球状の巨大な特殊空間が現在目の前にある廃ビルを包み込んでいる。この特殊空間は絶対的な力を誇る「ネオ・チャイルド能力者」の力を無力化することが出来る、特殊フィールドだ。

彼らが能力を発動するには「具現する力」に干渉が可能なEPS領域を展開する必要がある。反EPS砲は空間を歪曲させた特殊フィールドを展開することによって、EPSエネルギーを一カ所に蓄積できない性質を持つ「反・EPS領域」を展開することが出来るのだ。

しかし、それには一つ問題があった。この廃ビルにいる「ネオ・チャイルド能力者」たちは地下に潜んでいるため、反EPSのエネルギーが地下にまで完全に浸透しないのだ。効果は本来の効果に比べ、50パーセント近く減少してしまう。

だからこそ、『反・EPS領域』を展開したのにもかかわらず、これだけの部隊を動かし突入させたのだ。付け加えて虎の子である光学兵器『C18FS』を持ち出し、部隊に装備させた。

これだけの装備と人員を動員したのだ。反EPS領域の効果が半減したことを差し引いても、十分に勝算はあるはずだった。

が、事はそう簡単に上手くは運ばなかったようだ。小田切の装着したインカムのイヤホンから次々と予測していなかった報告が聞こえてくる。

『ブラボー第二分隊、壊滅！ 目標が沈黙後、急に大規模な爆発を起こした！ 体内に高性能の爆弾を仕掛けておいたらしい。負傷者多数、至急救護班をポイントCに急行させてくれ！』

『ホテル・リィダイ救護班、了解。ただちにポイントへ向かう』

『ホテル・リィダイ第五分隊より一部（アルファ1）。Cブロックのオフィスルームに爆発の痕跡があり。先程のEPS反応消失はこれに関係していると思われる。すべての『ネオ・チャイルド能力者』には体内に爆弾が仕掛けられていると推測する。今後の指示を求む』

『ゴルフ・リィダイ第四分隊より、本部（アルファ1）。Bブロックに目標は見つからず。引き続き、Aブロックの捜索にあたる』

「……………」

小田切は目を細めた。してやられた。まさか、『ネオ・チャイルド能力者』の体内に『爆弾』を仕込んでいたとは。完全に想定外の出来事である。報告を受ける限りでは相当威力の高い『爆弾』であるらしい。これでは迂闊に攻撃を仕掛けることは出来ない。地下に下手なダメージを与えれば天井が崩れ落ちる可能性もあるし、場所によっては第二小隊のような死者や負傷者を増やすことになる。その『爆弾』も体内

の何処に隠しているか分からない。万が一、爆弾に衝撃を与えることなく目標を殲滅したとしても、生体反応がなくなった瞬間に『爆弾』が起動するような仕掛けになっているのなら、結果は同じだ。

おそらく、これを戸木原はすべて想定して、行っているのである。一見、残虐な行為に見えるが、敵に付け入る隙を与えない、見事な策である。

これに対し、小田切は強行突破を図る指示を指揮者に与えた。

『なるべく遮蔽物の少ない広い部屋に目標を誘い込み、殲滅せよ。接近戦は避け、距離を保ちながら、攻撃を行え』というものである。

こちらが『能力者』ネオ・チャイルドの力を封じることができるのはわずか300秒である。すでに180秒が経過し、残りはあとわずかだ。この限られた時間に目標を殲滅させなくてはならない。地下で爆発が起きようが、この時間を過ぎれば、ASHの部隊でも『能力者』ネオ・チャイルドに対抗するのは難しい。急いで有人宇宙施設『あおぞら』のほうに『反EPS砲』の第二射の指示を出しておいたが、多少のタイムラグが出る上にエネルギーの充電が充分でないため、今展開しているほどの効果時間は得ることが出来ない。

多少のリスクを背負っても、目標を殲滅することを優先させるべきだ。

小田切が抱く懸念は他にもある。

『能力者』ネオ・チャイルドの位置が分散していることである。彼らの目標は廢ビル<sub>の</sub>地下に閉じこめられている石和武士と佐々木勇二郎を口封じに抹殺されることだと推測される。

だとすれば、何故わざわざ『能力者』ネオ・チャイルドを分散させる真似をしたの  
だろうか。こちらが感知したEPS反応はよつつで、この廃ビルの中  
に『能力者』ネオ・チャイルドは四人いるはずなのだ。

四人同時に石和達を襲えば、彼らは生き残る術はない。一挙に始  
末することが出来たはずだ。なのにそうしなかった理由は何か。遊  
んでいるのだろうか。いや、例えそうだったとしても、それだけだ  
とは思えない。まだ、なにかを企んでいる可能性は充分にある。予  
測不能の事態に対処できるだけの心構えはしておく必要がある。そう  
だった。

「それにしても……『反EPSエネルギー』を使うことなく、『能  
力者』ネオ・チャイルドを倒したのか。大したモノだな」

小田切はそんなことを独りごちた。『能力者』ネオ・チャイルドの力は圧倒的なも  
ので、例え相手が子供だったとしても、普通ではまず勝つことはあ  
り得ない。相手に触れることも出来ず、命を蹂躪されるはずだ。に  
も関わらず、『能力者』ネオ・チャイルドの一人はオフィスルームで死亡、二人目は  
生存していたが、見るも無惨な重傷を負っていたという報告を受け  
た。

「いったいどうやって、二人もの『能力者』ネオ・チャイルドをそこまで追い込んだ  
のか。非常に興味がある。是非、二人には生還してもらい、その話  
を聞きたいものだ。」

そんなことを考えながら、小田切は傍らに目を向けると、運転席  
で唐沢忠之が真剣な表情で俯いていた。両手には先程、小田切が渡  
した『ベレッタM92FS』を強く握りしめていた。

「どうした、唐沢。さっきとは真逆だぞ。少し、肩の力を抜け」

と、小田切は唐沢に声を掛けた。唐沢はぎこちなく頷いたが、緊張に強ばった身体はそう簡単に元には戻らなかった。

先程小田切の行った脅しが効いたのか、それとも部隊が突入し、周囲に漂う緊張感に当てられたのか。突入前に抱えていた脳天気さは完全に吹き飛んでいるようだ。

と、言っても、恐怖に怯えているようには見えない。緊張感に身を委ねている。そんな表情だった。いい傾向であると、小田切は思った。この程度でパニックになるようでは使い物にならない。まだ、事は始まったばかりなのだ。これから更に事態は大きなモノとなり、状況は苛酷なモノになってゆく。その重圧感に押しつぶされない者が小田切には必要だった。これから何が分かるか分からないのだ。使える駒は一つでも多い方がいい。

小田切はそんな分析を行いながら、再び、インカムのイヤホンの中で飛び交う情報に意識を向けた。

『ゴルフ・リーダー第四分隊より一本部（アルファ1）。目標を補足。これより排除する』

『一本部（アルファ1）了解。どんな能力を持っているか分からない。近接戦闘は避け、距離を取りながら一斉攻撃を仕掛ける』  
『了解』

どうやら、新しい『ネオ・チャイルド能力者』を発見したようだ。もう一人は反応があるにも関わらず、発見できないらしい。いくら広いビルとはいえ、他にヒトは全くないのだ。これほどの部隊で捜索に当たっていないながら、何故、発見するのに手間取るのだろうか。

小田切は十分に警戒を促しつつ、最後の『ネオ・チャイルド能力者』の捜索に全力を尽くすように全隊員に伝えると、右腕につけてある腕時計を見た。

『反・EPS砲』を展開をしてから、230秒が経過していた。

反・EPS領域の効果はあと1分弱。タイムリミットは間近にまで迫りつつあった。



## 11 「物質変換の恐怖」

ASHの第四分隊が遭遇したのは、長髪の少年だった。五歳ぐらいの年頃で、身体には皮で出来た衣を纏っている。長い前髪を揺らめかせながら、少年は冷たい瞳を讃えていた。

第四分隊の面々は困惑した。

何故『ネオ・チャイルド能力者』がここにいるのか。『ネオ・チャイルド能力者』は石和達を抹殺するためにこの地下に来てしていると踐んでいたのだが、その少年がいた場所は石和達がいるCブロックとはまるで反対の場所　　Aブロックだった。

様々な場所に『ネオ・チャイルド能力者』を配置し、石和達の逃げ道を塞ぐためだろうか。いや、それにしてもCブロックには二人の『ネオ・チャイルド能力者』が固まっていたし、最後の一人は全ブロックを捜しても未だに見つからない。網を張っていたと考えるにはあまりにもお粗末な配置である。

しかも、長髪の少年がいたのは電灯の通っていない、埃にまみれた部屋だった。ドアを開け放し、廊下の光が差し込むことによつて、かろうじて部屋の中が見渡せる。

そんな場所に少年は佇んでいた。よく分からない場所にいたことに不信感を抱きながらも、第四分隊は行動を開始した。どういう意図があるにしろ、やることは変わらないのだ。

六人の隊員が両手に掲げたMP7の銃口を長髪の少年に向けた。

そして、分隊長の合図と共に短機関銃サブマシンガンのトリガーが引かれ、銃声と共に薬莢が宙に舞った。少年を抹殺するために高速で連続射出された銃弾が、長髪の少年に降り注ぐ。

少年はその銃弾を防ぐ仕草を全く見せなかった。その必要がなかったのだろう。

銃弾の集中砲火を浴びても少年に致命打を与える事ができなかったのだ。それどころか、少年はかすり傷ひとつ負っていない。少年の肉体に命中した銃弾は一つとして肉体に食い込むことなく、粉々に砕け散り、その破片が床にばらばらと落ちてゆく。

「銃弾が効かないっ！ くそっ………EPS領域で肉体を強化しているのかっ!？」

第四分隊の隊員の一人がそんな推測を口にしたが、その考えは外れていた。少年のその能力をその隊員は身を持って知ることになった。

少年の右手が正面に突き出された。手のひらから、ヴンツ、と鈍い音が響き渡り、そこから空間の一部が球状に歪んだ。ソフトボール状の大きさにになったその歪みをそのまま隊員の一人が持つMP7に向けて解き放った。

球状の歪みが銃に触れると、途端に音を立ててMP7のフレーム部分が爆発した。銃が中で暴発したのだ。飛び散った銃の破片が隊員の眼や顔面に深々と突き刺さり、隊員は両手で顔を抱えながら、

悲鳴を上げた。

そこに少年が近づいてゆき、その隊員の膝をぼん、と軽く右手で叩いた。すると、ぽきんと、軽い音を立てて、隊員の足が歪な形に曲がった。

ただ、少年が手を触れた。それだけのことで、隊員の骨と肉が脆くも崩れたのである。

隊員が雄叫びを上げながら、身体のバランスを崩し、床に転げ回った。そこから少年の蹂躪が始まった。少年の両手が隊員の身体を掴んだ。

ずぶり、と隊員の左肩に少年の右手が沈み、肩の骨がぺしゃんこになる。

ぽきぽき、と音を立てて少年の左手が隊員の腹に沈み、あばら骨が折れ、粉々になる。それは錆び付き、金属疲労を起こしたスプーンが脆く崩れ去る現象にも似ていた。

「ぎゃあっ？ げぼっ！！ ひいつ、や、やめ た、助け……ぎゃああああああああああああっ！！？」

隊員は悲鳴を上げるだけで、抵抗することも逃げることも出来ない。少年の何気ない遊びに翻弄され、それが終わったときには隊員は原型を留めない肉塊となって、無惨な死を迎えた。

「う……うわああああああっ！」

他の隊員が悲鳴を上げて、少年に銃弾を集中させるが、やはり効果はなかった。少年の身体には傷一つつかず、銃弾が粉々に砕け散るだけ。

少年は再び手を翳した。無数が歪みの玉が次々と少年の手のひらから解き放たれ、MP7が次々と爆発する。その爆発で負傷した隊員の身体を先の隊員と同じような過程で次々と蹂躪してゆく。

その光景に戦慄した隊員の一人が本部の小田切に通信を繋ぎ、状況を錯乱した頭で説明した。小田切はその状況からその『能力者』ネオ・チャイルドの能力を推測した。おそらく『物質変換』だろう。

手に触れたもの、身体に触れたもの、その歪みの玉を飛ばした対象。

それらを物質を変換し、非常に脆い性質のモノにしてしまうのだろう。つまり、触れられたら、最後、少年の手によって、対象は子供の手でも簡単に壊せる、脆い物質に改造されてしまうと言っただ。

第四分隊には即座に徹底命令が出された。反・EPS領域が展開されていても、なお、それほどの能力を行使できるのであれば、第四分隊が武装では絶対に目標を殲滅することは出来ないからだ。

しかし、その命令が本部から下されたとき、すでに刻は遅かった。通信を行っていた隊員を覗き、他の隊員はすべて、息絶えていた。原型を留めない、壊れた人形のような姿を曝して。首や手足がもげ、辺り一面にばらばらと転がっている。辺り一面が血の海と化し、少年の身体もまた、全身が真っ赤に染まっていた。

隊員は齒をかちかちと震わせながら、背を向けて一目散に逃げ出した。少年は一人も逃す気はない様だった。隊員の背中に向けて、歪みの玉を撃ち出し、彼の背中を脆い物質に変質させた。

ぼきん、と間の抜けた音が廊下に響き渡り、隊員の身体が後ろから真つ二つに折れた。隊員は顔をひくつかせて、笑った。立っていないながら、天地が逆さまに見える光景を滑稽に思ったのかもしれない。それは隊員自身も分からなかった。

恐怖に引きつった表情で笑い声をあげる隊員の元へゆっくりと少年が近づいてくる。間近にまで迫った手を見て、隊員は絶叫し、その声は廢ビルの地下全域に響き渡った。

これに対し、小田切は即座に次の行動を開始していた。もう一人の『ネオ・チャイルド能力者』の捜索を行わせていた第五部隊をAブロックに向かうように指示を出したのだ。

第五分隊には第二分隊と同様、光学兵器C18FSが装備されている。少年の姿を発見すると、第五分隊のメンバーはすぐさま銃口を少年に向け、一斉にレーザー・ビームを解き放った。とっさの事で、少年は完全に虚を突かれた様だった。歪みの玉を第五分隊に向けて放つ暇もなく、無数のビームが少年の肉体を貫いた。

『物質変換』が少年の持つ能力で、銃弾を無力化するのならば、物質以外の兵器で攻撃を仕掛けてやればいい。レーザービームは物質ではない、光学兵器だ。物質変換の力のみ能力であるなら、これを無力化することは出来ないはずだ。

小田切の予想通り、少年はそれを防ぐことは出来なかった。無数のレーザーの傷痕が刻まれ、少年は沈黙した。そのままゆっくりと、床に横たわり、わずかな空白を置いて、爆発を起こした。

今回は距離を取り、充分警戒していたため、第五分隊の隊員に負

傷者は出なかった。だが、第四分隊は壊滅。これは小田切が予想していた以上の打撃だった。第四分隊にも光学兵器が装備されていれば問題なかったのだが、事はそう簡単な問題ではない。

まだ試作品である光学兵器は数が充分ではないため、分隊二つ分の装備しか用意出来なかったのである。それにいくら強力な兵器とはいえ、光学兵器のみで対抗しようと思うのは危険な発想なのだ。

これがもし、『ネオ・チャイルド能力者』がレーザービームを無力化出来る『能力』を持っていたら、手も足も出なかった事だろう。あらゆる事態を想定するためには、実弾と光学兵器、双方を準備しておく必要がある。『ネオ・チャイルド能力者』と遭遇したことは運が悪かったと言うほかない。

そして、その尻ぬぐいを第五分隊に行かせたおかげで、よけいな時間をロスする羽目になってしまった。本来、最後の『ネオ・チャイルド能力者』の搜索が任務だった第五分隊をAブロックで足止めしてしまった。第五分隊にはすぐさま側索に戻るよう指揮者が指示を与えたが、間に合わず。最後の『ネオ・チャイルド能力者』の行方を発見できないまま、タイムリミットの300秒が過ぎてしまったのだった。

小田切は眉を顰め、有人宇宙施設『あおぞら』へ第二射の準備を急ぐように通達した。第二分隊、第四分隊が壊滅し、反EPS領域が消失したとなると、一気に形成が不利になる。なんの触媒もなしに『ネオ・チャイルド能力者』を殲滅することは非常に難しい。

指揮者は残った分隊すべてで、『ネオ・チャイルド能力者』の搜索を行い、場所を突き止めたら、距離を取って監視するように指示を出した。反EPS領域が再び展開された刻を狙い、再び攻撃を仕掛けることに決めたのである。



## 12 「つかまえた」

Cブロックの廊下一帯は騒然としていた。レーザー・ビームによる攻撃で少年の身体を貫き、『ネオ・チャイルド能力者』を殲滅した快進撃もつかの間、少年が爆発を起こしたことにより、ASHの第二部隊は壊滅的な被害を受けていた。

幸い石和達は他の隊員に強制的に運ばれ、少年とは大きく距離を取った位置にいたので、爆発による被害は皆無だった。

ただ、それでも、目の前に起こった惨劇を目の当たりにして、冷静ではられない。周囲に漂う熱風を全身に浴びながら、石和は戦慄した。大きく目を見開き、周囲を見回す。

生死を確かめるために少年近づいた隊員は原型を留めない肉片となって四散した。他の部隊員も爆風の直撃を浴びてしまい、二名が死亡、他三名も重傷を負う羽目になった。

辺り一面がめらめらと燃え上がり、肉の焦げた臭いが漂っている。手や足が爆風で吹き飛び、あえいでいる隊員がいる。全員がほぼ血まみれで苦悶の表情を浮かべていた。

見るも無惨なその光景に石和は目をそらし、歯を強く食いしばった。傍らにいた隊員が通信機を片手に狼狽した声で叫んだ。



「フッポー」

「第二分隊、壊滅！ 目標が沈黙後、急に大規模な爆発を起こした！ 体内に高性能の爆弾を仕掛けておいたらしい。負傷者多数、至急救護班をポイントCに急行させてくれ！」

『救護班、了解。ただちにポイントへ向かう』

通信を終えると、少しの間を置いて、様々な薬品や器具を抱えた白衣の集団が数人やってきて、第二部隊の負傷者を抱え、治療を始めた。

ASHお抱えの医療班らしい。石和と佐々木の元にも白衣を来た中年男が二人、若い女性が二人やって来て、傷の治療を始めた。

佐々木の背中に刺さっていたガラスを引っこ抜き、傷口を洗浄すると、ガーゼで覆い、包帯をぐるぐると巻き始めた。白衣を着た男の一人が石和の身体を見ると、わずかに眉を顰め、止血剤や足に添え木などを付けた応急処置を施していった。

「あ、ありがとう。あの……君たちは一体？」

『……………』

佐々木がそう訊くが、白衣の四人組はなにも答えない。まるで、石和と佐々木を救出したのは何かの作業の一環であるかのように、その動作は機械的だった。

石和は力なく笑った。

「は……はは、ささき。この人たちに何か聞き出そうとしても……無駄、だぞ。ここにいる連中は自らの意志で動いている訳じゃない……だ、誰かに指示されて……動いてるんだ……ごほっ……」

佐々木が目を丸くした。

「ど、どうということだい？」

「ASHは自らの意志で動く組織じゃ、ない。三ツ葉社を守護するための……け、警備会社だからな……こふつ、三ツ葉社の上層部の……人間が指示しない限り、ASHは動くことはないんだ……絶対に」

その言葉を聞いて、佐々木ははっ、とした。

「つまり……三ツ葉社の上層部にASHを突入させ、ネオ・チャイルド『能力者』を殲滅するように指示したヒトがいるってことかい？」

石和は頷いた。

「そ……それだけじゃ、ない。この人達の……会話から察する、に……ネオ・チャイルド『能力者』がこの廃ビルに侵入して来ることは予め知っていたんだ。じゃなければ……こんな迅速な行動が行えるわけがない……からな、ぐつ　うつつ！」

「しゃべらないで。ますます傷口が開く」

苦悶の表情を浮かべる石和に白衣の男は低い声で言った。

「君の言うとおり、我々はある『依頼主』からの指示で動いている。そして、『依頼主』に関する事、今起きていることはすべて口外することは出来ない。だが、一つだけ言えることがある。我々の仕事は君たちの傷を治し、助けることだ。我々はそのことに全力を尽くす。それは信じてほしい」

そう言われてしまうと、石和にはこれ以上何も言えない。

「す、すまない。失礼……した。ち、治療してくれることに感謝する……」

と、石和は素直に詫びと感謝の言葉を口にした。

「感謝されるのはまだ早い。君の傷は思った以上に酷い。ここにある器具では応急処置しか出来ん。はやく設備の整った病院に運び、然るべき処置をしないと危険だ。それに」

白衣の男が言葉を濁して、石和の右腕を苦々しい表情を浮かべ、眺めた。それで石和は理解した。

おそらく　　もうこの腕は二度と使い物にならない。

白衣の男の表情はそう語っていた。不思議と石和にショックはなかった。

先程から右腕に感覚が全くない。力を込めようとしても全く動く気配がない。何となくではあるが、己の右腕が死んでしまったことを石和はすでに悟っていたのだ。

佐々木は息を飲んで、石和の顔を泣きそうな面で眺める。石和は苦笑した。

「な……なんて、顔してるん……だ、ささき。確かに五体満足じゃないが……俺も佐々木も無事だったんだ。そ、それを素直に喜ぼう……」

そう言った。本当なら、少年のEPS領域に囚われ、そこで石和

の人生は終わっていた。そこに佐々木が駆けつけ、助けてくれた。そしてASHの介入により、『ネオ・チャイルド能力者』の魔の手を振り払ってくれた。これ以上を望んだら罰が当たるといふものだ。石和は死の淵に立ったにも関わらずかろうじて生き延びた。五体満足とは行かなかったが、それでも。

生きていたのだ。

千恵子に会える。あの笑顔がもう一度見られる。子供たちに会える。

石和にとって、それが一番大事なことであり、それ以外は何もいらなかった。死の瀬戸際を体感することにより、石和はそれを強く実感した。

「さあ、いこう」

白衣の男がそう告げると、二人の隊員が石和の身体をそつと持ち上げ、開いた担架の上に乗せた。そして、ふたりの隊員が前と後ろに護衛に付き、石和と佐々木と共に出口へと向かった。

搬入用エレベーター、通常エレベーター、非常口。

この地下フロアから抜け出すことが出来る場所は計三つあるが、現在そのうち二つが使用出来るとのことだ、搬入用エレベーターと非常口である。

佐々木の話によると、発電施設では搬入用エレベーターと突如、通常エレベーターがオフラインとなり、コンピューターが反応しなくなっただけ。それはASHが外で配線をいじった結果そうなった

のだろう。

「どうやら僕の行いはすべて無駄に終わったみたいだね」

と、自嘲的な笑みを浮かべて、佐々木が肩を竦めた。石和はそうは思わなかった。あくまでもそれは結果論だ。石和がこうして生きているのは佐々木のおかげなのだ。ここまで必死で動いてくれた佐々木の行いは紛れもなく石和の活力となってくれた。それが無駄な行いである筈などない。石和は一言、「ありがとう」と佐々木に言っつて、その想いを伝えた。佐々木は照れくさそうに苦笑した。

石和を乗せた担架が向かうのは非常口だった。搬入用エレベーターは石和よりも酷い負傷を負った隊員の輸送に使っているとのことだ。複数の足音を鳴り響かせながら、廊下を渡り歩き、出口に向かつて進みゆく。

完全に開いた非常口のドアを見えてくると、石和は安堵の溜息を吐いた。

これでようやくすべてが終わりだ。自分達を追いかけていた『能力者』二人はもういない。そして、この地獄の閉鎖空間から抜け出せることが出来る。まだ、なにも解決したわけではないが、今は無事生還できる喜びを噛みしめよう。石和はそう思った。

隊員が担架の前後に張り付き、非常口の中に入ろうとした時、辺り一面を覆っていた青紫色の空間が突如として元に戻った。一瞬にして、奇妙な空間は痕跡すら残さず消え失せ、廊下の空間は本来の色を取り戻した。

この『能力者』の能力を封じた奇妙な空間は、どうやら時間の限

定があるらしい。それで部隊の人間があれほど急いでいたのだろう。いささか持続時間が短いが、それでもあのEPS領域を無力化する技術は大したものだ、と石和は素直に感心する。

どつという過程を経て、『ネオ・チャイルド能力者』の能力を封じ込めたのか。途端にその構成に興味が湧いてくる。こんな状況にも関わらず、そういったものに関心を示すこの性格には我ながら呆れる。科学馬鹿だな、と石和は自嘲的な笑みを浮かべた。

と。

「あ……………」

そんな石和の笑みが凍り付いた。大きく目を見開いて、顔を大きく歪ませる。石和のその様子に気付いた佐々木やASHの隊員たちが怪訝な面持ちで、石和の向ける視線の方向へ目を向けた。

途端、石和と同じような驚愕の表情がその場にいる全員に伝染し、辺り一面が緊張感に包まれた。

通常の空間に戻ったのを見計らったようなタイミングで。

それは現れた。

「あ、ああ……………」

石和が目を向けたのは今歩いてきた廊下の一番奥。そこから、厩気楼のように一人の少女が出現　　現出した。

石和はその少女の姿に見覚えがあった。この廃ビルの中ではない。

鹿島大学付属病院へ侵入した横川昌美が遭遇した少女である。

モニター越しに、みたその姿を石和は覚えている。昌美の放った銃弾を『空間転移』させ、自らを発砲するように仕向けた少女。

昌美の胸にボールペンを突き刺し、彼女の息の音を止めた少女。

髪の毛をアップスタイルにまとめ、皮の衣を纏った幼い少女。

『能力者』ネオ・チャイルド 『空間転移』の能力を持つ少女の姿が石和達の眼前にあつた。

前であつた。

「そ、そんな……」

石和は戦慄に身体を震わせながら、呻いた。何故、あの少女がここにいるのか。この廃ビルに転送されてきた『能力者』ネオ・チャイルド は二人だけではなかつたのか。

そう考えた直後、石和は小さくかぶりを振って、自分の推測を否定した。

違う。そう決めつけていただけだ。研究室から出てきた子供たちが二人だつたと確認しただけで。『瞬間物質転送装置・改』テレポルト・ゲート からどれだけの『能力者』ネオ・チャイルド が転送されてきたかは一切確認してないのだ。石和が見ていないところで、他に『能力者』ネオ・チャイルド が転送されてきていたとしても不思議はない。

現実として、『能力者』ネオ・チャイルド の姿が石和達の眼前にある。それがすべての事実。その憶測が正しいことを証明していた。

「う……うああああああああつ！」

担架の後方に位置していた隊員が絶叫し、短機関銃サブマシンガンの標準を少女に定めながら、突進した。ばらばらららつ、と銃弾の連続射出音を鳴り響かせながら、少女を狙撃する。

「お、おい馬鹿、やめろっ！ 無駄に刺激するな。他の分隊を集結させて、包囲するんだっ！」

隣の隊員 口の利き方から察するに分隊長だろう がそう叫んだが、彼の発砲と突進は止まらない。まったく聞こえてないようだ。

その隊員にも分かっているはずだった。少女に銃弾が効かないことを。先程、『能力者』ネオ・チャイルドを封じ込めていた青紫色の空間はもうないのだ。それは目の前の少女が己の力を減少させることなく、自在に扱えることが出来ることを意味していた。

だからこそ、隊員は絶叫したのだろう。迫り来る恐怖を堪えきれず、思考することを忘れた。発砲せずにはいられなかったのだ。

少女に銃弾は命中しない。掠りもしなかった。少女の姿が消え失せ、少し離れた位置に出現し、銃弾がそちらに牙を向くと、また姿が消失し、少し離れた位置に現出する。まるで出来の悪いアニメーションを見ているようだった。不自然な動きで空間を転移しながら、少女はジグザグに移動しながら隊員のいる方向へ近づいてくる。

銃弾を撃ちつくし、慌てて、ロングマガジンを再装填しようとマガジンを抜くと、隊員の眼前に少女の姿があった。長い長い廊下を渡り歩くタイムラグを0にして。一瞬で、懐に飛び込まれていた。



少女は唇の端を上げた。今までの子供たちは無表情で感情を顔に出すことをしなかった。その少女が笑みを浮かべたことに石和は一瞬驚いたが、すぐさまそれが演出であることに気付く。少女のその瞳には感情はなく。人形のような無機質なもののままだったからだ。笑っているように見せた少女は隊員の腕を背伸びして、掴み、そして、言った。

「つかえまえた」

瞬間 隊員の背後でごとんつ、と何かが落ちる音がした。隊員が驚いた表情を浮かべて、背後に振り返った。音がした方向へ目を向けると、そこに銃が落ちていた。

それは隊員が今し方持っていた筈の短機関銃サブ・マシンガンだった。

「え……？」

隊員は間の抜けた声を上げていた。自分の腕をしてみる。そこには短機関銃サブ・マシンガンはなかった。隊員の手首もなかった。両手首の先は綺麗な肉の断面があるだけ。

他には何も無い。銃も、己の手首もない。

当然だ。ヒトの身体には手は二つしか存在しない。その二つの手首は既にそこにあるのだ。両手が張り付いた短機関銃サブ・マシンガンと共に、隊員の背後に。

モノの見事に隊員の手首は二つに分離していた。

「ひっ……！」

隊員が擦れた悲鳴を上げ、それを引き金にしたかのように両腕から噴水の様な血飛沫が舞い上がった。少女はその血を全身で浴びながら、笑う。そして、少女は隊員の胸に手を当て、次の解体作業を始める。

足が膝の先から、消え失せて、背後へごとん、と落ちる。

下半身が上半身を残して消え失せて、背後へごとん、と落ちる。

隊員の身体が消え失せて、背後へごとん、と落ちる。

最後に残されたのは隊員の首だけ。その場に木から落ちた果実のように、床に落下し、ごろごろと転がった。

少女が身体に手を触れた。たったそれだけのことで身体がバラバラに分解された。それは何も知らぬ子供が昆虫を興味本位で解体するよう時のような光景を彷彿させた。

『空間転移』。

二つの空間にEPS領域を展開させ、その二つを差し替えることが出来る能力。少女は触れたモノの構成情報を読み取り、部分的な転移を行うことが出来る。

いま少女が行った四肢の解体もその一能力によるものだろう。

少女は闊歩する。血の海となった床に素足を浸して。ぴちゃり、ぴちゃりと音を立てながら、石和たちのもとに近づいてくる。

「くっ……！」

分隊長が懐から灰色の缶を取り出して、ピンを抜き、少女に向かって投げつけた。地面に転がると、煙が勢いよく吹き出し、辺り一面を覆っていく。

スモーク・グレネード

発煙手榴弾である。これで少女の視界を覆い、時間を稼ぐつもりらしい。すかさず隊員は通信機を手に取り、叫んだ。

フォックスノット

「第三分隊より本部！ 聞こえるか。非常口付近にて目標を発見！ 至急、他の部隊をポイントAへ集結させてくれ！ 繰り返す。非常口付近にて目標を発見！ 至急、他の部隊をポイントAへ集結させてくれ！ こちらは可能な限り、目標をここで足止めする！」

通信を終えるとすかさず分隊長は石和達の方へ振り向き、手を横に振った。

「お前たちは早く上へ！ その二人を早く外へ連れ出せ！ 上に待機している部隊と合流したあと、本部に指示を仰ぐんだ、急げっ！」

「し、しかし、隊長！」

「いいから、早く行けっ！ 邪魔だっ！ 死にたいのか！」

指示した分隊長の言葉に一瞬、他の隊員たちは躊躇する素振りを見せたが、すぐに隊員の一人が「いくぞ！」と叫び、石和を乗せた担架とともに、階段へ向かった。

### 13 「不可解な行動」

一行が階段に向かったのを聴覚だけで確認するすると、分隊長は次の行動に移っていた。

懐から再び手榴弾を取り出し、ピンを抜き、再び少女がいた方向へ投げつける。

が、今度は先程のような煙は出ない。代わりに強力な閃光が廊下を覆った。

閃光手榴弾。フラッシュ・バン 石和が造り出した即席の代物ではなく、正式に造られた強力な目くらましである。視界を煙で塞ぎ、更には閃光で目を眩ませる二段構えの作戦。

これでEPS領域を展開する手段を完全に防いだ筈だ。

分隊長は短機関銃サブ・マシンガンを構え、発砲した。煙で標的は見えない。ただ、煙がもうもうと舞う前方へ向けて、闇雲に撃ちまくる。

煙による視界の遮断は諸刃の剣だ。こちらも標的を見失うからだ。だが、これだけ銃弾を連続で撃ちまくれば、少なくとも牽制になる。足止めぐらいは出来るはずだ。

確かに分隊長の作戦は的を射ていたし、上手くいけば『ネオ・チャイルド能力者』

の足を止めることは可能であった。

しかし

分隊長の足に何かが触れた。背後へ振り向くと、そこには赤く彩られた少女が立ちつくしていた。

「な  
」

分隊長の顔が凍り付いた。確かに他の能力者ネオ・チャイルドであれば足止めぐらいは可能であったかもしれない。だが、彼女の能力は『空間転移』である。視界に認識できる位置ならば、どんな場所にいようが空間を差し替えることが出来る。

つまりは、発煙手榴弾スモーク・グレネードが煙を吐き出し、視界を覆う前にその場から『転移』してしまえば、いくらその二段構えの作戦が効果的であったとしても役に立たないと言うことだ。

少女は最初から分隊長の背後に転移していたのだ。

少女が微笑む。ガラスの微笑。残酷で無慈悲だが、それを全く感じさせない氷のような笑顔。そして、少女はその言葉を口にした。

「  
つかえまえた」

分隊長は恐怖の雄叫びを上げた。

一人残った分隊長の悲鳴が聞こえてきた。石和達が非常口の階段を昇り始めてから、まだそんなに経過していない。どうやら応戦もむなしく、足止めをすることが出来なかったようだ。

非常口の入り口に影が差した。アップスタイルの少女だ。血に塗れた顔を石和達の方向へ目を向け、すうっと、目を細め、笑みを浮かべた。

石和の背筋に冷たい者が駆け抜け、戦慄した。

「い、いそげっ！ はやく一階へ昇るんだ！」

先頭の隊員の一人が促し、石和を乗せた担架と共に上へ駆け上っていく。少女は静かに階段まで歩み寄ると、そっと階段に手を触れた。

「つかまえた」

少女がそう呟いた瞬間、すべてが終わった。石和達がこの廃ビルから抜け出すために絶対不可欠な存在を奪い去られていた。

階段が　　なくなっていた。

石和達がいる場所を中心に前後一メートルあたりの階段がぼっかりと消え失せていた。階段がなければ上へは上がれない。当然のことだ。そして、足の踏み場がなくなった者達がどうなるかは言うまでもない。ただ、重力の法則に従うのみである。

「わっ……あああああっ！」

佐々木の悲鳴が上がった。続いて、隊員たちの悲鳴があがり、石和達はそのまま床へ一直線に落下した。バランスを失った担架からずり落ち、石和の身体は床に強く叩きつけられた。

「がっ……！ ふっ……！」

呻き声を上げて、苦悶に喘ぐ。佐々木や他の隊員たちも身体を床に強く叩きつけられ、身体を丸め、踞っている。崩れ落ちた衝撃で、隊員たちの持っていた懐中電灯や器具などが床一面に散乱してしまっていた。

そんな石和たちのもとに大量の瓦礫が降り注ぐ。原型を留めないほど細切れになった階段の破片だった。

これで退路は完全に断られた。途中から先の階段は健在だが、そこに至るまでの道がない。これではこの非常口から脱出するのは不可能である。搬入用エレベーターまで戻らなければ一階に戻ることは出来ないだろう。

しかし、この『ネオ・チャイルド能力者』がそれを逃すとも思えない。あらゆる武器を行使しても、この汎用性が高いこの『能力』に対抗できる気がしない。おそらく、あの『ネオ・チャイルド能力者』は今までの『能力』とは別格だ。

『能力』が強い弱い云々の前に『空間を転移する』という力の種類自体が汎用性の高い厄介な代物なのだ。どんなに逃げても、あの少女はその差を一瞬にゼロにしてしまう。

そして、触れられたら、一卷の終わり。少女の視界にいる限り、抜き取った構成情報を元に対象の身体を思うがままに蹂躪することだろう。

倒れていた隊員たちが起き上がって、両手で掲げた短機関銃サブ・マシンガンの銃口を少女に向けた。おそらく、その牽制は無意味。少女に銃は一切通用しないのだから。きつと脅威には感じてはいないはず。

案の状、少女は短機関銃サブ・マシンガンの存在になんの反応も示さなかった。この距離だと発煙手榴弾スモーク・グレネードを使うわけにもいかない。閃光手榴弾フラッシュ・バンも使うには距離が近すぎる上に、不意を突かない限り、まともに食らうこととはないだろう。

つまりは 打つ手はなし、ということだ。

少女が近づいてくる。

石和の胸の鼓動がどくどくと音を立てて高まる。絶望感がじわじわと身体を浸食していく。その場にいる全員が声もなく、極度の緊張感に身体を強ばらせている。

今度こそ本当にどうにもならない。ここにいる全員が全身を細切れにされ、ヒトの尊厳を無視した、惨たらしい死を迎える。先程見た隊員の様に。石和はその時を覚悟した。

「……………」

が、そこで奇妙なことに石和は気付く。少女はいつまで経っても『それ』を行わない。接近を続けてきたその足も止まっている。怪訝に思い、少女の顔に目を向ける。

少女の視線には石和達には映っていないかった。床に散らばった器具をまじまじと見つめている。少女が目を細めると、床に散らばっ



ていた器具の一つが消失し、少女の手に転移した。

それは大型の懐中電灯。周囲を灯りで照らす、ただ、それだけの道具である。少女はそれに電源を入れ、電灯がつくのを確認する。

それで終わりだった。目の前にいる石和達には目も暮れず。少女は天を仰いで、次の瞬間、懐中電灯を持ったまま消失した。次に姿を現した場所は崩れ落ちて無くなった階段の上。

少女はそのまま、階段を駆け上り、一階に向かってゆく。

「……………」

そのまま沈黙が訪れる。少女が戻ってくる様子はなかった。やがて、他の部隊が駆けつけて来ても、少女は帰ってこない。石和は再び生き延びた実感を噛みしめることもなく、訳の分からない少女の行動にただひたすら困惑していた。

『追いかけて』は佳境に近づきつつあった。『鬼』の三人はやられてしまい、ゲームオーバー。『子』をぎりぎりまで追いつめはしたが、寸でのところで逃げられてしまった。『鬼』が圧倒的優位にいたに関わらず。

もし、この『追いかけて』に観客がいたら、爽快感を覚えたことだろう。絶望的状况下から逆転していく様はスポーツでも物語でも血沸き肉踊るものだ。相場が決まっているからだ。しかし、この『追いかけて』はそれだけのゲームでは終わらない。

『鬼』が『子』を追いかけて、追いつめ、捕まえる。これはそんな単純なゲームではない。もっと『子』たちを驚かせるびっくり箱を用意してあるのだ。

きつとみんなびっくりしてくれる。

きつと父親は喜んでくれる。

少女はびっくり箱を開けた。その時『の瞬間を想像して、胸に躍動感がせり上がってくるのを感じていた。

少女は最後の仕上げとなる行動を開始した。

EPS領域が作り出せない空間が無くなった頃を見計らい、少女は隠れていた部屋から廊下へと躍り出た。

そこにはたくさんの『子』がいて、少女の姿を見て、大きく目を見開いて驚いていた。

そのまま目的地へ向けて駆け出すと、『子』役のうちの二人が少女を妨害してきた。『子』を捕まえるのは少女の役目ではない。もっと別の役割がある。しかし、目的地にたどり着けないのは少女にとっては非常に困ることだった。長髪の少年と少女は手分けをして、その仕掛けはすでに施してある。

時間をかければ、その仕掛けは発動することだろう。

だが、それではだめだ。物足りない。父親にもそう言われていた。とても驚くびっくり箱を完成させる為には目的地に行つて最後の仕上げを施す必要があるのだ。

だから、少女は目の前の『子』の妨げをくぐり抜け、自分の責務ではない役を果たす。

「つかまえた」

少女はそう言つて、『子』の身体をとんとタッチした。二人とも赤い紅い壊れた玩具になつて、動かなくなった。捕まえたら、『子』は壊れた玩具になる。それがこの『追いかけて』に課せられたルールだった。壊れた玩具は動かない。

残念、もう少し我慢していれば、いっしょにびっくり箱を楽しめたのにね。

少女はそんなことを壊れたおもちゃ達に心の中で告げて、次に進む。目的地は非常口の階段。ここを駆け昇れば、少女の目的地は間

近だった。非常口の中に入り込むと、少女は驚いた。

他の『子』たちが階段をのぼって上に昇ろうとしていたのだ。少女は慌てた。それは困る。まだ仕掛けは施していない。現在の状態で抜け出されたら、びっくり箱を披露する機会を失ってしまう。そうなってしまえば少女の父親はさぞがっかりすることだろう。

少女は狼狽しながら、階段に手を触れた。そして、力を行使する。階段の構成情報を読みとり、今階段を昇っている『子』たちの領域を丸ごと切り取り、空間を差し替える。

『子』たちは驚き、悲鳴を浴びて、落下していった。これでこの『子』達は階段を使って上に昇ることはできなくなった。しばらくはこの地下からは出ることはできないだろう。『子』たちは残念そうな表情を浮かべ、外に出ることを妨害されたことを悔やんでいるように見えた。

残念でした。でもこれでいいんだよ。びっくり箱を開ける前に『追いかけて』が終わってしまったら、おもしろくないんだから。

そんなことを口にしそうになって、いけない、と少女は口をつぐんだ。これは父親から『子』たちには決して漏らしてはいけない、と強く言われていたことなのだった。『びっくり箱』の中身を知ってしまったら、中身を見てもびっくりしなくなってしまうから。それでは意味がないのだ。

少女は言いたい衝動を抑え、いたずらっぽく笑うと、床に目を向けた。『子』たちが階段から落ちてしまったとき、持っていた道具を落としてしまったらしい。少女はその一つに目を向けた。大きな大きな懐中電灯だった。手にとって、スイッチを入れてみると、明

るい光が灯った。この地下と違って、上は暗いと父親は言っていた。少女の父親が言ったことをするには明かりが必要になる。だとしたら、これは役に立つかもしれない。借りていこう。

少女は懐中電灯を抱え、能力を使った。壊れた階段の上に狙いを付けて、空間を差し替え、移動する。これで問題なしである。『子』たちは追いかけて来ることが出来ない。

少女は小刻みに空間を差し替えながら、移動し、地下から地上の一階へとたどり着いた。

辺りを見回すと、少女の予想と違い、あちこちに光があることに気づいた。人もたくさんいる。途中から『追いかけて』に参加した『子』たちだった。搬入用エレベーターと通常エレベーターの付近に多くのライトが設置し、辺り一面を強く照らし出している。少女は困惑した。これだけ『子』の数が多いと、びっくり箱の仕掛けを施すのが困難になる。

『子』たちは少女がそこにいることに気づくと、驚いて騒ぎ始めた。このままだと大騒ぎになって、びっくり箱を仕掛けられなくなってしまう。少々もつたいないが、少女は一階にいる『子』たちを捕まえることにした。

距離を取って、鉄砲を少女に向けて放つ、『子』たち。鉄砲の弾は当たったら、危ない。そういう風に父親から言われている。少女はあらゆる場所に繰り返し転移し、『子』たちに絞らせない。そして、エレベーターの間近にまで近づき、『子』の身体に触れる。能力を使い、『子』の構成情報を読みとってしまえばあとは簡単だった。

みんな、みんなが赤く壊れた玩具へと変わる。変わってゆく。その作業がすべて終わるのに二分とかならなかつた。十人以上いた『子』たちはたちまちのうちに壊れた人形へと変貌し、動かなくなつた。

少女はふう、と大きくため息を吐いた。少し手間取ってしまった。新しく参加した『子』たちがいつたい全員でどれだけいるのか分からないが、これ以上びっくり箱の設置に時間がかかるのは困る。地下にいる『子』たちがここまで来て、建物の外に出てしまったら、何の意味も持たないからだ。『子』たちが動き始める前にことを済ませてしまった方がいいだろう。

念のために少女は通常エレベーターと搬入用エレベーターのワイヤーを『能力』を使って切断した。床にエレベーターが落下する轟音が聞こえてくる。これで『子』たちはもう上へ昇ることはできないだろう。

これで安心して、最後の仕上げに取りかかることができる。少女は行動を開始した。懐中電灯のスイッチを入れ、明かりを灯す。周囲には大型のライトが複数の設置されており、それなりに明るい。それでもすべての闇をフォローしているわけではない。仕掛けを施す場所には『能力』を使う必要があるし、なによりも暗くては場所が特定できない。少女は周囲を見渡し、懐中電灯で位置を確認しながら、父親に指示されたポイントへ向かう。仕掛けを施す場所は一つではない。地下でもそうだったが、指定されたポイントは複数ある。

父親によって少女の頭に複数の正確な位置は叩き込まれている。少女は頭に浮かぶ位置に歩み寄り、父親に指示された通りの処置を

施す。

ひとつ、ふたつ、みっつ。

次々と機械のような早さと正確さで少女は『それ』を行う。『びつくり箱』の準備は着々と進んでゆく。指示した場所に狂いが生じれば、『びつくり箱』そのものが作動しない可能性もあるので、少女はわずかな懸念を抱いていたが、周囲に起きた変動で、その不安は霧散した。

辺りに起こり始めた変動。それが少女の五感を通じて伝わってくる。そこに感じる確かな手応え。

それがびつくり箱が正常に作動している何よりの証拠だった。少女は真つ赤に染まった唇を歪め、無邪気な笑顔を浮かべた。

始まった、始まった。『びつくり箱』がひらいた。みんなは驚いてくれるかな、喜んでくれるかな？

一人少女は謳うような声で、そんな言葉を楽しそうに紡ぐ。

その詩に呼応するかのよう。廃ビルが低い唸りと共に不気味に蠢動し始めた。

『崩壊』が始まったのだ。

(了) 第七段階『裏切りと銃声』に続く

第六段階『崩壊』



14 「びっくり箱が開いた」

第六段階『崩壊』(了)(後書き)

第六段階、ここまで読んでくれて、ありがとうおおおっ！ ここまで感想とかくれると嬉しいです！ 続きを書く活力になります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8625p/>

---

混沌のアルファ・リニューアル版

2011年11月16日01時34分発行